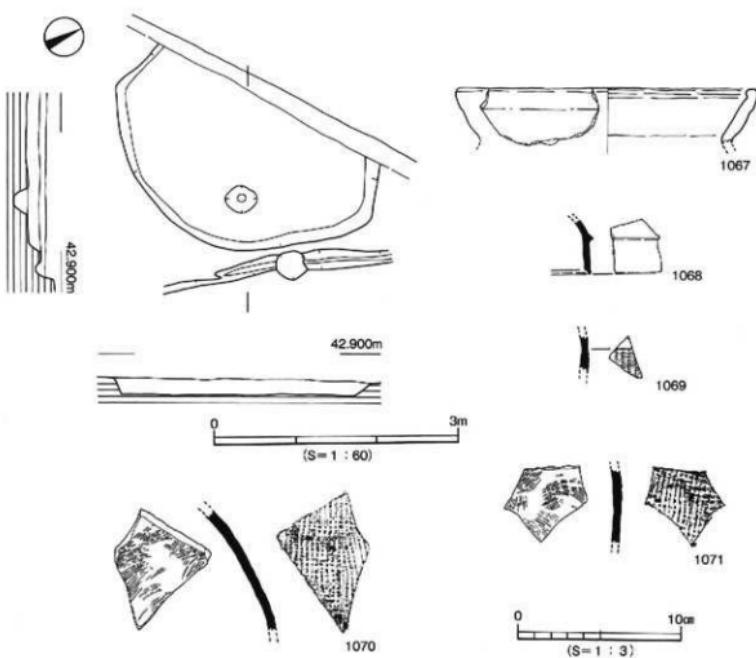


## S B210 [第187図、図版61]

S B210はⅡ区のF10～G10区に位置し、S B209・S B212に切られ、北側は調査区外に続く。平面形態は方形である。規模は3.46×(1.75) m、深さ24cmを測る。出土遺物は土師器と須恵器がある。

出土遺物（1067～1071）1067は土師器の菱形土器の口縁部。1068～1071は須恵器。1068は坏蓋。1069は胴部外面に沈線1条と刺突文を施す。1070・1071は胴部片。

時期：出土した須恵器の形態から古墳時代後期に時期比定する。



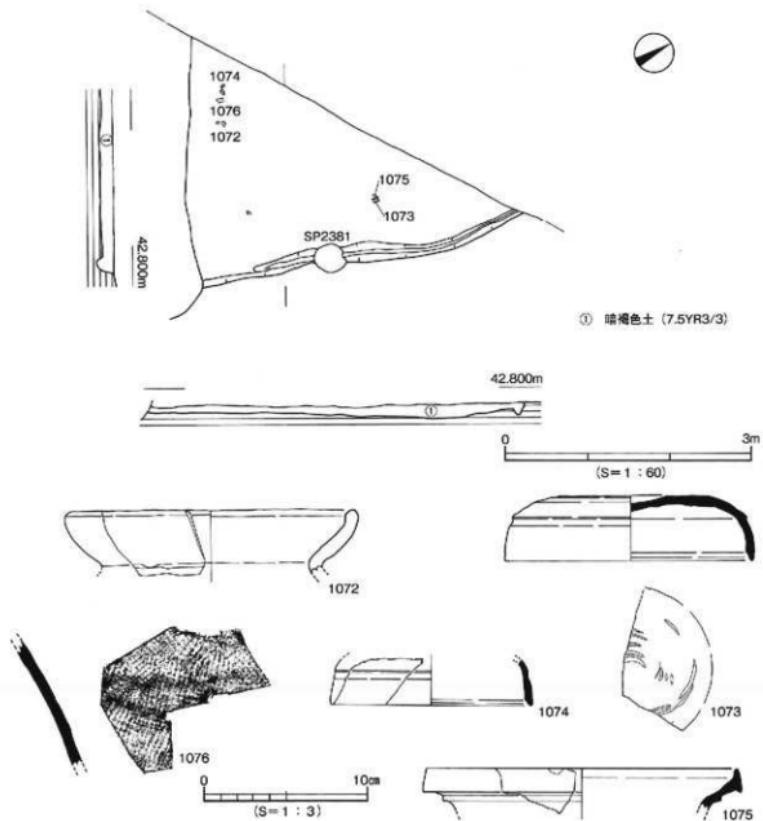
第187図 S B210測量図・出土遺物実測図

## S B212 [第188図、図版61]

S B212はⅡ区のF9～G10区に位置し、S B209に切られ、S B210を切り北側は調査区外に続く。平面形態は直線的な一辺を検出したため方形と考える。規模は(3.06)×(3.90) m、深さ16cmを測る。埋土は暗褐色土（7.5Y R3/3）である。出土遺物は土師器と須恵器がある。

出土遺物（1072～1076）1072は土師器の口縁部片。1073～1076は須恵器。1073・1074は坏蓋。1073は扁平な天井部。1074は口縁部片。1075は菱形土器の口縁部片。1076は胴部片。

時期：出土した遺物より下限を6世紀後半に時期比定する。



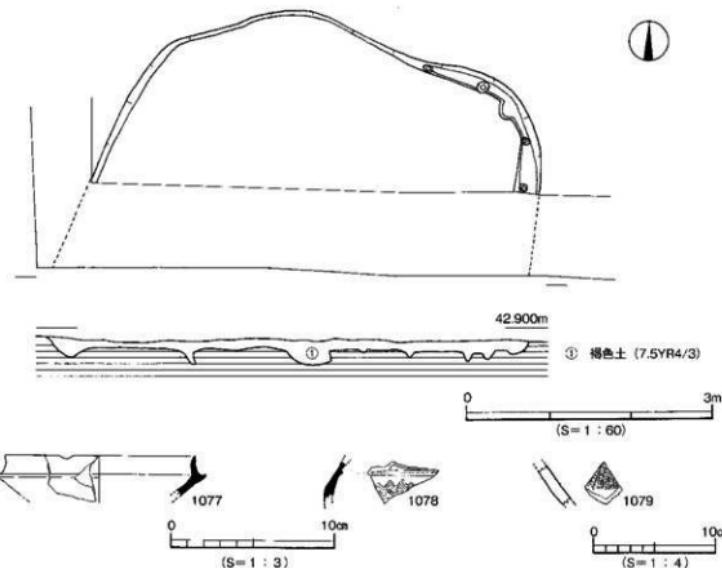
第188図 SB212測量図・出土遺物実測図

## SB214 [第189図、図版61・68]

SB214はII区のH 9・10区に位置し、南側は調査区外に続く。平面形態は丸味をもつ方形と考えられる。規模は4.86×(2.40)m、深さ13cmを測る。内部施設は周壁溝がある。周壁溝は東側の壁下に部分的にあり、周壁溝内に小ピットが4基ある。埋土は褐色土(7.5Y R4/3)である。出土遺物は須恵器、弥生土器がある。

出土遺物(1077~1079) 1077・1078は須恵器。1077は壊身。1078は壺形土器。外面に凸帯1条と波状文を施す。1079は弥生土器の胴部。外面に貝殻による弧文。

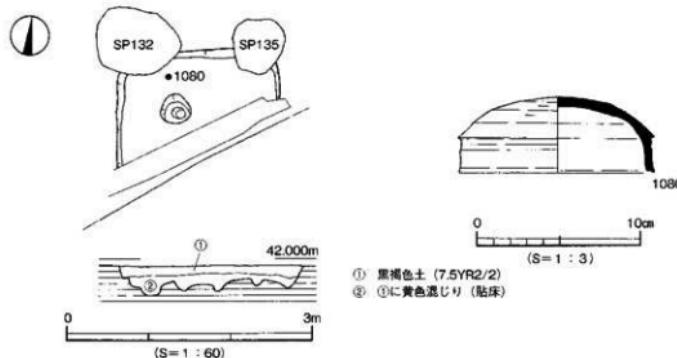
時期：出土した須恵器の形態から古墳時代後期に時期比定する。



第189図 SB214測量図・出土遺物実測図

## SB101 [第190図、図版61]

SB101はI区のI 9~10区に位置し南側は調査区外に続く。平面形態は2ヶ所のコーナー部を検出したことより方形と考えられる。規模は2.00×(1.16)m、深さ13cmを測る。内部施設は貼り床と柱穴がある。貼り床は住居全面に厚さ10~20cmである。埋土は黒褐色土(7.5YR2/2)、貼り床は黒褐色土に黄色土混じりで硬い。出土遺物は須恵器がある。



第190図 SB101測量図・出土遺物実測図

出土遺物（1080） 坏蓋。丸味のある天井部、口端部は凹む。

時期：出土した須恵器の形態より5世紀後半と考えられる。

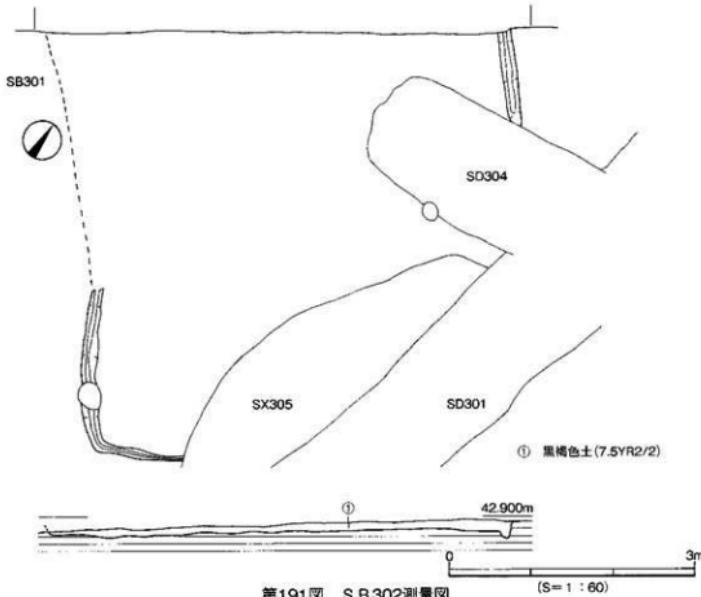
#### S B302 [第191・192図、図版61]

S B302はⅢ区のC・D 5区に位置し、S B301、SD301を切りSD304、SX305に切られ北側は調査区外に続く。平面形態は長方形と考えられる。規模は $(5.28) \times (5.72)$ m、深さ14cmを測る。内部施設は周壁溝がある。埋土は黒褐色土（7.5YR2/2）である。出土遺物は石製品の台石がある。台石は住居址の南西部に位置し床面に接して出土しているため現位置をとどめていると思われる。

#### 出土遺物（1081）

石製品1081は台石。厚みがあり安定する面を持つ。

時期：SD304に切られるため古墳時代に時期比定する。



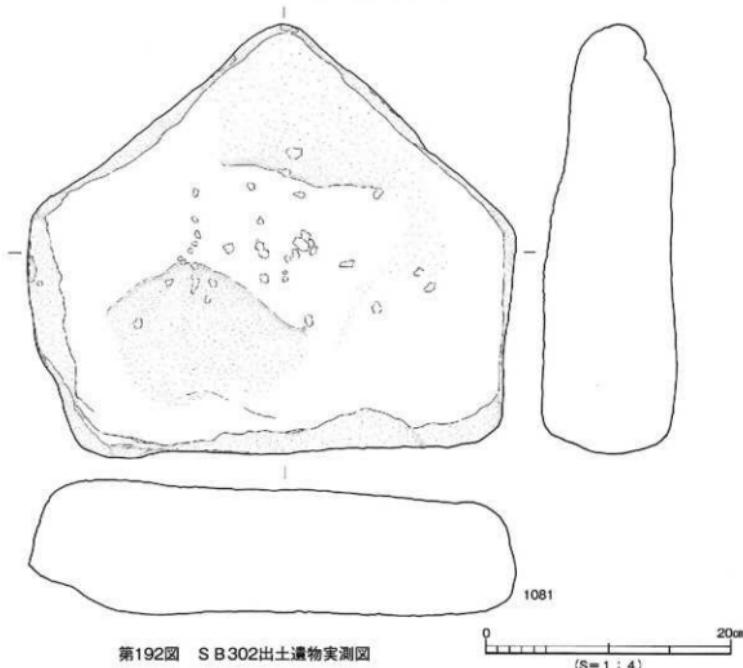
第191図 S B302測量図

#### (2) 土坑(S K)

##### S K301 [第193図、図版64]

S K301はⅢ区のE 5区に位置しSD301を切る。平面形態は長方形を呈し規模は $2.58 \times 2.02$ m、深さ43cmを測る。断面形態は四角形状である。埋土は暗灰褐色土（砂・黄色ブロック・礫3~7cm含む）である。出土遺物は土師器、須恵器、弥生土器がある。

出土遺物（1082~1093）1082~1083は土師器。1082は壺形土器の口縁部片。1083は瓶形土器。1084



第192図 SB 302出土遺物実測図

～1090は須恵器。1084は壺身。短い受け部。1085～1086は高坏形土器の脚部片。1085は透かしを待つ。1087～1088は壺形土器の口縁部片。1088は外面に9条の波状文を施す。1089は壺形土器の胴部。1090は胴部片、外面に格子タタキが残る。1091～1093は弥生土器。1091は壺形土器。1092・1093は高坏形土器の壺部片。1092は外面に5条の凹線文。1093は脚部片。外面に沈線文、貫通しない矢羽根透かし、凹線文を施す。

時期：出土した遺物の形態より6世紀後半に時期比定する。

#### S K 302 [第194図、図版64・67]

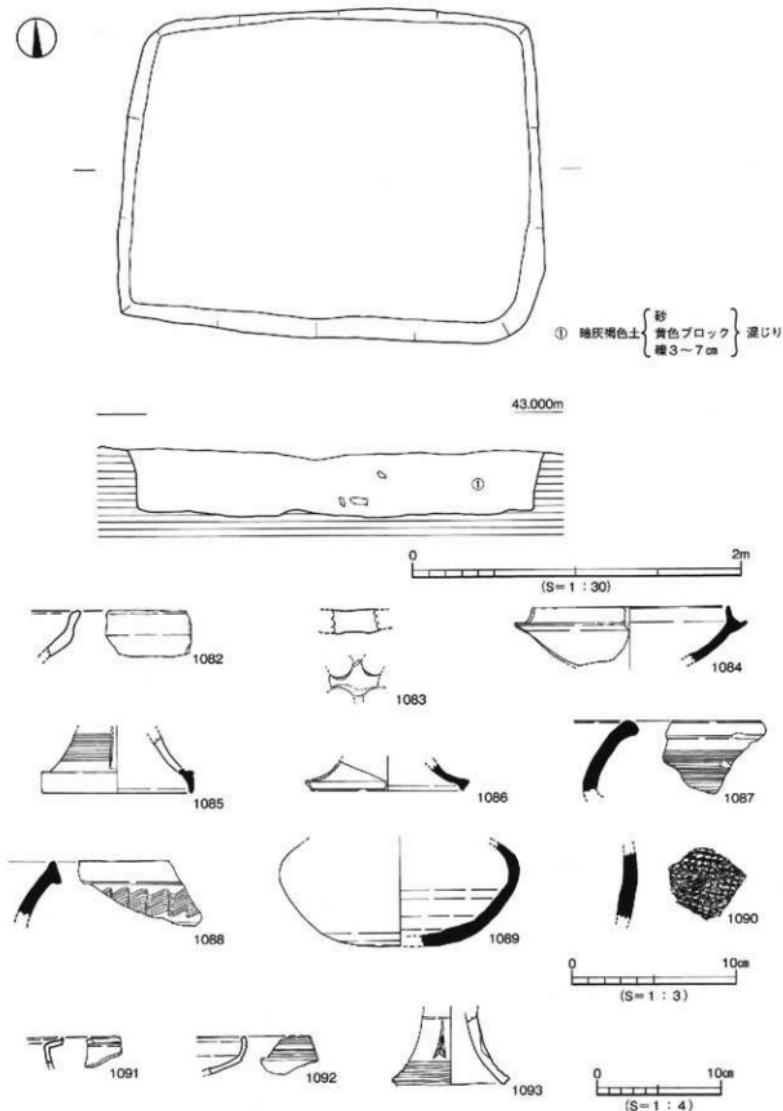
S K 302はⅢ区のD・E 5区に位置しS D301を切る。平面形態は長方形を呈し規模は2.25×1.58m、深さ35cmを測る。断面形態は四角形状である。暗灰褐色土(砂・黄色上ブロック・疊3～7cm)である。出土遺物は土師器と須恵器、石器、鉄製品がある。

**出土遺物 (1094～1103)** 1094は土師器の壺形土器。底部に蒸気孔あり。1095～1100は須恵器。1095は壺蓋の小片。1096は壺身片。1097は高坏形土器の脚部片。1098は脚部。脚端面は内傾し凹む、外面に凹線1条がある。1099は壺形土器の口縁部。1100は胴部片、外面に格子タタキが残る。

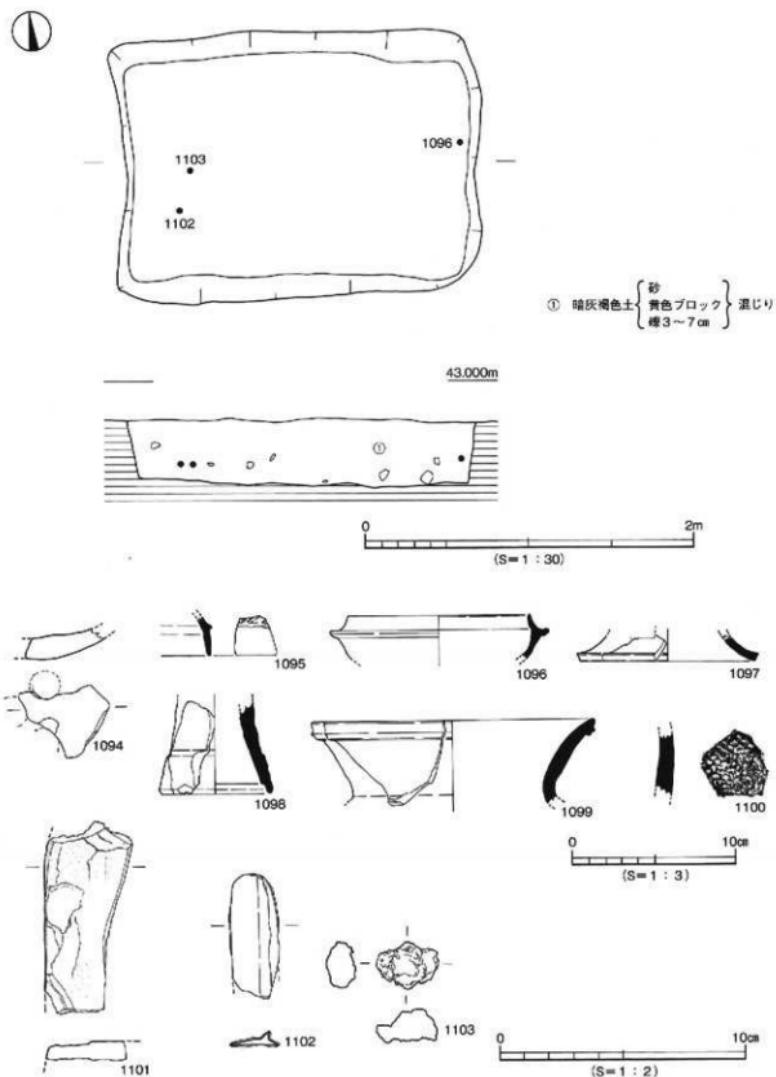
石製品 (1101) 加工斧の素材。

鉄製品 (1102・1103) 1102は鎌・鎌先の基部。1103は鉄滓。

時期：出土した須恵器の形態より6世紀後半に時期比定する。



第193図 S K301測量図・出土遺物実測図



第194図 SK 302測量図・出土遺物実測図

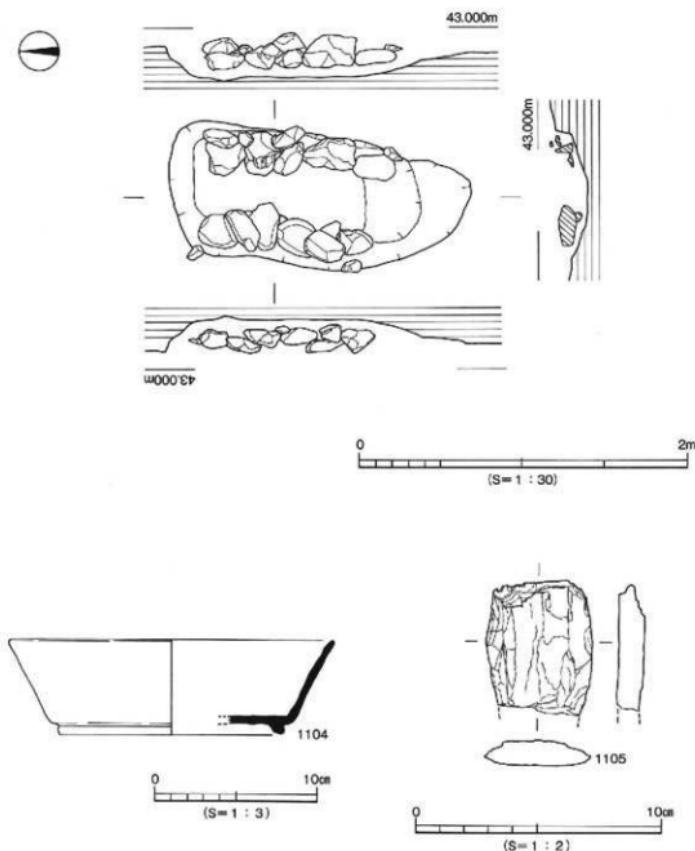
## SK310〔第195図、図版61〕

SK310はⅢ区のC3区に位置しSD302に切られる。平面形態は南北方向に長い長方形を呈し、規模は南北1.74m、東西0.83m、深さ10cmを測る。西側と東側に塊石が2段に残る。出土遺物は須恵器と石器がある。

出土遺物（1104・1105）1104は須恵器の高台付の壺。

石製品（1105）扁平片刃石斧の未製品。

時期：出土した須恵器の形態より古墳時代後期末に時期比定する。



第195図 SK310測量図・出土遺物実測図

## 6. 古代の遺構と遺物

掘立柱建物址 1 棟、土坑 1 基、溝 3 条、性格不明遺構 5 基がある。

### (1) 掘立柱建物址 (掘立)

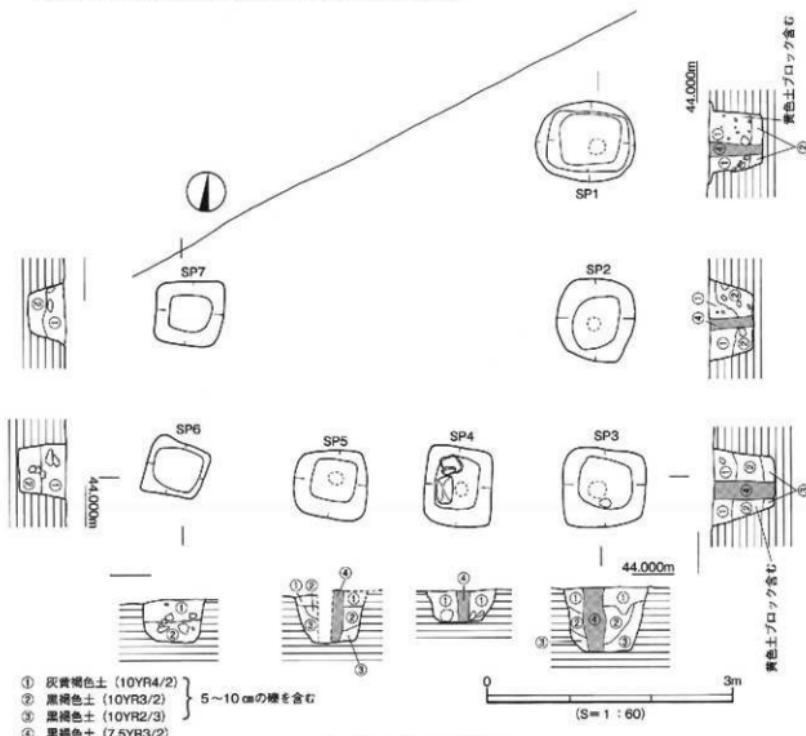
掘立301 [第196・197図、図版61]

掘立301はⅢ区のB 3～C 4区に位置し、SD 304・301を切る。規模は3間×2間分を検出した。柱穴の平面形態は方形で規模は0.8～1.0m、深さ40～70cmを測る。5基の柱穴からは柱痕を検出し径20cmを測る。埋土は灰黄褐色土(10Y R4/2)、黒褐色土(10Y R3/2)・(10Y R2/3)・(7.5Y R3/2)である。遺物は須恵器、土師器、鉄製品、SP 1・3・4から10～40cmの石が出土した。

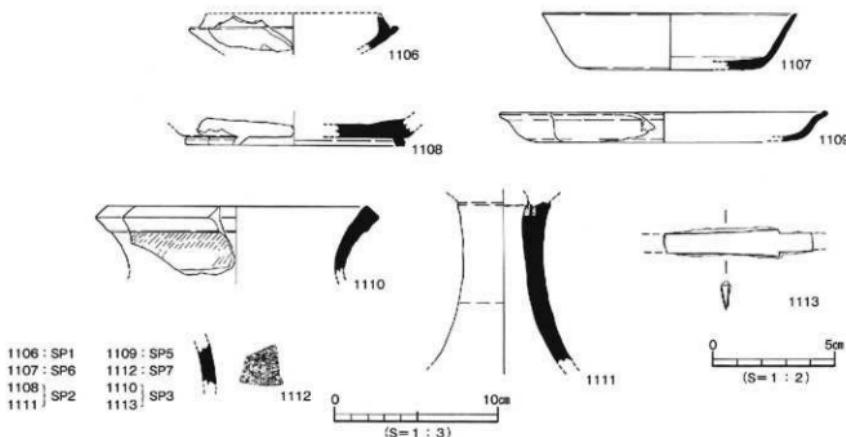
出土遺物 (1106～1113) 1106は坏身片。1107は坏。1108は高台付き坏。1109は皿。1110は菱形土器の口縁部。1111は高环形土器の柱部。1112は胴部片、外面に繩文タキが残る。

鉄製品 (1113) 刀子。切先を欠損している。

時期：出土した須恵器の形態より古代に時期比定する。



第196図 掘立301測量図



第197図 挖立301出土遺物実測図

## (2) 土坑 (SK)

## SK 308 [第159図、図版61]

SK 308はⅢ区のB 3区に位置し、SD 302に切られる。平面形態は長方形である。規模は長軸1.54m、短軸0.8m、深さ18.8cmを測る。断面形態は四角形状である。埋土は褐灰色土（5 YR 4/1）、明赤褐色土（5 YR 5/6）がブロック状に混じる。出土遺物は土師器、須恵器がある。

時期：出土した遺物と埋土より古代に時期比定する。

## (3) 溝 (SD)

## SD 302 [第159・198図、図版61]

SD 302はⅢ区のA 3～E 3区に位置し SK 308・310を切り SD 304に切られる。規模は検出長16.9m、幅1.25m、深さ7.3cmを測る。断面形態はレンズ状である。埋土は褐灰色砂質土である。出土遺物は土師器と須恵器がある。

出土遺物 (1114) 脚部片。外面格子タタキが残る。

時期：出土した須恵器の形態から古代に時期比定する。

## SD 303 [第159図、図版61]

SD 303はⅢ区のB 2～D 2区に位置する。規模は検出長9.0m、幅0.94m、深さ6.4cmを測る。断面形態はレンズ状である。埋土は褐灰色砂質土である。出土遺物は土師器と須恵器がある。

時期：埋土と溝の方向性から SD 302と同時期の古代に時期比定する。

## SD 304 [第159図、図版61]

SD 304はⅢ区のC 3～5区に位置し、SD 301・302を切り掘立301に切られる。規模は検出長5.3m、幅2.4m、深さ17.2cmを測る。断面形態はレンズ状である。埋土は褐灰色土である。遺物は土師器、須

恵器、石製品がある。

時期：出土した遺物より古代に時期比定する。

#### (4) 性格不明遺構 (S X)

##### S X301 [第159図、図版61]

S X301はⅢ区のB 2区に位置し北側は調査区外に続く。平面形態は長方形と考えられる。規模は(3.04) × 2.18m、深さ11cmを測る。断面形態はレンズ状である。埋土は灰褐色土(7.5Y R 4/2)砂混じりである。出土遺物は須恵器がある。

時期：埋土と出土遺物から古代に時期比定する。

##### S X302 [第159図、図版61]

S X302はⅢ区のC 2区に位置し東側は調査区外に続く。平面形態は長方形と考えられる。規模は(2.74) × 2.20m、深さ11cmである。断面形態はレンズ状である。埋土は灰褐色土(7.5Y R 4/2)である。出土遺物は須恵器がある。

時期：埋土と出土遺物から古代に時期比定する。

##### S X303 [第159図、図版61]

S X303はⅢ区のD 3・4区に位置し試掘トレンチに切られる。平面形態は不整形である。規模は(4.07) × 1.68m、深さ15cmを測る。断面形態はレンズ状である。埋土は灰褐色土(7.5Y R 4/2)である。出土遺物は須恵器がある。

時期：埋土と出土遺物から古代に時期比定する。

##### S X304 [第159図、図版61]

S X304はⅢ区のC 1区に位置し東側は調査区外に続く。平面形態は不整形である。規模は(1.41) × 0.58m、深さ11cmを測る。断面形態はレンズ状である。埋土は黄灰色土(25Y 4/1)である。出土遺物はない。

時期：埋土より古代以降に時期比定する。

##### S X305 [第159図、図版61]

S X305はⅢ区のC 4～D 5区に位置し、S B 302とS D 301を切る。平面形態は不整形である。規模は(4.14) × (1.78) m、深さ36cmを測る。断面形態はレンズ状である。埋土は黄灰色砂(25Y 6/1)である。出土遺物は土師器、須恵器、3～30cmの石が集中して出土した。石の中には砥石として使用されたものがある。

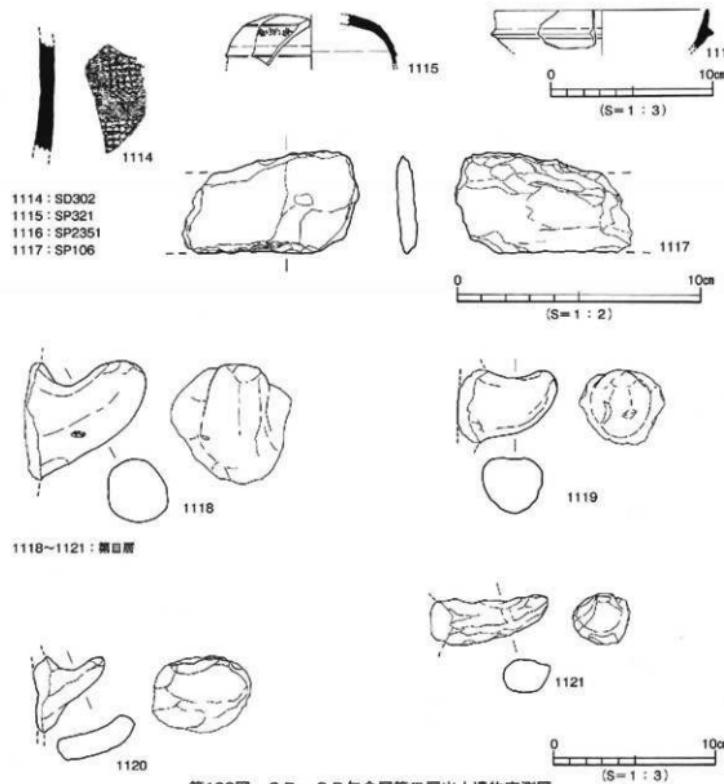
時期：埋土より古代以降に時期比定する。

## 7. その他の遺構と遺物 [第198図、図版61・68]

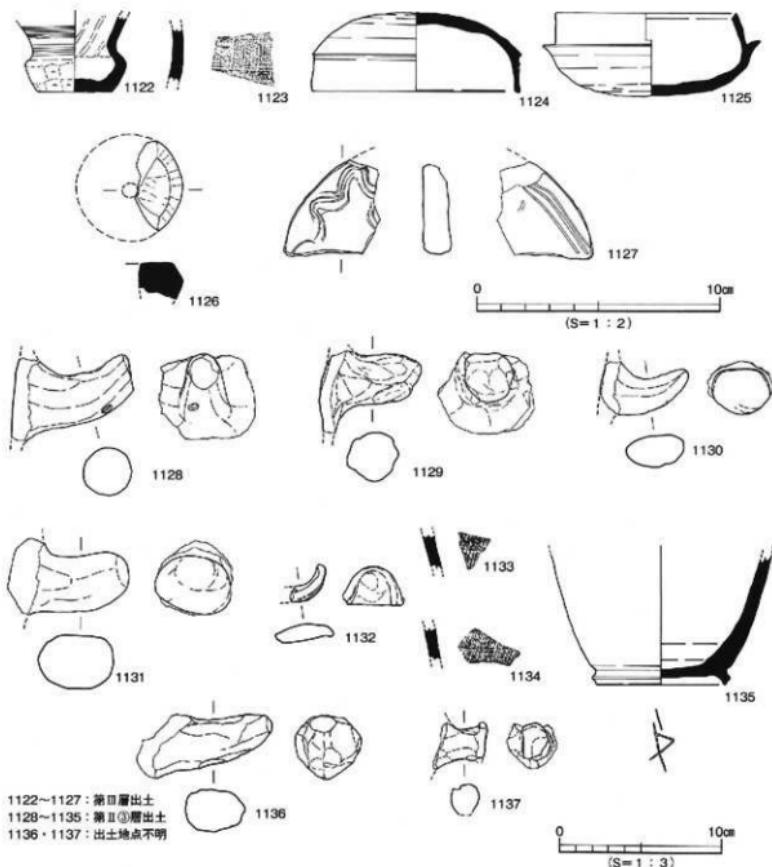
1115はS P 321出土の壺蓋。外面に1条の凹線と細かい刺突文、陶質土器か。1116はS P 2351出土の高壺形土器。口縁下部に断面三角形状の凸帯を持つ出作・市場型土器。1117は石庖丁 S P 106出土。

## 8. 包含層出土の遺物〔第198・199図、図版61・68〕

- (1) 第Ⅲ層出土遺物 (1118~1127) 1118~1121は土師器の瓶形土器の把手部。1118・1119は断面円形、1120は断面扁平である。1121は断面円形で長い。1122~1126は須恵器。1122は埴形土器。平底の底部。1123は外面に繩文タタキと沈線2条。1124・1125は环身・环蓋のセットの完形品。重機による掘削時にⅡ区S B206上面付近で検出した。1126は算盤玉形紡錘車。1127は分銅形土製品。両面にヘラによる沈線。
- (2) 第Ⅱ③層出土遺物 (1128~1135) 1128~1132は土師器の瓶形土器の把手部。1128・1129は断面円形、1130・1131は楕円形、1132は扁平な舌状。1133~1134は胴部片。繩文タタキに沈線を施す。1135は高台付の底部。底部外面にヘラ記号。
- (3) 出土地点不明遺物 (1136・1137) 1136・1137は瓶形土器の把手部。1137はミニチュア品。



第198図 S D・S P 包含層第Ⅲ層出土遺物実測図



第199図 包含層第Ⅲ・Ⅱ③層・出土地点不明出土遺物実測図

## 9. 小 結

本調査で弥生時代後期から古代までの遺構を検出した。検出した遺構は、堅穴式住居址15棟、土坑4基、溝3条、性格不明遺構5基、柱穴365基である。検出した遺構と出土遺物には注目するものがある。土層と弥生時代、古墳時代の主な遺構と遺物についてまとめを行う。

層位：本調査では、土層を6層確認した。以下、下層部より年代についてまとめを行う。

第Ⅳ層は無遺物層である。第Ⅲ層は弥生土器、土師器、須恵器が出土していることより、古墳時代の堆積層である。第Ⅱ③層は土師器、須恵器が出土していることより、古墳時代から古代の堆積層で

ある。第Ⅱ②層は土師器が出土していることより、古代から中世の堆積層である。第Ⅱ①層は現代の水田床上で無遺物層である。第Ⅰ層は現代の水田である。

弥生時代：遺構は竪穴式住居址5棟、溝1条である。竪穴式住居址の平面形態は円形と方形に分かれ、円形2棟、方形3棟である。円形住居址のS B301の内部施設には高床部を持ち、炉を2個（副次的炉）検出した。副次的炉を持つ住居址は、調査区の西に位置する東本遺跡2次、4次、6次調査地から7棟検出されている。桑原地区では、この副次的炉を持つ住居址は弥生時代後期後業～末の時期にあり、今回検出されたS B301も弥生時代後期の時期であり桑原地区で8棟目の検出例となる。

溝S D301は、検出した弥生時代の住居址5棟の東に位置し、埋土は粘質土が覆い水が流れた状態でないことから、溝S D301は弥生時代の集落を区切る溝ではないかと考えられる。

遺物はS B203から石製勾玉と小玉が出土した。S B203は円形で規模が大型であり、出土遺物には勾玉と小玉があることからS B203は集落の中での有力な人物の住居と考えられる。

古墳時代：遺構は竪穴式住居址15棟、土坑2基である。竪穴式住居址の平面形態は方形である。竪穴式住居址S B202は非常に残りがよく、壁高63cmを測る。壁高が60cmを超える住居址は、本調査区の西に位置する東本遺跡4次調査地5C区S B502がある。S B502の平面形態は隅丸方形で規模は5.5×5.5m、壁高60cmを測る。内部施設には主柱穴4本、炉2基、周壁溝、貼り床、「U」字状の溝がある。S B202とは、壁高と柱穴数は同じであるが、大きさと内部施設に違いが見られる。桑原地区で壁高60cmを超える竪穴式住居址の検出は2棟目となる。松山平野内で60cmを超える竪穴式住居址は検出例が少なく貴重な資料である。

遺物では、住居址内の台石の出土が上げられる。S B204からは、28.3×41.5×15.3cmの台石が使用面を上にして床面に接地して出土した。S B302からは、30.5×39.0×10.8cmの台石が床面に接地して出土した。出土状況からこの2つの住居から出土した台石は、元の位置をとどめていると思われる。このように住居址内から台石が出土する例は、本調査区の南西に位置する樟味四反地遺跡5次調査地の竪穴式住居址4棟（弥生時代中期末～古墳時代後期）から、元の位置をとどめていると思われる台石が出土している。この4棟の台石はワラ打ち用の台石として紹介されている。

その他の出土遺物では、渡来系遺物があげられる。出土した渡来系遺物には927・969・971の軟質土器（瓶の把手）、928・948・958・1113・1114の繩蓆文土器、1061・1116の出作・市場型土器、1115・1122の陶質系土器（壺蓋・壙）、1126の算盤玉形紡錘車がある。出土した遺物からは、本調査地が渡来人とのつながりを考えさせる遺跡である。とくに、陶質系土器と算盤玉形紡錘車は出土例の少ないもので大変貴重である。今後は、桑原地区での出土した渡来系の遺物と住居・土坑などの遺構との関係に注目していきたい。

### 【参考文献】

- 渡辺 誠 2005 「川越哲志先生追悼記念論文集」「ワラ打ち用の台石」
- 高尾和長 1996 「東本遺跡4次調査」松山市文化財調査報告書第54集
- 高尾和長 2002 「樟味四反地遺跡5次調査」松山市文化財調査報告書第87集
- 山之内志郎 2004 「東山古墳群3次調査・6次調査」「委託県内出土の渡来系遺物」松山市文化財調査報告書第97集

第11章

たる み たか ぎ  
樽味高木遺跡

9次調査地

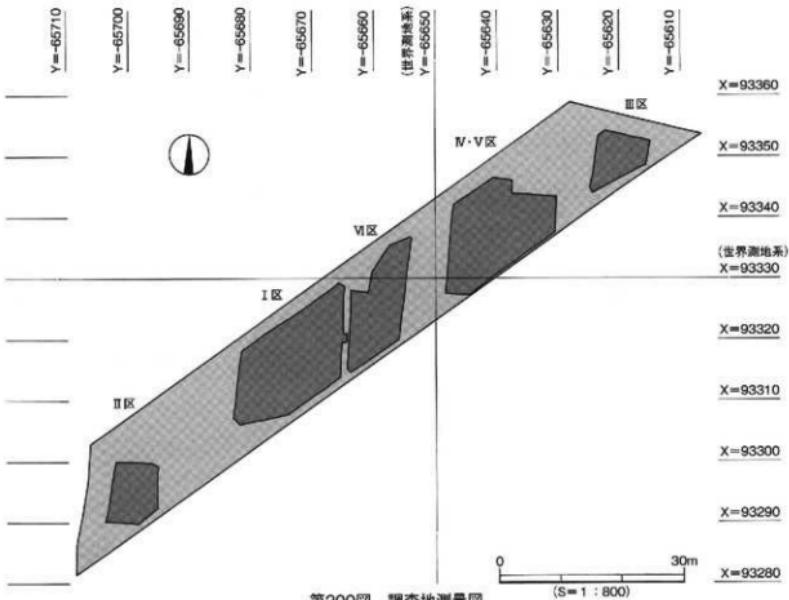


## 第11章 樽味高木遺跡9次調査地

### 1. 野外調査の経過と方法

調査対象地は樽味高木遺跡7次調査地と同11次調査地間の110m部分である。野外調査は2004(平成16)年2月2日から開始した。対象地の安全対策と調査区の設定等準備行為を行い、9日から重機を用いて表土除去に着手した。既存の生活道路を保全し、表土掘削で生じた堆土置き場を確保する都合上、調査区をI～VI区に区分し、順次調査に着手した〔第200・201図〕。試掘調査のデータを鑑み、地表下0.5～0.6mで掘削をとどめ、4層上面にて遺構検出作業を行った。

I区では遺構の密度が高く、検出した弥生時代の掘立柱建物址と土坑、さらに古墳時代の竪穴式住居址等を中心に4月下旬まで調査を行った〔第202・203図〕。II区では遺構密度の低いことが判明する。III区では古墳時代の竪穴式住居址が一部重複する形で検出され、遺構の密度が高いことを確認した。住居址群の精査ではセクションベルトを設定して断面土層による先後関係の確認を試みた。IV・V区からも古墳時代の竪穴式住居址が検出される。VI区では弥生時代の竪穴式住居址と、古墳時代の竪穴式住居址と掘立柱建物址を検出し、遺構密度の高いことが判明する。5月中旬、県下が梅雨入りする。度重なる大雨により、調査区が水没する事態に見舞われる。天候の回復を待って、調査区に溜まつた



第200図 調査地測量図

雨水の除去と遺構面の乾燥に努めて、遺構の精査を継続した。7月には県下が梅雨明けし、遺構の精査及び記録化が順調に進む。記録は測量図の作成と写真撮影で対応し、必要に応じて縮尺1/10の遺物出土状況平面測量図を作成した。中旬からはレベル測量の補足を行い、30日までに各調査区の埋め戻し及び仮設調査事務所の撤去等、調査にかかる全ての野外調査を終えた。測量に際しては、国土座標第IV座標系基準点から調査地内に座標点を移動し、これを基準とした5m方眼のグリッド割りを設定した。グリッドはX=93355、Y=-65610を起点として、東から西へA・B・C…、北から南へ1・2・3…とし、これらを組み合わせたA 1～S 13区の呼称名を付した〔第201図〕。

## 2. 基本層位

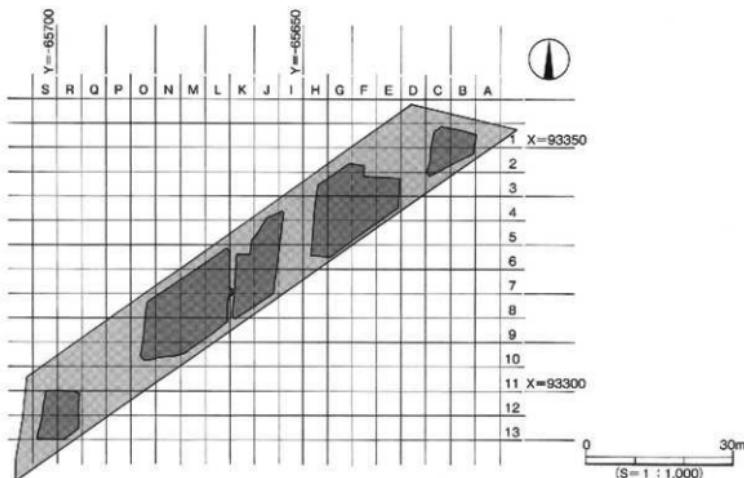
調査対象地の長さはおよそ110m分で、調査以前は宅地と駐車場であった。現況は地表面がわずかに北東から南西方向へ下がる地形で、42.1～41.65mを測る。基本層位は1～5層を検出した〔第205～210図、写真図版69-2・3、72-2、73-1〕

1層－真砂土や碎石で、層厚15～80cmを測る現代の造成土である。調査地全域で検出され、市道標味溝辺線統一基本土層の造成土に相当する。

2層－現代の水田や畑にかかる土層で、宅地化以前の土地利用の様子がうかがえる。耕作土部分に相当する2-①層、床上部分の2-②層に細分可能である。

2-①層：灰色土（N5/0）で、層厚10～50cmを測り、統一基本土層の第I①層に相当する。

2-②層：明赤褐色土（2.5Y R5/6）で、層厚2～10cmを測り、鉄分とマンガンの沈着が認められる。統一基本土層の第I②層に相当する。



第201図 区割図



第202図 調査地西半部



第203図 弥生時代の掘立柱建物址

3層 - 黒色土 (10Y2/1) で、粘性の強い土である。調査地の全域ではなく局部的に遺存する。すなわち、I区の南西部、IV区北東隅、V区南西隅、VI区全域にて遺存を確認した。弥生時代の中期土器と古墳時代後期頃の須恵器片を含む遺物包含層になり、遺物の包含量はVI区が多い。統一基本土層の第IV層に相当する。

4層 - 三層に分層可能である。調査区の北壁沿いでは I と IV・V 区を人力により一部深掘りを実施したが、人工遺物は確認できなかった。統一基本土層の第V層に相当する。調査区北壁における本層上面の標高値は、III区東端で41.48m、I区東端で41.14m、同西壁で40.72mを測る。本層上面を地形測量すると、調査地が北東から南西にむけて緩やかに下がる地点に立地していることが明らかとなっている。

4-①層：黒色混じりの浅黄橙色土 (7.5Y R8/6) で、非常に硬い質感である。I区北東部で確認できた。

4-②層：浅黄橙色土 (7.5Y R8/6) で、非常に硬い質感である。

4-③層：にぶい褐色土 (7.5Y R6/3) で、2~3cm大の円礫をわずかに含む。

5層 - にぶい黄褐色砂礫 (10Y R4/3) で、砂礫の大きさにより二層に分層可能である。統一基本土層の第VI層に相当する。

5-①層：1~2cm大の円礫で構成され、IV・V区の深掘りトレンチで確認した。

5-②層：10cm大の円礫が密集した状態であった。

### 3. 調査概要

検出した遺構は堅穴式住居址10棟、掘立柱建物址2棟、溝1条、土坑10基、性格不明遺構1基、柱穴120基である。これらの遺構は4層（統一基本土層の第V層）上面にて輪郭を確定できたものが大半を占め、分布には偏在が認められる。また、遺構から出土する遺物の量にも偏在が認められ、弥生時代に帰属するSB602や古墳時代のSB302からは比較的まとまった量の考古遺物を確認している。遺構の帰属時期については埋土と遺物、さらに遺構の重複関係を総合して判断し、弥生土器の時期については梅木謙一の土器編年〔梅木2000・2001〕に準拠した。出土遺物を伴わない遺構や、碎片のみで時期特定が困難な遺構については、帰属時期を特定することは差し控えた。なお、報告する主要遺構については種類毎に表6にまとめた。

表6 検出主要遺構一覧

遺構名	位置	平面形態	規模 長さ×幅×深さ(m)	主な出土遺物
S B 402	E 3、F 3	不整多角形	特定不可	弥生後期土器
S B 602	J 6、K 6	隅丸長方形	(5+) × 5.4 × 0.3	弥生後期土器、有溝石錘
S B 101	L 8・9	正方形状	4.3 × 4.5 × 0.25~0.43	古墳後期土師器・須恵器
S B 301	B 1・2	長方形状	5.3 × 4.9 × 0.20~0.45	古墳後期土師器・須恵器
S B 302	B 2、C 2	不整方形か長方形	5.0 × 3.3 × 0.15~0.5	古墳中期土師器
S B 303	B 1、C 2ほか	方形か長方形	3.5 × (10+) × 0.1~0.4	古墳後期土師器・須恵器
S B 401	E 3・4ほか	長方形	4.2 × 3.4 × 0.15	古墳後期土師器・須恵器
S B 501	G 3、H 3ほか	隅丸長方形状	3.7 × 2.8 × 0.2~0.4	古墳後期須恵器
S B 601	K 6・7ほか	方形か長方形	4.3 × (0.8+) × 0.1	古墳後期土師器・須恵器
S B 603	J 5・6ほか	方形か長方形	5.4 × (2.6+) × 0.15~0.25	古墳後期土師器・須恵器
掘立101	N 8、O 8ほか	長方形(1×2間)	2.5 × 5.7 × 0.42~0.6	弥生中期土器
掘立601	J 6・7	長方形(2×3+間)	2.9 × 3.5 × 0.5	古代の土師器・須恵器
S K 101	N 8	隅丸長方形状	2.4 × 2.0 × 0.1	弥生中期土器・柱状片刃石斧
S K 105	M 9	隅丸方形状	1.6 × 1.4 × 0.14	
S K 106	N 9、O 9ほか	不整隅丸長方形状	2.3 × 1.6 × 0.26~0.3	弥生中期土器・石庭丁
S K 601	J 4・5	不整隅丸方形状	1.5 × 1.2 × 0.2	弥生中期土器
S K 602	J 5	不整長方形状	1.0 × 0.7 × 0.18	古墳後期須恵器
S X 401	F 4	掘り方未検出	0.7 × 0.7	古墳後期土師器・須恵器
S P 621	J 5	小整円形状	0.74 × 0.94 × 0.5	弥生中期土器

#### 4. 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構には堅穴式住居址2棟、掘立柱建物址1棟、土坑4基、柱穴1基があり、調査地西半部に位置する傾向を読み取ることができる。I区西半部、旧地形がやや下がる浅い谷状の緩斜面には掘立柱建物址と土坑が重複して検出され、土地利用の一端を垣間見ることができる〔第205図〕。

##### (1) 堅穴式住居址 (S B)

###### S B 402 [第211図]

調査地中央部のIV区、E 3、F 3区に位置する。遺構の大半は調査区外へ続いており、住居址の南西隅を検出したにとどまる。IV区北壁上層の観察に拘れば、遺構は3層上面から構築されている。平面形態は隅丸の長方形を呈する可能性もあるが確定的ではなく、規模も判然としない。検出面からの深さは30~45cmを測り、埋土は黒色土(N 1.5/0)の單一層である。遺物は埋土中から弥生土器の小破片が数点出土し、図化できるのはこのうちの僅か1点に限られる。

**出土遺物** 1138は複合口縁壺の口縁～頸部にかけての小破片である。複合口縁部は「く」の字接合となる。

**時期** 時期特定に有効な遺物は限られるものの、これと埋土とを参考にして後期後半～終末に比定しておきたい。

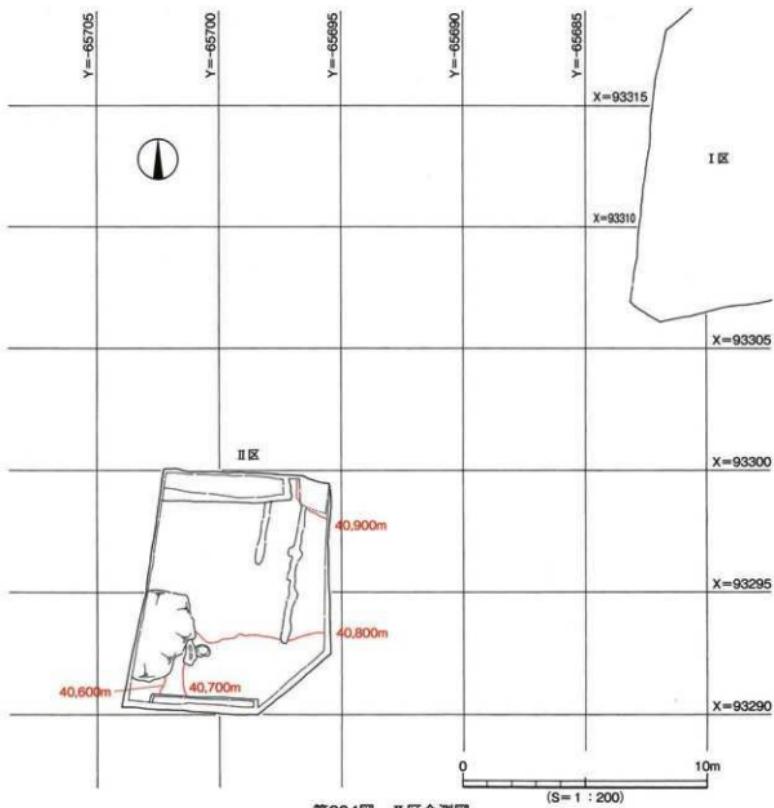
###### S B 602 [第212~215図、図版74]

調査地中央部のVI区北半部、J 6、K 6区に位置し、遺構の一部は調査区外へ続く。VI区西壁の觀

察に掲れば、遺構は4層上面から構築され、S B601に切られる。また、検出時に掘立601を構成する柱穴3基（S P605・609・610）に切られることも確認している。したがって、検出時における遺構の重複関係から、本住居址はS B601や掘立601と比べて相対的に先行して構築された可能性が高いと認識していた。平面形態は隅丸方形ないしは長方形と考えられ、規模は東西5m以上、南北5.4m、検出面からの深さ30cmを測り、埋土は黒色土（N1.5/0）を基調とし、下層には炭化物と炭化材を多く含む。この炭化物と炭化材の包含量を根拠に分層すると、埋土の堆積が水平基調となる。床面では大型の炭化材は認められなかった。付帯施設には住居中央のやや南寄りに土坑SK605と2基の柱穴（P①と②）がある。柱穴の配置から主柱4本で屋根を支える構造が復元可能であることから、S 16とした大型礫の地点にも主柱が配されていたと考えられる。なお、SK605の北15m地点の住居床面から焼土が認められたものの、掘り方を確認するには至らず、周壁溝も未検出であった。主柱穴の柱痕は未検出で、P①の上面からは多量の弥生土器の破片とともに完形の有溝石錐が出土した。遺物は下層に集中しており、弥生土器の壺、壺、鉢、高杯、支脚のほか、大小の礫が出土した。上層に伴う遺物はわずかで、弥生土器の壺、壺、高杯の小片のほか、土器片を再加工した円盤状土製品を確認した。

**出土遺物（1139～1166）** 1139～1144は上層、1145～1166は下層から出土した。1166は時期的に本住居に伴わない遺物と判断でき、住居に後続して構築された別遺構に伴う可能性が高い。1139～1141が壺、1142が壺底部、1143が高杯の脚部で、いずれも小片である。1144は円盤状土製品で、厚手の土器片の周縁を整形して、平面形態が不整円形を呈し、法量は径52mm、厚さ16mmを測る。両面の体部中央に穿孔や穿孔途中の痕は認められない。1145～1147は壺、1145は肩部の張りの弱い小型品で、口縁が「く」の字状を呈し、口径は12.4cmに反転復元される。1148～1157は壺で、1148～1150は単口縁、1151～1154は複合口縁となる。1149は細長頸帶と考えられ、胴部の中位は強く張り算盤玉形を呈し、底部は短く突出する。1151と1152は同様の形態で、長く伸びる頸部となる。1153は器面の磨滅が著しく調整は不明である。1156は下層上面で出土した大型壺の底部。1158～1161は鉢。1158は直口口縁で、口端は先細りし、復元口径12.6cmを測る。1159は折れ曲げ口縁で、口縁部の外反度は強く、口端は面取りする。1160は底部が小さくボタン状を呈する。1162と1163は高杯。1163は長脚化が進行し、円孔が不規則な4方向に穿たれる。1164は支脚で、斜めに傾斜する受部の一部と裾部の大半は欠損している。調整は内面に無数の指頭痕が残り、外面にはタキキ後に粗雑な指ナデを施す。1165は硬質砂岩製の有溝石錐。器面は敲打整形で仕上げており、長軸方向に施された溝は擦切技法による。器面全体は墨化し、一部には煤の付着がみられる。長軸86mm、短軸59mmを測り、重量328.97gである。1166は住居南西隅で確認した復元口径14.3cmを測る須恵器壺蓋。

**時期：埋土と出土遺物から、S B602は後期後葉、梅木編年の伊予中部V-3様式（梅木II-2）に時期比定される。**興味深いことは、遺物には下層に集中する傾向が認められ、弥生土器の多くは破片で、有溝石錐は受熱により一部黒化した完形品であった点である。埋土に水平基調の堆積が認められること、主柱穴で柱痕が未検出であったこと等と考え合わせると、本住居は廃絶後に屋根を含む主柱が撤去され、その後に弥生土器と石錐を作う人為的な埋め戻しが執行されたと考えられる。

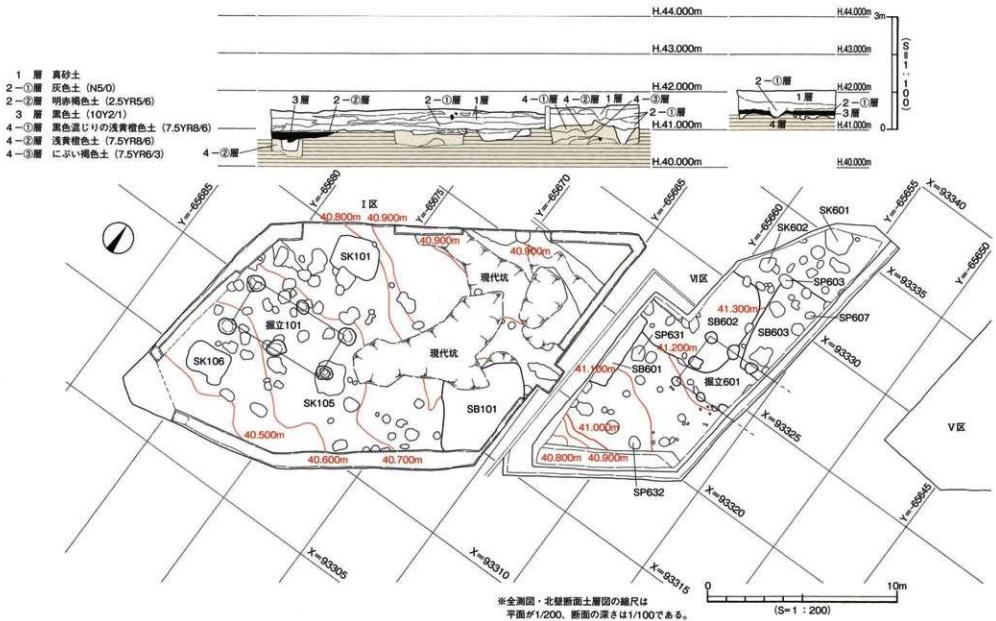


第204図 II区全測図

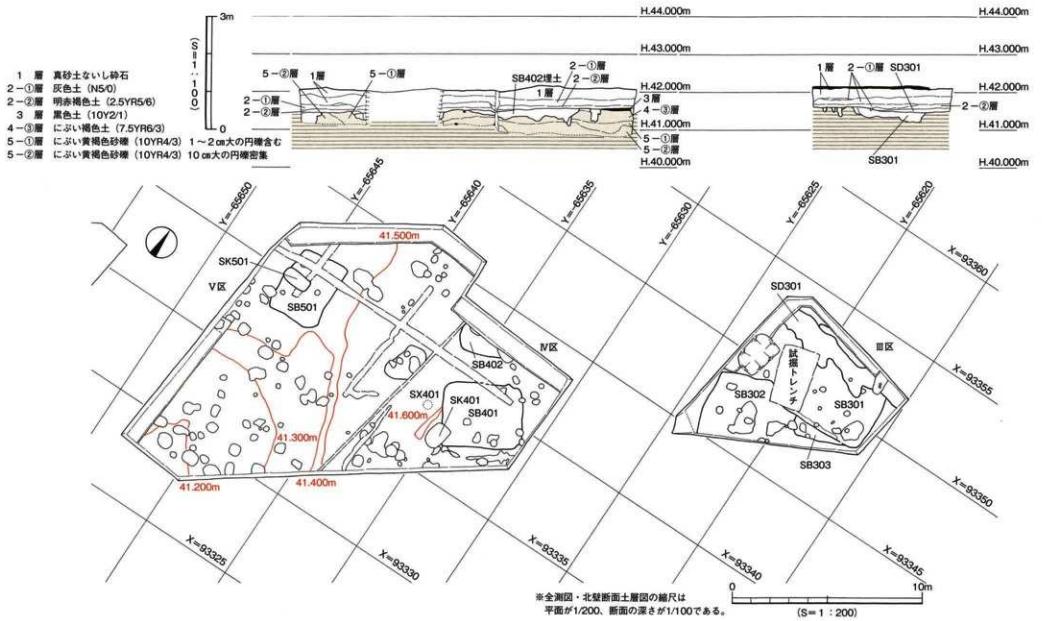
## (2) 挖立柱建物址（掘立）

## 掘立101〔第216図、図版70-4〕

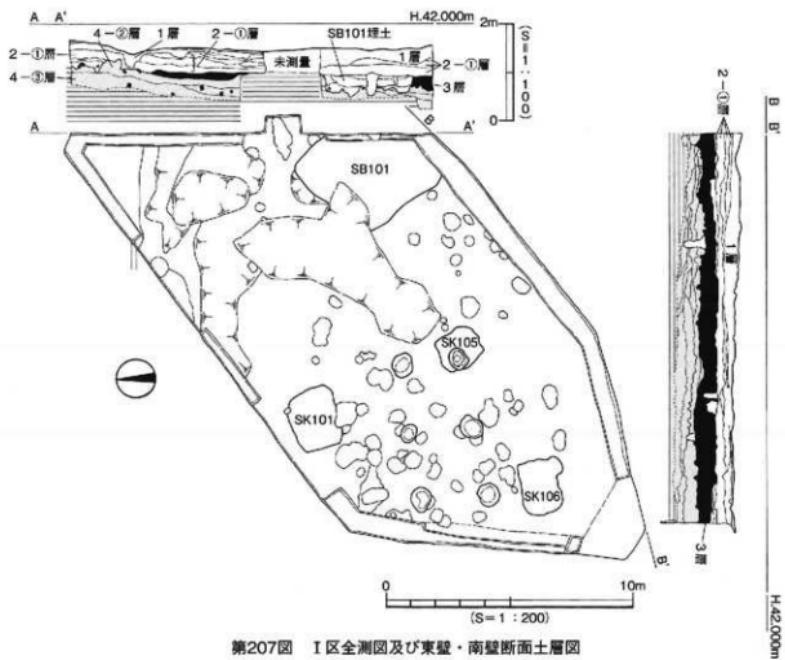
調査地西部に設定したI区西、N8・9、O8・9区に位置する、6基の柱穴から構成される2×1間の掘立柱建物址である。建物跡の平面形態は長方形を呈し、建物主軸は東西方向を指向し、N-83°-Eである。建物規模は桁行2間で5.7m、梁行1間で2.5mを測り、床面積は14.25m<sup>2</sup>となる。柱穴は後述するSK105を切り込んで構築されていることが検出時点で明らかとなっている。各柱穴の埋土は黒色土（N15.0）で、掘り方埋土には拳大程度の円礫を多量に含んでいる。これは建物の柱を安定的に据え置く為の措置と理解できる。柱穴①を除く各柱穴からは直径15~20cmの柱痕を検出した。柱穴⑤⑥では柱痕下部から大型の礫が確認され、これは柱の沈下防止や柱の長さ調節を意図した措置とも考えられる。なお柱穴①では柱抜き取りとみられる掘り方が検出され、床面にまで抜き取り痕は



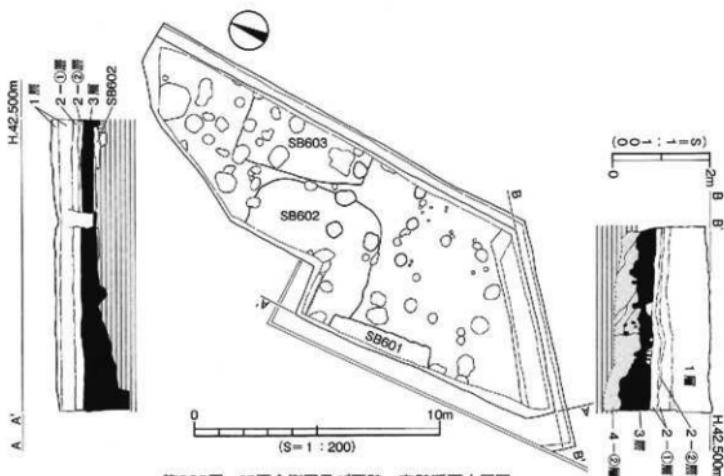
第205図 I・VI区全測図及び北緯断面土層図



第206図 III・IV・V区全測図及び北壁断面土層図

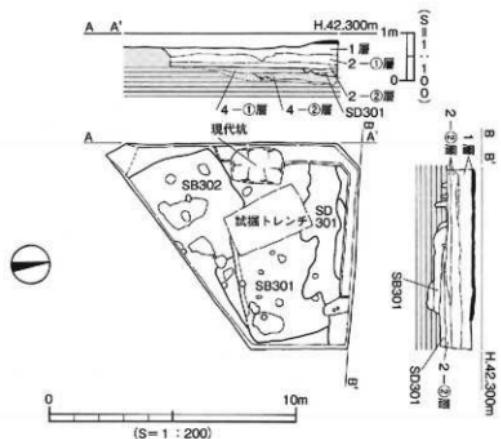


第207図 I区全測図及び東壁・南壁断面土層図

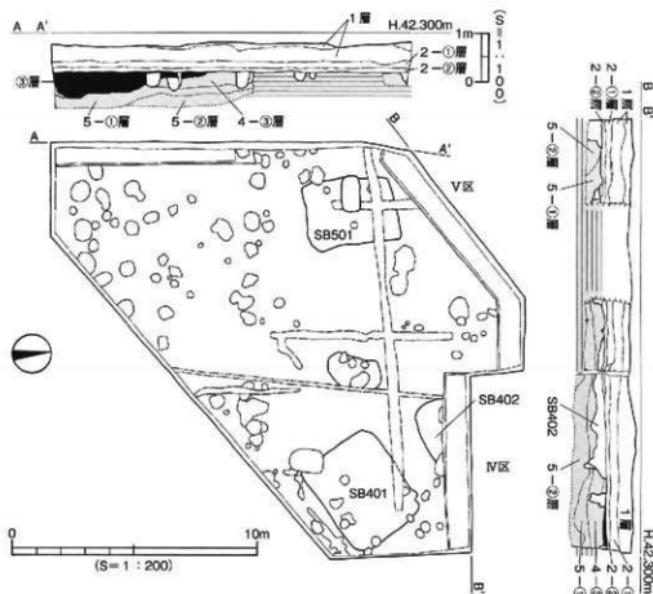


第208図 VI区全測図及び西壁・南壁断面土層図

樟味高木遺跡 9 次調査地



第209図 III区全測図及び北壁・西壁断面土層図

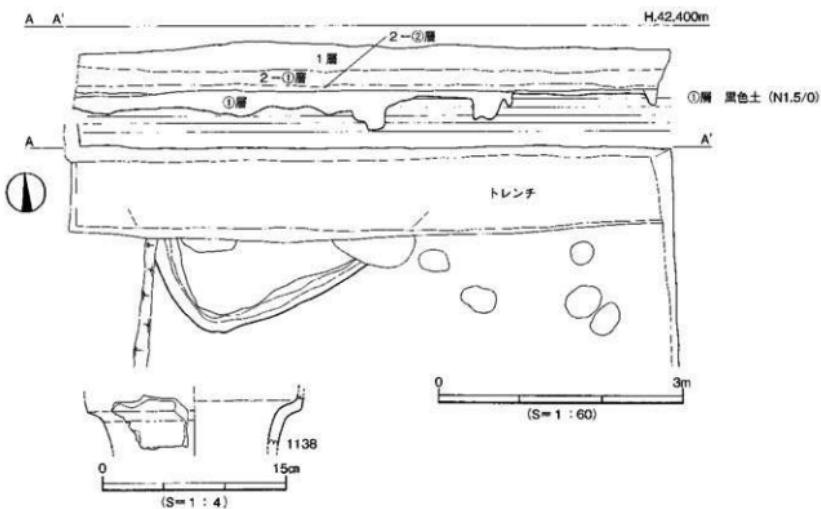


第210図 IV・V区全測図及び北壁・西壁断面土層図

達している。各柱穴の深さは検出面から42~60cmを測り、建物の四隅に位置する柱穴は全て深く掘られており、建物の構造上から四隅の柱穴が特に重要なことが想起される。遺物は各柱穴から出土しており、同化可能な遺物は全て掘り方埋土から出土したものである。なお柱穴間で遺物の接合は認められなかった。

**出土遺物 (1167~1187)** 1167~1173は柱穴①出土品。壺と壺の小片があり、壺には平底と小さく括れる上げ底があり、壺には長頸タイプの中型品がある。1174と1175は柱穴②出土品。1174は口縁部の屈曲が強く、頸部には刻みを施した突帯がめぐらし、口端は上方に拡張する。器面の摩滅が著しく内外面の調整は不明で、復元口径22.6cmを測る中型品である。1175は短頸壺の胴部の上半片。1176~1178は柱穴④出土品。壺の口縁部と底部の小片がある。1179~1182は柱穴④出土品。壺と鉢がある。1179の壺は口端に拡張が認められないタイプで、復元口径19.5cmを測る中型品。1181は「く」の字状口縁をもち、外面の調整はタテハケ後ナデ、内面は横方向のミガキとなる。1183~1187は柱穴⑥出土品。1183~1187は柱穴⑥出土品。1183~1185は壺で、1185は括れの上げ底。1186は高杯の脚裾部小片。矢羽根状の透かしの一部が確認でき、その下には細沈線文を施している。

**時期**：埋土と出土遺物、さらに柱穴④がS K105に後続することから、掘立101は後期前葉、梅木編年の伊予中部V-1様式が上限と考えられる。柱抜き取り埋土からは時期を特定できる遺物が確認できていないことから、建物の下限を決定することは厳密には困難といわざるを得ない。これらを明記した上で建物の帰属時期は後期前葉に比定しておきたい。



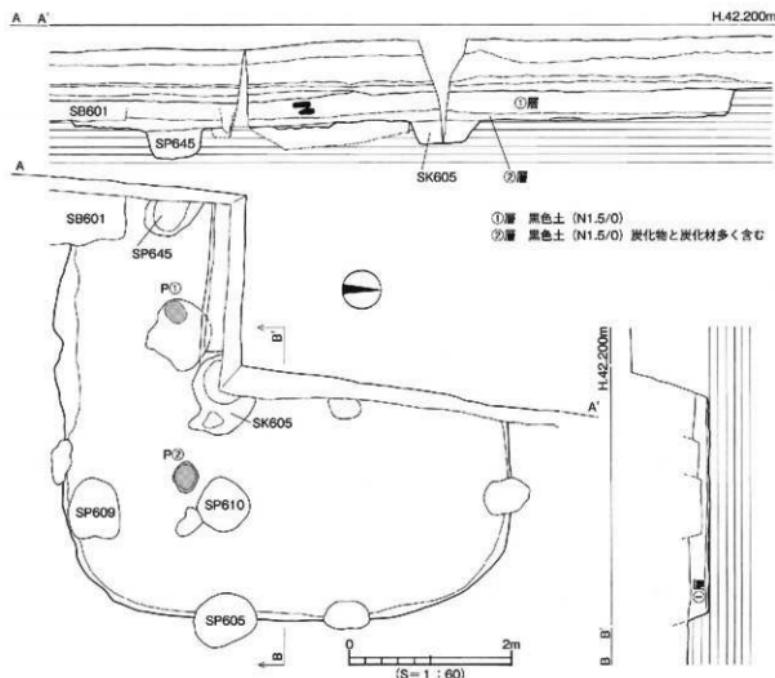
第211図 S B 402測量図及び出土遺物実測図

## (3) 土坑(SK)

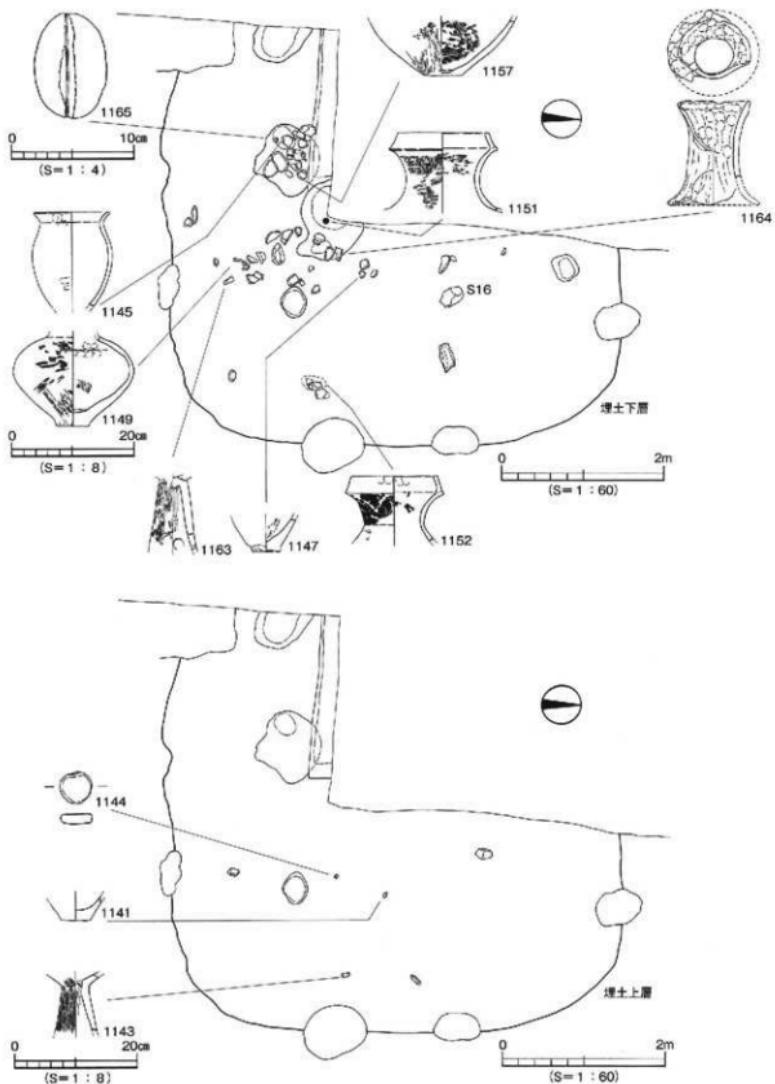
## SK101 [第218~219図、図版70-1・76]

調査地西のI区北西部、N8区に位置し、建物101の北2.7mで検出した。SK102に一部切られる。平面形態は隅丸長方形状を呈し、土坑長軸が東西方向を指向し、N-75°-Eとなる。規模は長軸2.4m、短軸2.0m、検出面からの深さはわずかに10cmを測り、土坑下部(床面付近)のみの遺存と判断される。断面形態は逆台形状で、床面にはわずかな起伏がみられる。埋土は黒色土(2.5Y2/1)を基調として、橙色土(7.5YR7/6)碎ブロックや白色礫粒の有無を基準に四層に細分可能である。長軸のセクションベルトの観察に拘れば、西方向からの流入によって本遺構が埋没した状況を復元可能である。遺物は弥生土器、石器、礫があり、これらの多くは埋土①層から出土した。

出土遺物(1188~1199) 1188~1192は壺。「く」字状口縁で、肩部の張りが強い1188と、弱い1189と1190とがみられ、後者は口縁部の成形時に折り曲げ部を強く横ナデを施す。1192は底部が小さく括れる上げ底。1193~1196は壺。長頸の中型品で、内傾する頸部に外傾する口縁部をもつ。1194と1195



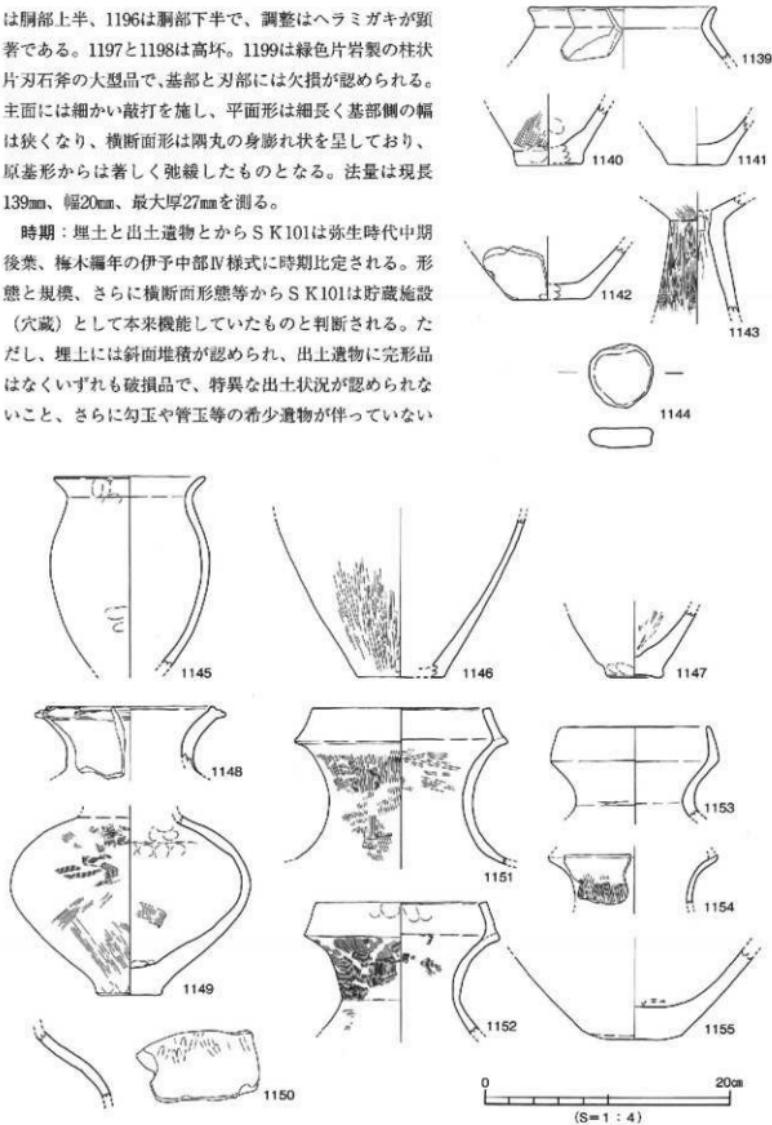
第212図 SB602測量図



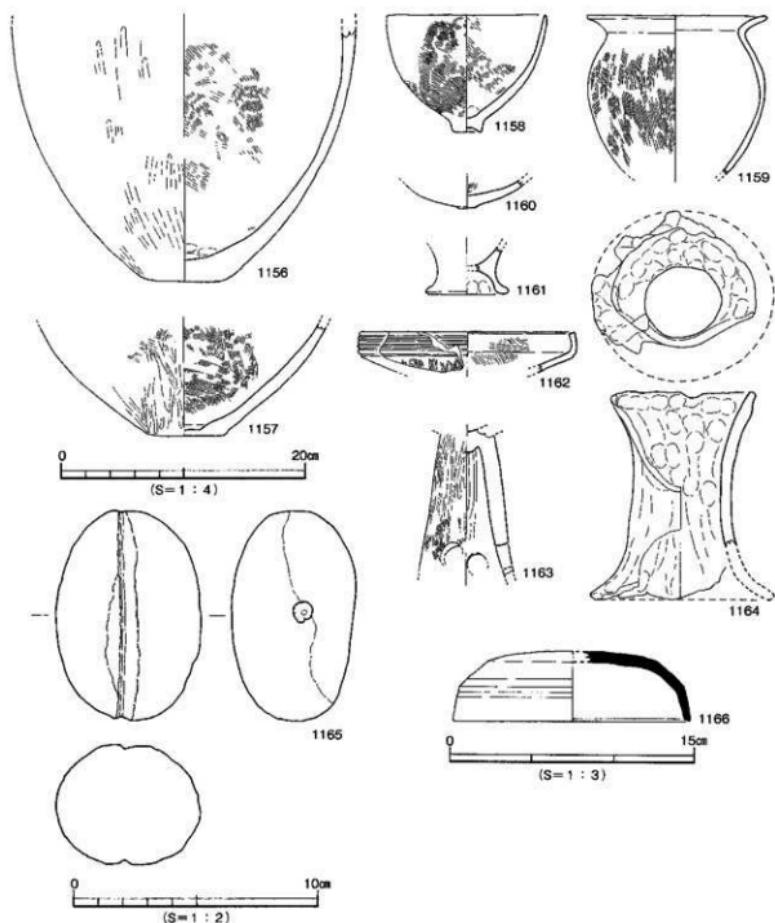
第213図 S B 602遺物分布図

は胸部上半、1196は胸部下半で、調整はヘラミガキが顕著である。1197と1198は高壺。1199は緑色片岩製の柱状片刃石斧の大型品で、基部と刃部には欠損が認められる。正面には細かい敲打を施し、平面形は細長く基部側の幅は狭くなり、横断面形は隅丸の身膨れ状を呈しており、原基形からは著しく弛緩したものとなる。法量は現長139mm、幅20mm、最大厚27mmを測る。

時期：埋土と出土遺物とからSK101は弥生時代中期後葉、梅木編年の伊予中部IV様式に時期比定される。形態と規模、さらに横断面形態等からSK101は貯蔵施設（穴藏）として本来機能していたものと判断される。ただし、埋土には斜面堆積が認められ、出土遺物に完形品はなくいずれも破損品で、特異な出土状況が認められないこと、さらに勾玉や管玉等の希少遺物が伴っていない。



第214図 SB 602出土遺物実測図(1)



第215図 SB 602出土遺物実測図(2)

ことから、S K101は機能停止後、埋没過程において生活廃棄物を投棄するゴミ穴として活用されていた可能性が高いと判断される。出土遺物の弥生土器には明確な時期差を認めることができることから、比較的短期間で埋没した可能性が高い。

**S K105 [第220図]**

調査地西のI区北西部、M9区に位置する。造構検出時に掘立101を構成する柱穴④に切られることが確認している。平面形態は隅丸方形状を呈し、土坑長軸が南北方向を指向し、N-20°-Wとなる。規模は長軸1.6m、短軸1.4m、検出面からの深さはわずかに14cmを測り、S K101と同様、土坑下部（床面付近）のみの遺存と判断される。断面形態は逆台形状で、床面にはわずかな起伏がみられる。埋土は黒色土（7.5Y R1.7/1）に浅黄色土（2.5Y7/4）碎ブロックが混じる單一層である。埋土の精査中に遺物がみられず、1~2cm大の小円碟を確認したのみである。

時期：S K105には時期を特定できる遺物を伴っていないため、構築時期を特定することには制約があるといわざるを得ない。ただし、検出時点で掘立101を構成する柱穴④に切られることが確定しており、S K105は弥生時代後期前葉以前に構築された可能性が高いものと理解しておきたい。

**S K106 [第221図、図版70-2・3・76・77]**

調査地西のI区北西部、N9・10、O9・10区に位置し、掘立101を構成する柱穴⑥の南2mで検出した。平面形態は不整隅丸長方形状を呈するが、南東隅に突出部（張り出し）がある。土坑長軸は東西方向を指向し、N-85°-Eとなる。規模は長軸2.3m、短軸1.6m、検出面からの深さ26~30cmを測り、土坑下部（床面付近）のみの遺存と判断される。断面形態は逆台形状で、床面はほぼ平坦となる。埋土は黒色土（N15.0）を基準として、炭化物粒の有無を基準に四層に細分可能である。遺物は弥生土器、石器、碟があり、埋土②層上面から遺物の多くが出土した。

**出土遺物（1200~1215）** 1200~1208は甕、1209と1210は壺、1211と1212は鉢、1213はミニチュアの鉢、1214は高杯。甕は中型品と小型品とがあり、口縁部を拡張するものがある。調整は胴部下半の外面にヘラミガキされる傾向にあり、底部は平底が多い。鉢には折り曲げ口縁と直口縁とがあり、いずれも小型品となる。1213は上層から出土した唯一の完形品。1215は緑色片岩製石庖丁で左半部を大きく欠く。二孔が伴うものであれば長さに対して幅の短い横長系となる。刃部は扁刃刃で、表面側の刃部研ぎ出しは明確で、再研磨に施したものである。右側縁には研磨による抉りがみられ、これは遺存する孔と対称の位置関係である。また、裏面中央の背部寄りには未貫通の孔が確認できる。このことから、本資料は当初直線刃半月形（著しい横長系の体部二穿孔品）の磨製石庖丁として機能し、破損した後に、刃部に対して再研磨を施した再利用品（リサイクル品）と判断される。体部裏面の中央背部寄りには貫通に至らない孔痕があり、両端には紐掛け用の抉りがあることから、紐掛けは孔から抉りへ変化する過渡的な様相を呈するものである。法量は現長85mm、幅45mm、最大厚7.0mmを測る。

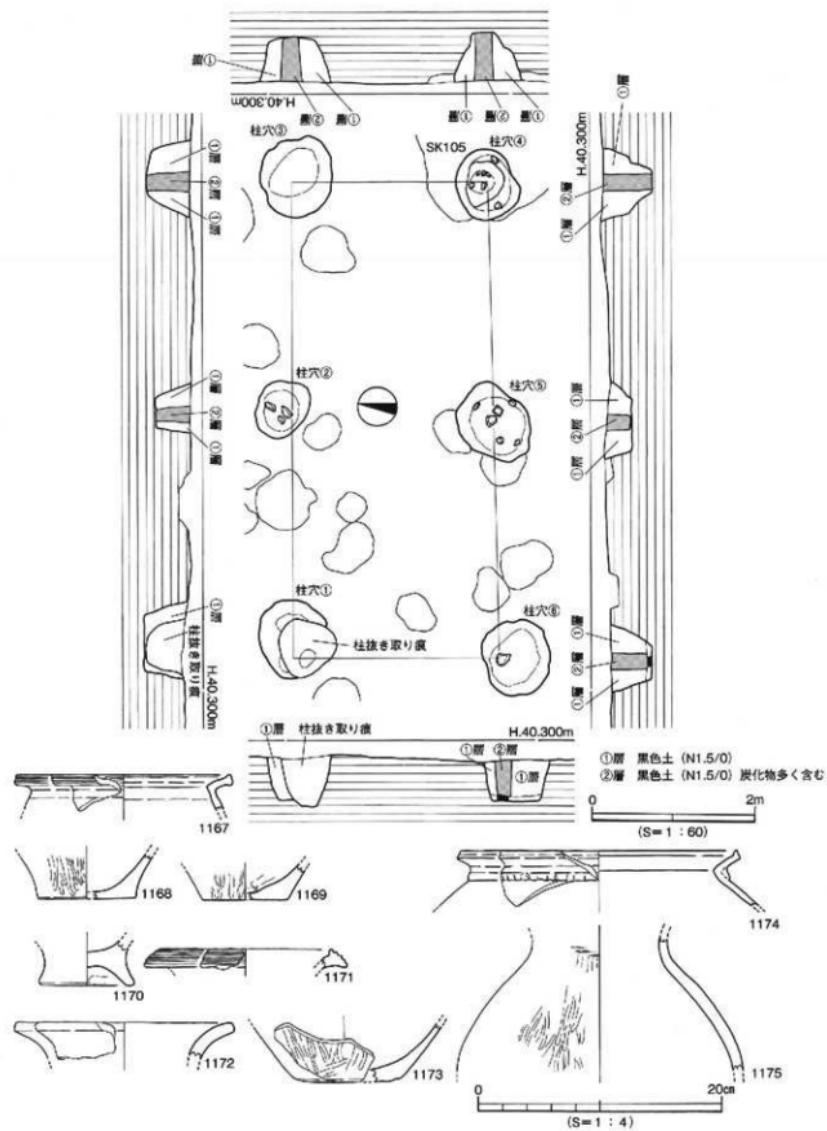
時期：埋土と出土遺物とから、S K106は中期後葉、梅木編年の伊予中部IV様式に時期比定される。

**S K601 [第222図]**

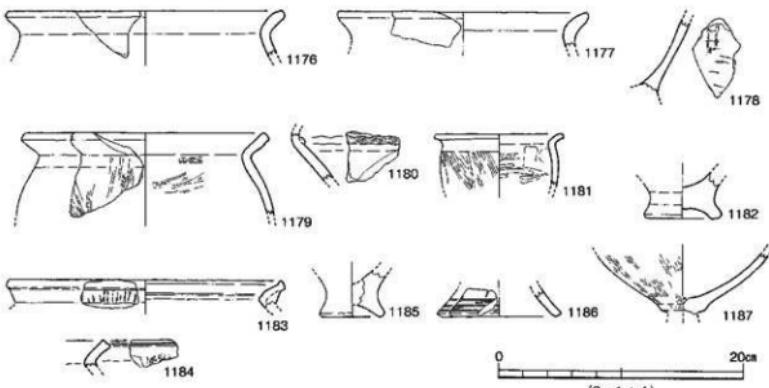
調査地中央、VI区北西端のJ4・5区に位置し、遺構の一部は調査区外へ続く。平面形態は不整隅丸方形状を呈し、規模は東西長1.5m、南北長1.2m、検出面からの深さ20cmを測る。中央寄りで直径60cmを測る掘りこみを検出し、二段掘り状を呈する。埋土は黒色土（2.5Y2/1）の單一層である。遺物は埋土中から弥生土器片がわずかに出土し、図化可能なものはわずかに1点である。

**出土遺物** 1216は長頸壺で、口縁部は短く外反する。

時期：埋土と遺物とからS K601は弥生時代中期後葉、梅木編年の伊予中部IV様式に時期比定される。



第216図 捨立101測量図及び出土遺物実測図(1)



第217図 挖立101出土遺物実測図(2)

## (4) 柱穴 (S P)

## S P 621 [第223図]

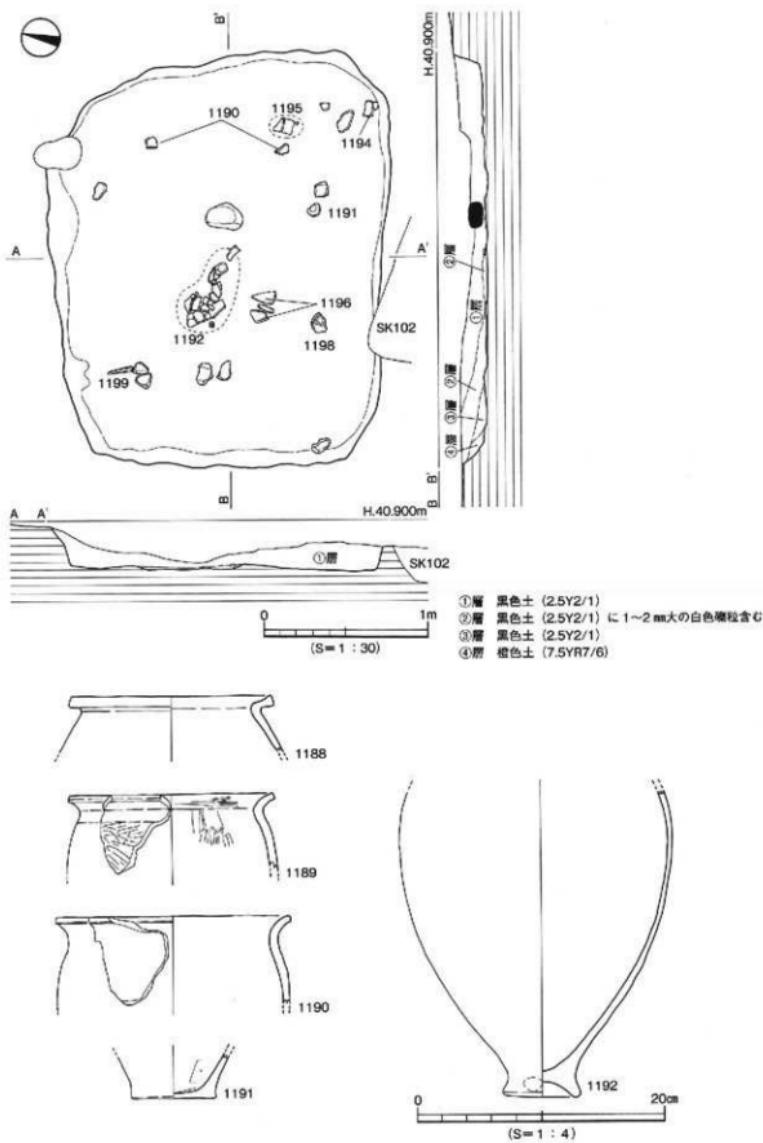
調査地中央、VI区の北西部のJ5区に位置し、平面形態は不整梢円形状を呈する。規模は東西長0.74m、南北長0.94m、深さ50cmを測る。床面は二段掘り状を呈する。埋土は黒色土(25Y2/1)の單一層である。遺物は埋土中から弥生土器片が出土し、圓化可能なものは2点である。

出土遺物(1217・1218) 1217は壺上半部。口縁部の屈曲は強く、口縁端は上方に拡張され、ナデ凹む。復元口径22.5cmを測り、調整は外側が細かいタテハケ目である。1218は壺下半部で、底部を欠く。器面の摩滅は著しいが、わずかに縱方向のミガキ痕が観察できる。

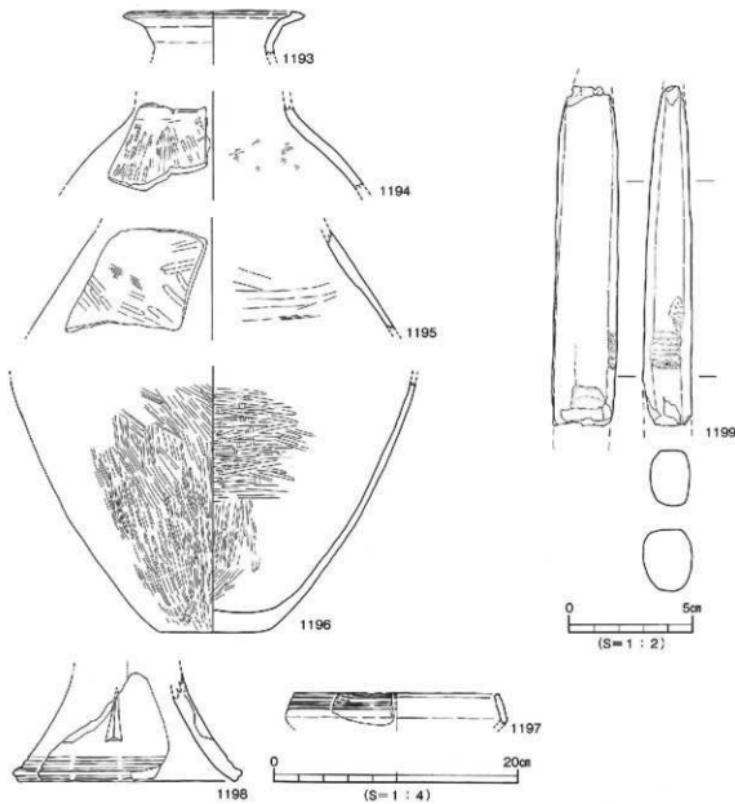
時期：埋土と出土遺物とから、S P 621は弥生時代中期後葉、梅木編年の伊予中部IV様式に時期比定される。

## 5. 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構には竪穴式住居址8棟、掘立柱建物址1棟、土坑4基、柱穴2基、性格不明遺構1基がある。多くは調査地東半部に位置する傾向にあり、旧地形のやや高い緩斜面上を中心として竪穴式住居址や掘立柱建物址、土坑等が展開する。これは古墳時代の土地利用の一端を示す知見となる[第206図]。



第218図 SK 101測量図及び出土遺物実測図(1)



第219図 SK 101出土遺物実測図(2)

## (1) 竪穴式住居址 (S.B.)

## S.B. 101 [第224図、図版70-5・6]

調査地西部、I区の南東部のL 8・9区に位置し、一部は調査区外へ続く。現代坑により住居の北西隅は削られて消失していた。I区東壁断面上層の観察に拠り、住居の確認面は3層上面であることを確認した。平面形態はほぼ正方形を呈し、規模は東西長4.3m、南北長4.5m、検出面からの深さ25~43cmを測る。埋土は三層に大別される。上・中層は黒色土(N15/0)で、北東方向からの流入による堆積である。下層は褐色土(7.5Y R4/4)混じりの黒色土(N15/0)である。住居の構築時床面は凹凸が著しく認められ、住居北東部は下層より整地していた可能性が考えられる。したがって、下層上面が住居使用時の床面とみられ、局部的に貼床を伴う。付帯施設として周壁溝を確認したが、部分的な確認にとどまった。主柱穴は未確認で、竈に相当する施設も同様である。遺物はわずかに上

飾器と須恵器の破片があり、住居の南半でその多くが出土した。圓化していないが、大小の碟も合わせて確認している。なお白卡2点は中層上面にて出土している。このほか住居内に流入した凹線文期の弥生土器小片がわずかに出土しており、これは住居埋没過程の遺物と判断される。

#### 出土遺物 (1219~1233)

1219~1221は弥生土器。1222~1224は土師器の甕である。

1222は住居址検査面出土。口縁の1/8程度の遺存で、口縁内面に稜をもつ。1224は二重口縁甕で、口端は面をもつ。

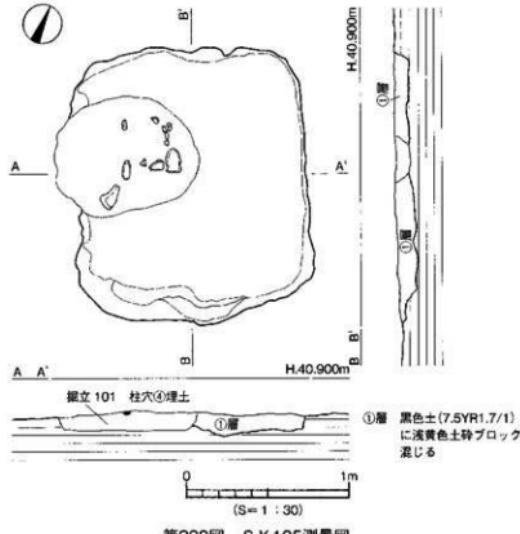
復元口径17.2cmを測り、色調は外面がにぶい橙色 (5 YR R

5·4)、内面が橙色 (5 YR 5/4) を呈する。1225~1229は高杯で、杯部は直線的に外傾し、口縁部はわずかに外に屈曲する。脚部は1227と1228のような短脚タイプと、1229のような長脚タイプとがみられる。1230は製塙土器とみられる破片で器壁は薄い。調整は外面に平行タタキ、内面に指ナデ痕ととどめる。色調は外面がにぶい黄橙色 (10 YR 7/3)、内面が灰黄色 (25 YR 7/2) を呈する。1231は外面に格子タタキ痕を顯著に残す胴部小片。内外面の色調はにぶい黄橙色 (10 YR 6/3) である。1232と1233は須恵器。1232は東壁のトレンチ精査時に出土した杯蓋小片。口縁部と天井部との境界に凹線状の凹みを施す。天井により回転ヘラケズリを施す。1233は杯身小片。復元口径13.2cmを測り、口縁部は内傾して立ち上がる。

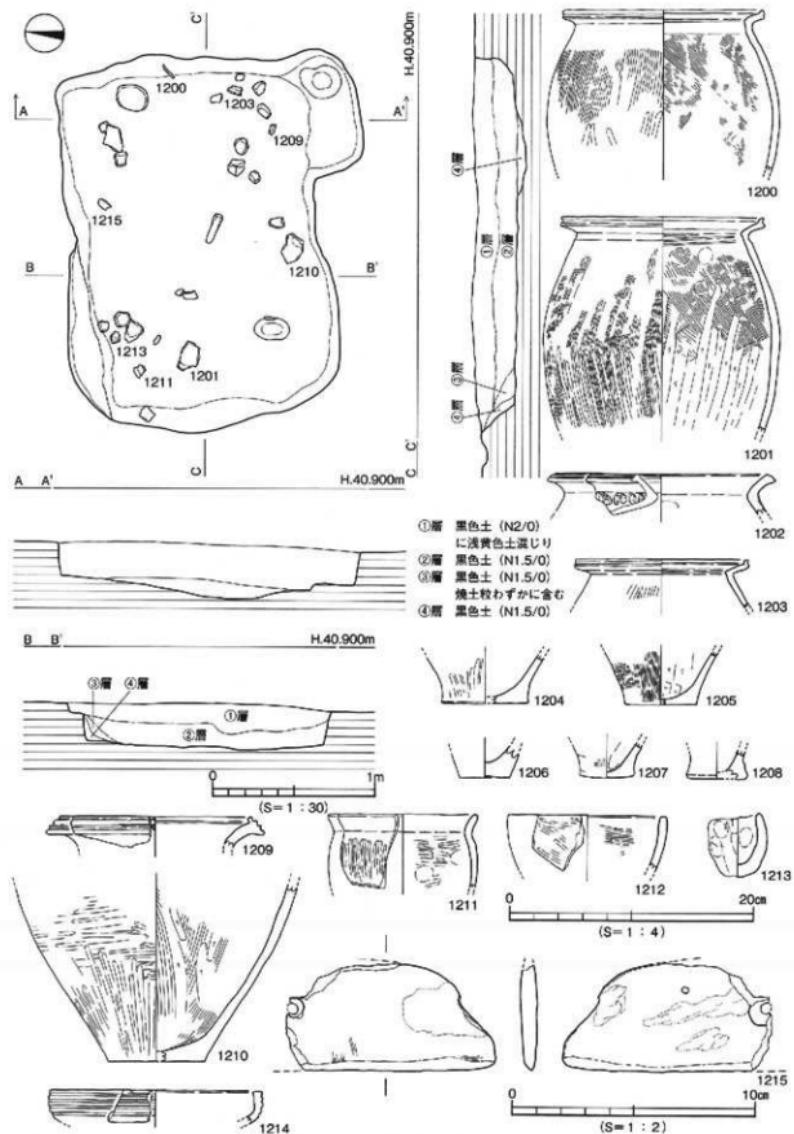
時期：埋土と遺物とから、S B101は古墳時代後期前半代に時期比定される。

#### S B301 [第226~227図、図版72~3・77]

調査地東端部、Ⅲ区東端のB 1・2区に位置する。平面形態は長方形を呈し、一部は調査区外へ続く。また、住居の北半部はSD301に切られ、西部は試掘時のトレンチに切られる。規模は東西5.3m、南北4.9m、検査面からの深さは20~45cmを測る。埋土は黒色土 (N1.5/0) で、床面の一部には貼床を確認した。付帯施設は主柱穴と周壁溝、さらに住居の北東と南東に土坑状の落ち込みを確認した。なお、土坑状の落ち込みは輪郭がやや不明確であった。主柱穴は3基確認できたが、配置からさらに北東部に1基の存在を想定し、4本柱で屋根を支える構造の可能性が高いものと考えておきたい。このような復元に従えば、東西間2.1m、南北間1.9mを測り、やや東西の主柱穴間が広いものとなる。なお、主柱穴は埋土の精査をおこなったが、柱痕跡を確認するには至らなかった。遺物は埋土中から



第220図 S K105測量図



第221図 SK 106測量図及び出土遺物実測図

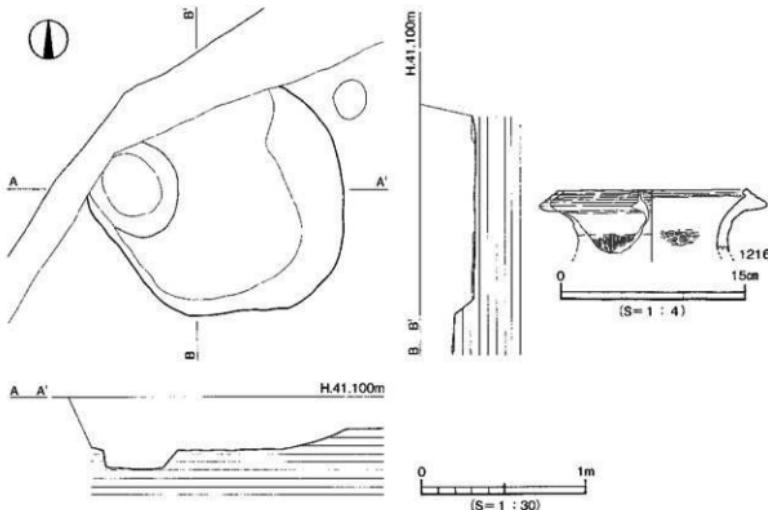
土師器の壺、鉢、高坏の小片のほか、須恵器の坏蓋、坏身が散在して出土した。ただし、周壁溝の南西隅付近で出土した坏身1244だけは特異な出土状況を呈していた。すなわち、口縁の一部をわずかに打ち欠いた坏身を半裁し重ねた状態で周壁溝の床面に据えていたのである。

**出土遺物 (1234~1245)** 1234~1236は土師器、1237~1245は須恵器である。坏蓋と坏身の遺存は不良で、いずれも小破片である。1244は口径12.5cm、器高4.6cm、底径5.8cmを測る坏身である。口縁部は内傾した後に直立気味に立ち上がる。底部は扁平となり、内面には同心円文のタタキあと具痕が残る。色調は内外面ともに灰白色 (N7/0) を呈し、焼成は良好である。1245は1/2強が残る壺である。口縁部は短く外傾し、段をもち大きく外に開く。復元口径12cmを測り、器高は12.5cmと推定される。胴部は扁平となり、最大径位置が中央よりやや上位となり、弱い稜をもつ。

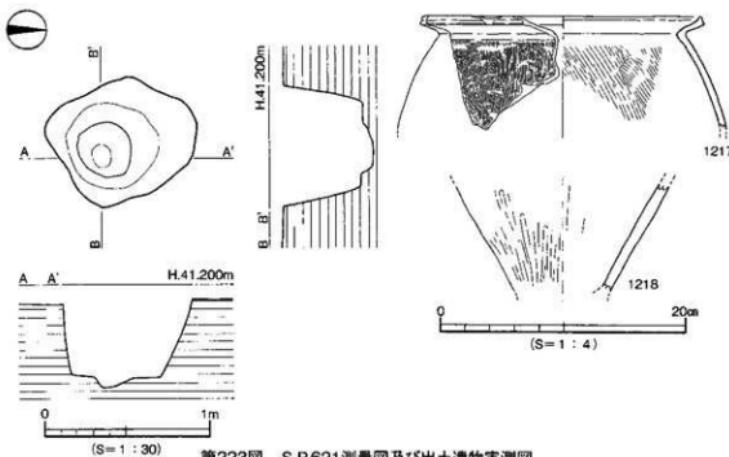
**時期** 埋土と遺物、とくに周壁溝床面の1244や、比較的の遺存の良い1245の形態から、SB301は古墳時代後期前業に比定される。なお、主柱穴から柱痕跡が未確認であることと、周壁溝からの1244の出土状況とから、住居廃絶時には屋根を含む上屋が撤去されたオープンの状態であった可能性が考えられる。本住居址の調査知見は住居廃絶時の状況を具体的に示す事例のひとつに位置付けられる。

#### SB302 [第228~230図、図版72-3・77・78]

調査地東端部、Ⅲ区東端のB2・C2区に位置する。一部は調査区外へ続き、住居の北東隅は試掘時のトレンチにより切られている。平面形態は不整形か不整長方形状を呈し、規模は北端の東西長4m、中央の東西長5m、確認した南北長3.3mを測る。検出面からの深さは15~50cmを測り、床面近くの埋土を確認した。埋土は炭化物粒と焼土粒が多量に混じる黒色土 (N1.5/0) で、遺物は住居



第222図 SK601測量図及び出土遺物実測図



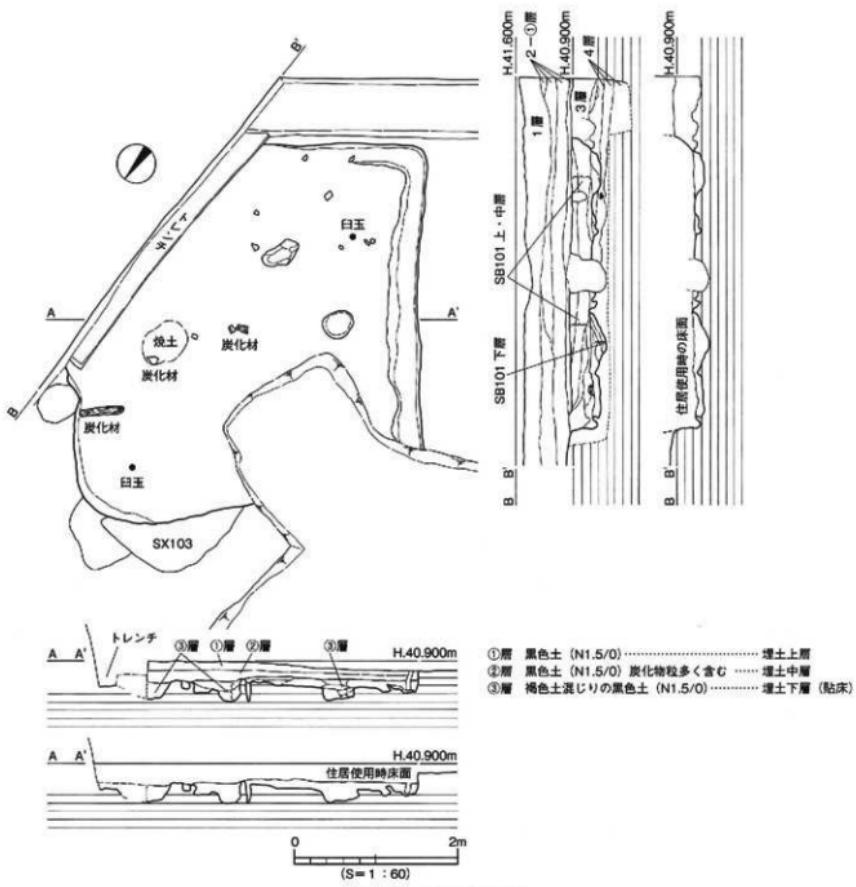
第223図 SP 621測量図及び出土遺物実測図

北半部で土師器がいくつかまとめて出土した。調査の工程上、出土時の遺物出土状況の平面図は平板を用いて行い、遺物のまとまりを群として認定し、その範囲を記録した。付帯施設には5基の柱穴と、中央に大型土坑を確認した。住居自体の遺存が不良であったことに起因して周壁溝は検出されなかった。

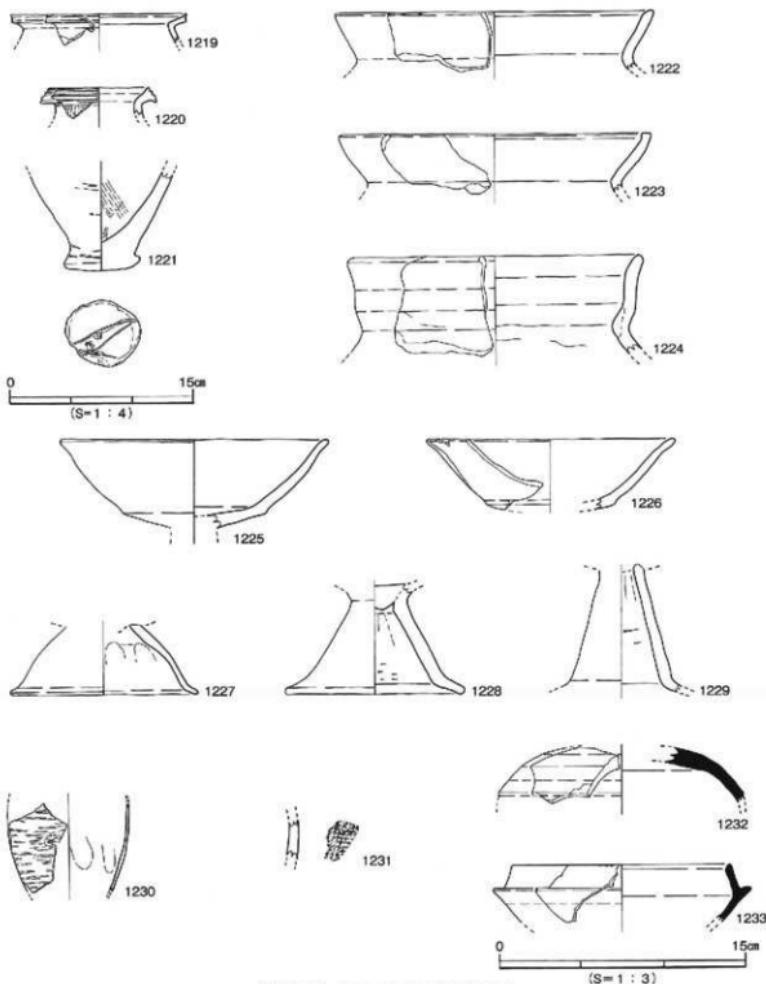
柱穴の配置からは調査区外へ続く住居南半にさらに2基の柱穴の存在が予想される。したがって、本住居は中央の柱穴1基を含めて7本の柱で屋根を支える構造が考えられる。住居北壁では竈等の炊飯施設の痕跡を確認するには至らず、また主柱穴の柱痕跡も未検出である。

**出土遺物 (1246~1268)** 1246~1249は壺である。1246は口縁部が「く」の字状を呈し、肩部は強く張り、胴部最大径が口径を凌ぎ、球形を呈する。法量は復元口径17.2cmを測り、残高23.1cmを測る。器面の摩滅が著しいが、縦方向のハケ目調整が看取される。色調は外面がにぶい黄褐色 (10Y R 5/3)、内面が灰黄褐色 (10Y R 5/2) を呈し、焼成は良好である。1247は口縁のみが1/2程残る。口縁部はやや長く、口端が内にわずかに肥厚する。口縁の屈曲は甘く、内面の稜線は弱いものとなる。肩部は強く張り、色調は外面がにぶい黄褐色 (10Y R 5/4) を呈する。1248は口縁部がやや直立するタイプで、復元口径15cmを測る。肩部の張りは強く、球形の胴部となる。口縁の屈曲部は強いヨコナデにより外面がわずかに凹む。器面の摩滅が著しく、調整を確認することはできない。1249は1248と同形態となる。1250~1252は壺で、大中小がみられる。1250は大型品で口径14.7cm、残高27.1cmを測り、口縁は緩やかに外反する。肩部は強く張り、底部に向かってややすぼまる。色調は外面が橙色 (5 Y R 6/8)、内面が明赤褐色 (5 Y R 5/6) を呈し、底部外面に黒斑が認められる。1251は口縁部が胴部中心から外れた位置に取り付く中型品。口縁は強く屈曲して直口し、口端は丸く収まる。器面の内外面は摩滅が著しい。口径10.1cm、器高15.8cmを測る。1252は小型丸底壺である。口縁は短く直立気味である。色調は外面がにぶい黄褐色 (10Y R 7/3・6/3) を呈し、胎土にはわずかに石英と長石を含む。1253は塊。口縁は短く直口し、ヨコナデにより凹む。胴部はボウル状を呈し、丸底になるものと

みられる。復元口径は11.8cmを測り、色調は外面がにぶい褐色(7.5Y R6/3)、内面が明褐色(7.5Y R7/1)を呈する。1254~1264は高壺で、1254の遺存が最も良い。これは壺部が深く、脚部は短く「ハ」字形に開くタイプである。壺部は緩やかに立ち上がり、口縁がわずかに外反する。脚部は裾部が外に短く屈曲し、弱い稜が認められる。脚内面には横方向のケズリ痕が看取される。法量は口径20cm、器高は16.8cmを測る。1255~1258は壺部、1259~1264は脚部である。1257と1258は先述した1254の壺部と同形態タイプで、大きさに差異が認められる。1259は短脚で「ハ」字形に開き、裾部が外に屈曲するタイプであり、1257や1258と同一個体の可能性がある。1265と1266は瓶で、いずれも底部はわずか



に丸みをもつ。1266は砲弾形の器形となり、口径は25.4cm、残高21.8cmを測り、底部には楕円形の蒸気孔が穿たれている。胴部のやや下がった位置には把手が剥がれた痕跡が認められる。色調は外面とともににぶい黄橙色(10Y R6/4)を呈する。焼成は良好で、底部外面に黒斑がみられる。1267は高台の付く塊あるいは壺である。輪高台は底部外側に「ハ」字形に取り付く。色調は外面がにぶい黄橙



第225図 SB 101出土遺物実測図

色（10Y R7/3）、内面が灰黄褐色（10Y R6/2）を呈する。本資料は住居埋没過程で流入（混入）したか、ないしは住居埋没以降に構築された別遺構に伴うものと判断される。1268は硬質安山岩系の敲石で、下端に擦痕と敲打痕とが認められ、自然礫を転用したものである。法量は長さ11.1cm、幅7.9cm、最大厚6.3cmを測る。

時期：埋土と遺物からS B302は古墳時代中期後半代に比定される。須恵器は出土していないが、帰属時期から判断して須恵器は共伴するものと考えられる。

#### S B303〔第231図、図版72-3〕

調査地東端部、Ⅲ区東端のB 1・2、C 2区に位置する。住居の大半がS B301に切られ、西壁は試掘時のトレチにより切られる。平面形態は方形か長方形状を呈するものとみられ、規模は東西長3.5mを測り、検出面からの深さは10~40cmである。埋土は炭化物粒と焼土粒が多量に混じる黒色土（N 15/0）で、S B301の埋土と酷似する。遺物は土師器と須恵器の破片がわずかに出土した。付帯施設には3基の柱穴を確認したが、その配置からは北東の位置にさらに1基の柱穴の存在が想定され、4本の柱で屋根を支える構造が復元できる。なお柱痕跡は未検出である。

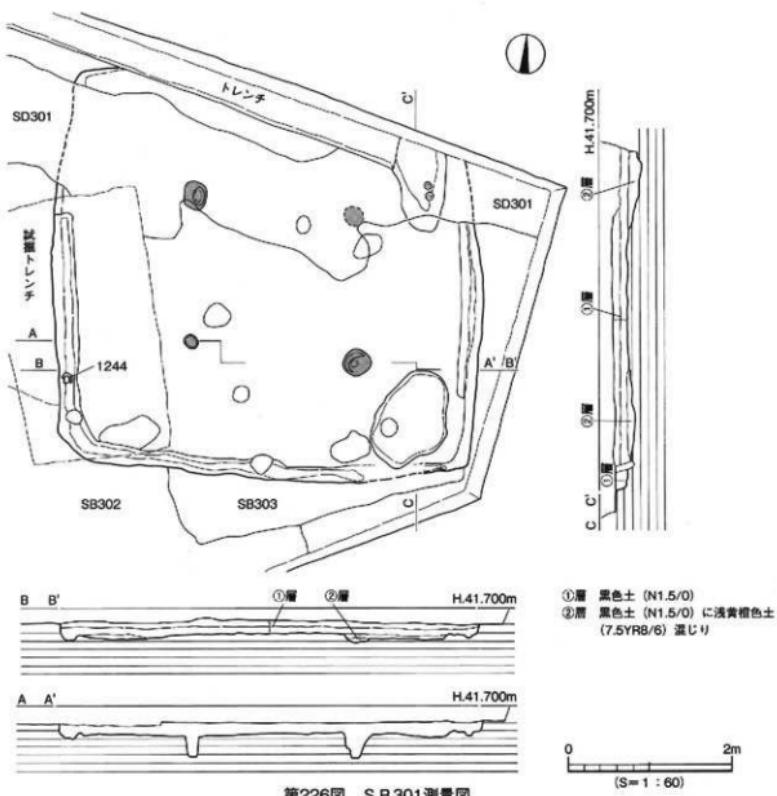
**出土遺物（1269~1272）** 1269~1270は土師器である。1269は甕の口縁部片で、復元口径18.8cmを測り、わずかに内湾する器形となり、口端は丸く收める。外面に粘土の接合痕が看取される。1270と1271は高坏。1270は坏部の1/4が遺存し、深めの坏部で、口縁は内湾気味に立ち上がり、わずかに外反する。口端は丸みをもち、復元口径13.8cm、残高5.7cmを測る。色調は外面が橙色（5 Y R6/6）、内面が明赤褐色（5 Y R5/6）を呈し、焼成は良好である。1271は脚据部片で、大きく「ハ」字形に開く形態となる。1272は須恵器の坏蓋片で、天井部の1/2が残る。天井部は平坦面をもち、約1/2は回転ヘラケズリを施す。口縁部との境は明確さに欠ける。復元推定の口径は14cm程度であろうか。色調は内外面が灰色（N5/0・6/0）を呈し、焼成は良好である。

時期：埋土と遺物、さらにS B301との重複関係から、S B302は古墳時代後期前葉に時期比定される。

#### S B401〔第232図〕

調査地東寄りのIV区東端、E 3・4、F 4区に位置する。遺構の一部はS K401や溝状の現代坑により切られる。また、古代~中世の柱穴数基にも切られている。弥生時代後期のS B402の南0.7mに位置する。埋土は黒色土（N15/0）の單一層である。付帯施設は検出できず、主柱穴は本来伴っていない可能性もある。「豎穴式住居址」というよりは「豎穴遺構」と呼称すべきであるが、野外調査の記録に準じて敢えて「豎穴式住居址」の略号を用いて報告しておく。遺物は埋土中から土師器と須恵器の小片、石片が出土した。

**出土遺物（1273~1280）** 1273~1276は土師器の甕。1274は口縁部の1/4が遺存し、復元口径18.9cmを測り、口端はわずかに内面に肥厚する。色調は内外面ともに明赤褐色（5 Y R5/6）を呈し、胎土には1~3mm大の長石や石英を多量に含む。1277~1279は須恵器。1277は坏蓋の小片で、天井部と口縁部の境には明瞭な後が巡る。調整は天井部外面に回転ヘラケズリが認められ、色調は内外面が灰色（10Y6/1とN6/0）を呈する。1278は坏身で、1/4が遺存する。口縁部はやや内傾して立ち上がり、受部は短く水平に伸びる。胎土には1~4mm大の長石がわずかに認められる。推定の復元口径は11.4



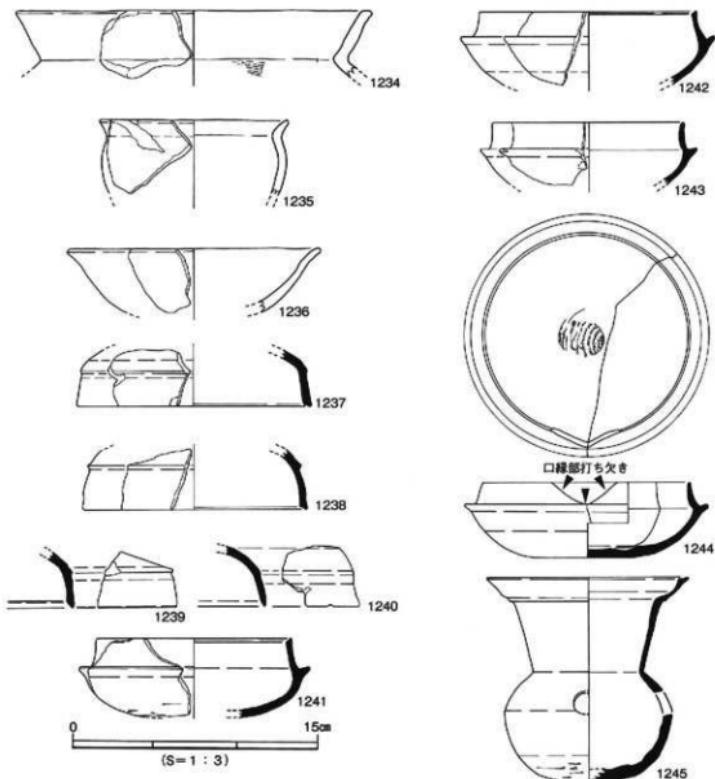
第226図 SB301測量図

cm程度となり、調整は底部外面の1/2までは回転ヘラケズリとなる。1279は無蓋高壺の脚部小片で、長方形の透かし孔が認められる。1280は硬質砂岩製の台石。表面に顕著な使用痕は認められない。完形品で、長さ19.4cm、幅17.7cm、厚さ4.2cmを測る。

時期：埋土と遺物から、SB401は古墳時代後期前半代に時期比定される。

#### S B501 [第233図、図版73-3]

調査地中央のV区北西隅、G 3・4、H 3・4区に位置する。遺構の一部はSK501や溝状の現代坑により切られている。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長軸長3.7m、短軸長2.8m、検出面からの深さは20~40cmを測る。埋土は褐色粒の混じる黒色土 (N1.5/0) である。この褐色粒は遺構を覆う現代の水田床土の影響によるものとみられ、床土に沈着した鉄分が住居埋土に作用した可能性が高い。付帯施設は3基の柱穴が伴う。遺物は埋土中から弥生土器片と須恵器片とが出土した。



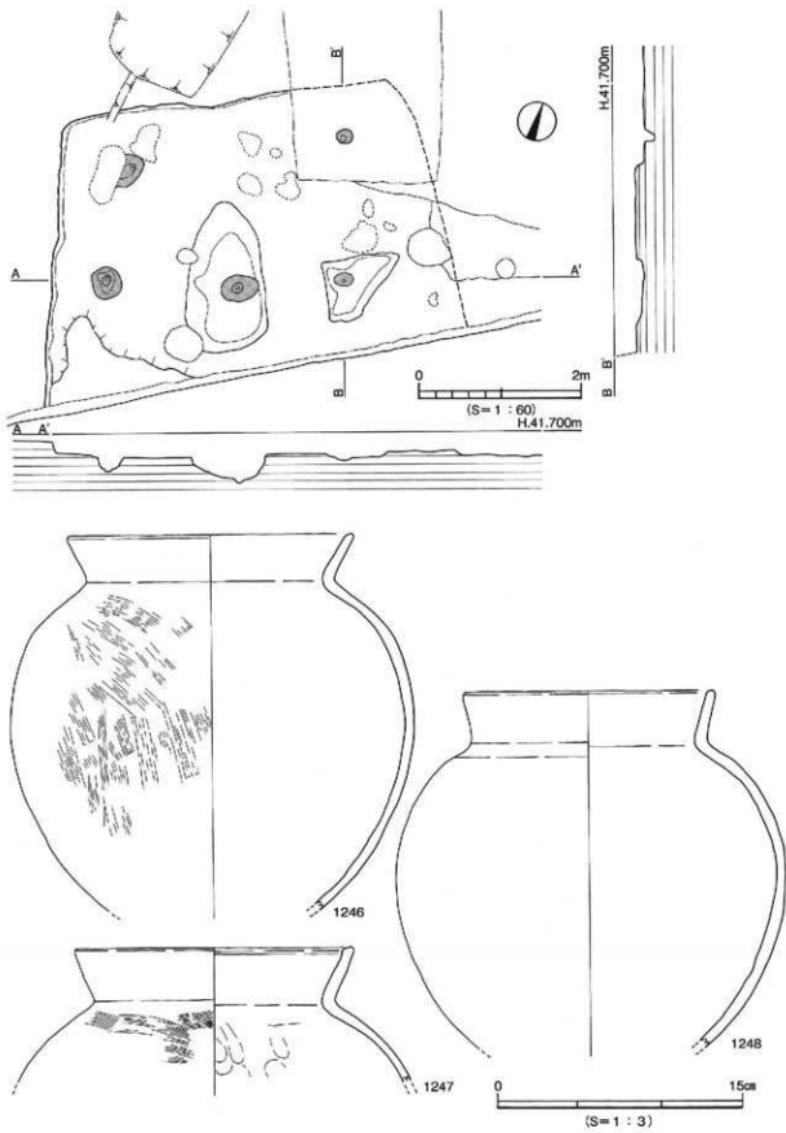
第227図 S B 301出土遺物実測図

**出土遺物 (1281~1284)** 1281は弥生土器の支脚。中実タイプで、器高が低く円柱状で、上下がわずかにスカート状に聞く器形となる。1282~1284は須恵器。1282は壺蓋で、復元口径14.6cmを測る。1284は壺。肩部はやや張り、調整は外面に平行タタキ後に回転ナデ、内面には同心円文（青海波文）の充て具痕がみられる。

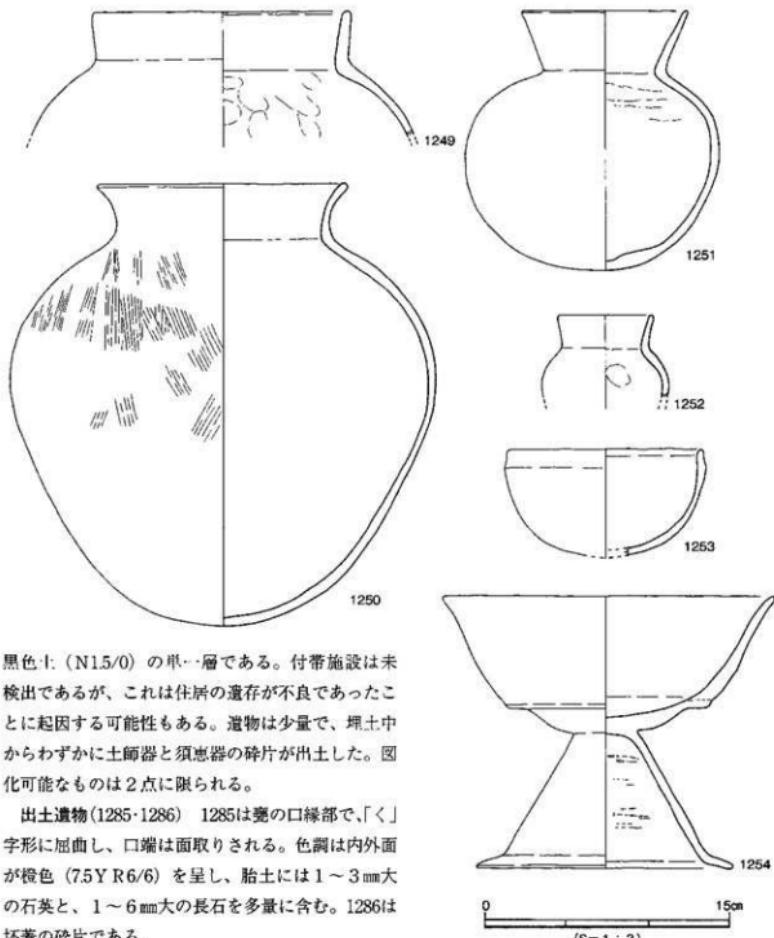
**時期**：埋土と遺物から、S B 501は古墳時代後期に時期比定される。なお1282はS B 501に直接伴うものではなく、埋没過程で混入したものである。

#### S B 601 [第234図]

調査地中央部のVI区西部、K 6・7区に位置し、遺構の大半は調査区外へ続く。VI区西壁の観察に拘れば、遺構は3層中から構築され、S B 602を切る。コンクリートを伴う現代坑により切られている。平面形態は方形ないしは長方形を呈し、規模は南北長4.3m、検出面からの深さ10cmを測る。埋土は



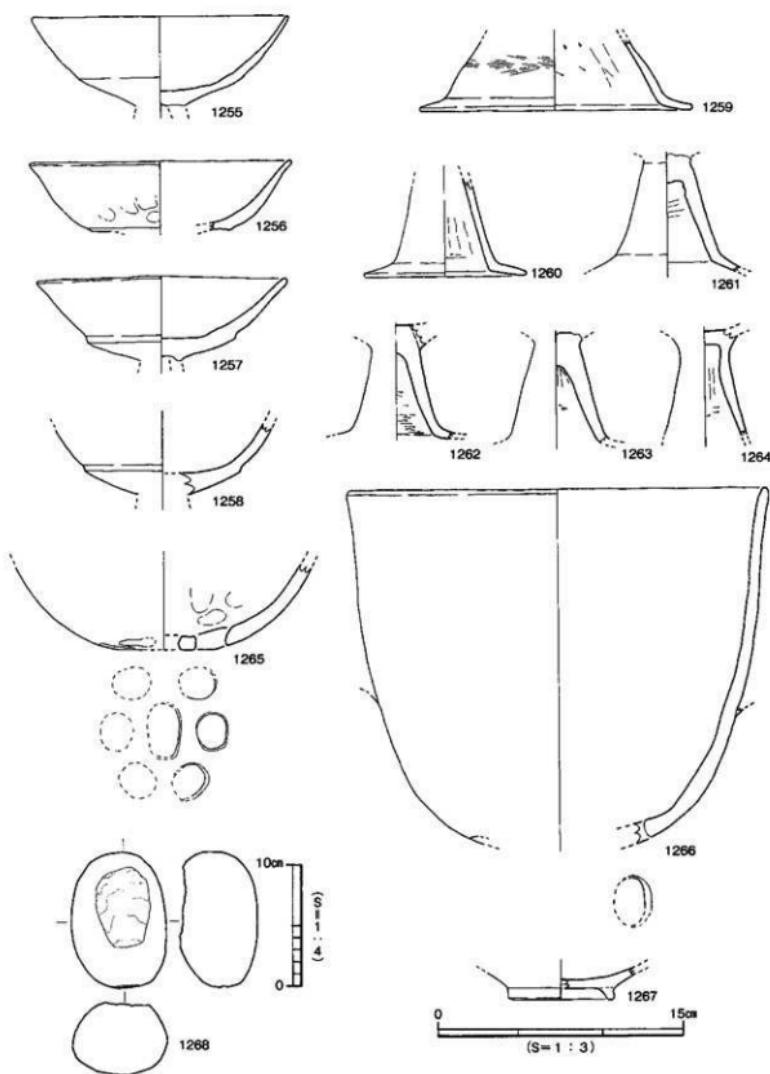
第228図 SB 302測量図及び出土遺物実測図(1)



第229図 SB 302出土遺物実測図(2)

## SB 603〔第235図〕

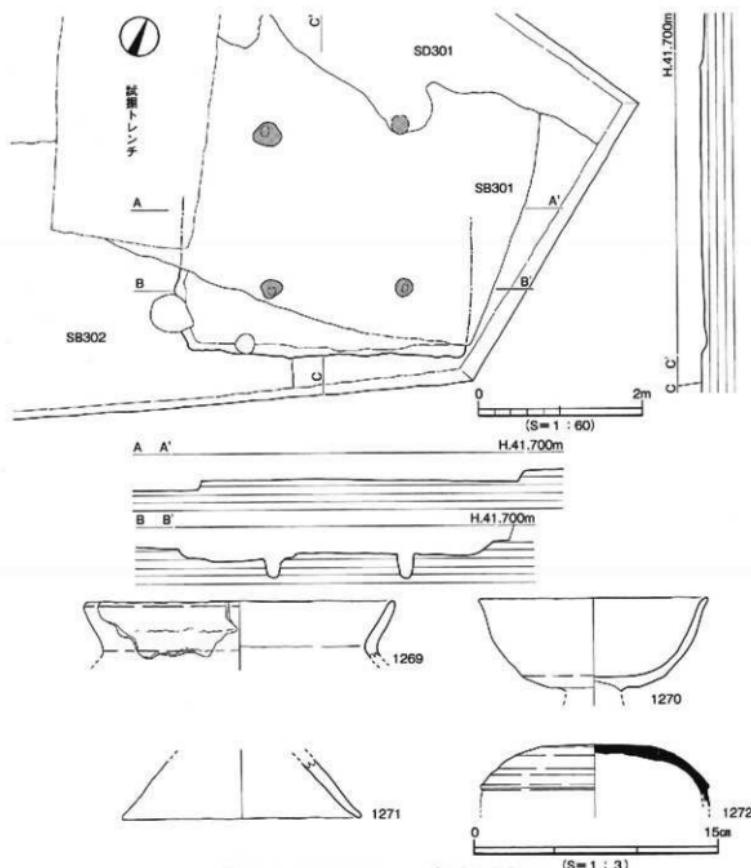
調査地中央部のVI区東部、J 5・6区に位置し、遺構の大半は調査区外へ続く。弥生時代後期SB 602の東に隣接しており、古墳時代後期以降の掘立601を構成するS P 604に切られる。平面形態は方形ないしは長方形を呈するものとみられ、南北長5.45m、検出面からの深さは15~25cmを測る。埋土上



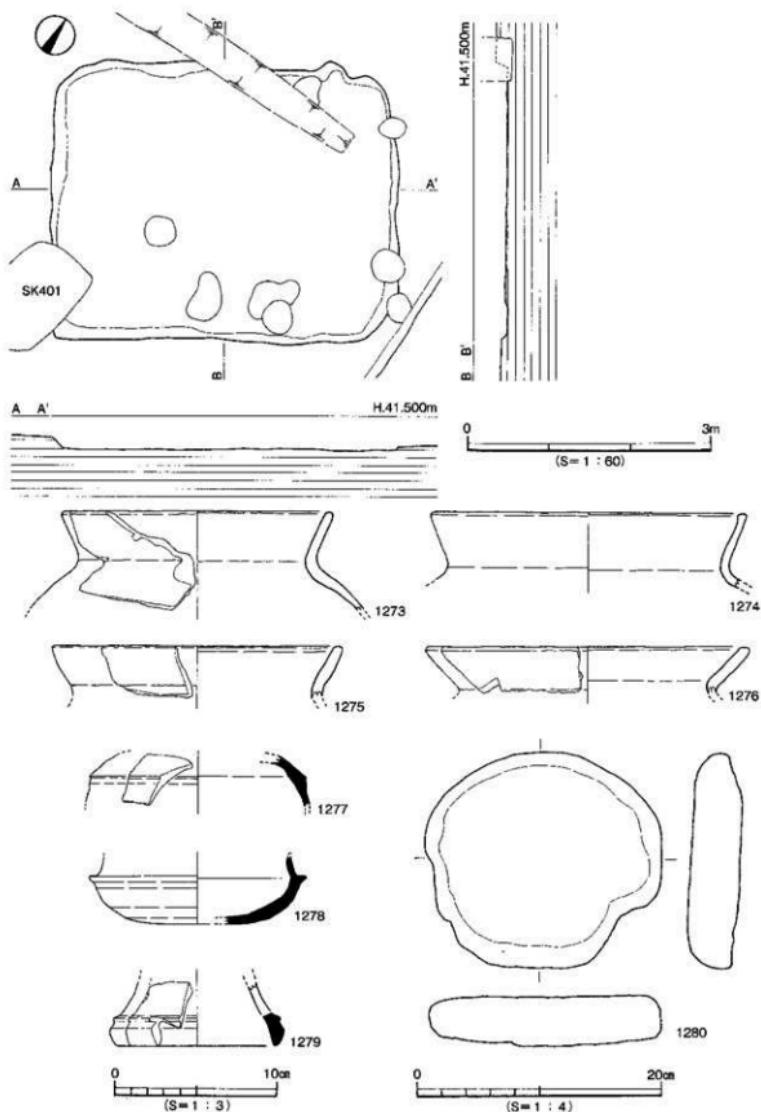
第230図 SB 302出土遺物実測図(3)

は黒色土（N15.0）の単一層である。付帯施設は周壁溝と2基の柱穴を確認した。主柱穴は配置状況から、調査区外にさらに2基の存在が予想され、4本柱で屋根を含む上屋を支える構造と推定される。遺物は埋土中から弥生土器、土師器、須恵器の各小片がわずかに出土した。壺、高杯、支脚の弥生土器はSB603に直接伴うものではなく、埋没過程で混入したあるいはSB603以前に構築されていた柱穴や土坑等に伴っていた可能性が高い。

**出土遺物（1287～1294）** 1287～1289は弥生土器である。1287は長頸壺の胴部片か。算盤玉状の胴部最大径位置の下端に断面「コ」字形の突帯を貼り付け、突带上には刻みを施す。突帶の上位には充填山形文状の施文がみられる。色調は外面がにぶい黄橙色（10YR 6/4）、内面はにぶい黄褐色（10Y



第231図 SB303測量図及び出土遺物実測図



第232図 SB 401測量図及び出土遺物実測図

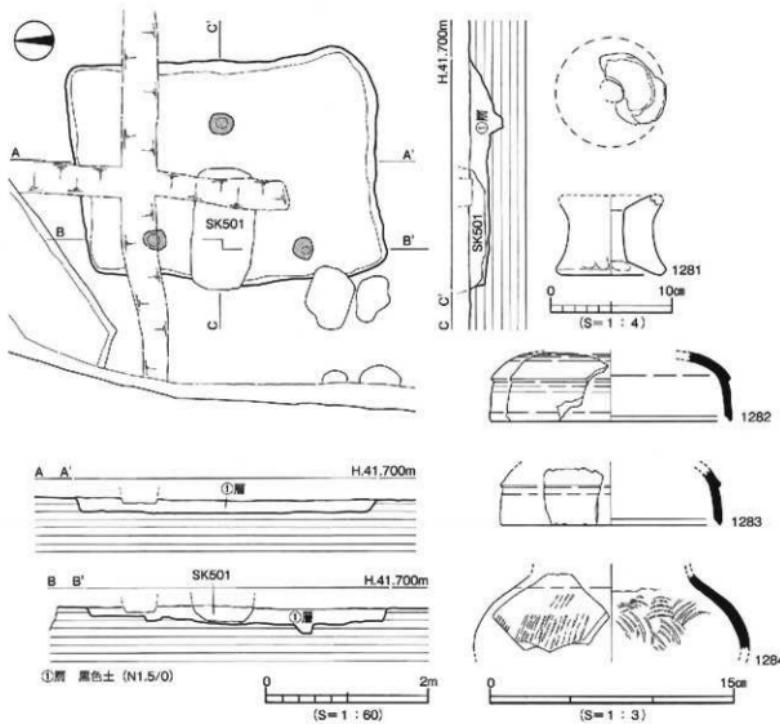
R5/3) を呈する。胎土には1~3mm大の石英と金雲母を含む。1288は高壇脚部、1289は支脚の脚部壠である。1290は土師器の壺片。1291と1292は須恵器の壺蓋、1293は壺身。復元口径12.8cmを測る。1294は無蓋高壇の脚部片。

時期：埋土と遺物からSB603は古墳時代後期に時期比定される。

## (2) 挖立柱建物址（掘立）

### 掘立601〔第236図〕

調査地中央部のVI区中央、J6・7区に位置し、SB602と603を切る。建物の方位は真北に対して直交し、N-90°-Eとなる。規模は、梁間2間(SP610・609・617)で2.9m、桁行き3間以上(北側SP610・605・604、南側SP617・618・619)で3.5m以上となり、検出面からの深さは最深で50cm(SP604)を測る。各柱穴は平面形態が円～楕円形を呈し、埋土は黒色土(N1.5/0)の單一層で、重複する堅穴式住居址の埋土と酷似していた。検出時の埋土に認められたひび割れや乾燥度合いを手



がかりとして切り合ひ関係を確定した。なお柱痕跡は認められなかった。遺物はわずかに土師器と須恵器の碎片が出土し、このうち國化可能は3点である。

**出土遺物 (1295~1297)** 1295はS P 609出土の土師器の壺。口縁部が短くやや内湾し、復元口径21cmを測り、色調は内外面ともに明赤褐色（5Y R5/6）を呈し、胎土には1~2mm大の石英と長石を含む。1296はS P 617出土の須恵器の坏身。口縁部の1/8程度の遺存である。口縁部の立ち上がりは内傾し、直線的に伸びる。復元口径12.4cmを測り、色調は内外面ともにオリーブ灰色（25G Y6/1）を呈する。1297はS P 617出土。

**時期**：埋土と遺物、さらに遺構の重複関係から、掘立601は古墳時代後期以降、少なくともS B 603が機能を停止し、住居の大半が土により埋積された後に構築されたものと判断される。

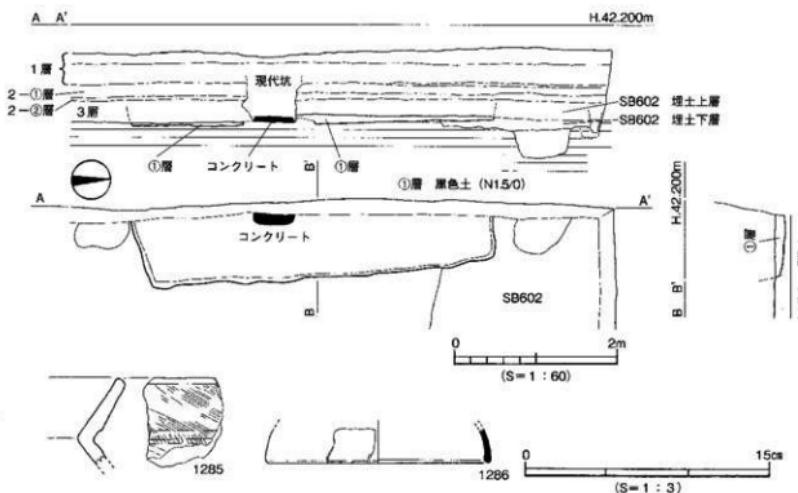
### (3) 土坑 (SK)

#### S K 602 [第237図]

調査地中央部のVI区北端、J 5区に位置する。平面形態は不整長楕円形を呈し、規模は長軸1m、短軸7.8m、検出面からの深さは18cmを測る。埋土は黒色土（N15/0）の單一層で、埋土中から弥生土器と須恵器の破片がわずかに出土した。

**出土遺物 (1298~1301)** 1298は弥生土器の壺底部。1299と1300は須恵器の坏身、1301は高环の脚部である。このうち1298は混入した遺物と考えられる。

**時期**：埋土と遺物からS K 602は古墳時代後期に時期比定される。



第234図 S B 601測量図及び出土遺物実測図

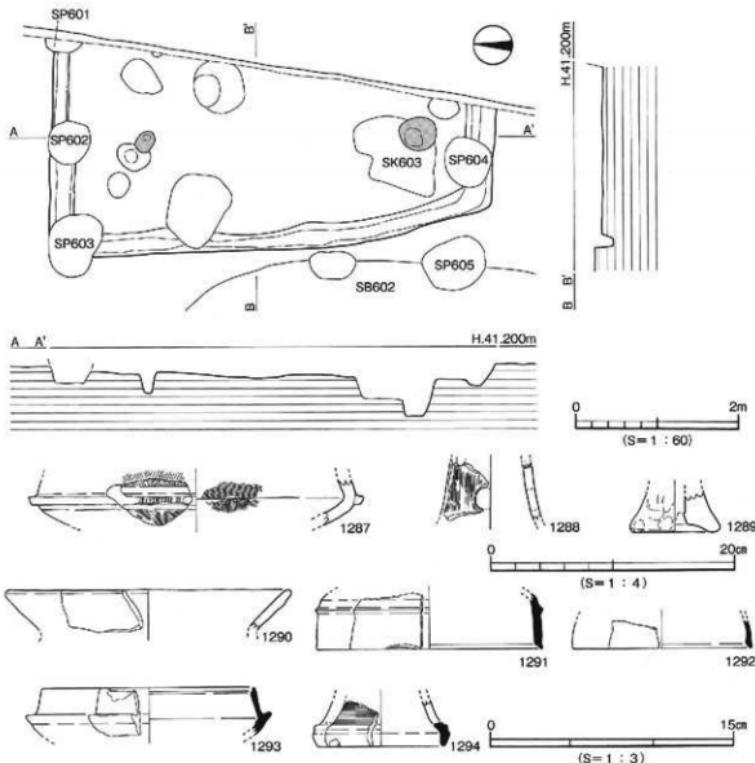
## (4) 性格不明遺構 (S X)

## S X 401 [第238図]

調査地東寄りのIV区東、F 4区に位置する。S B 401の西1.1m地点で検出し、70cm四方に遺物が集中していた。遺物に伴う掘り方は確認するには至らず、遺物の溜まりと認定した。その遺物には土師器の壺と瓶、須恵器の坏身を含む。

出土遺物 (1302~1304) 1302は壺口縁部の小片、口縁の1/8が遺存。内湾する口縁部の復元口径は18.8cmを測り、色調は内外面がにぶい黄橙色 (10 Y R 6/3・6/4) を呈する。1303は瓶の胴部で、バケツ形を呈する。胴部最大径は24cmを測り、色調は内外面ともに橙色 (5 Y R 6/8) を呈する。1304は壺身小片で、復元口径13.4cmを測る。

時期：遺物から古墳時代後期に時期比定される。

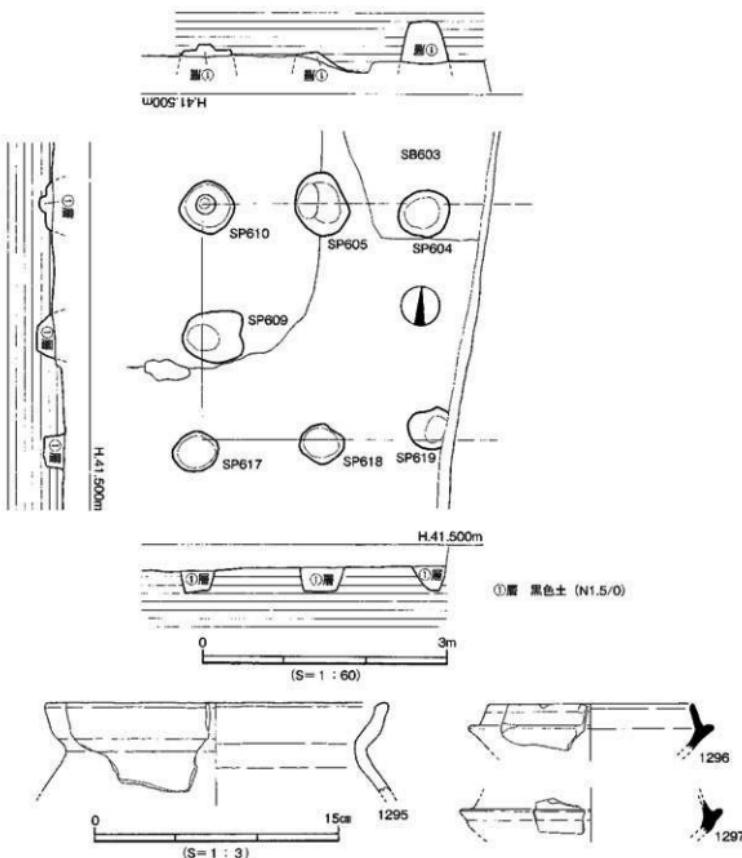


第235図 S B 603測量図及び出土遺物実測図

## (5) 柱穴 (SP)

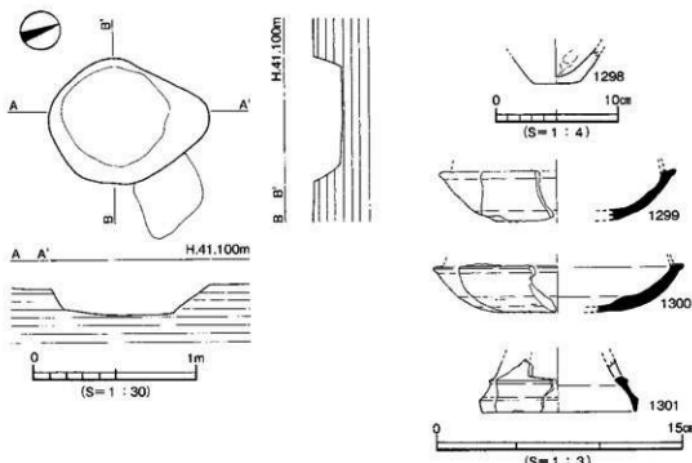
## SP 603・607 [第239図]

SP 603はSB 603の北東隅を切る柱穴である。検出時に切り合い関係を確認している。平面形態は不整円形を呈し、規模は径0.7m、検出面からの深さは24cmを測る。埋土は黒色土（N1.5/0）の単一層である。遺物は埋土中から須恵器の坏蓋と坏身の小片が出土した。なお、SB 603を切り込んで構築された柱穴SP 607はSB 603の南東2.2m地点に位置する不整隅丸方形状を呈し、規模は一辺0.4m、検出面からの深さ20cmを測る。埋土は黒色土（N1.5/0）の単一層で、弥生土器の複合口縁帯片が出士した。



第236図 掘立601測量図及び出土遺物実測図

出土遺物(1305～1308) 1305はS P 607出土。口縁部の1/4が遺存し、復元口径11.3cmを測る中型品。複合口縁の接合部は断面「コ」字形を呈し、外面には4条の櫛描波状文を施す。色調は外面がにぶい橙色(7.5Y R6/4)、内面がにぶい黄橙色(10Y R6/4)を呈し、胎土には1～4mm大の石英と長石を含み、金雲母もみられる。1306～1308はS P 603出土。1306は復元口径12.1cmを測る坏蓋。天井部と口縁部の境にみられる稜は曖昧で、口端は内傾する面をもち、わずかにナデ凹む。色調は内外面ともに灰白色(N8/0)を呈し、胎土には微砂粒を含む。1307は復元口径12.7cmを測る坏身。口縁は内傾し短く立ち上がり、口端は丸く仕上げる。受部は短く水平に伸びる。色調は内外面ともに灰黄色(2.5Y 6/2)を呈する。1308は底部付近が1/6程遺存する坏身。口縁部は欠損する。底部外面の2/3に回転ヘラケズリを施し、色調は外面が灰白色(N7/0)を呈す。

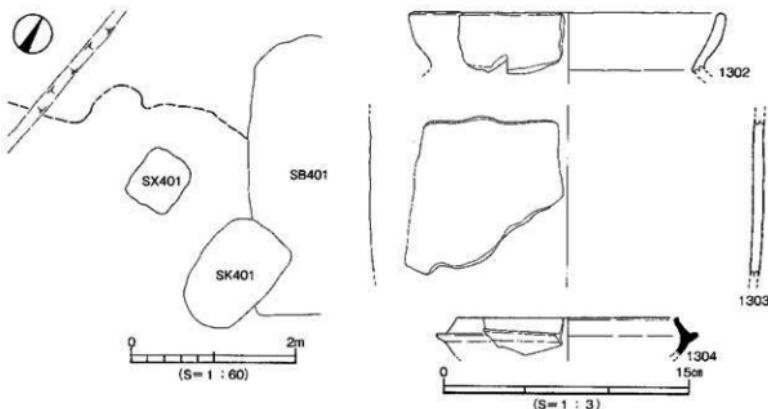


第237図 SK 602測量図及び出土遺物実測図

時期：いずれの柱穴もS B 603を切って構築されていることから、古墳時代後期のS B 603以降に帰属する。その場合、S P 607の図化可能な遺物が弥生時代後期中葉～後葉の複合口縁壺に限られることは、年代的には符号しない。したがって、S P 607の1305は直接柱穴の時期を特定する遺物に位置付けるには適当とはいえない。ここでは柱穴の埋没過程で混入した遺物と認めておきたい。S P 607の調査所見は同区周辺に弥生時代後期中葉～後葉に帰属する遺構が展開する可能性を示唆するものであり、遺跡の展開を考える上で興味深い。

一方、S P 603は埋土と遺物、さらに遺構の重複関係から古墳時代後期後半に時期比定される。

このように遺構出土遺物には直接伴うものと、何らかの要因で混入したものとが混在するケースがある。野外調査時における遺構の重複関係や遺物の出土状況、さらに室内調査における整理と分析作業を通じて、遺物と遺構に対して的確な評価を与えることは調査担当者の責務のひとつといえよう。



第238図 SX401測量図及び出土遺物実測図

## SP632〔第240図〕

調査地中央部のVI区北端、J 7・8区に位置する。平面形態は不整円形を呈し、規模は東西長0.68m、南北長0.64m、検出面からの深さは18cmを測る。埋土は黒色土（N15/0）の單一層で、埋土中から須恵器の小片が出土した。

**出土遺物** 1309は須恵器の坏身。復元口径13.6cmを測る。口縁部は内傾して立ち上がり、受部はわずかに水平に伸びる。色調は内外面ともに明オリーブ灰色（5 G Y7/1）を呈し、胎土には1~2mmの石英と長石を含む。焼成は良好である。

時期：埋土と遺物から、SP632は古墳時代後期に時期比定される。

## 6. 中世の遺構と遺物

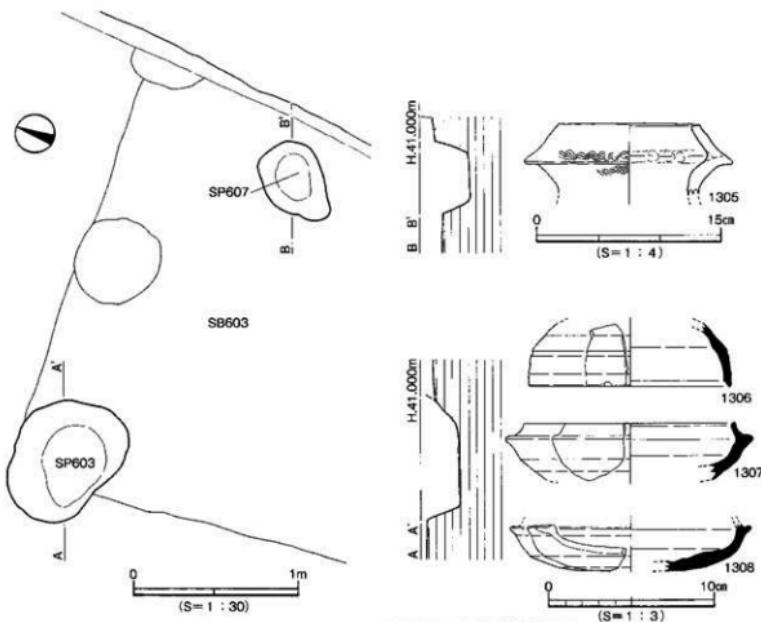
## (1) 土坑（SK）

## SK501〔第241図〕

調査地中央部のV区北西隅、G 3・4、H 3・4区に位置し、SB501を切る。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.5m、短軸0.76m、検出面からの深さ20cmを測る。横断面形態は逆台形状を呈し、埋土は灰色土（5 Y4/1）の單一層である。遺物は埋土中から土師器の坏と三足付き羽釜の小片がある。

**出土遺物** (1310~1312) 1310は土師器の坏で、復元底径7cmを測る。器面の摩滅は著しく、外底の調整は判別できない。1311は土師器の坏口縁部片で、復元口径14.2cmを測る。口縁部は内傾する。1312は羽釜の脚で、端部はわずかに外に屈曲する。残高13.7cmを測り、外面はナデ調整仕上げである。

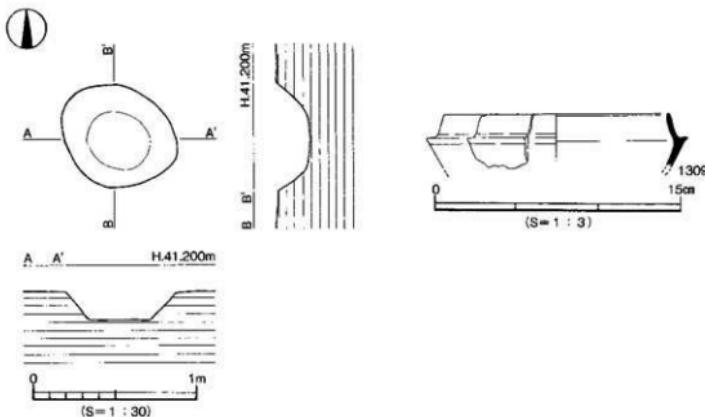
時期：埋土と遺物からSK501は中世（14世紀代）に時期比定しておきたい。



第239図 SP 603・607測量図及び出土遺物実測図

## 7. 包含層出土の遺物

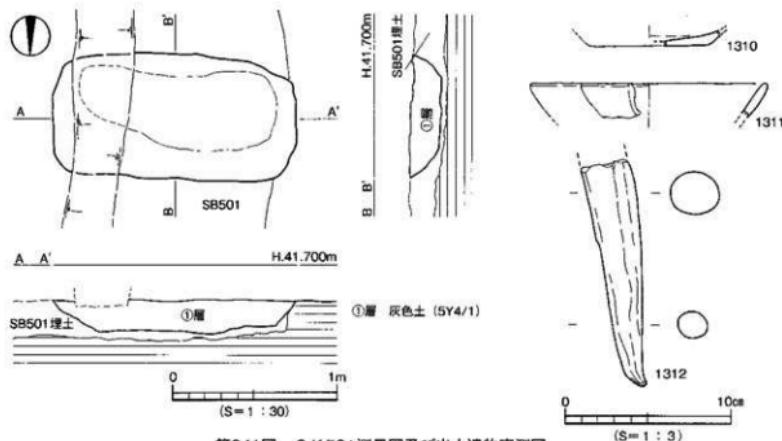
VI区の遺構検出時にわずかに遺物が出土しており、これらは3層の黒色遺物包含層に伴うものと判断してよい〔第242図1313～1320〕。1313～1317は弥生土器。1313と1314は壺口縁部片である。1313は復元口径21cmを測り、口縁の成形は折り曲げによる。口端を上方に拡張し、外面に1条の凹線文を施す。色調は内外面ともに明赤褐色（5Y R5/6）を呈し、胎土には1～2mm大の石英と長石を含む。1314は頸部に突帯が巡る。復元口径23.8cmを測り、胴部は強く張る形態と想定されることから、鉢の可能性もある。1315は長頸の壺口縁部片で、復元口径21cmを測り、口縁部は外反する。色調は外面が橙色（5Y R6/8）、内面がぶい黄橙色（10Y R7/3）を呈する。1317は厚い平底で、外面にはハケ目調整後に縱方向の細かいヘラミガキを施す。色調は外面が橙色（7.5Y R6/6）、内面が灰黄色（2.5Y 7/2）を呈し、胎土には1～3mm大の石英と長石を含み、金雲母も認められる。なお外面の底部附近には黒斑が看取される。1316は壺の胴部最大径付近の小片である。2条の貼り付け突帯を施し、突帯上及び突帯間と、上位の突帯の上に半截竹管文を施す。色調は外面が灰黄色（10Y R5/2）、内面が黒色（10Y R2/1）を呈し、胎土には1～2mm大の石英と長石を含むほか、わずかに微砂粒が認められる。1318～1320は須恵器。1318は口縁部1/4が残る壊身である。復元口径13.8cm、器高3.9cmを測る。天井部には回転ヘラケズリを施す。1319は復元口径12.2cmを測る壊身である。1320は壺の肩部片で1/8の遺存である。肩部は強く張り、外面が平行タキの後にカキ目調整を施し、内面には同心円文（青海波文）の充て具痕が残る。



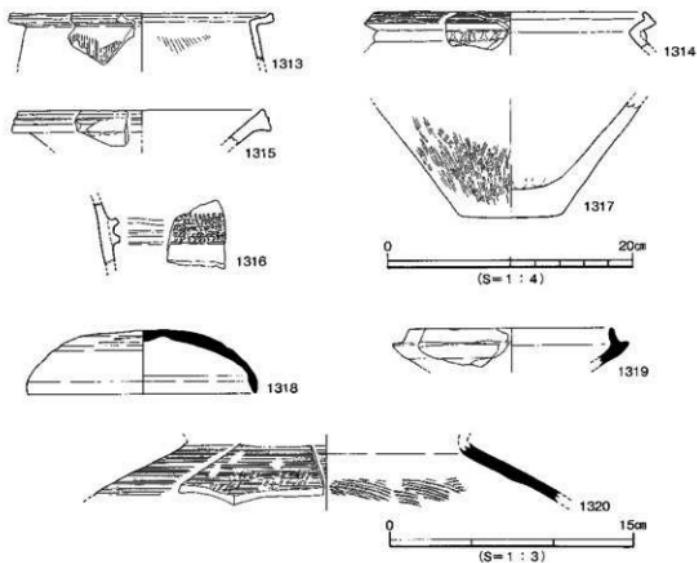
第240図 SP 632測量図及び出土遺物実測図

## 8. 小 結

今次調査では対象地内から弥生時代中期後葉、同後期後葉、古墳時代中期後半、同後期、中世の生活関連遺構と遺物を確認したことが成果の一つに挙げられる。遺構を確認した4層上面の測量によって、当地は北東から南西に向けて緩やかに下がる地形であったことも判明している。これらは弥生時代中期後葉～古墳時代後期にかけての土地利用の具体的様相を知る上で興味深いデータを提示できたといえる。以下、いくつかの項目を整理しておきたい。



第241図 SK 501測量図及び出土遺物実測図



第242図 VI区遺物包含層（3層）出土遺物実測図

## (1) 遺構の変遷について

これまでの報告では時代毎に遺構の調査所見を詳述してきたので、ここでは遺構の変遷について触れておきたい。

## 〔弥生時代〕

弥生時代には前期に遡る遺構が未検出である。中期後葉、後期前葉、後期後葉の遺構を確認し、これらの遺構の多くは調査地西側に分布する。中期後葉にはSK101・105・106・601とSP621があり、主には貯蔵施設（穴藏）として当地の西半部を利用していることがわかる。この穴藏は平面形態と規模、さらに構造に一定の規則性のあることがうかがえる。後期前葉には掘立101があり、貯蔵施設として1×2間の規模をもつ高床式倉庫が新たに加わることが明らかくなっている。掘立101はSK105を切り込んで構築されていることから、穴藏から高床式倉庫へという貯蔵施設の転換が一部で生じていたことが示唆される。なお、当地からは同時期の居住施設は未検出であったが、同7次調査地からは直径9m程度に復元される円形竪穴式住居址を検出しており、今次調査I区から西方向一帯には当該期の居住施設や貯蔵施設が展開する可能性がある。後期後葉に至りSB602と402を検出したことにより、主要な生活関連構造となる居住施設の一端が確認できた。すなわち、SB602からは南北長5.4mの隅丸方形ないしは長方形で、4本柱で屋根を支える構造の竪穴式住居址であったことがほぼ確定している。

### [古墳時代]

古墳時代は中期後半と後期の生活関連遺構を確認した。主に調査地中央から東側に分布し、主要な遺構は竪穴式住居址である。中期後葉はS B302の1棟に限られ、5m四方ないしは5×5m以上の長方形の中型住居で、復元では7本柱で屋根を支える構造と考えた。住居の遺存が不良のため付帯施設の配置等は判然としなかった。そのため、新しい調理手法導入を裏付ける窓の有無については検証できず、課題を残した。

後期はS B101・301・303・501・601・603が該当する主要遺構で、これらは調査地中央から東側に分布する竪穴式住居址である。一辺が5m程度の中型住居と4m前後の小型住居で構成される可能性が示唆されるものの、規模の違いが住居の機能と関連するかについては今後も注目したい。

### [中世]

わずかに土坑1基（SK501）にとどまったが、これにより当地に生活関連遺構の存在したことが確認できた。当該期の遺構の面的な広がりや構成については、愛媛大学農学部構内の樟味遺跡2次調査地の成果が参考となる。すなわち、直線的な溝による方形区画が連結した中世集落の姿が提示されており、今次調査地はその外縁部に相当する。したがって、方形を呈する区画溝の範囲確認が今後の課題であり、野外調査における確認ポイントのひとつといえる。

### [まとめ]

このように、今次調査では弥生時代中期後葉から本格的な土地利用が開始されたことを確認した。弥生時代後半期には貯蔵域や居住域として当地を活用しており、当地が集落の一角を担っていたことは確かといえよう。特に、中期後葉～後期前葉の貯蔵施設の確認は、既往の調査では確認事例に恵まれていない。なかでも掘立101のような1×2間の高床式倉庫の認定は今後周辺部で類例の増加が予想される。古墳時代に移行すると中期後葉、すなわち後半期から居住域として再び当地を利用し、調査地の東半部が集落の一角を担っていたことが判明した。愛媛大学農学部構内の樟味遺跡3次調査地の成果から、当地から東側一帯にも当該期の集落が広く展開していることを指摘できる。

### （2）弥生時代後期後葉の竪穴式住居址S B602について

S B602は一辺5.4m程度の隅丸方形あるいは長方形を呈した中型竪穴式住居址であった。堆土の堆積状況、遺物の残存状況、完形の有溝石錐の出土等から総合的に検討し、竪穴式住居の廃絶後に各種遺物を伴う人為的埋め戻しの執行された可能性が高いことを指摘した。主柱穴を精査したにもかかわらず、柱痕跡は確認できなかったことから、住居の廃絶時点では屋根を伴う主柱が撤去され、オーブンになっていた可能性は高い。同様の事例は東野森ノ木遺跡2次調査地S B502や同4次調査地S B401があり、これらはいずれも弥生時代後期後葉や後期終末に時期比定され、弥生時代後半期で共通している。これらと異なる点は、完形の勾玉や管状玉が伴わず、有溝石錐が供献されたことにある。この有溝石錐は完形品であるが、単品での出土であることから、網に装着された状態で住居内に置かれていたとは考え難く、特異な保有形態か、住居廃絶時の単独供獻の可能性が示唆される。

第12章

樽味高木遺跡

11次調査地



## 第12章 檜味高木遺跡11次調査地

### 1. 野外調査の経過と方法

#### (1) 調査の経緯

発掘調査に先立ち、調査地の周囲に丸杭、トラロープ、ガードフェンスを用いて安全対策を施した。調査地に隣接して調査事務所と仮設トイレを設置し、発掘機材の搬入を行った。調査区は3区画に分け、東よりI区、II区、III区とした。

2月1日より重機を使用して掘削をⅢ区、Ⅱ区、I区東側の順で行い、I区西側を掘削上置き場とした。掘削は、試掘調査の結果に基づきIV層（地山）上面まで行った。

Ⅲ区では、幅1.2m、長さ7.0mの調査区を設定した。地山上面にて精査し遺構検出を行い、柱穴を確認することが出来た。遺構測量、写真撮影を行い2月8日に埋め戻しを行った。

Ⅱ区では、地山上面での遺構検出により竪穴式住居址、土坑、溝、柱穴を検出した。2月10日には、業者に委託し調査区内に基準点を設置し座標系に伴う調査区割りを設定した。その後平板を用いて縮尺100分の1による遺構配置図を作成した。遺構埋土と遺構番号を記録した後に、個別の遺構精査を開始した。遺構精査は、工程上竪穴式住居址と土坑を優先的に行うこととした。記録は、主に測量図と写真を用いた。測量図は必要に応じて縮尺10分の1による遺物出土状況の平面図と断面土層図、さらに縮尺40分の1による遺構・地形測量図を作成した。遺構全体が明確になった3月16日には、高所作業車を用いて写真撮影を実施した。測量の補足を行い、3月31日までにⅡ区の埋め戻しを行った。

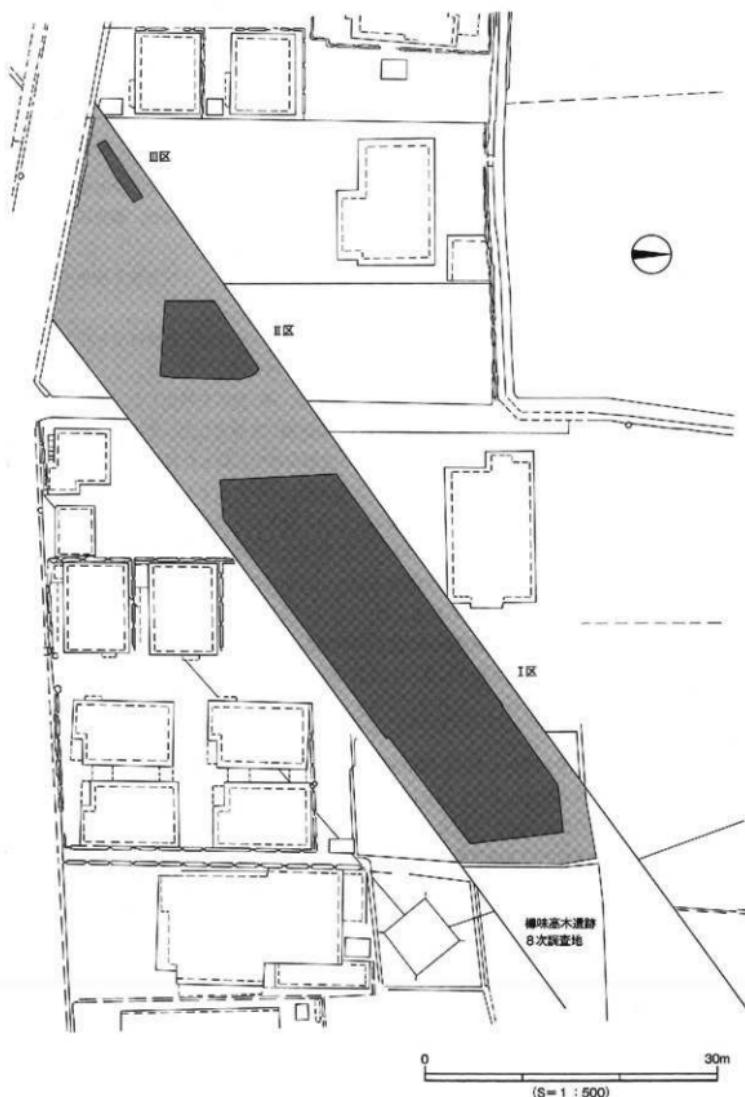
I区では、排土置き場の関係上東側から調査を行った。地山上面での遺構検出により竪穴式住居址、土坑、柱穴を検出した。2月14日に遺構検出状況の写真撮影を東側排土の上より行う。遺構精査は竪穴式住居址から行った。ほぼ遺構が明確になった5月12日、高所作業車を使用して写真撮影を行う。18日まで遺構完掘状況の測量を行う。5月19日よりI区東側の埋め戻しを開始し、20日には埋め戻しを完了する。

5月23日より西側の掘削を開始し30日に掘削を完了する。25日より調査区の西側より精査を行い、竪穴式住居址、土坑、柱穴を検出した。31日に高所作業車を使用して検出状況の写真撮影を行う。遺構配置図を作成し、竪穴式住居址から精査を開始する。7月13日高所作業車を使用して遺構完掘状況の写真撮影を行う。完掘状況の遺構測量を22日まで行う。23日から遺構内出土の土壤と遺物洗浄を行う。25日から埋め戻し作業を行い29日に埋め戻しを完了する。29日までに発掘機材と道具の整理を行い、30日には調査事務所・備品を撤去し調査を終了する。

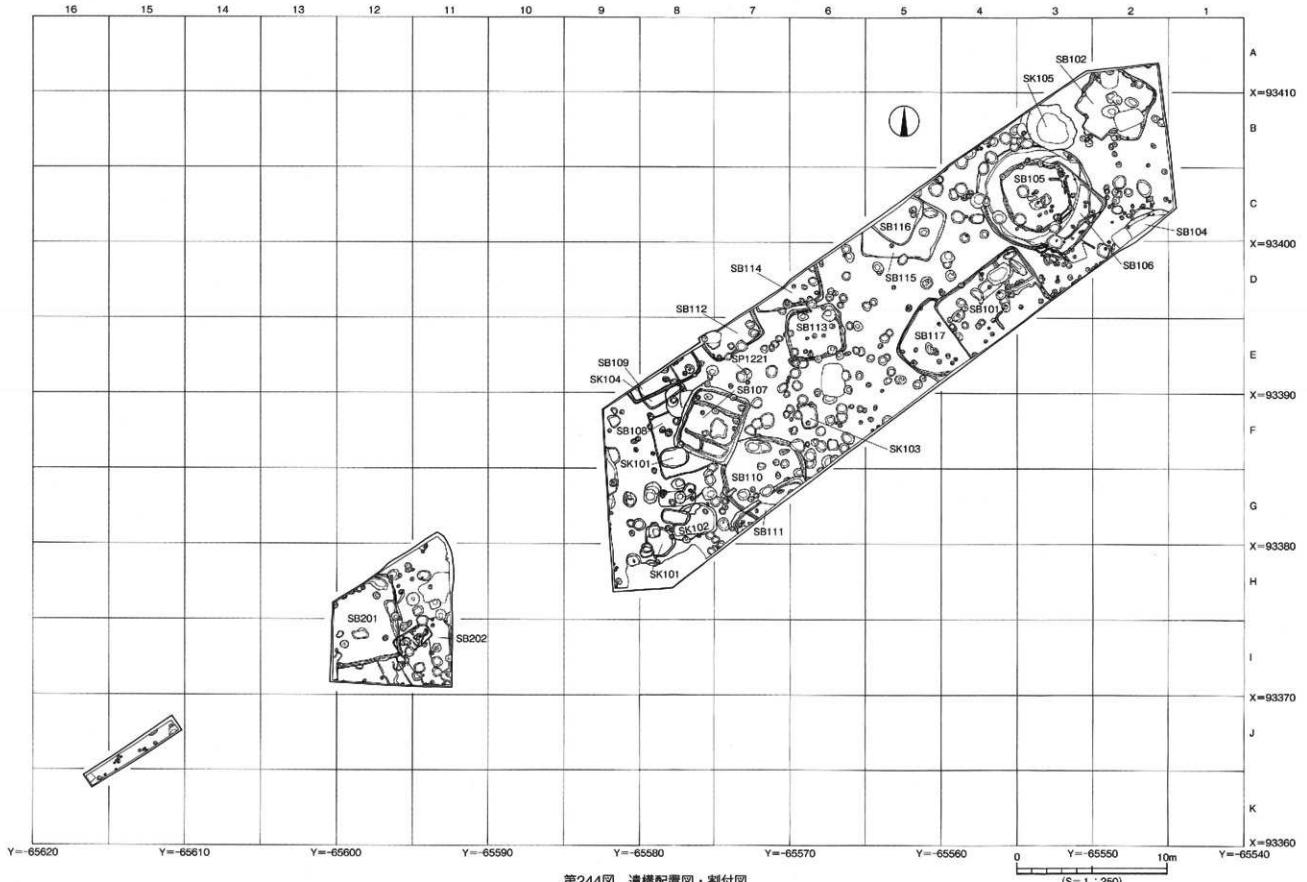
### 2. 基本層位〔第246図〕

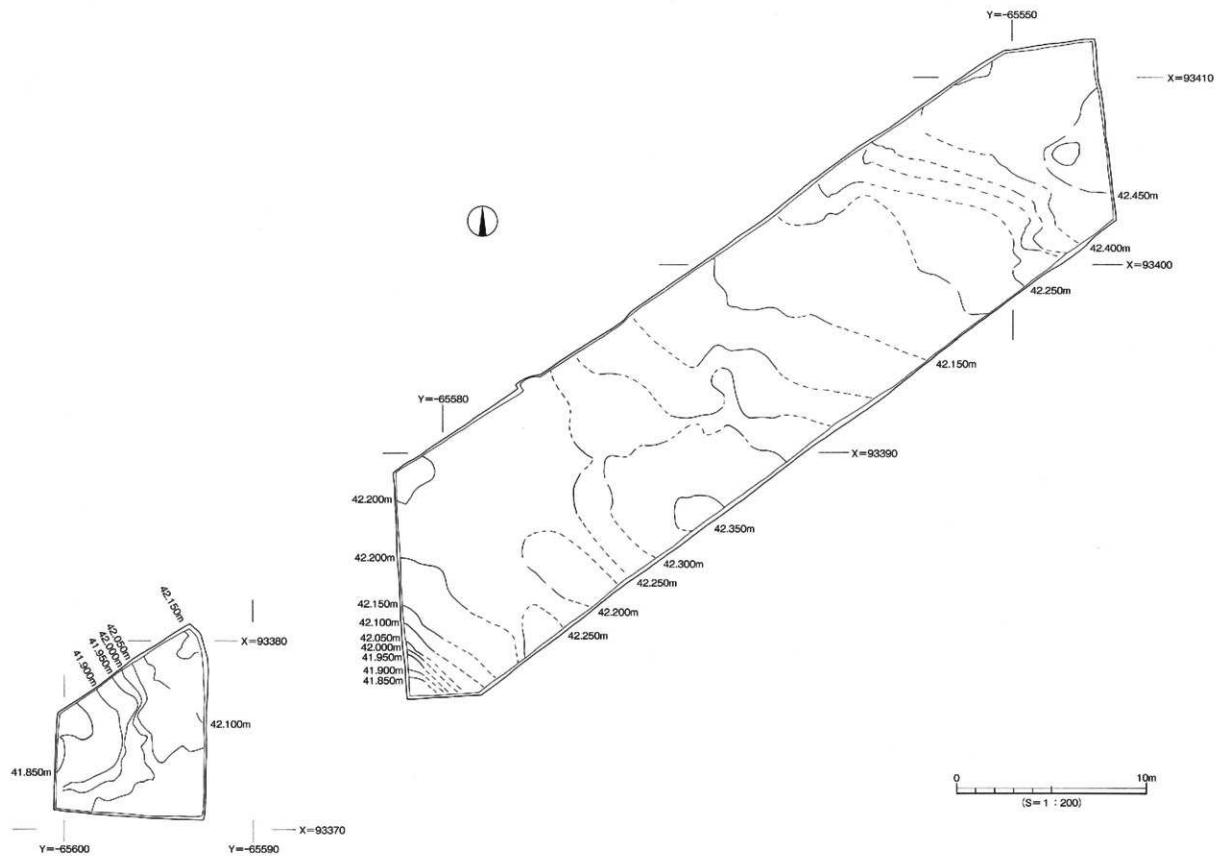
調査地は、石手側中流域南岸の扇状地上に立地し、標高は44.0mを測る。調査前は宅地であった。

本調査では、4層の土層を確認した。I層は造成土である。調査区全域で検出した。II①層は灰褐色土（水田耕作土）調査区全域で検出した。II②層は黄褐色土（水田床土）調査区全域で検出した。III層は4層に分層できる。III①層は褐灰色土（10Y R4/1）、III②層は灰黄褐色土（10Y R4/2）、III③



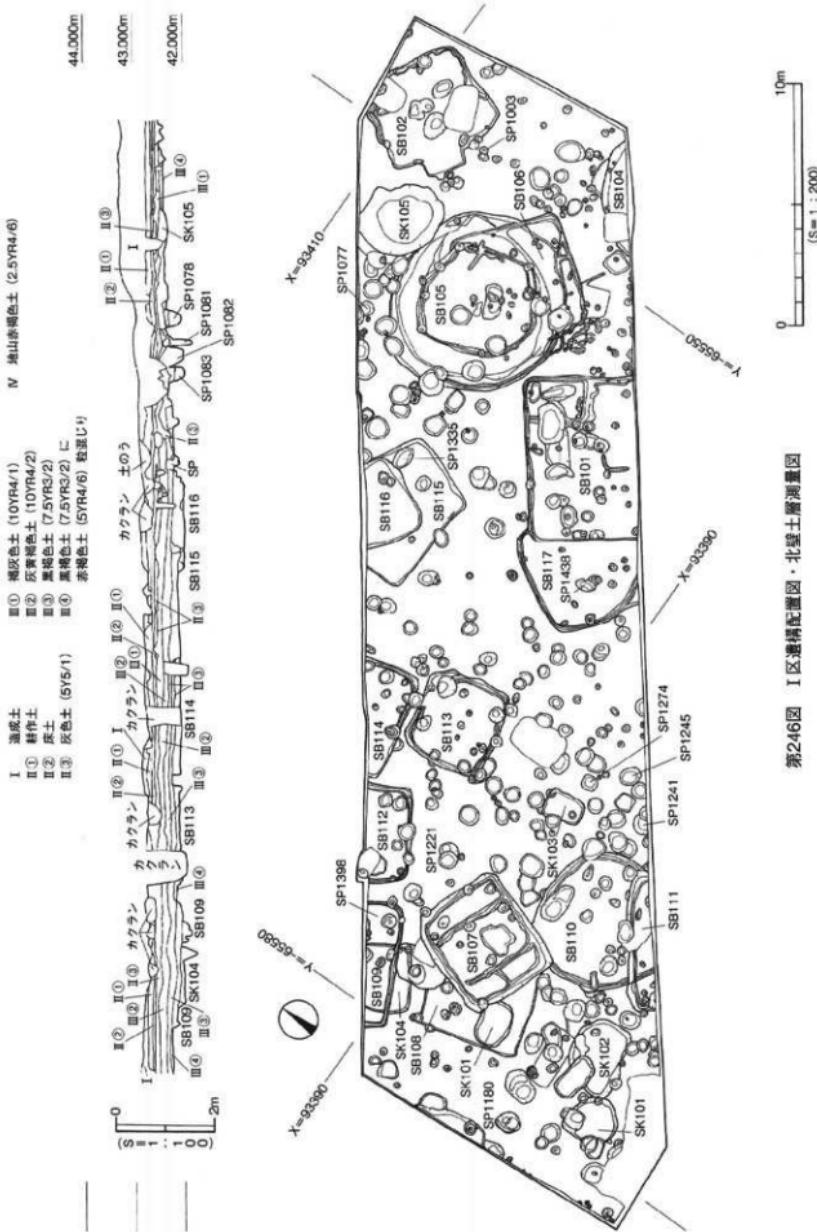
第243図 調査地位置図



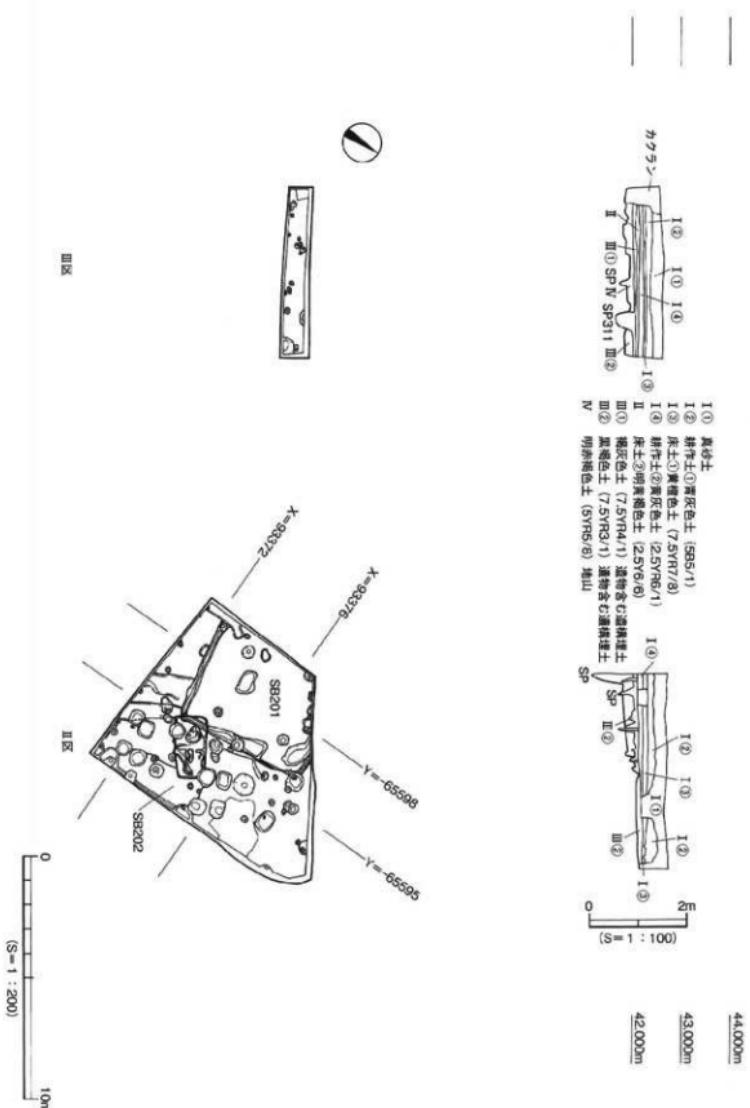


第245図 地形測量図

基本層位



第24図 1区邊境断面、北壁土質測量図



第247図 II区・III区構造配置図・北壁土層測量図

層は黒褐色土（7.5Y R3/2）、Ⅲ④層は黒褐色土（7.5Y R3/2）に赤褐色土（5Y R4/6）粒混じり。Ⅳ層は赤褐色土（25Y R4/6）であり調査区全域で検出した。Ⅳ層上面が遺構検出面となる。

### 3. 調査概要

検出した主な遺構は、堅穴式住居址20棟、土坑5基、溝1条、性格不明遺構2基、柱穴535基である。遺物は遺構と包含層から確認されている。その遺物には、弥生土器（壺形土器、壺形土器、鉢形土器）、土師器（壺形土器、壺形土器、高坏形土器、瓶形土器）、須恵器（壺形土器、壺形土器、壺身蓋、瓶）、軟質土器、石器（石庖丁、石臼、剥片）があり、その数量は、テンバコ（600×440×150mm）48箱分に及ぶ。遺構の帰属時期は、出土遺物を基準として三期に大別される。Ⅰ期は弥生時代後期、Ⅱ期は古墳時代前半、Ⅲ期は古代から中世に大別でき、古墳時代前半に帰属する遺構が多い。

以下、主な遺構と遺物を取り上げて報告を行う。

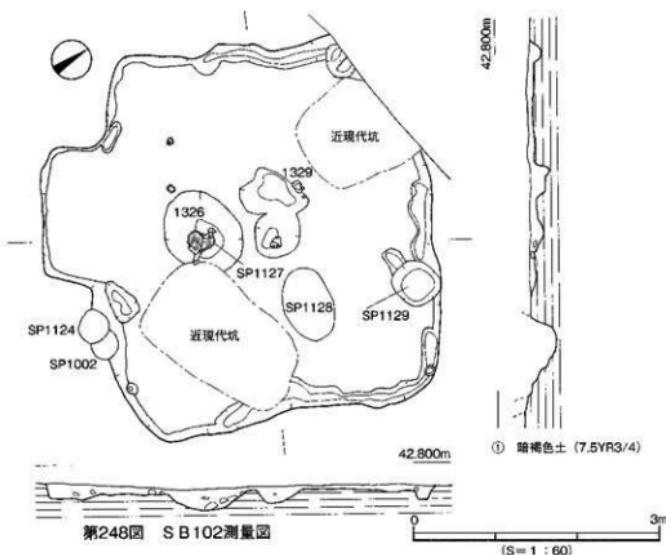
### 4. 弥生時代の遺構と遺物

堅穴式住居址8棟、土坑1基を検出した。

#### （1）堅穴式住居址（S B）

S B102〔第248・249図、図版79・80・81〕

S B102は、I区のA 2～B 3区に位置し S P1002・1124・1128と近現代坑に切られ、北側が調査

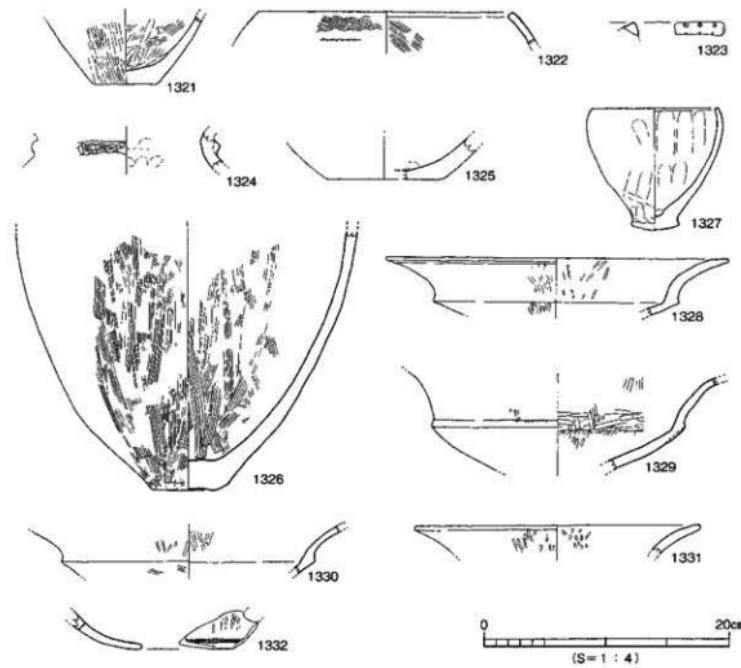


区外に続く。平面形態は方形で西側に張り出し部を持つ。規模は $4.8 \times 4.2\text{m}$ 、深さ2~8cmを測る。張出部の平面形態は長方形である。規模は、 $0.75 \times 1.7\text{m}$ 、深さ7~18cmを測る。内部施設には周壁溝と土坑状の窪みがある。周壁溝は北から東の壁下で検出した。規模は幅15~30cm、深さ4cmを測る。埋土は暗褐色土(7.5Y R3/4)である。出土遺物は弥生土器の壺形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器がある。

#### 出土遺物 (1321~1332)

1321は壺形土器の底部。1322~1326は壺形土器。1322は複合口縁壹の口縁部、1323は口縁端面に竹管文、1324は頸部に凸帯を持つ、1325・1326は底部。1327は鉢形土器の完成品、丸みを持つ底部に内湾する口縁部。1328~1332は高坏形土器。1328~1331は坏部、1332は脚部片。

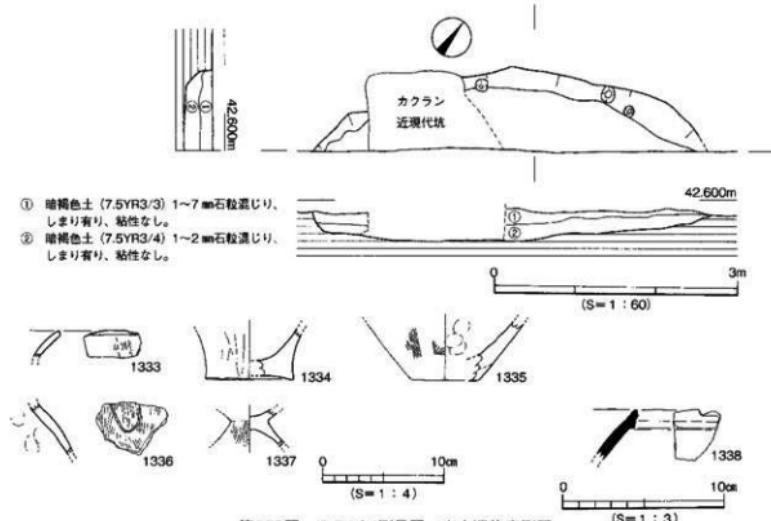
時期：出土遺物より弥生時代後期後半に時期比定する。



第249図 S B 102出土遺物実測図

#### S B 104〔第250図、図版79・80・86〕

S B 104は、I区のC2区に位置し、東側を近現代坑に切られ、南側は調査区外に続く。平面形態は円形で北側の一部分を検出した。規模は検出長(4.6)×(0.9)m、深さ20cmを測る。埋土は暗褐色土(7.5Y R3/3) 1~7mm石粒混じり、暗褐色土(7.5Y R3/4) 1~2mmの石粒混じりである。出土遺



第250図 S B 104測量図・出土遺物実測図

物は弥生土器の壺形土器、壺形土器、鉢形土器と須恵器がある。

出土遺物 (1333~1338) 1333~1335は壺形土器、1336は壺形土器、釣り針状の線刻がある。1337は台付鉢、1338は須恵器の壺形土器の口縁部、口縁端部直下に凸帯を持つ。

時期：出土遺物より弥生時代後期後半に時期比定する。

#### S B 105 [第251~256図、図版79・80~82・86]

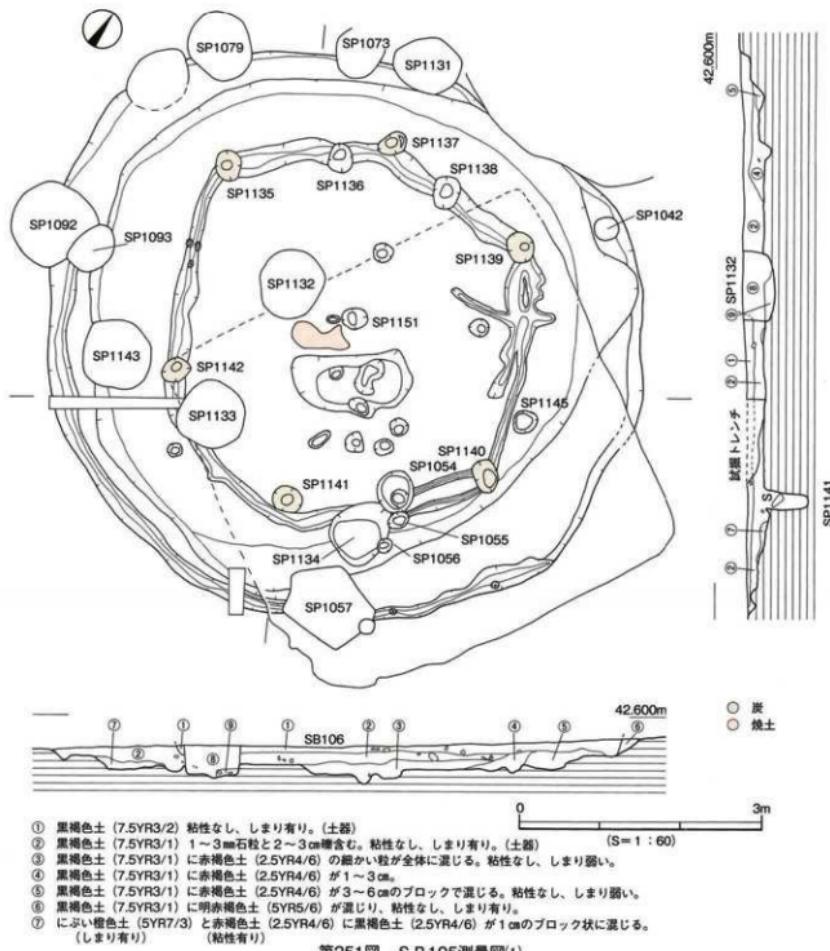
S B 105は、I区B 3~C 4区に位置し掘立101の柱穴、北東部の一部をS B 103、南東部をS B 106に切られる。平面形態は円形である。規模は径7.5m、深さ40cmを測る。内部施設は主柱穴、周壁溝、高床部、炉、小溝がある。主柱穴は6角形状に6本検出し、東側と西側の柱間が他の柱間より長い。平面形態は円形で規模は径25~40cm、深さ36~54cmを測る。周壁溝は西から南の壁下で検出した。規模は幅15~35cm、深さ4~6cmを測る。高床部は壁から50cmの幅で検出した。炉は中央やや南に検出した。平面形態は楕円形である。規模は長軸1.5m、短軸0.7m、深さ20cmを測る。小溝は主柱穴6本を結ぶ間に検出した。規模は幅10~38cm、深さ4~7cmを測る。埋土は黒褐色土 (7.5Y R3/1)、黒褐色土に赤褐色土 (2.5Y R4/6)、明赤褐色土 (5 Y R5/6) 混じり、にぶい橙色土 (5 Y R7/3) と赤褐色土 (2.5Y R4/6) に黒褐色土 (7.5Y R3/1) 混じりである。出土遺物は弥生土器の壺形土器、壺形土器、鉢形土器、土師器の高壺形土器、瓶形土器、須恵器の器台形土器、石器、焼土がある。

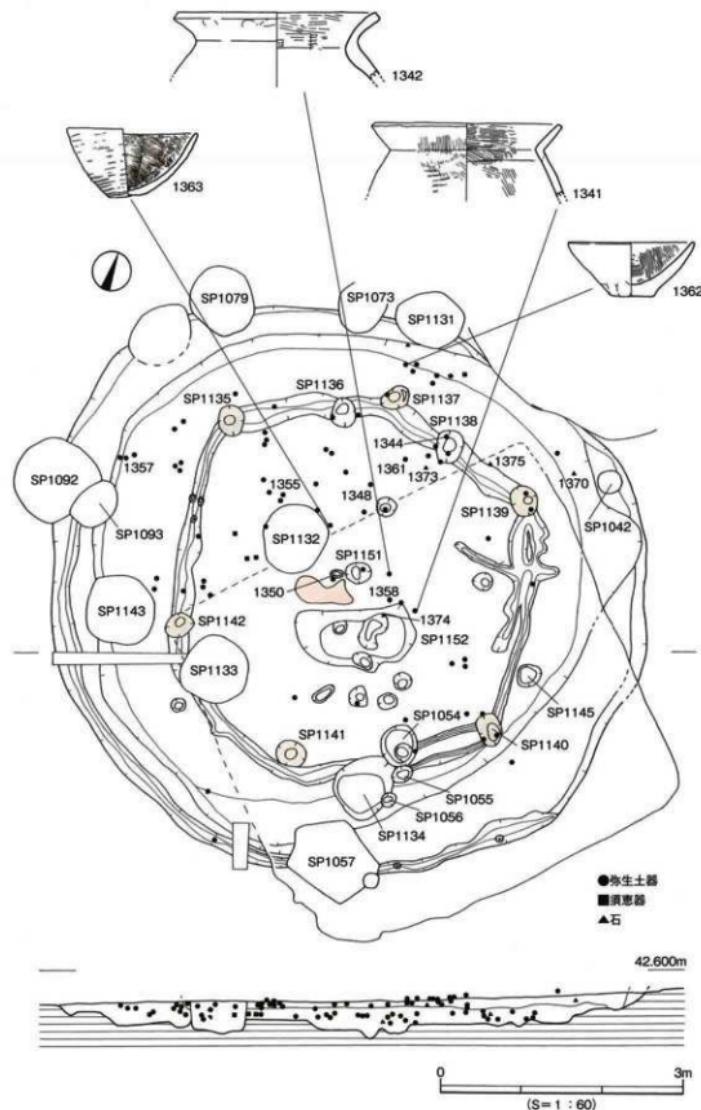
#### 出土遺物 (1339~1375)

1339~1345は壺形土器、1339~1340の外側には叩き痕が顕著に残る。1344~1345は底部片。1346~1361は壺形土器。1346は口縁端部に4条の沈線文。1347は口縁端部を拡張し端面に波状文を施す。1348~1352は複合口縁壺の口縁部。1348~1350は外側に波状文、1351は波状文と沈線文を施す。1352は

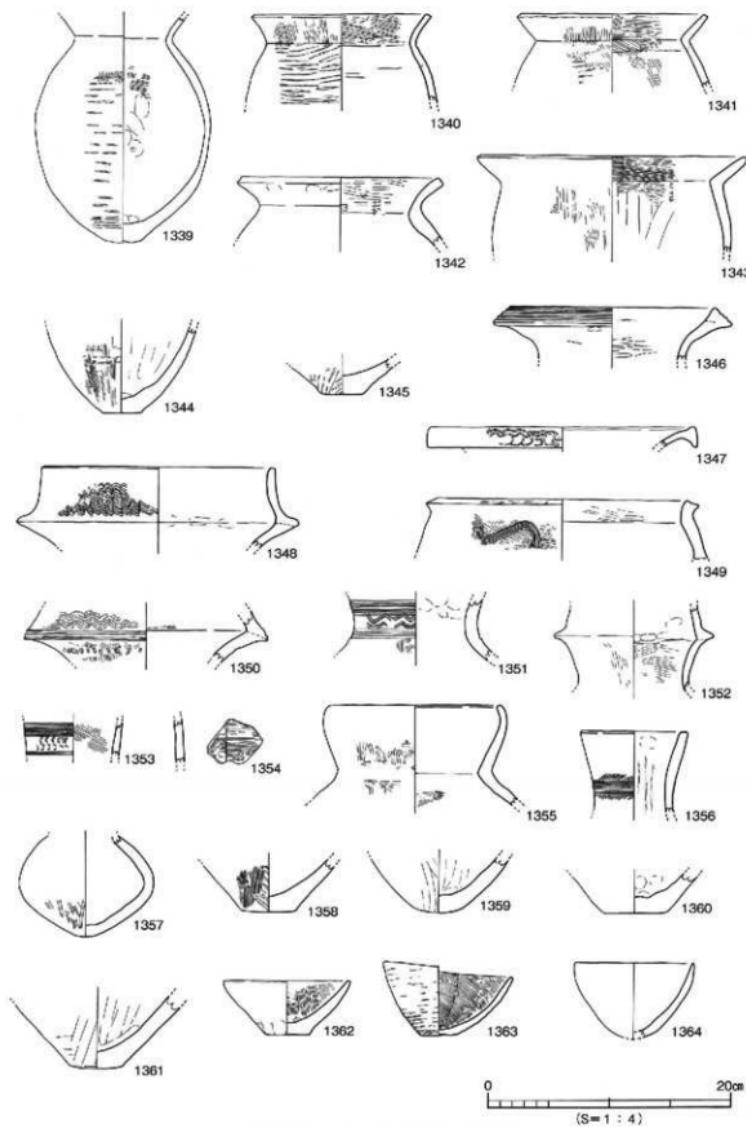
頸部と口縁部が細い。1353は頸部外面に半截竹管文と沈線を施す。1354は外面に「十」字状の線刻。1356は頸部に沈線文と刻み目を施す。1357は胴中位が張る。1358~1361は底部片。1362~1364は鉢形土器。1365は高壺形土器の壺部。1366~1367は瓶形土器の把手部。1368~1369は須恵器の器台形土器、斜線で充填された山形文。1370~1375は石製品。1371は敲打痕が顕著に残る。1372は研磨痕が残る。1374は一部に使用痕が見られる。1375はよく使い込まれた使用痕が見られる。

時期：出土遺物より弥生時代後期半に時期比定する。

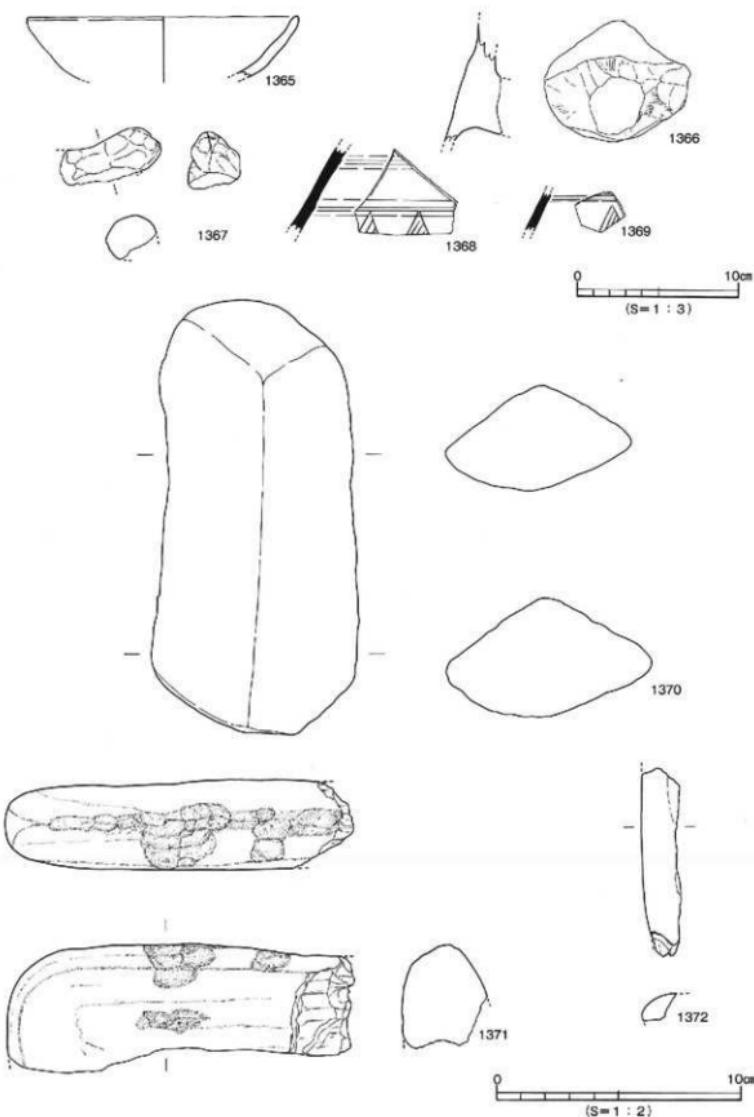




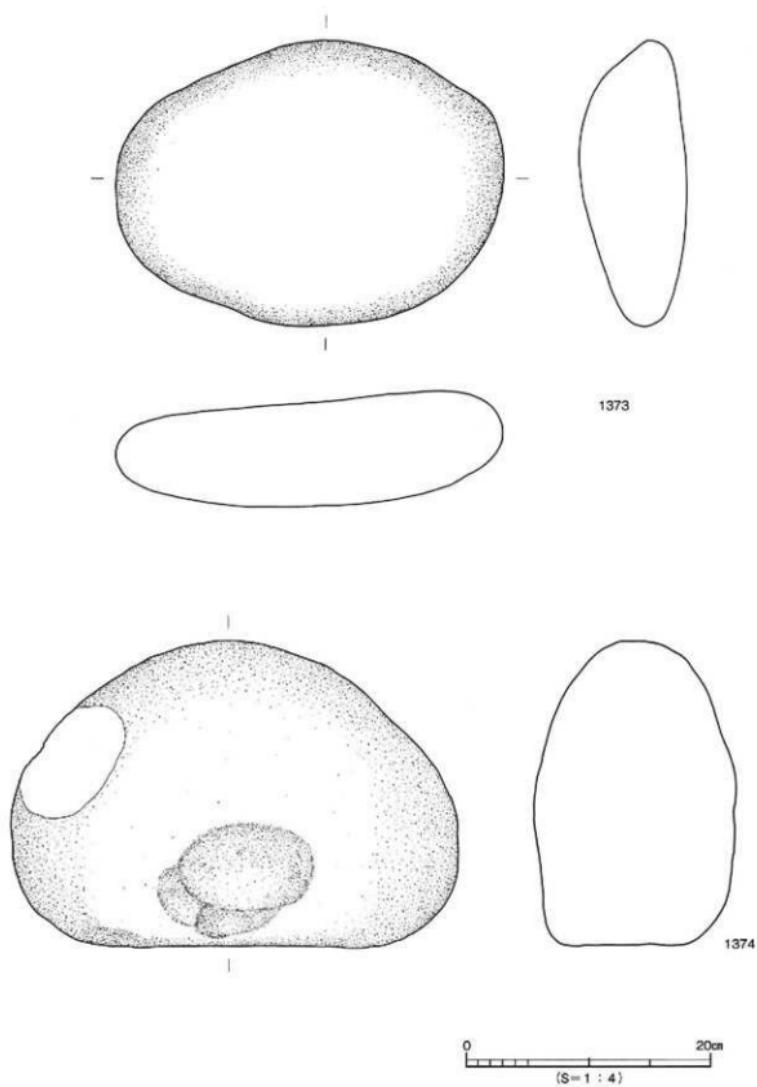
第252図 S B 105測量図(2)



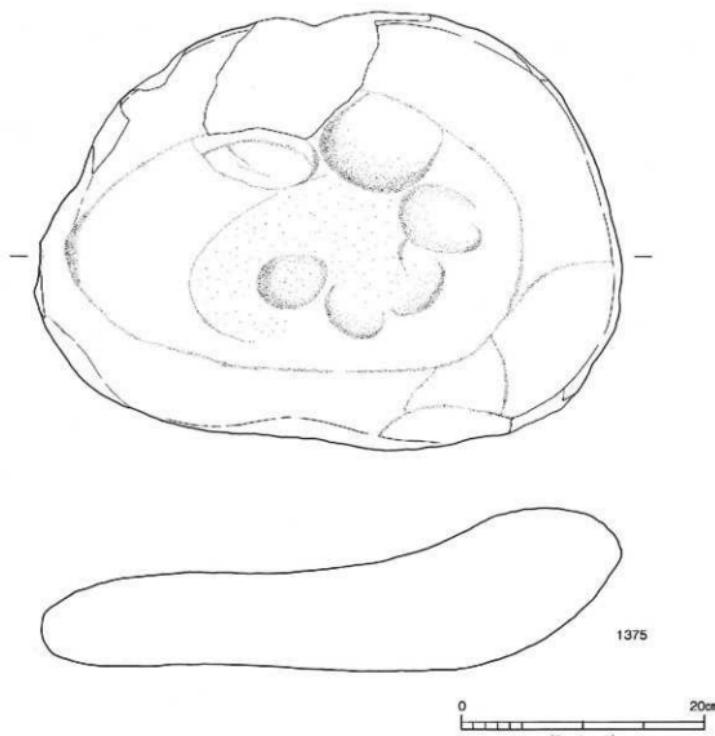
第253図 SB105出土遺物実測図(1)



第254図 SB 105出土遺物実測図(2)



第255図 SB 105出土遺物実測図(3)



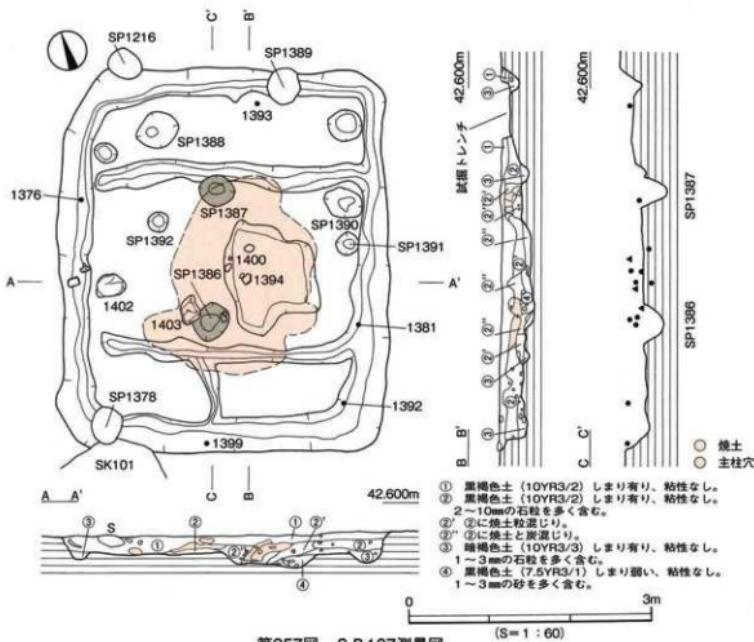
第256図 S B 105出土物実測図(4)

## S B 107 (第257~261図、図版80・84・86)

S B 107は、I区のF 7・8区に位置しS B 108・109を切り、SK 101・SP 1216・1378・1389と北西部を試掘トレンチに切られる。平面形態は方形である。規模は4.7×4.05m、深さ27cmを測る。内部施設は主柱穴、周壁溝、炉、小溝がある。主柱穴は2本を検出した。平面形は円形で規模は径40~50cm、深さ29cmを測る。周壁溝は壁下を全周する。規模は幅24~50cm、深さ7~10cmを測る。炉は住居中央部に位置し平面形態は大小2個の長方形が接する形である。規模は長さ1.4m、幅1.12m、深さ12cmを測る。小溝は主柱穴2本の外側に2本平行に検出した。規模は幅15~35cm、深さ5~10cmを測る。埋土は黒褐色土(10Y R3/2)、暗褐色土(10Y R3/2)である。出土遺物は土師器、弥生土器、紡錘車、石製品、炉周辺から焼土がある。

## 出土遺物(1376~1403)

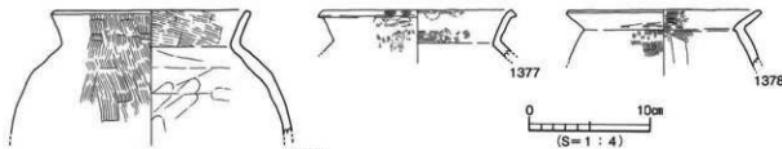
1376~1380は壺形土器。1376~1378は口縁部、1376は外傾する口縁部の端部は丸みを持つ。1379・1380は底部片。1380は底部外面に範状工具による線刻。1381~1384は鉢形土器。1381は直行口縁小さ



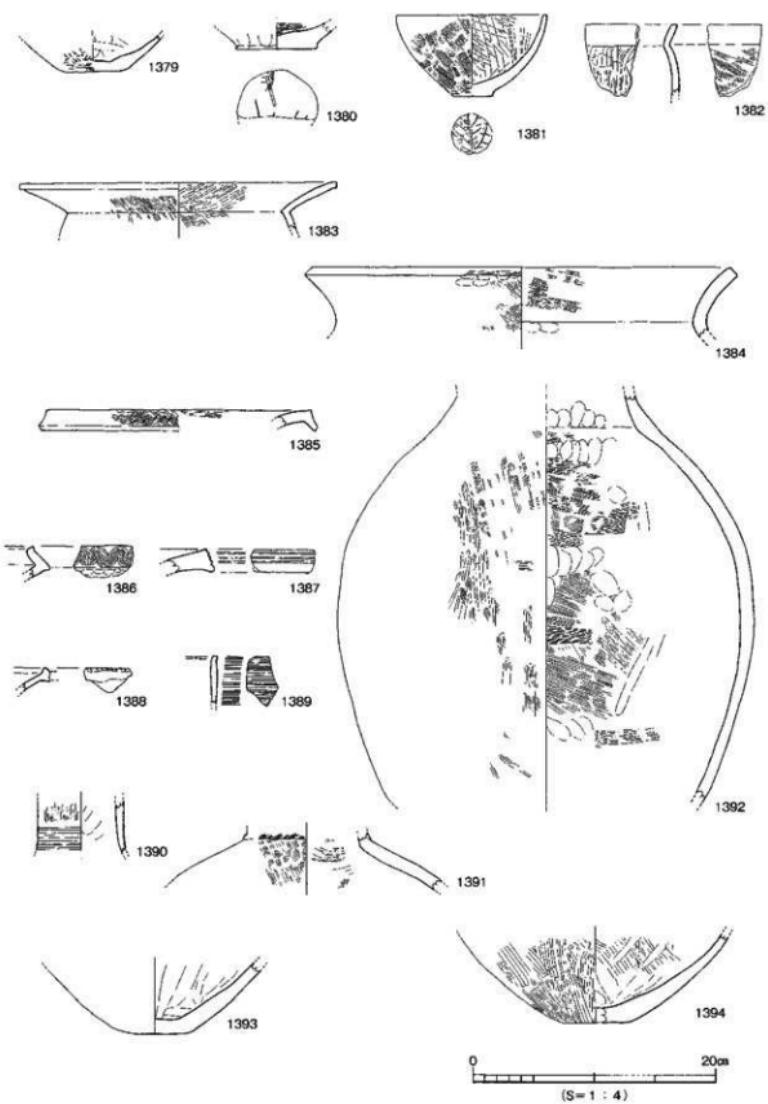
第257図 SB 107測量図

な底部に葉脈痕がある。1382は短く外傾する口縁部。1383は大きく外傾する長い口縁部。1384は大型鉢の口縁部。1385~1395は壺形土器。1385~1389は口縁部片。1385は口縁端部を下方に拡張し端面に波状文を施す。1386は口縁端部を上方に拡張し波状文を施す。1387は口縁端部拡張し凹線文を施す。1388は口縁端部に刻み目。1389は直行口縁、薄い器壁外間に細い沈線を施す。1390は頸部片、外面に細い沈線文。1391は頸部に凸帯を巡らす。1392は頸部から胴部の残存。1393・1394は底部片。1395はミニチュア品。1396・1397は高坏形土器。1396は坏部片。1397は柱部。円孔が残る。1398は壺形土器の底部片、円形の蒸気孔あり。1399は紡錘車上面に2列の刺突文、裏面に線刻と思われる細い線がある。1400~1403は石製品。1400は石庖丁、2個の円孔が残る。両面ともに研磨が見られる。1401~1403は台石。1401・1403には使用痕が顕著に見られる。1403は住居床面からの出土。

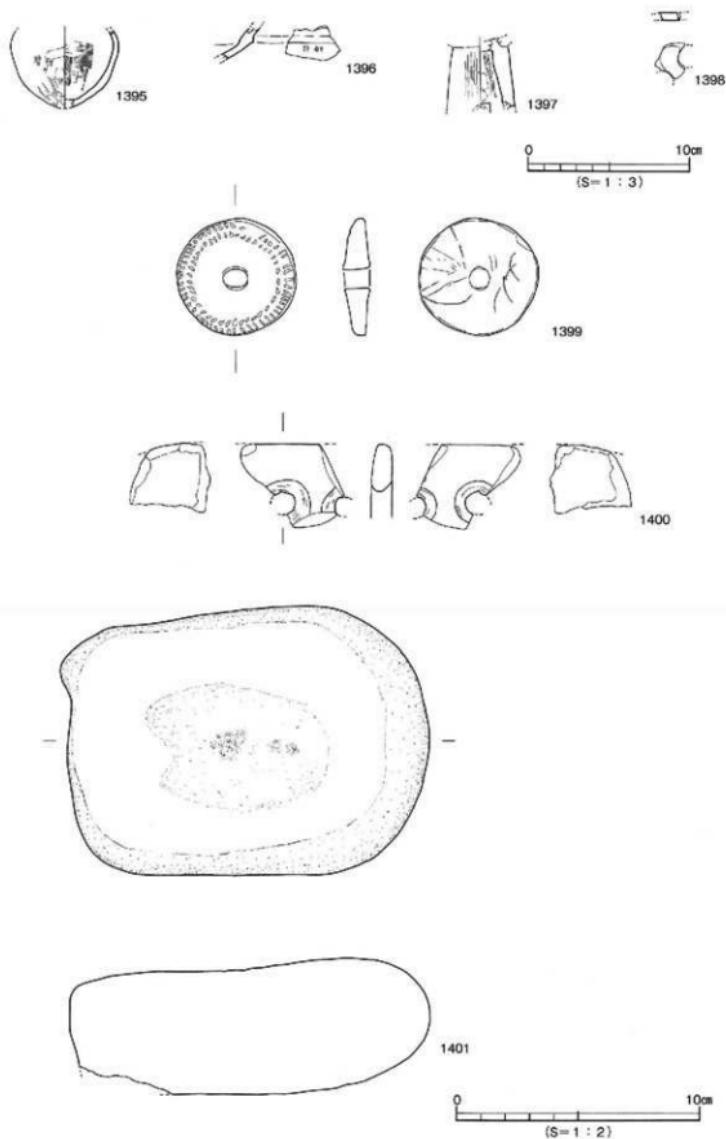
時期：出土遺物より弥生時代後期後半に時期比定する。



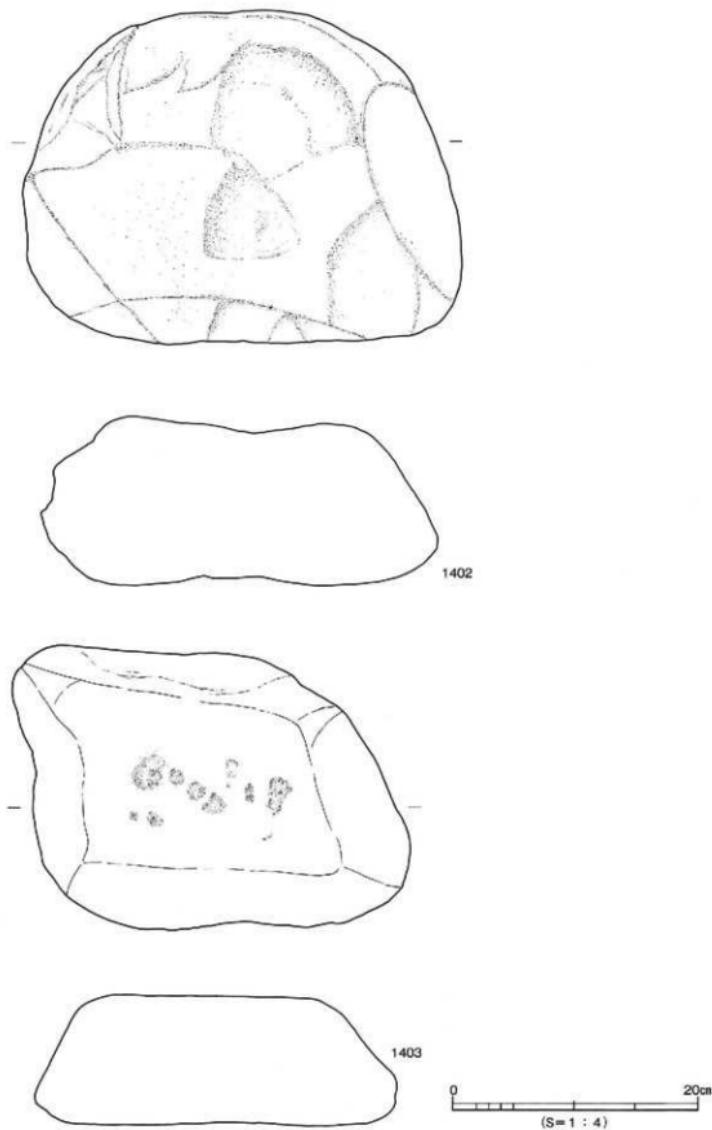
第258図 SB 107出土遺物実測図(1)



第259図 SB 107出土遺物実測図(2)



第260図 SB 107出土遺物実測図(3)



第261図 SB 107出土遺物実測図(4)

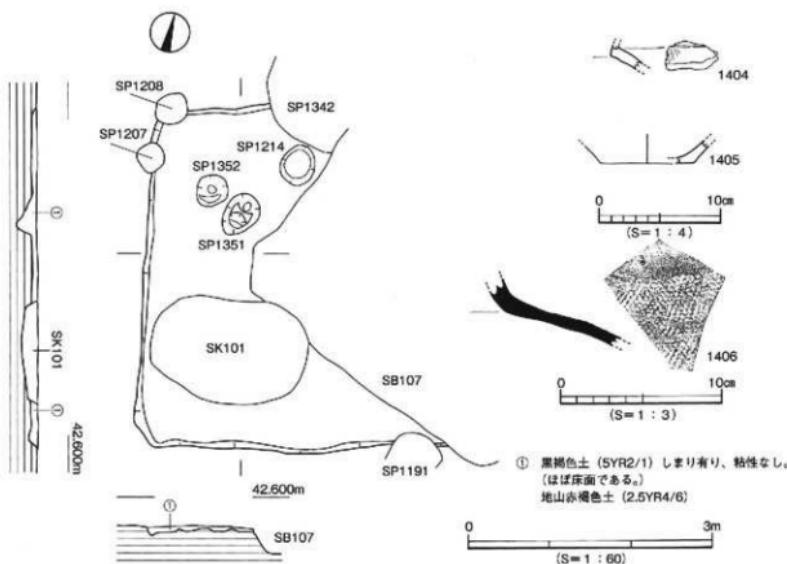
## SB108 [第262図、図版80]

SB108はI区のF8区に位置しSB107、SK101、SP1342・1191に切られる。平面形態は2ヶ所のコーナー部を検出したことより方形と考えられる。規模は4.3×(3.8)m、深さ3~10cmを測る。内部施設には柱穴がある。埋土は黒褐色土(5YR2/1)である。出土遺物には、弥生土器、須恵器がある。

## 出土遺物 (1404~1406)

1404・1405は壺形土器。1404は頸部片。1405は平底の底部。1406は須恵器の壺形土器。

時期：弥生時代後期後半のSB107に切られるため弥生時代後期後半以前とする。



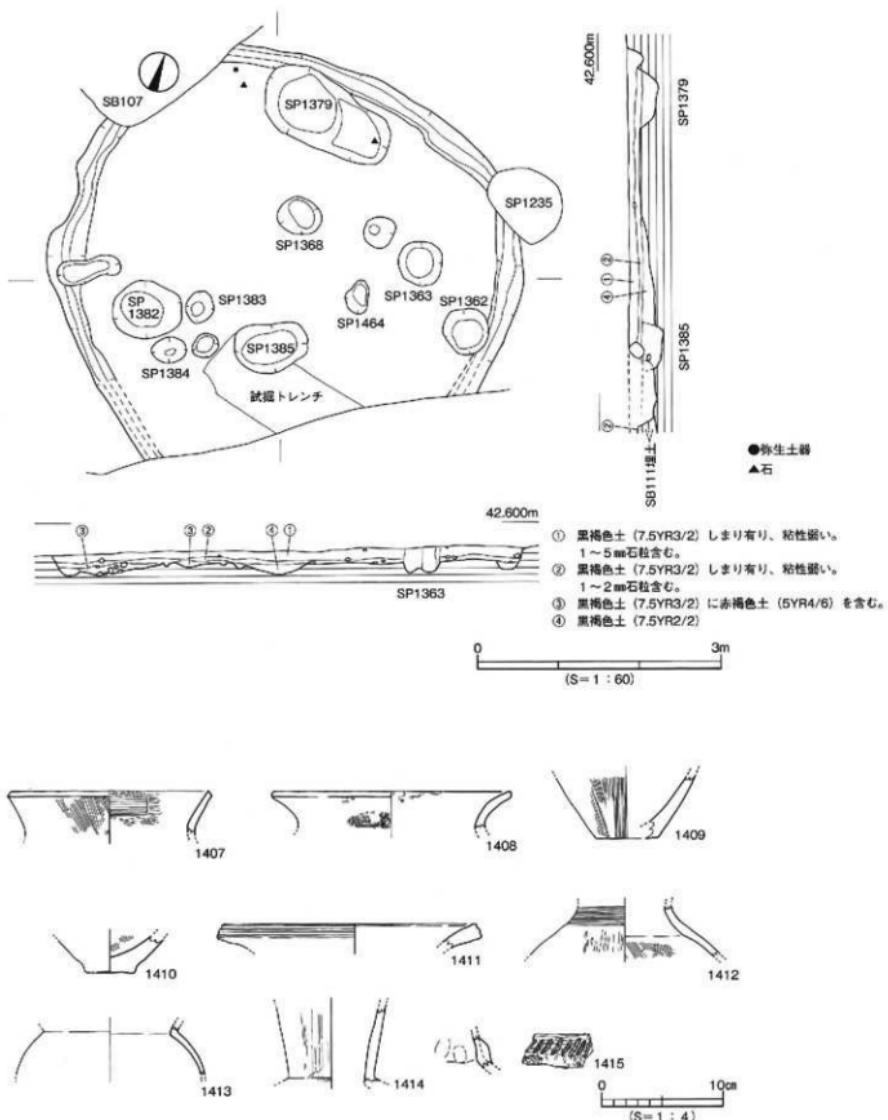
第262図 SB108測量図・出土遺物実測図

## SB110 [第263・264図、図版80・87]

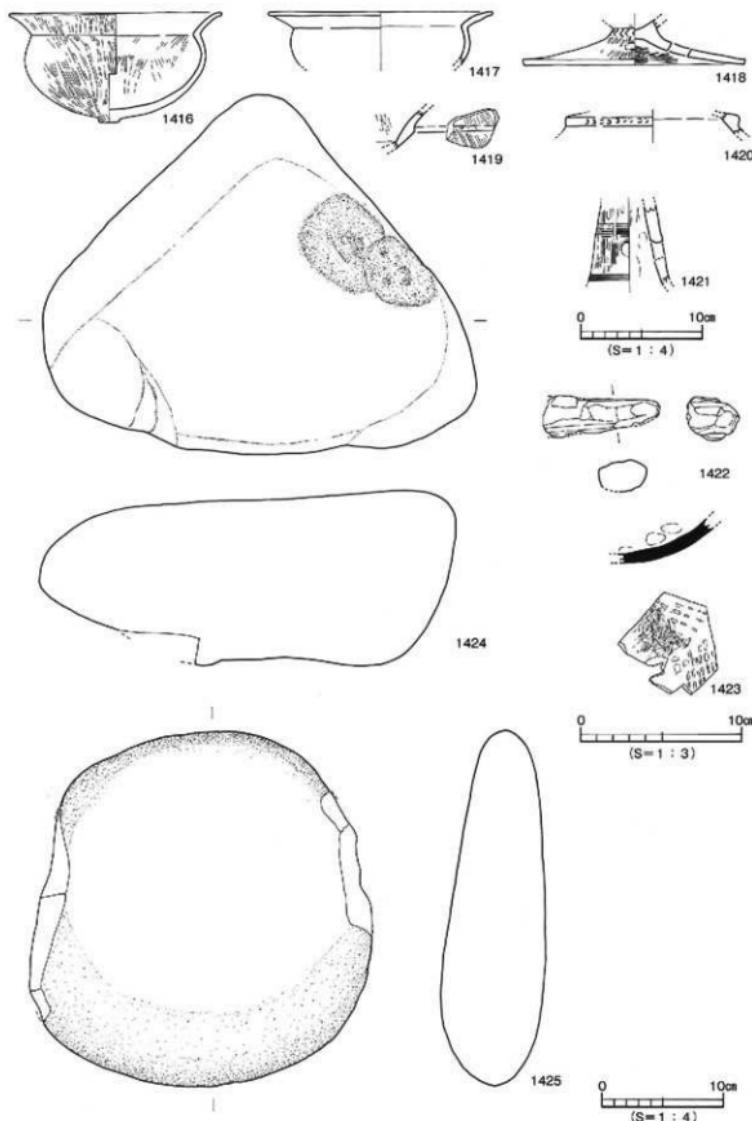
SB110はI区のF6~G7区に位置し、SB111を切り、SB107、SP1235と試掘トレンチに切られ南側は調査区外に続く。平面形態は不整形な円形と考えられる。規模は検出長(5.55)m、深さ17cmを測る。内部施設は周壁溝、土坑を検出した。周壁溝は壁下を巡る。規模は幅20~40cm、深さ6cmを測る。土坑は住居北側に位置する。平面形態は楕円形で、規模は長軸1.52m、短軸0.79m、深さ23cmを測る。埋土は黒褐色土(7.5YR3/2)、赤褐色土(5YR4/6)、黒褐色土に赤褐色土混じりである。出土遺物は弥生土器の壺形土器、壺形土器、鉢形土器、高壺形土器、土師器の壺形土器、須恵器、石器がある。

## 出土遺物 (1407~1425)

1407~1410は壺形土器。1411~1415は壺形土器。1416~1418は鉢形土器。1416はボタン状の底部か



第263図 SB110測量図・出土遺物実測図(1)



第264図 SB 110出土遺物実測図(2)

ら外反する口縁部につづく。内外面は丁寧な磨きを施す。1419~1421は高壺形土器。1422は獸形土器。1423は須恵器の底部片。底部外面に薙が付着している。1424・1425は石製品。使用痕が見られる。

時期：出土遺物より弥生時代後期後半に時期比定する。

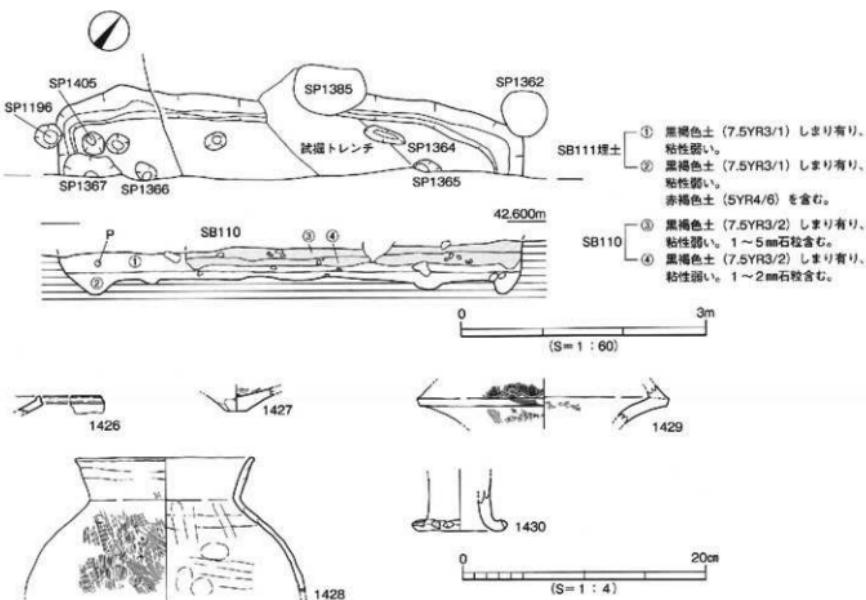
#### S B111 [第265図、図版80]

S B111は、I区のG 7区に位置し、S B110、S P1362・1385、試掘トレンチに切られ南側は調査区外に続く。平面形態は2ヶ所のコーナー部を検出したことより方形と考えられる。規模は5.74×(12)m、深さ21cmを測る。内部施設には周壁溝がある。規模は幅30~50cm、深さ7cmを測る。埋土は黒褐色土(7.5 YR 3/1)、黒褐色土に赤褐色土(5 YR 4/6)混じりである。出土遺物は土師器、弥生土器がある。

#### 出土遺物 (1426~1430)

1426~1428は変形土器、1429は壺形土器、1430は支脚形土器。

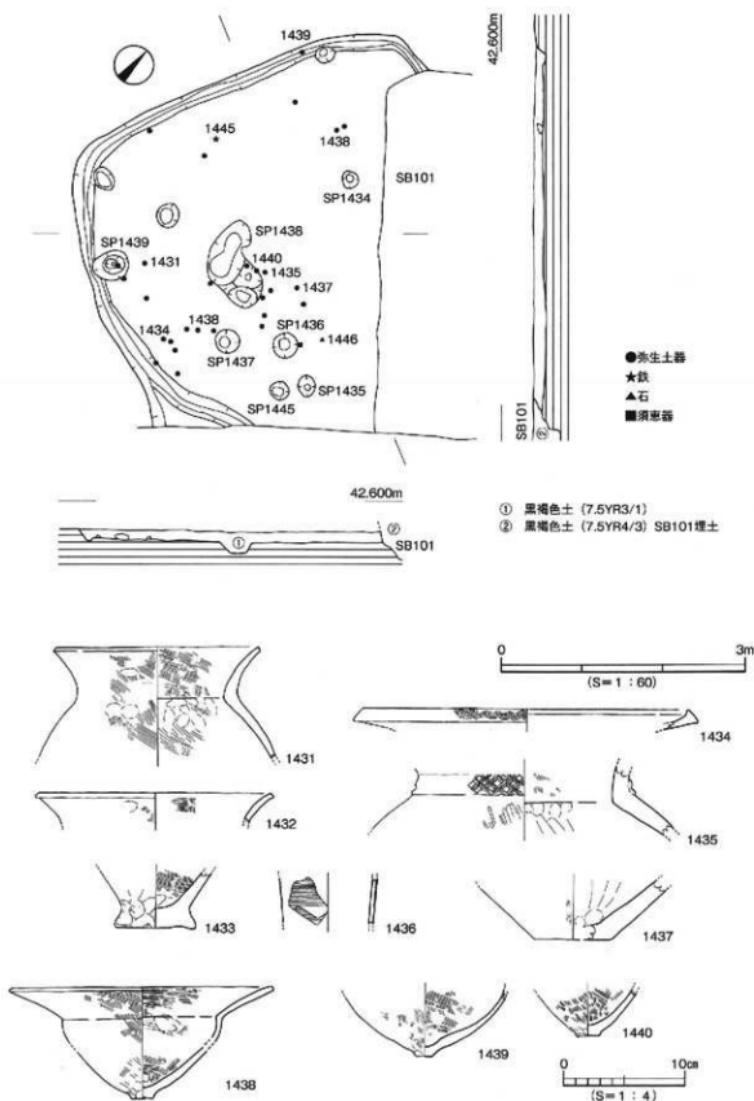
時期：S B110に切られるが埋土はほぼ同じことより弥生時代後期後半か後期後半以前とする。



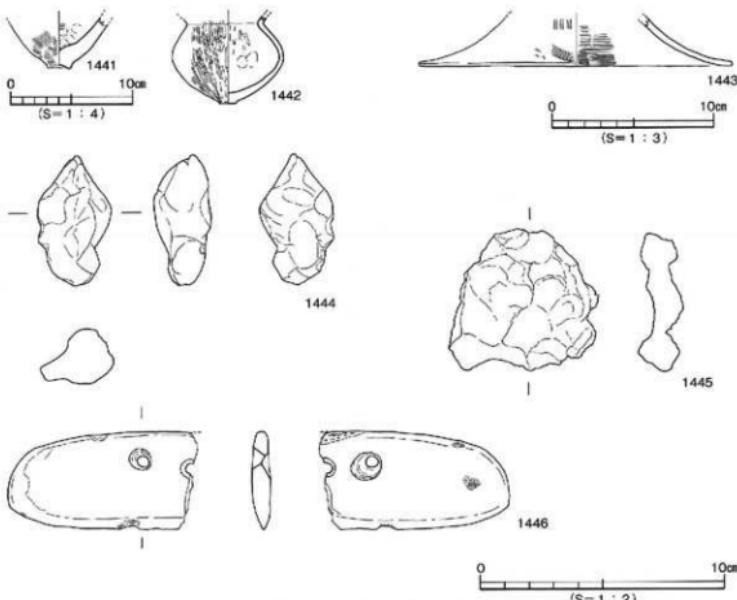
第265図 S B111測量図・出土遺物実測図

#### S B117 [第266・267図、図版80・87]

S B117は、I区のD 5~E 5区に位置しS B101に切られ、南側は調査区外に続く。平面形態は2ヶ所のコーナー部を検出したことより方形と考えられる。規模は4.6×(4.7)m、深さ6cmを測る。内部施設は周壁溝と柱穴がある。周壁溝の規模は、幅10~30cm、深さ5cmを測る。埋土は黒褐色土(7.5



第266図 SB117測量図・出土遺物実測図(1)



第267図 SB 117出土遺物実測図(2)

Y R3/1)である。出土遺物は弥生土器の壺形土器、壺形土器、鉢形土器、器種不明土器、鉄製品、石庖丁がある。

出土遺物(1431~1446) 1431~1433は壺形土器、1434~1437は壺形土器、1438~1443は鉢形土器。1444は粘土塊、1445は鉄滓、1446は石庖丁。約1/2の残存、丁寧に磨かれている。

時期：出土遺物から弥生時代後期後半から後期末とする。

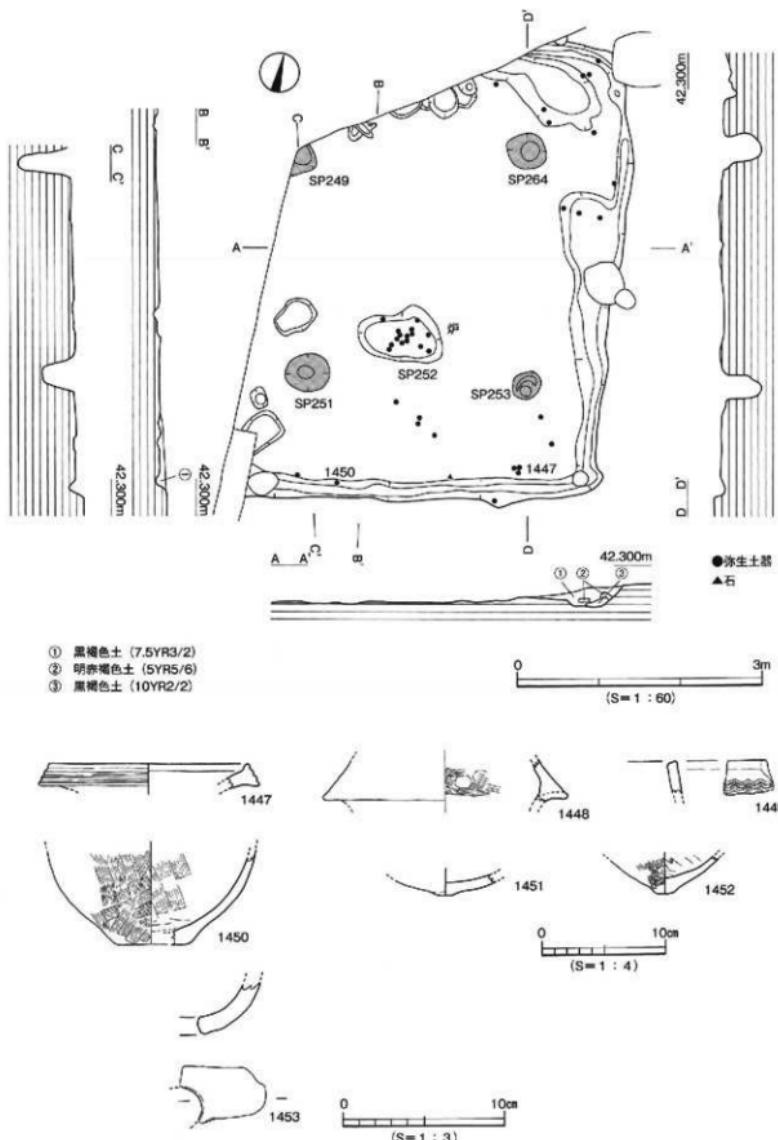
#### S B201 [第268図、図版85]

S B201はII区のH・I 12区に位置しS K201、S Pに切られ西～北側は調査区外に続く。平面形態は方形である。規模は5.7×4.25m、深さ10cmを測る。内部施設は主柱穴、炉、周壁溝がある。主柱穴は4本検出し平面形態は円形である。規模は径40~60cm、深さ42~64cmを測る。炉は住居中央南に検出した。平面形態は椿円形である。規模は1.1×0.8m、深さ6cmを測る。周壁溝は盤下を巡る。規模は幅22~60cm、深さ8cmを測る。住居埋土は①黒褐色土(7.5 Y R3/2)に②明褐色土(5 Y R5/6)と③黒褐色土(10 Y R2/2)がブロックで混じる。出土遺物は弥生土器、土師器がある。

#### 出土遺物(1447~1453)

1447~1450は壺形土器。1447は口縁端部を拡張し外面に凹線文を施す。1448・1449は複合口縁壺。1449の外面に波状文を施す。1451・1452は鉢形土器。1451はボタン状の底部。1453は壺形土器の底部片。

時期：出土遺物から弥生時代後期後半とする。



第268図 SB 201測量図・出土遺物実測図

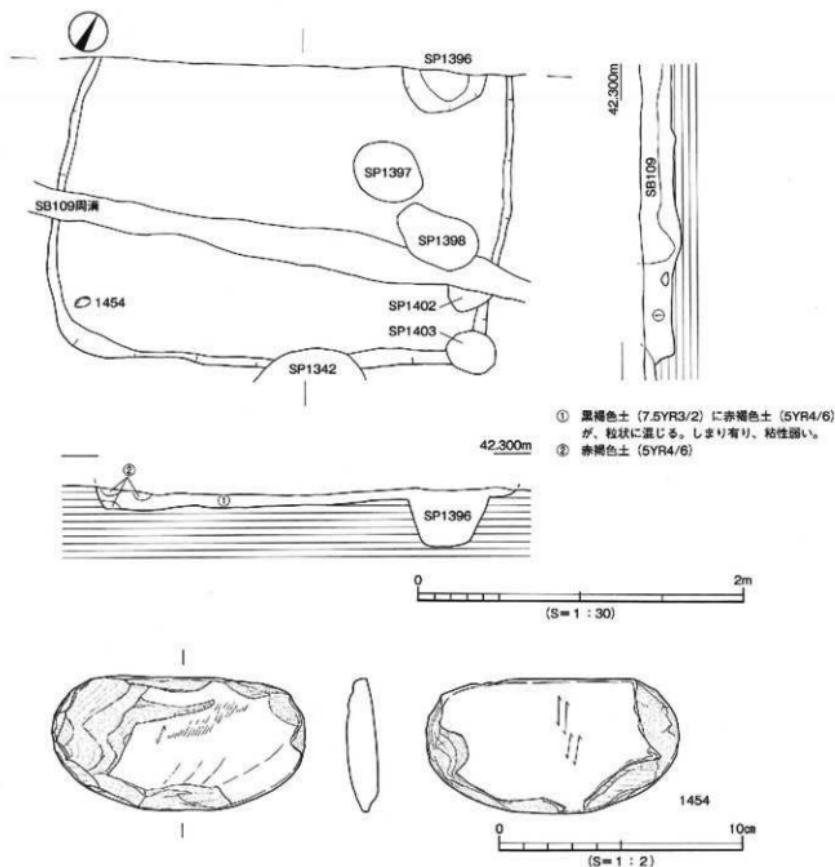
## (2) 土坑 (SK)

SK104 [第269図、図版80・84]

SK104はI区のE・F8区に位置しSB109とSP1342、1397、1398、1402、1403に切られ、北側は調査区外に続く。平面形態は方形である。規模は2.82×(1.84)m、深さ20cmを測る。埋土は黒褐色土(7.5YR3/2)に赤褐色土(5YR4/6)が粒状に混じる。西側には赤褐色土(5YR4/6)がブロック状に混じる。出土遺物は土師器、弥生土器、石庖丁がある。弥生土器、土師器は小片で固化出来ていない。

出土遺物(1454)石庖丁の未製品。両面と背に研磨痕が見られる。

時期：出土遺物より弥生時代後期後半に時期比定する。



第269図 SK104測量図・出土遺物実測図

## 5. 古墳時代の遺構と遺物

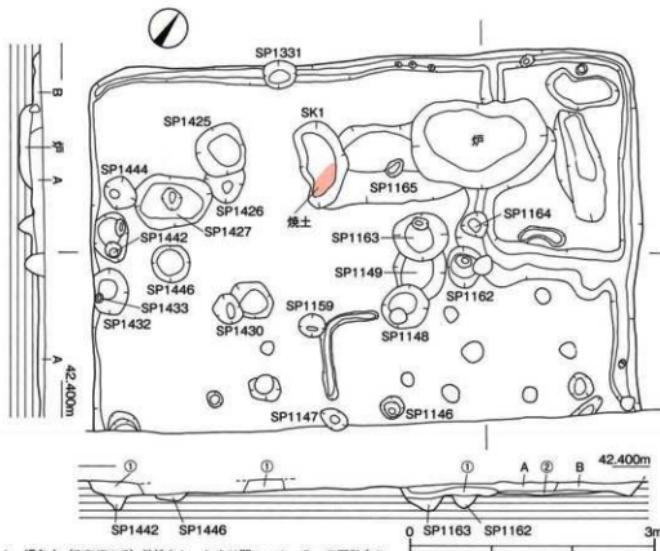
竪穴式住居址10棟、掘立柱建物址1棟を検出した。

### (1) 竪穴式住居址 (S B)

#### S B101 [第270~275図、図版79・80・82・83・88~90]

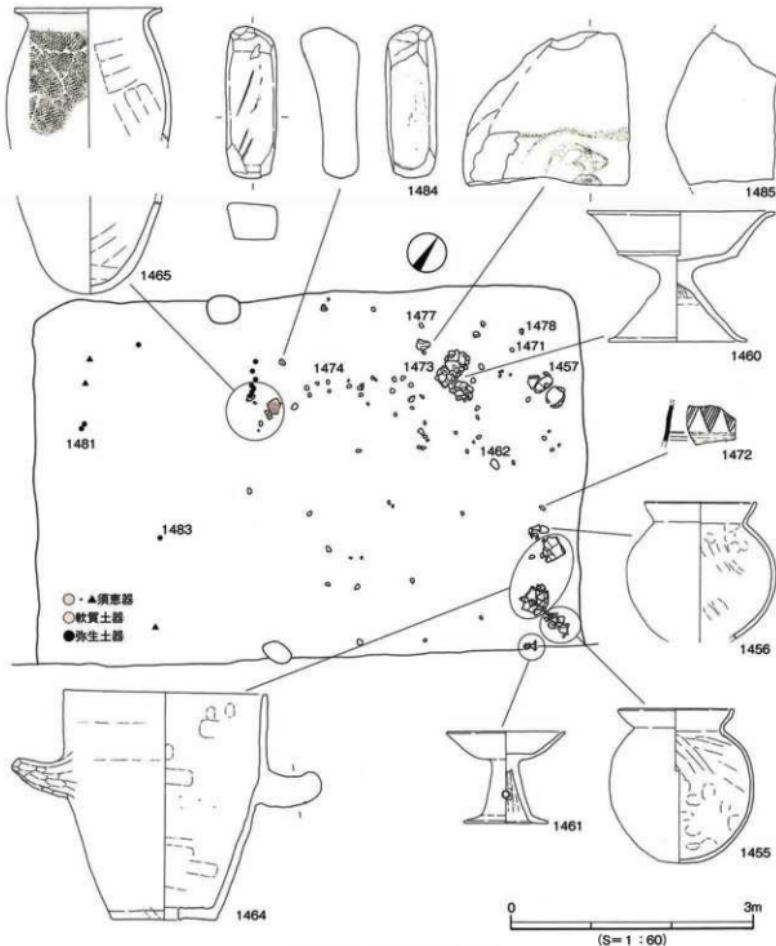
S B101は、I区のD3~E4区に位置しS B117を切り、南側は調査区外に続く。平面形態は方形である。規模は6.8×(4.5)m、深さ10cmを測る。内部施設は周壁溝、炉、土坑、柱穴がある。周壁溝は北から東の壁下で検出した。規模は幅20~35cm、深さ5cmを測る。炉は住居北東部に位置し、平面形は楕円形で規模は長軸1.7m、短軸1.0m、深さ24cmを測る。土坑(S K1)は住居北中央に位置し、平面形は楕円形である。規模は長軸1.1m、短軸0.6m、深さ14cmを測る。埋土は褐色土(7.5YR4/3)と黒褐色土(7.5YR3/1)、黒褐色土に赤褐色土(2.5YR4/6)混じり、貼り床は黄橙色土(7.5YR7/8)に黒褐色土混じりである。出土遺物は土師器の壺形土器、壺形土器、高環形土器、瓶形土器、須恵器の坏身、坏蓋、壺、器台、弥生土器、石器、焼土、SK1からは軟質土器の長胴壺が出土した。

出土遺物(1455~1485) 1455~1458は壺形土器。1455は完形品。丸みを持つ胴部に外傾する口縁部の端部は内傾する面を持つ。1456は球形の胴部に外傾する口縁部を持つ。1457は球形の胴部に段をも

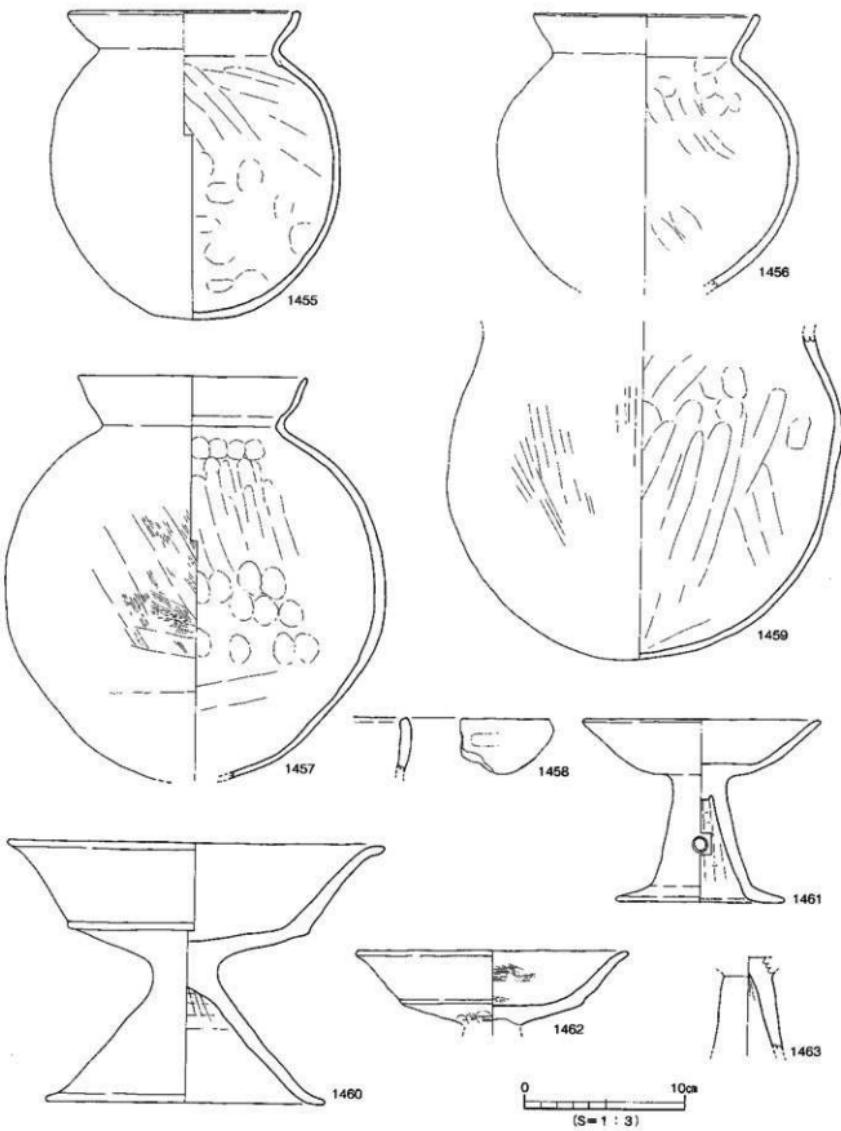


第270図 S B101測量図(1)

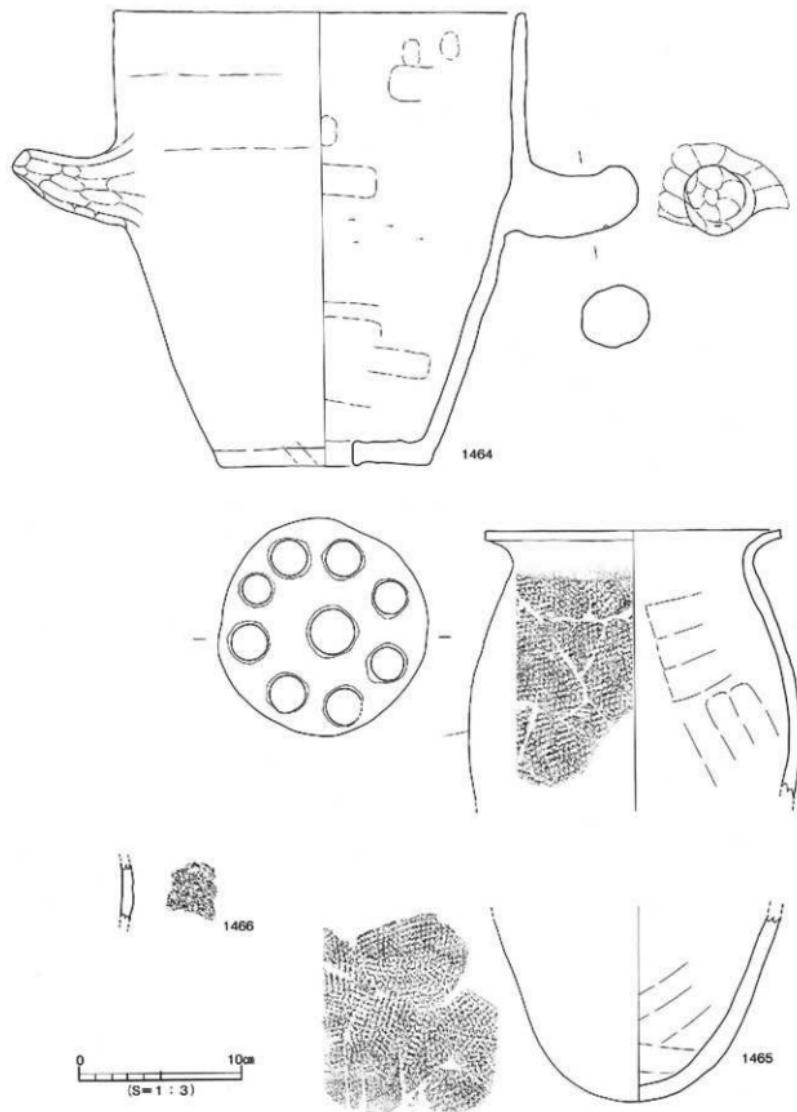
ち外傾する口縁部。1458は口縁部片。1459は鉢形土器。丸い底部から胴部、頸部は広い。1460～1463は高壺形土器。1460は「ハ」の字状に開く脚部、壺部は段を持ち外傾する。1461は完形品。脚据部が屈曲し水平に接地し壺部は皿状である。1462は壺部。1463は柱部。1464は壺形土器の完形品。平底の底部中央に蒸気孔を開け、中央の蒸気孔を中心に8個の蒸気孔を環状に配置する。胴部中央やや上部に把手が付き、把手下部に穿孔がある。1465・1466は軟質土器。1465は長柄甕SK1出土。丸底の底



第271図 S B101測量図(2)

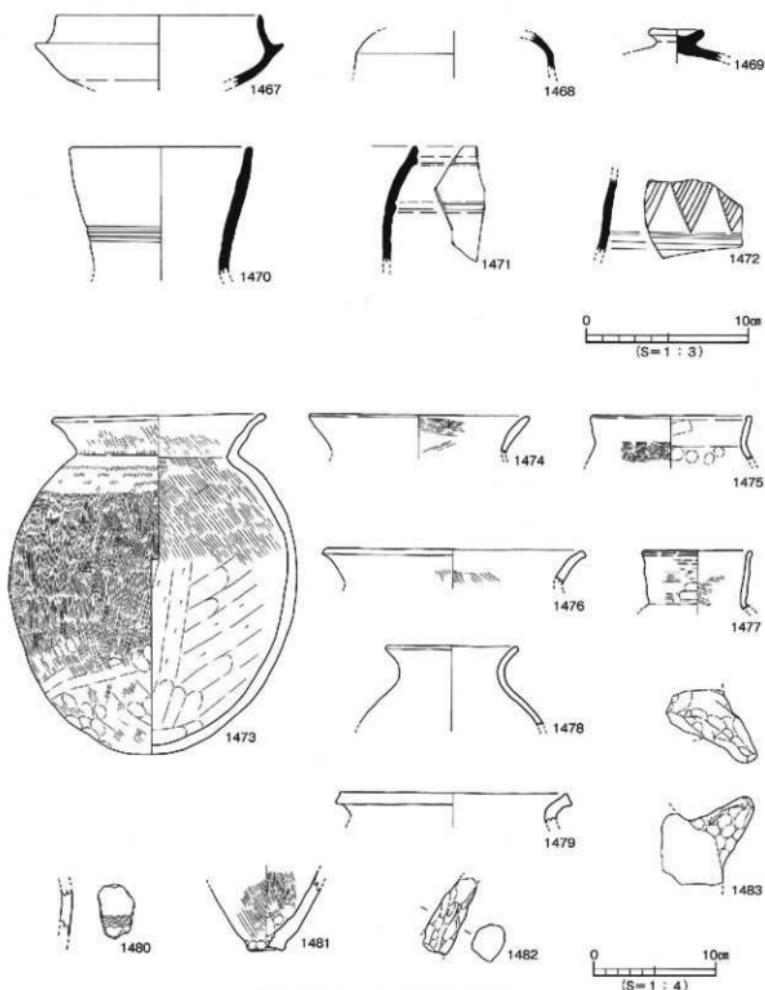


第272図 S B 101出土遺物実測図(1)



第273図 SB 101出土遺物実測図(2)

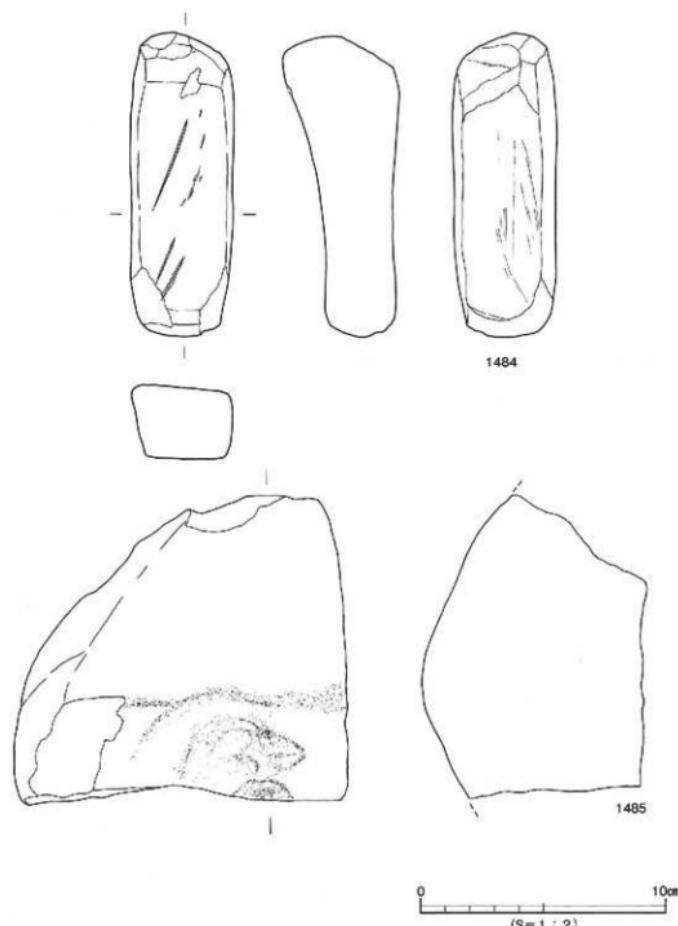
部。外面に叩き痕。1466は胴部片、外面に叩き痕。1467～1472は須恵器。1467は壺身。1468は壺蓋。1469は蓋。1470・1471は壺。1470はわずかに外傾する口縁部。中位にナデによる凸帯。1471はわずかに外反する口縁部。口端部下位と中位にナデによる凸帯を巡らす。1472は器台形土器。斜線で充填された山形文。S B 105出土品1368・1369と同一個体か。



第274図 SB 101出土遺物実測図(3)

1473～1483は弥生土器。住居址上面から出土した。1473～1476は壺形土器。1473は丸い底部に外傾する口縁部をもつ。1474～1476は口縁部片。1477～1480は壺形土器。1477～1479は口縁部片。1480は外面に細かい波状文を施す。1481は鉢形土器の底部片。1482・1483は支脚形土器。角部である。1484・1485は石器床面より出土した。1484は砥石。よく使い込まれている深い擦痕と浅い擦痕が見られる。1485は台石か。

時期：出土した土器の形態より古墳時代前半に時期比定する。



第275図 SB 101出土遺物実測図(4)

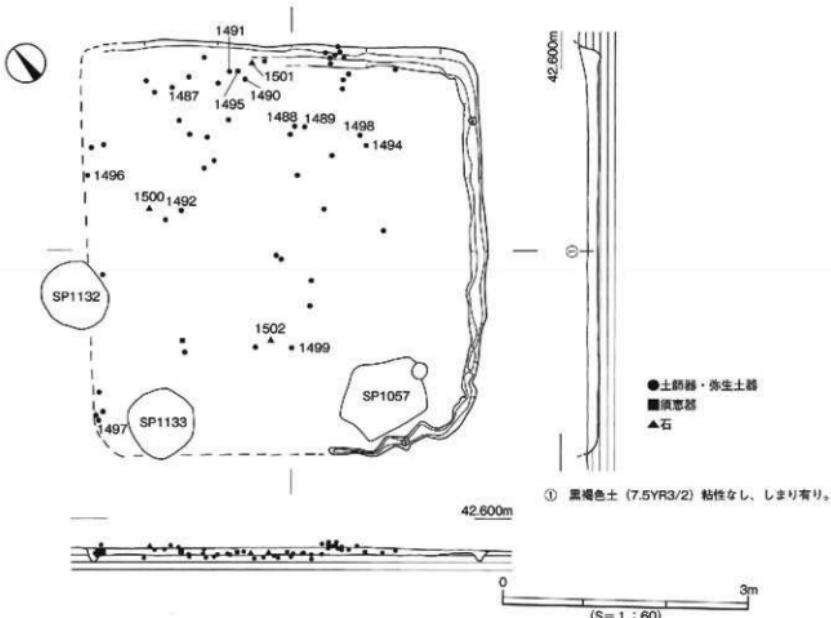
## SB106 [第276~279図、図版80・91]

SB106は、I区のC2・3区に位置しSB105を切りSP1132・1133・1057に切られる。平面形態は方形である。規模は5.2×(4.5)m、深さ11cmを測る。内部施設は周壁溝がある。周壁溝は東側から南側で検出した。規模は幅20cm、深さ7cmを測る。埋土は黒褐色土(7.5YR3/2)である。出土遺物は土師器の甕形土器、高壺形土器、瓶形土器、須恵器の壺身、把手付壺、弥生土器、石器がある。

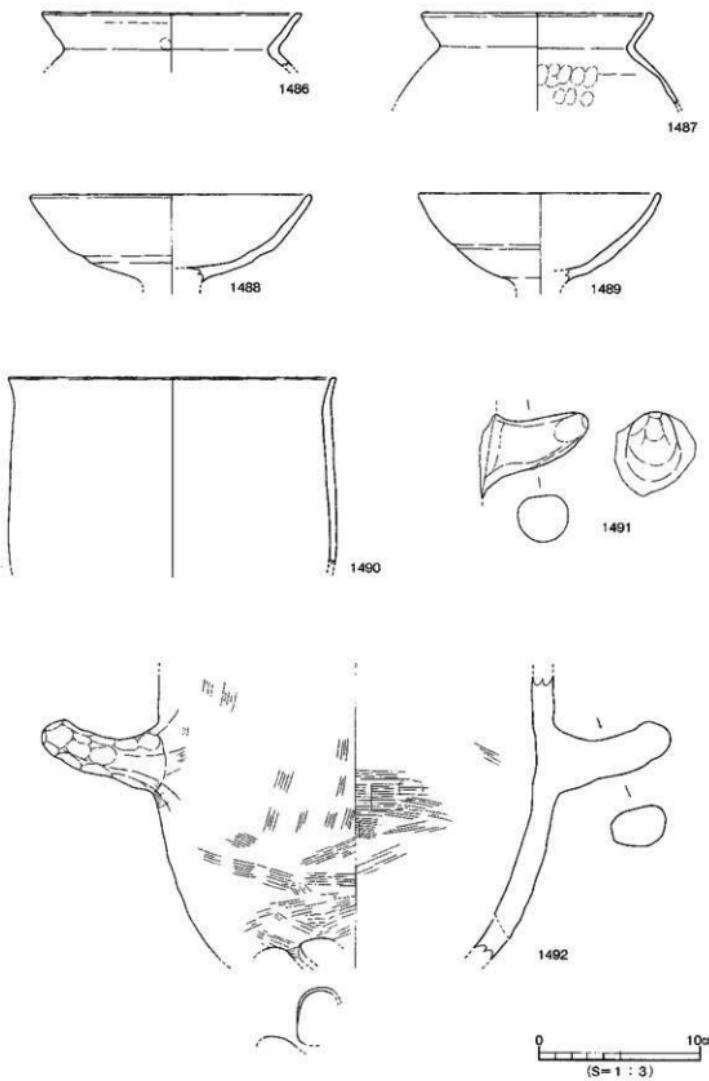
## 出土遺物(1486~1502)

1486~1492は土師器。1486・1487は甕形土器。1488・1489は高壺形土器の壺部。1488は皿状の壺部。1490~1492は瓶形土器。1490は口縁部。1491は把手部である。1492は底部から頸部。底部は丸みをもち橢円形状の蒸気孔が底部側面に残る。把手は断面橢円形状である。1493~1495は須恵器。1493は壺身。直立する口縁部端部は尖り気味である。1494は胴部片。内外面は擦り消してある。1495は把手付壺のほぼ完形品。平底の底部から直立する口縁部。胴部に渦巻状の把手が付く。胴中位にナデによる2本の凸帯を作り出し、凸帯間に波状文を施す。1496~1499は弥生土器。1496・1497は鉢形土器の底部片。1498~1499は支脚形土器。1498は角状突起を持つ。1499は中空。1500は台石。橢円形状で扁平である。1501は砥石。よく使い込まれ擦痕と敲打痕が顕著に残る。1502は石鏃。完形品である。

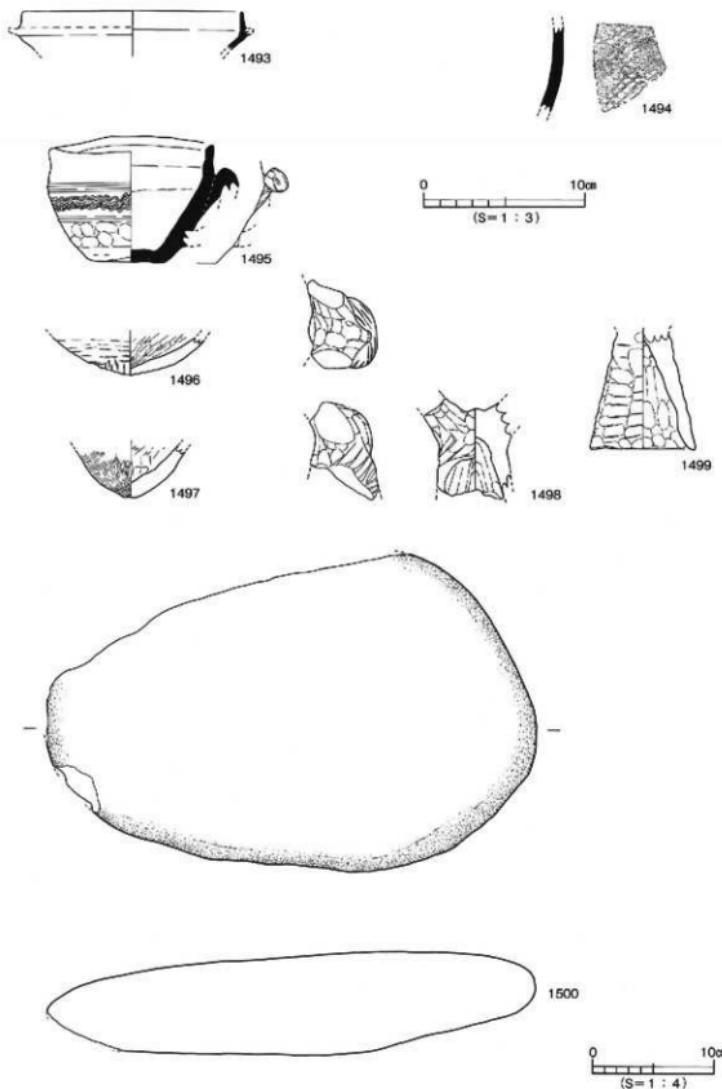
時期：出土した土師器の形態より古墳時代前半に時期比定する。



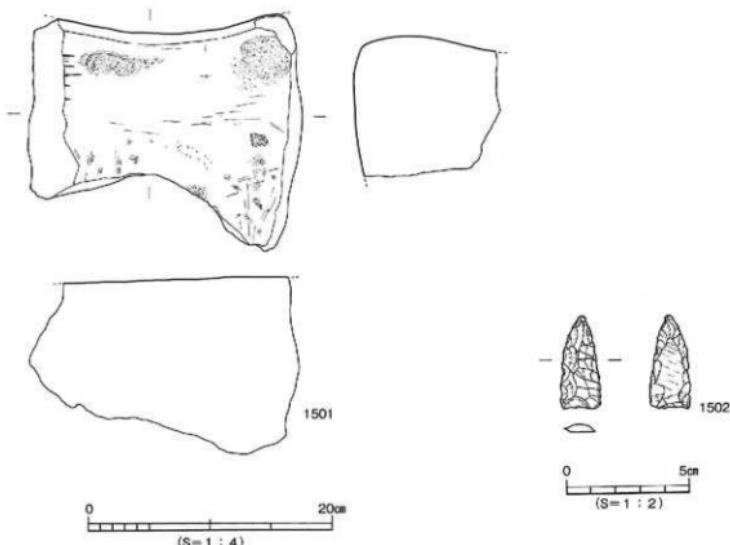
第276図 SB106測量図



第277図 S B 106出土遺物実測図(1)



第278図 SB 106出土遺物実測図(2)



第279図 S B 106出土遺物実測図(3)

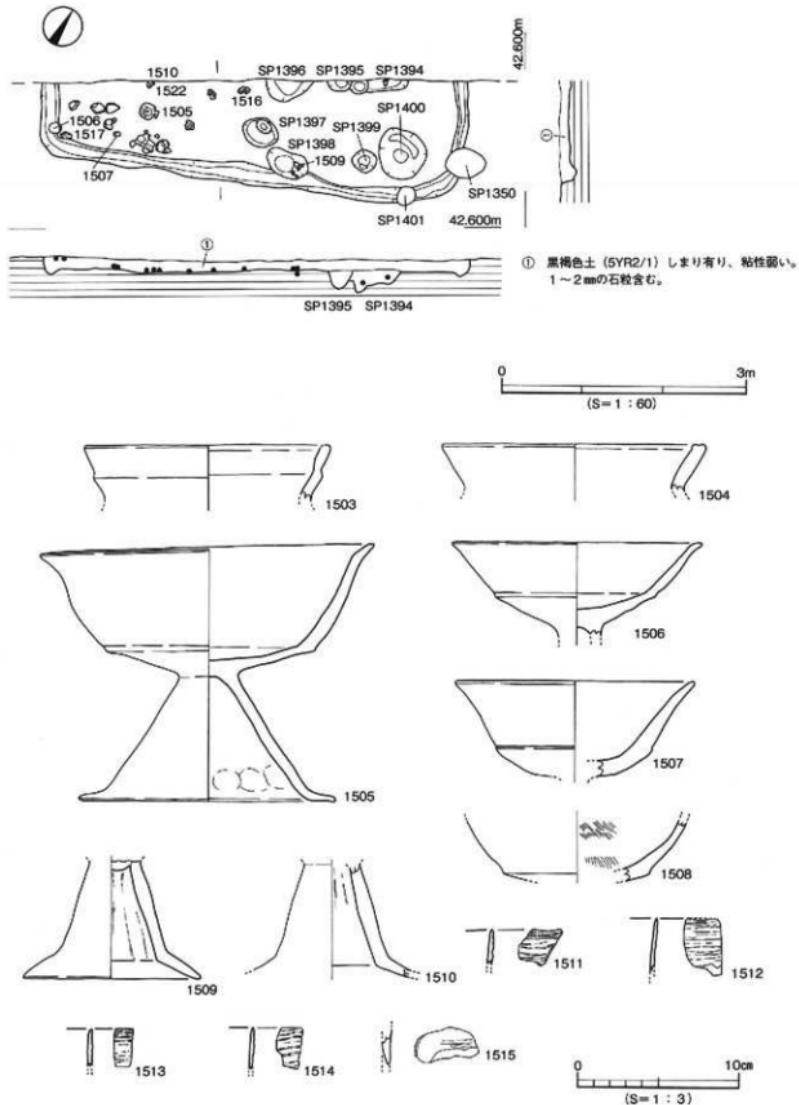
## S B 109【第280・281図、図版80・84・91】

S B 109は、I区のE 8区に位置し、S K104を切り、北側は調査区外に続く。平面形態は2ヶ所のコーナー部を検出したことより方形と考えられる。規模は $5.14 \times (1.45)$ m、深さ10cmを測る。内部施設は周壁溝、柱穴を検出した。周壁溝は壁下を巡る。規模は幅16~24cm、深さ5cmを測る。埋土は黒褐色土(5 YR 2/1)である。出土遺物は土師器の壺形土器、高坏形土器、軟質土器の把手付鍋、製塙土器、須恵器の出作・市場型土器、弥生土器、台石がある。

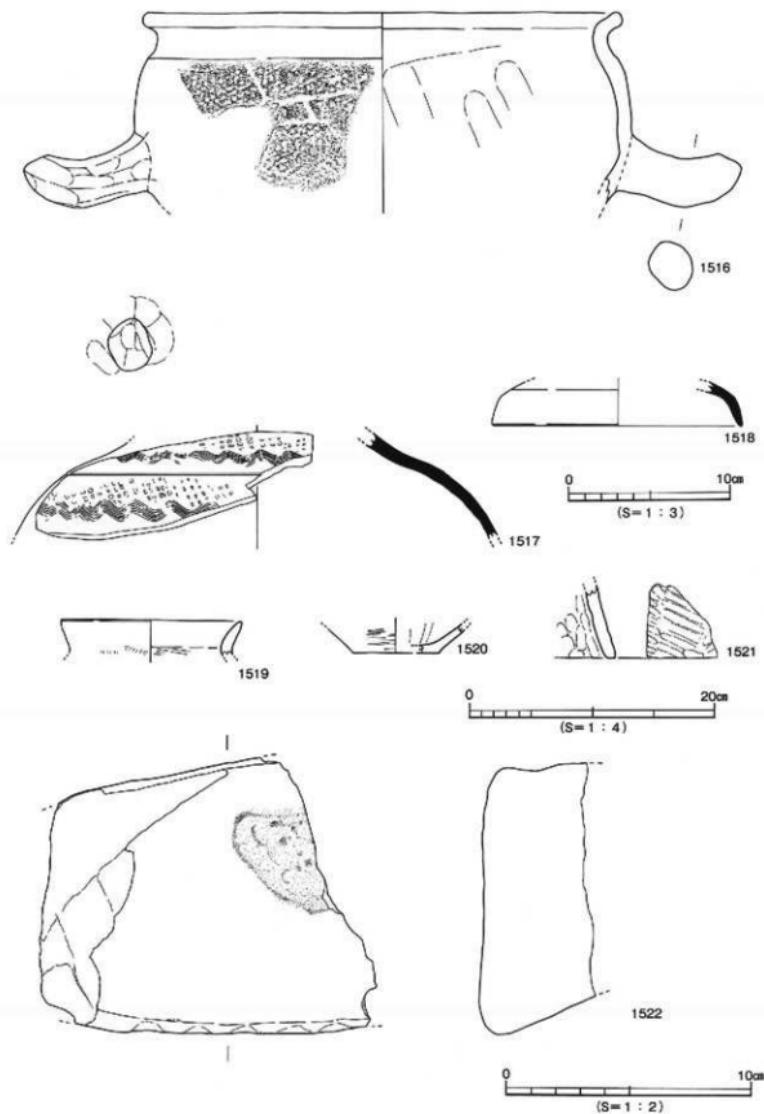
## 出土遺物(1503~1522)

1503~1516は土師器。1503・1504は壺形土器の口縁部片。1503は外傾し口縁部中位で段を持つ。口端部は水平な面を持つ。1504は外傾する口縁部の端部は肥厚され水平な面を持つ。1505~1510は高坏形土器。1505は「ハ」の字状に開く脚部は端部手前で屈曲し水平気味に接地する。坏部は塊状に深く段を持ち屈曲し端部手前でわずかに外反する。1506は段を持ち外傾する坏部、端部は尖り気味に丸い。1507は段をもち外傾する坏部。1509・1510は脚部。脚端部手前で屈曲する。1511~1515は製塙土器。器壁は薄く外面に叩き痕が残る。1516は把手付鍋。短く外傾する口縁部。頸部は強いナデにより頸部下にわずかに段を持つ。胴部中位に断面円形の把手が付く。外面には叩きが残る。1517・1518は須恵器。1517は出作・市場型土器、壺の頸部に波状文と沈線が巡る。外面に自然釉がかかる。1518は坏蓋。1519~1521は弥生土器。1519・1520は壺形土器。1519は口縁部。1520は底部である。1521は支脚形土器である。1522は台石、敲打による使用痕が見られる。

時期：出土した土師器の形態より古墳時代前半に時期比定する。



第280図 S B 109測量図・出土遺物実測図(1)



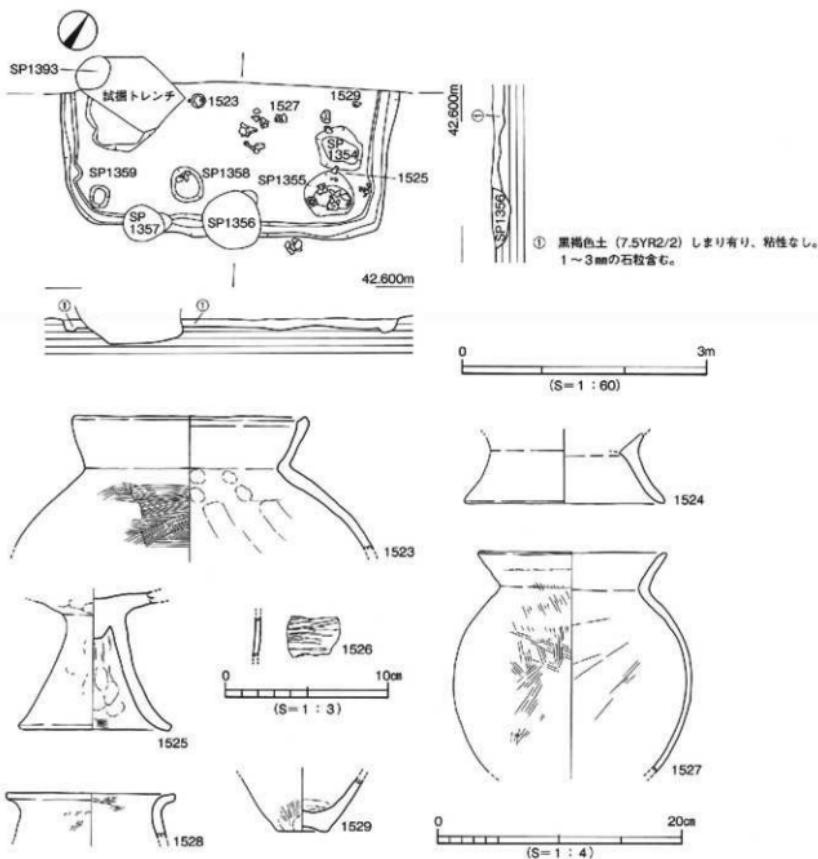
第281図 S B 109出土遺物実測図(2)

## SB112 [第282図、図版80]

SB112は、I区のD7～E8区に位置しSP1356・1357、試掘トレンチに切られ、北側は調査区外に続く。平面形態は2ヶ所のコーナー部を検出したことより方形と考えられる。規模は41×(186)m、深さ14cmを測る。内部施設は周壁溝、柱穴がある。周壁溝の規模は、幅18～24cm、深さ4cmを測る。埋土は黒褐色土である。出土遺物は土師器、製塩土器、弥生土器がある。

出土遺物 (1523～1529) 1523は甕形土器、1524は脚部。1525は高环形土器、1526は製塩土器。1527～1529は弥生土器。弥生土器は上面からの出土である。

時期：出土した土師器の形態より古墳時代前半に時期比定する。



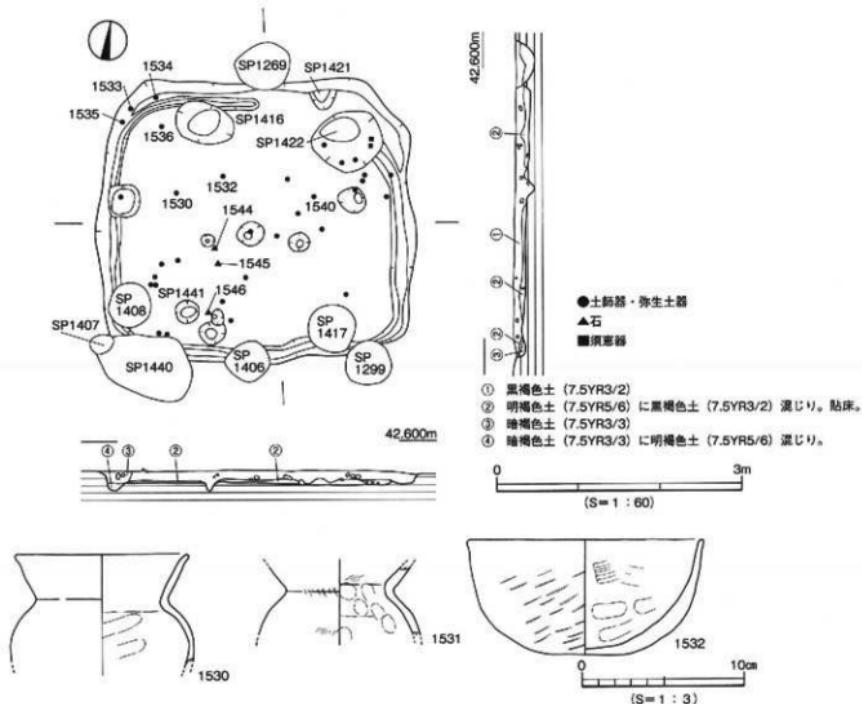
第282図 SB112測量図・出土遺物実測図

## S B113 [第283~285図、図版80]

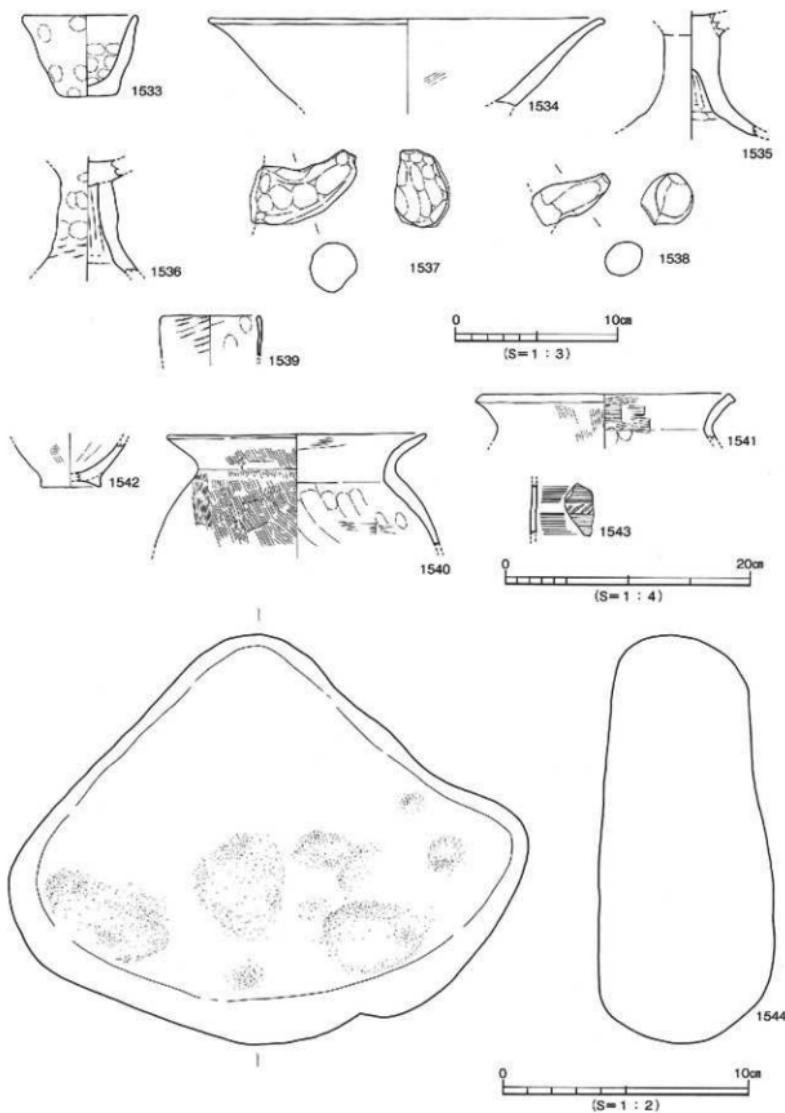
S B113は、I区のD・E 6区に位置し S P 1269・1299・1406・1408・1417・1440に切られる。平面形態は方形である。規模は3.8×3.45m、深さ6cmを測る。内部施設は貼り床、周壁溝と柱穴がある。貼り床は住居全面にあり、厚さ4~8cmを測る。周壁溝の規模は、幅14~34cm、深さ6cmを測る。埋土は①層黒褐色土(7.5Y R3/2)、②層明褐色土(7.5Y R5/6)に黒褐色土(7.5Y R3/2)混じり、③層暗褐色土(7.5Y R3/3)、④層暗褐色土(7.5Y R3/3)に明褐色土(7.5Y R5/6)混じりである。埋土内には3~10cmの礫が混じる。出土遺物は土師器の壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、瓶形土器、製塙土器、弥生土器、石器がある。

## 出土遺物 (1530~1546)

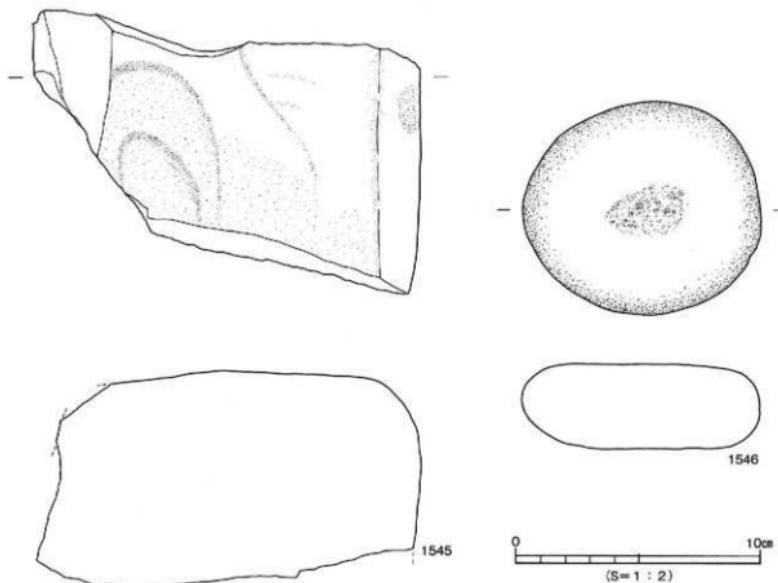
1530・1531は小型丸底壺。1530は外傾する口縁部に肩の張る丸い胴部。1531は外傾する口縁部から肩部。1532・1533は鉢形土器。1532は丸い底部に直立する口縁部、端部は尖り気味に丸い。1533はミニチュア土器。1534~1536は高坏形土器。1534は外傾する壺口縁。1535・1536は脚部。1537・1538は瓶形土器の把手。1537は断面円形の把手部。1538は断面梢円形の把手部。1539は製塙土器。器壁が薄



第283図 S B113測量図・出土遺物実測図(1)



第284図 SB 113出土遺物実測図(2)



第285図 S B113出土遺物実測図(3)

く外面に叩き痕がある。1540～1543は弥生土器。1544～1546は石製品。

時期：出土した土師器の形態より古墳時代前半に時期比定する。

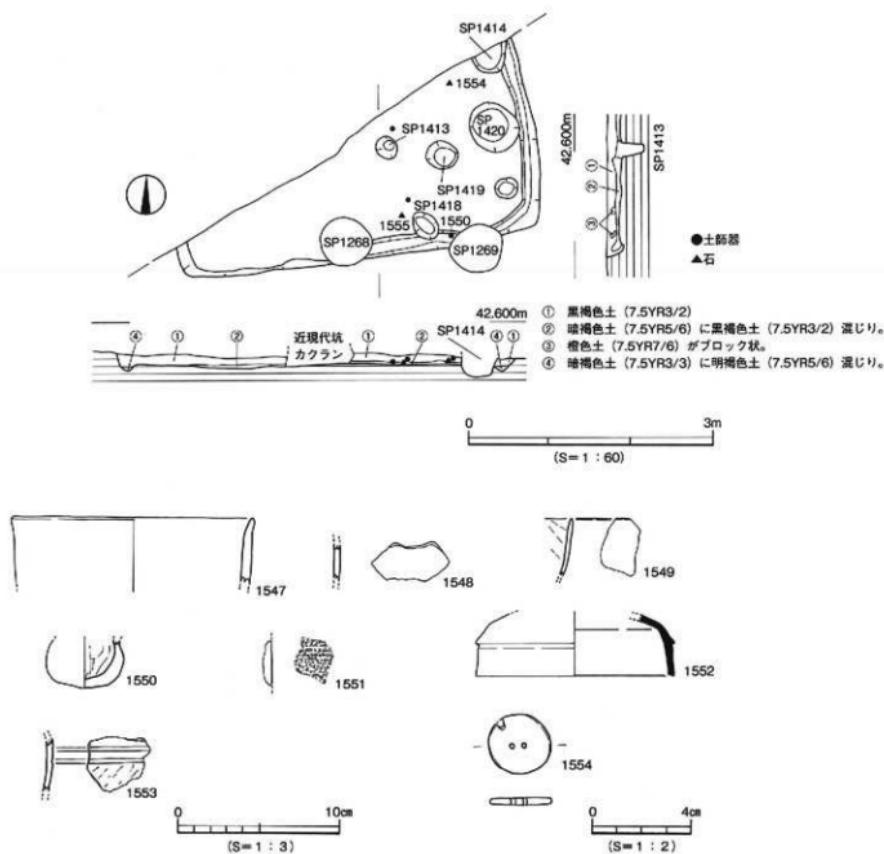
#### S B114〔第286・287図、図版80・92〕

S B114は、I区のD 6・7区に位置し、S P1268・1269に切られ北側は調査区外に続く。平面形態は2ヶ所のコーナー部を検出したことより方形と考えられる。規模は4.54×(24) m、深さ7cmを測る。内部施設は周壁溝がある。周壁溝は壁下に東部から南東部にかけて検出した。規模は幅16～26cm、深さ3cmを測る。埋土は4層検出した。①黒褐色土(7.5Y R3/2)、②明褐色土(7.5Y R5/6)に黒褐色土(7.5Y R3/2)混じり、③橙色土(7.5Y R7/6)ブロック状、④暗褐色土(7.5Y R3/3)に明褐色土(7.5Y R5/6)混じりである。出土遺物は土師器の瓶形土器、軟質土器、製塩土器、須恵器、石製の有孔円板、台石がある。

#### 出土遺物(1547～1555)

1547は瓶形土器。直立する口縁部片。1548・1549は製塩土器の胴部の小片。1550は手捏土器、丸い底部。1551は軟質土器。胴部の小片。1552は壺蓋、天井部と口縁部を分ける稜は明瞭で口縁部は直立気味に接地し、端部は窪む。1553は胴部片。1554是有孔円板。住居址北東部で検出した。一部欠けているがほぼ完形品である。1555は台石。住居址南側の床面から検出した。扁平で使用痕が側面に見られる。

時期：出土した遺物の形態より古墳時代前半に時期比定する。



第286図 S B114測量図・出土遺物実測図(1)

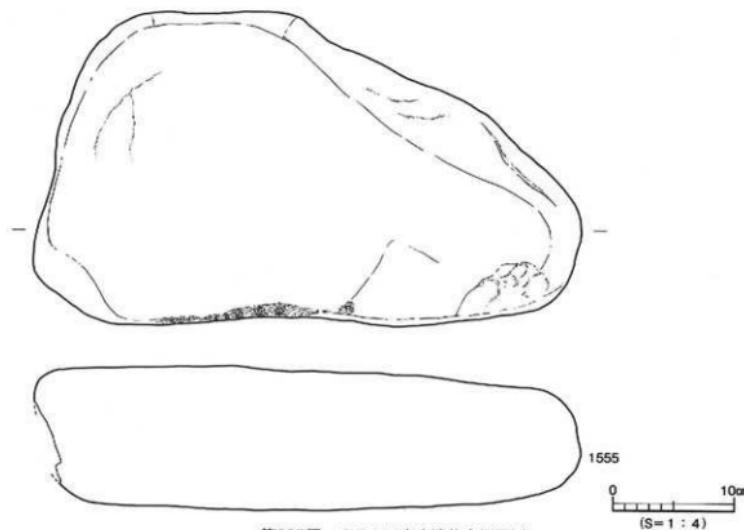
**S B115** [第288・289図、図版80・92]

S B115は、I区のC・D・S5区に位置しS B116に切られ、北側は調査区外に続く。平面形態は方形と考えられる。規模は5.1×(4.0)m、深さ12cmを測る。埋土は黒褐色土(7.5YR3/1)である。出土遺物は土師器、弥生土器、石器がある。

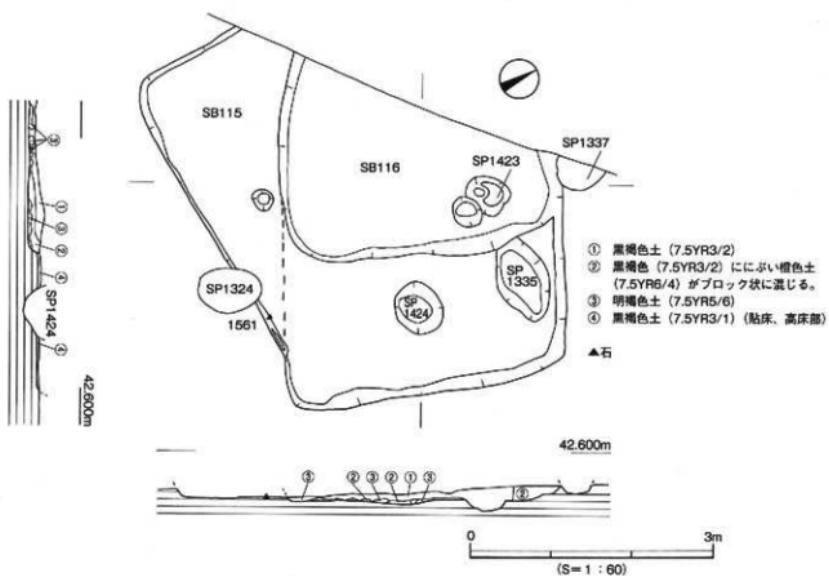
**出土遺物 (1556~1561)**

1556は土師器の壺形土器。1557は須恵器の壺蓋。1558~1560は弥生土器。1561は黒曜石。

時期：出土した須恵器の形態より古墳時代後半に時期比定する。



第287図 SB114出土遺物実測図(2)



第288図 SB115・116測量図

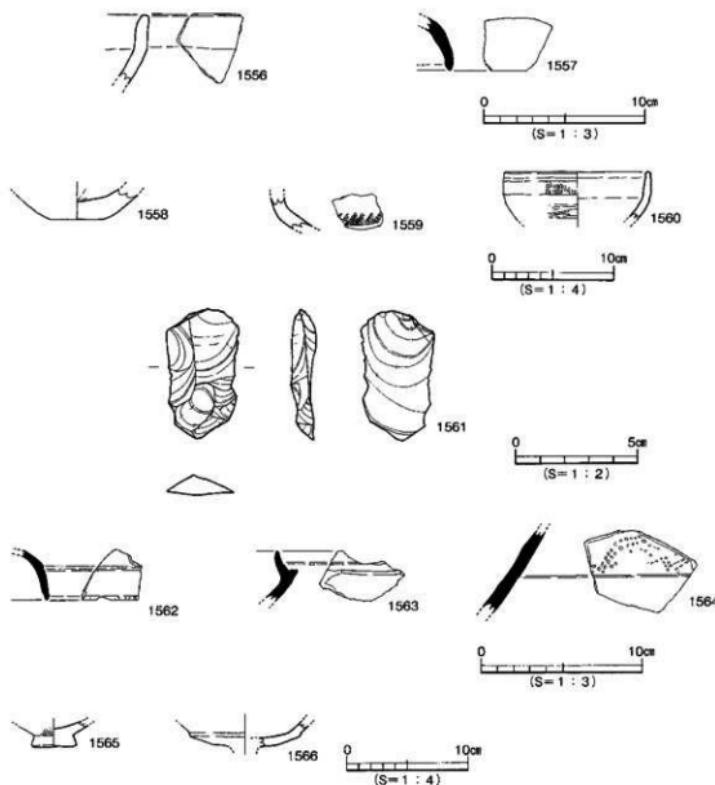
## SB 116 [第288・289図、図版80・92]

SB 116は、I区のC・D 5区に位置しSB 115を切り、北側は調査区外に続く。平面形態は2ヶ所のコーナー部を検出したことより方形と考えられる。規模は3.4×(2.6)m、深さ10cmを測る。内部施設には高床部を持つ。高床部は南東部に張り出す形で検出した。埋土は①黒褐色土(7.5Y R3/2)、②黒褐色土(7.5Y R3/2)にぶい橙色土(7.5Y R6/4)がブロック状に混じる、③明褐色土(7.5Y R5/6)、④黒褐色土(7.5Y R3/1)である。出土遺物は須恵器、弥生土器がある。

## 出土遺物(1562~1566)

1562~1564は須恵器。1562は壺蓋、1563は壺身、1564は器台形土器。壺部外面に段を持ち段上部に波状の列点文を施す。1565・1566は弥生土器。1565は鉢形土器、1566は高壺形土器。

時期：出土した須恵器の形態より古墳時代後半に時期比定する。



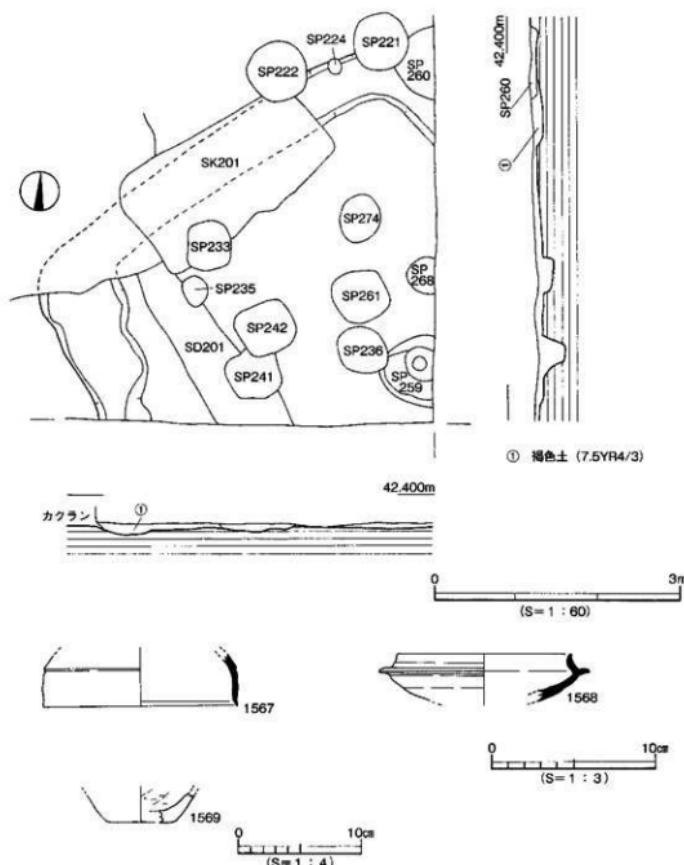
第289図 SB 115・116出土遺物実測図

## S B202 [第290図、図版85]

S B202は、II区のI 11区に位置しSK201、SD201、SP12基に切られ東側と南側は調査区外に続く。平面形態は2ヶ所のコーナー部を検出したことにより方形と考えられる。規模は3.8×(1.6)m、深さ4cmを測る。内部施設は浅い幅広の溝が塹下に巡る。埋土は褐色土(7.5YR4/3)である。出土遺物は土師器、須恵器、弥生土器がある。

出土遺物(1567～1569) 1567は坏蓋、1568は坏身、1569は弥生土器。

時期：出土した須恵器の形態より6世紀代とする。



第290図 S B202測量図・出土遺物実測図

## (2) 挖立柱建物址（掘立）

### 掘立101〔第291図、図版80・82〕

掘立101は、I区のB3～C4区に位置し、SB101を切り北西側は調査区外に続く。規模は3×3間で11基の柱穴を検出した。SP1169はSB101床面でわずかに色の違い（染み状）を検出した。柱穴の平面形態は円形と楕円形である。規模は径60～90cm、深さ10～33cmを測る。埋土はSP1083・1084・1096・1094が暗褐色土（7.5Y R3/3）で上面に2～7cmの黄色ブロック（地山）を上面に多く含む。SP1075・1078は暗赤褐色土（5Y R3/3）、SP1132は暗褐色土（7.5Y R3/3）と暗褐色土（7.5Y R3/3）に赤褐色土（2.5Y R4/6）1～3cmがブロック状に混じる。出土遺物は土師器、須恵器がある。

出土遺物（1570・1571）1570はSP1132出土須恵器の坏蓋、1571はSP1075出土土師器の壺形土器の把手部である。

時期：6世紀後半～7世紀とする。

## (3) 土坑（SK）

### SK201〔第292図、図版85〕

SK201はII区のI11・12区に位置しSB201を切り、SP222・223・228・229・234に切られる。平面形態は長方形である。規模は2.54×1.1～1.3m、深さ8～19cmを測る。断面形態はレンズ状である。床面は凹凸があり砾を含む。埋土はにぶい赤褐色土（5Y R5/4）に明赤褐色土（5Y R5/8）の粒混じりが主体である。出土遺物は土師器、弥生土器、石器がある。

### 出土遺物（1572～1574）

1572は土師器の壺形土器。口縁部は外傾し僅かに内湾する。口端面は内傾する面を持つ。1573は弥生土器の鉢形土器。1574は石器。断面隅丸方形で小口に敲打痕が見られる。

時期：埋土と出土遺物より古墳時代後期以降とする。

## (4) 性格不明遺構（SX）

### SX101〔第293図、図版80〕

SX101はI区のG8区に位置し、SP1173・1343・1273・1374・1377に切られる。平面形態は不整形な円形状である。規模は1.89×2.00m、深さ23cmを測る。断面形態は皿状である。埋土は黒褐色土（10Y R3/1）で1～3mmの石粒を含む。出土遺物は土師器、須恵器、弥生土器の小片がある。

### 出土遺物（1575）弥生土器の壺形土器。口縁部片。

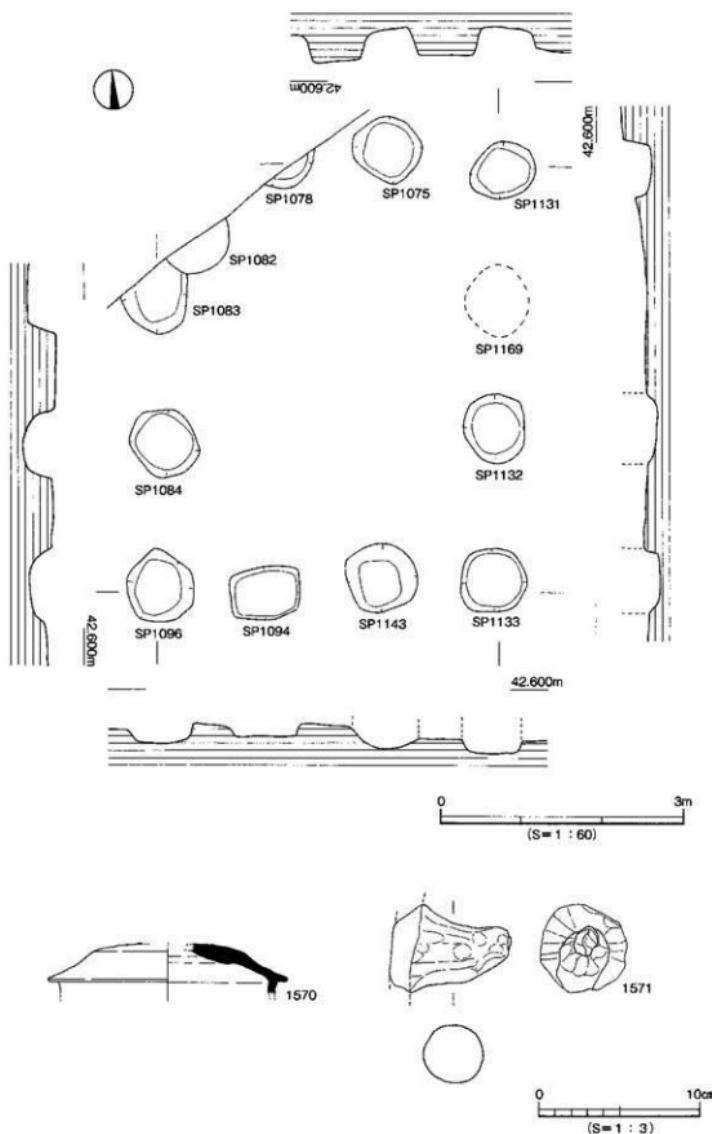
時期：埋土がSX102に似ることより古墳時代後期以降とする。

### SX102〔第294図、図版80〕

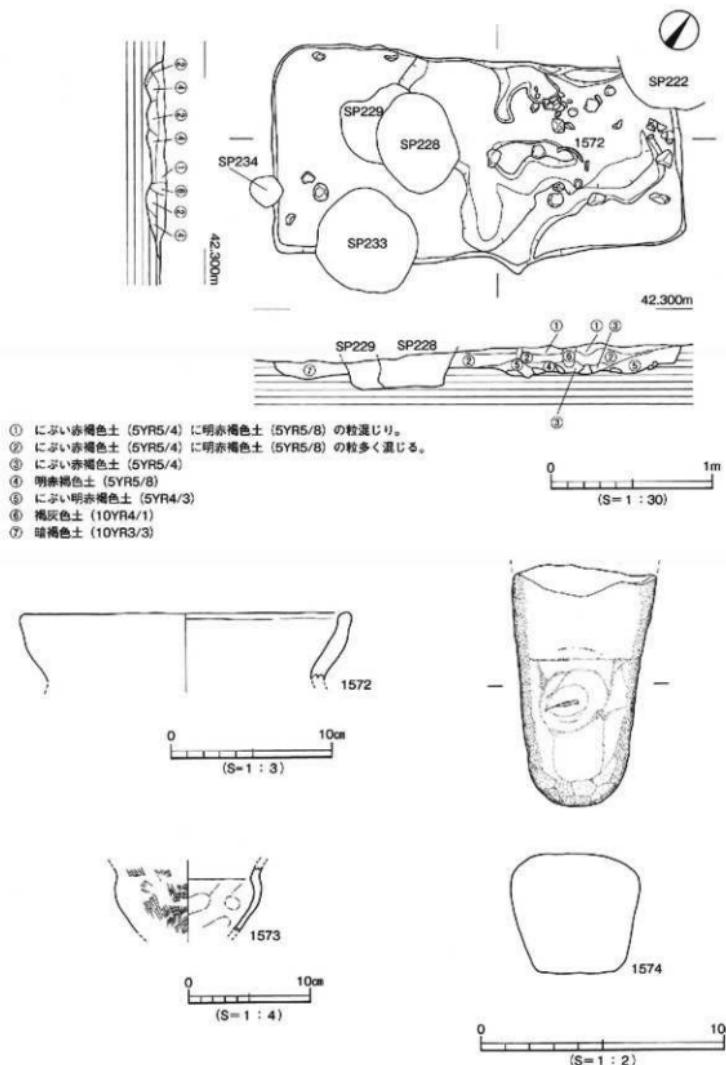
SX102はI区のG8区に位置し、SK102に切られる。平面形態は不整形である。規模は3.23×2.06m、深さ19cmを測る。断面形態はレンズ状である。埋土は黒褐色土（10Y R3/1）で1～2mmの石粒と砾を含む。出土遺物は須恵器、土師器、弥生土器、石器、ガラス玉、焼土がある。

出土遺物（1576～1582）1576・1577は土師器の壺形土器。1578・1579は須恵器。1578は坏蓋、1579は坏身。1580は弥生土器。1581は石錐。1582はガラス製の小玉。

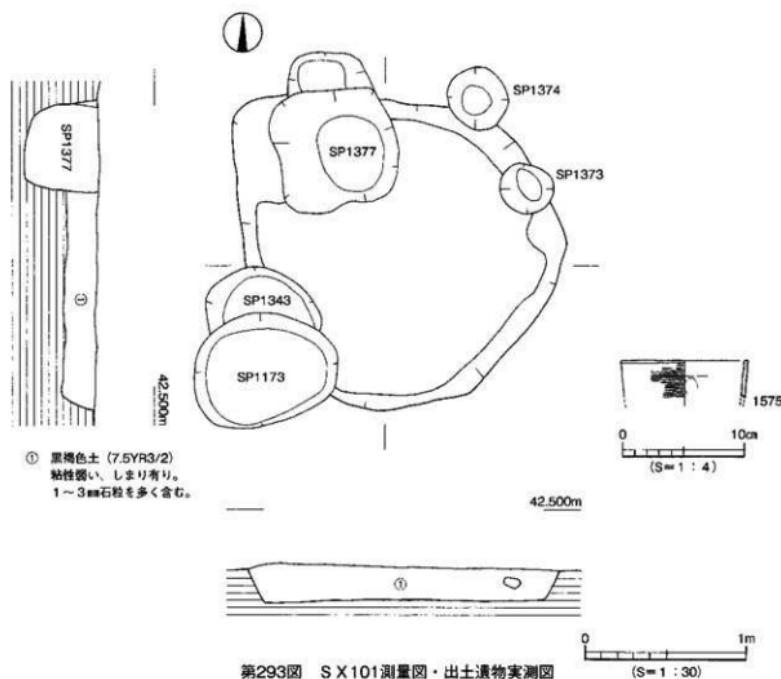
時期：出土遺物から古墳時代後期以降とする。



第291図 樹立101測量図・出土遺物実測図



第292図 SK201測量図・出土遺物実測図



## 6. 古代から中世の遺構と遺物

土坑3基を検出した。

### (1) 土坑 (SK)

#### S K101 [第295図、図版80]

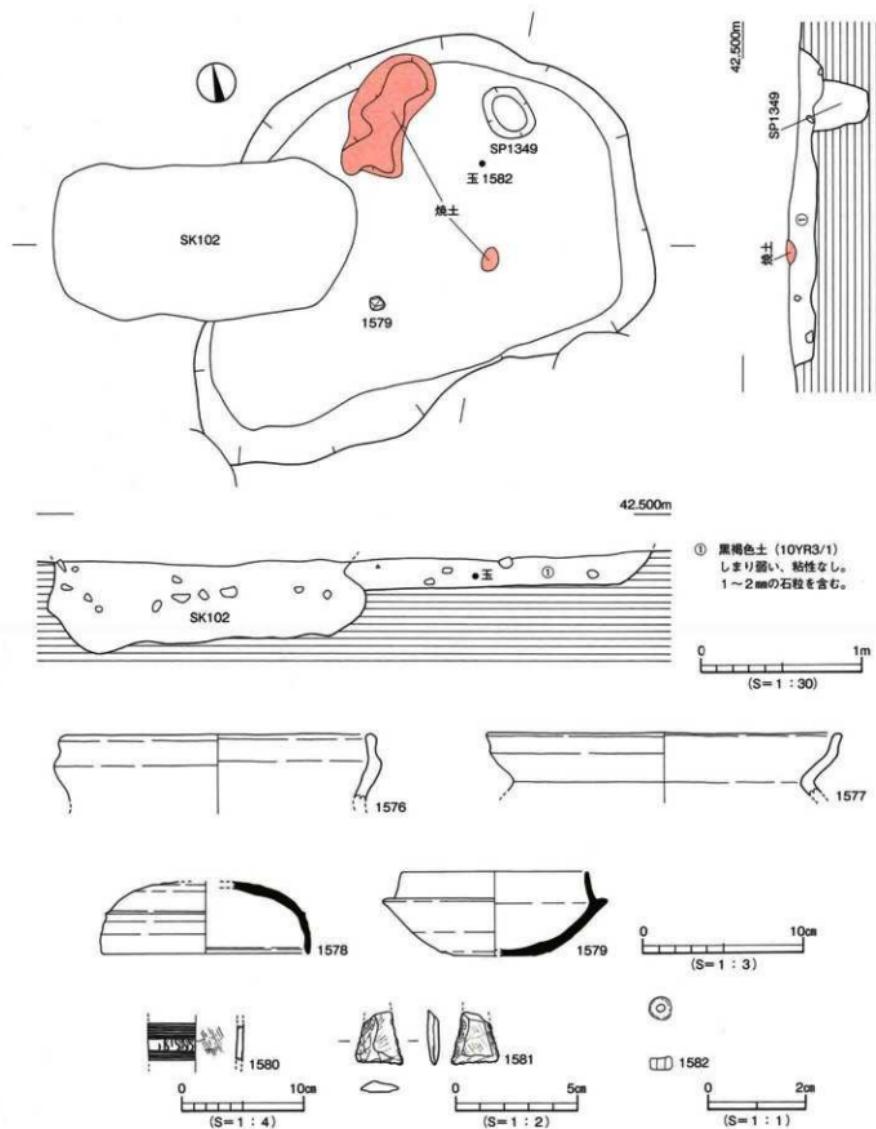
S K101は、I区のF 8区に位置しS B107・108を切る。平面形態は長方形である。規模は1.72×1.20m、深さ23cmを測る。断面形態は箱状である。埋土は褐灰色土(10Y R6/1)である。出土遺物は土師器、須恵器があるが小片のため図化出来ていない。

時期：褐灰色土の埋土より古代以降とする。

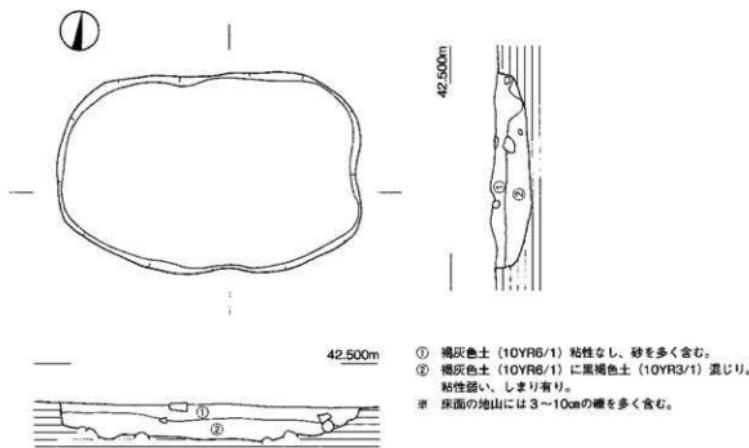
#### S K102 [第296図、図版80]

S K102は、I区のG 8区に位置しS X102を切る。平面形態は長方形である。規模は1.80×1.30m、深さ52cmを測る。断面形態はフラスコ状である。埋土は褐灰色土(10Y R4/1)で上層に礫、下層に砂を多く含む。出土遺物は土師器、須恵器があるが、小片のため図化出来ていない。

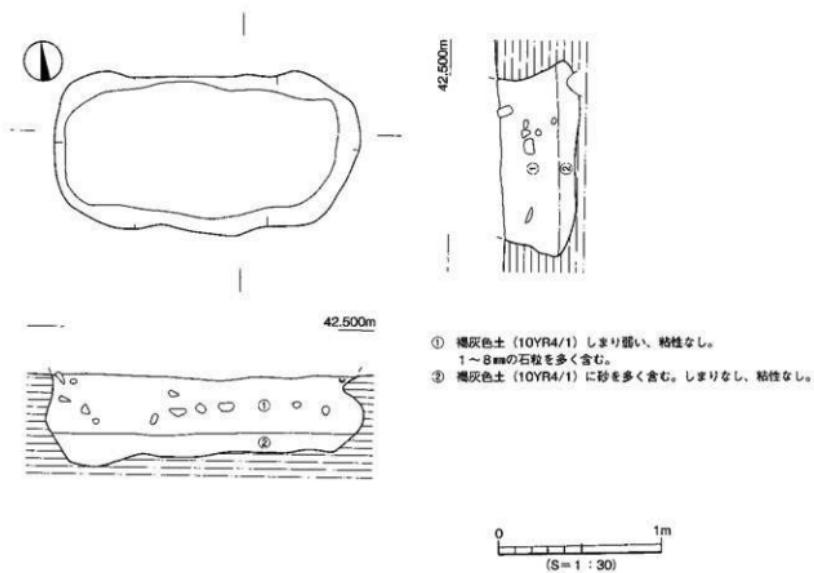
時期：褐灰色土の埋土より古代以降とする。



第294図 SX102測量図・出土遺物実測図



第295図 SK 101測量図

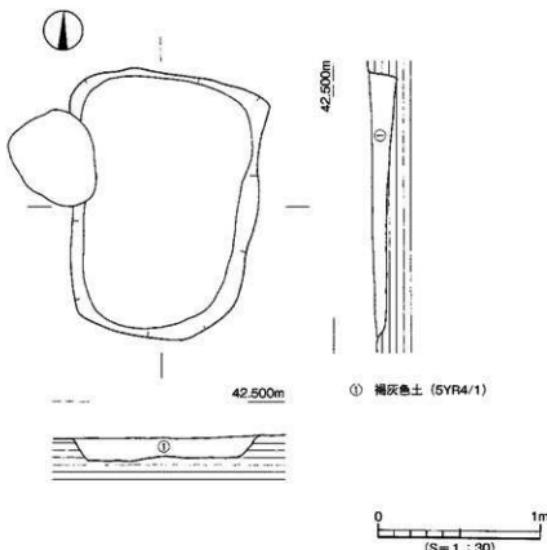


第296図 SK 102測量図

## SK103〔第297図、図版80〕

SK103はI区のF6区に位置しS Pに切られる。平面形態は長方形である。規模は2.52×1.24m、深さ9cmを測る。断面形態は箱状である。埋土は褐灰色土(5YR4/1)である。出土遺物は須恵器があるが小片のため図化出来ていない。

時期：褐灰色土の埋土より古代以降とする。



第297図 SK103測量図

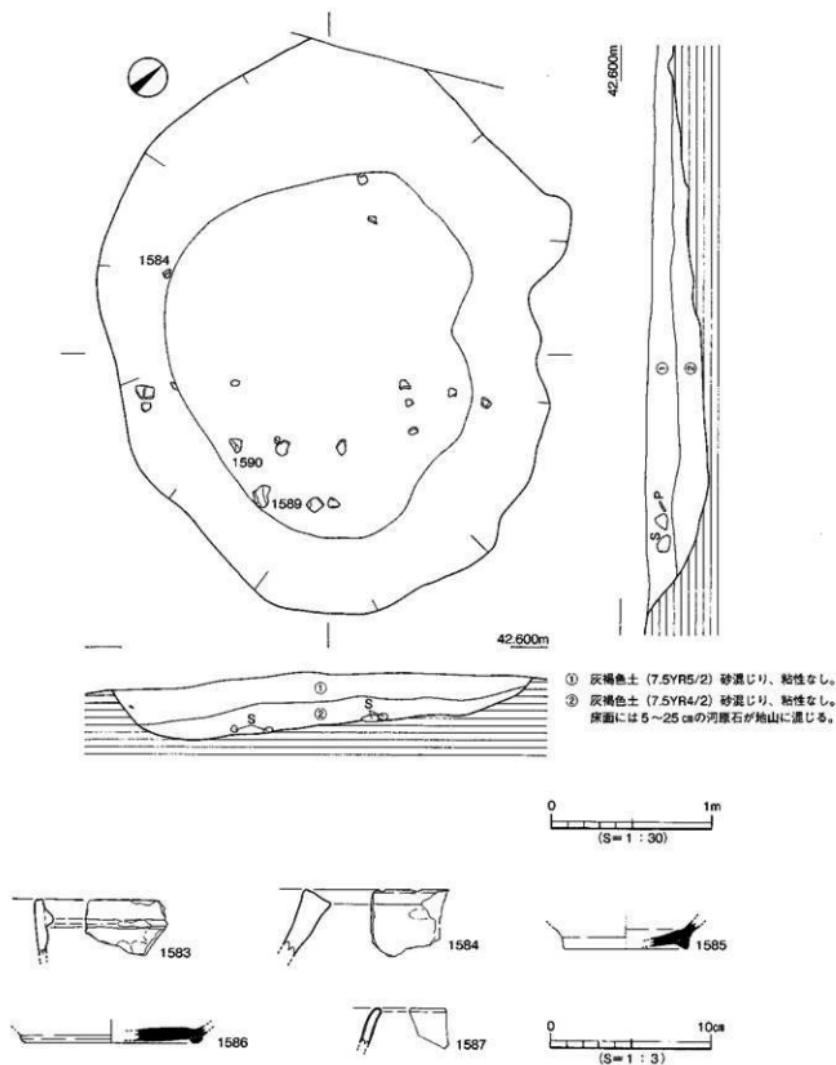
## SK105〔第298・299図、図版80〕

SK105はI区のB3区に位置し、S B105を切り北側は調査区外に続く。平面形態は不整形な楕円形状である。規模は3.5×2.63m、深さ30cmを測る。断面形態はレンズ状である。埋土は灰褐色土(7.5YR5/2)、(7.5YR4/2)である。東側床面には5~25cmの川原石が露出している。出土遺物は羽釜、捏鉢、土師器、弥生土器、石製品、鉄製品がある。

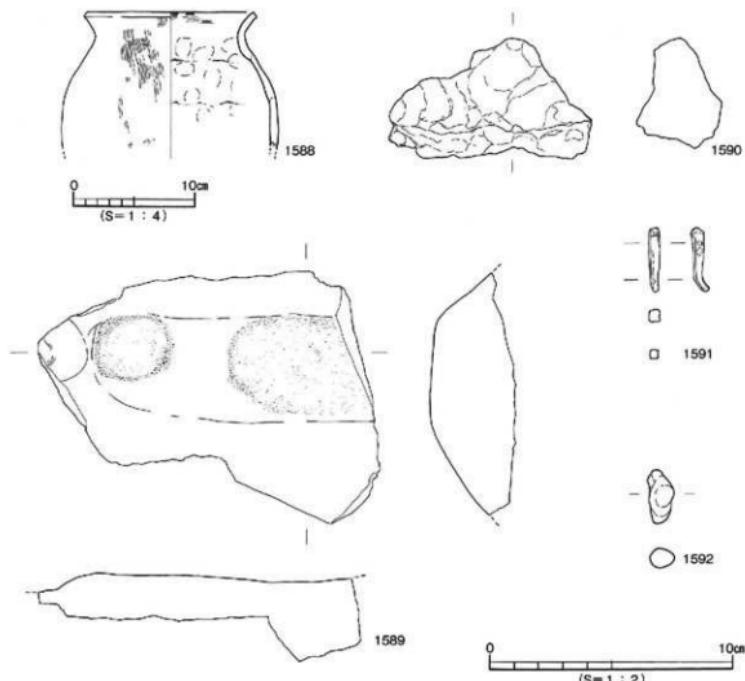
## 出土遺物(1583~1592)

1583は羽釜の口縁部。口縁直下に縫を貼り付ける。1584は捏鉢の口縁部。1585は須恵器の高台付き壺。1586は須恵器の高台付き壺。1588は弥生土器。壺形土器の口縁部から胴部、外面に縫の付着が見られる。1589は台石。使用面が顕著に残る。1590は鉄滓。長さ8.5cm、幅4.5cmを測る。1591は釘。断面正方形で先が曲がっている。1592は鎧膨れが激しく器種は不明。

時期：出土遺物より中世とする。



第298図 SK 105測量図・出土遺物実測図(1)



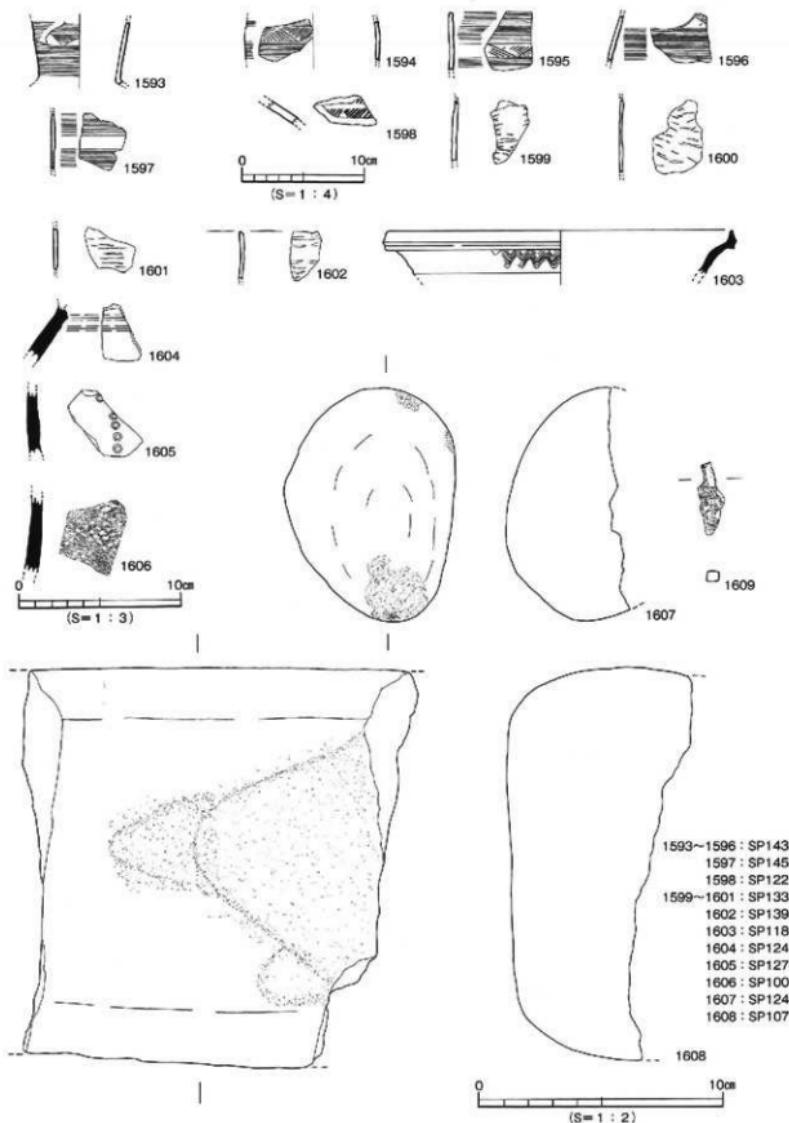
第299図 SK 105出土遺物実測図(2)

## 7. 柱穴出土遺物〔第300図、図版80・92〕

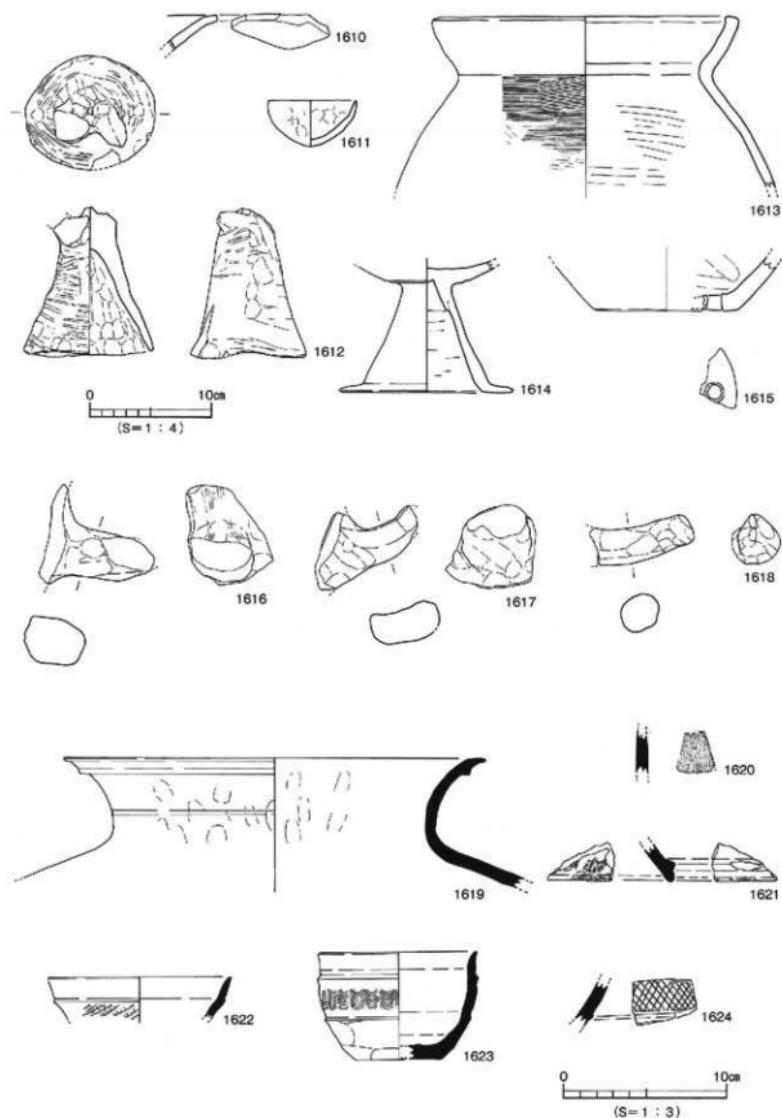
1593～1598は弥生土器の壺形土器。1593～1596はS P 1438出土、1597はS P 1458出土。長頸壺の頸部外面に櫛彫文を施す。1598はS P 1221出土。頸部下部に貝殻による施文を施す。1599～1601はS P 1335出土の製塙土器。1602はS P 1398出土の製塙土器。1603～1606は須恵器。1603はS P 1180出土の壺形土器の口縁部。口端部を上下に拡張し口縁下部外面に波状文を施す。1604はS P 1241出土。口縁端部直下外面に凸帶を施す。1605はS P 1274出土。胴部外面に竹管文を施す。1606はS P 1003出土。胴部内外面を擦り消している。1607・1608は石製品。1607はS P 1245出土の磨・敲石、全面が磨られ両端に敲き痕が見られる。1608はS P 1077出土の台石。使用痕が見られる。1609は釘。

## 8. 第Ⅲ層出土遺物〔第301・302図、図版92〕

1610～1612は弥生土器。1610は壺形土器の口縁部。1611はミニチュア土器。1612は角付きの支脚形土器。1613～1618は土師器。1613は壺形土器。1614は高壺形土器。1615～1618は瓶形土器。1615は底部、蒸気孔が1個残る。1616～1618は把手部。1619～1624は須恵器。1619は壺形土器。外反する口縁



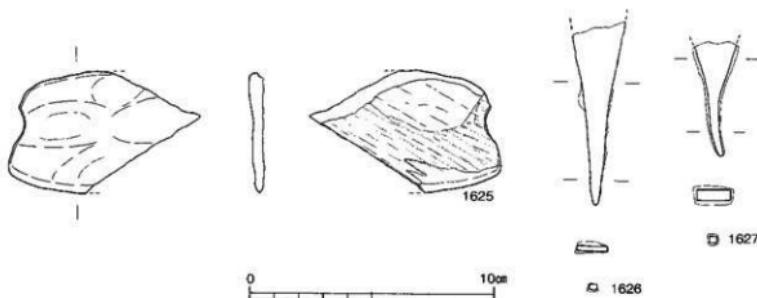
第300図 SP出土遺物実測図



第301図 第III層出土遺物実測図(1)

部の端部は尖り気味に丸く、端部下部外面に凸帯が巡り頸部にわずかに段を持つ。1620は胴部内外面を磨り消す。

1621・1622は高環形土器。1621は脚部片。脚端部手前に凸帯が巡る。外面に自然軸、内面に叢の痕跡が見られる。1623は把手付き塊。平底の底部に直立する口縁部、胴中位外面にナデによる2本の凸帯を作り出し凸帯間に波状文を施す。1624は器台形土器の坏部片。外面に先の鋭い工具で描かれた格子状の文様を施す。外面に釉がかかる。1625は石庖丁の破損品。抉りと研磨が見られる。1626・1627は鉄鏃。先端部は欠損している。



第302図 第III層出土遺物実測図(2)

## 9. 小 結

本調査では、弥生時代後期から中世の遺構と遺物を検出した。検出した遺構は、弥生時代後期の堅穴式住居址（SB102・105）と、古墳時代前半の堅穴式住居址（SB101・107）が注目される。遺物では、軟質土器、出作・市場型土器が上げられる。

**遺構：**弥生時代後期では、主柱穴間を巡る小溝と張り出し部を持つ住居、住居址内部を区切る小溝を持つ堅穴式住居址がある。

主柱間を巡る小溝SB105は、平面形態が円形で高床部を持ち主柱穴が6本ある。このような主柱穴間を巡る小溝を持つ住居は、松山平野に2遺跡3棟がある。調査区の南西に位置する椿味高木遺跡6次調査地に2棟（SB2・12）、東本遺跡6次調査地に1棟（SB101）である。椿味高木遺跡6次調査地SB2は、平面形態が5角形に近い円形で径6.6mを測る。内部施設には炉と主柱穴5本を持ち、主柱穴5本間を小溝が巡る。SB12は、床面だけの検出であるが主柱穴6本間を小溝が巡る。東本遺跡6次調査地SB101は、円形住居で径10mを測る。内部施設には、周提帶、炉を2ヶ所、周壁溝、主柱穴6本検出した。周壁溝は主柱穴6本間を巡る。

張出部を持つ住居SB102は、方形の住居址の西側に長方形形状の張出部を持つ。このような張出部を持つ住居は、調査区の南西に位置する桑原高井遺跡1次調査地に1棟（SB01）がある。SB01は、隅丸方形住居址の南部と北東部に張り出し部を持つ。

住居址内部を区切る小溝を持つ堅穴式住居址SB107は、平面形態が長方形で、内部施設に主柱穴2基、炉、小溝を持つ。小溝は主柱穴2本の外側に住居を短軸方向に平行に区切るように2本検出し

た。住居を区切る小溝は、東本遺跡4次調査地に1棟（SB203）がある。SB203は、弥生時代後期末の住居址である。平面形態が凹形で周囲堤、炉、内外2重に巡る主柱穴を持ち、外側の主柱穴10本の内8本から周壁に向かって小溝がある。

検出された竪穴式住居址の主柱穴間を巡る小溝と竪穴式住居址内を仕切る小溝の検出は、調査地が位置する桑原地区からの検出事例が多く報告されている。これは弥生時代後期の桑原地区における竪穴式住居址の形態を考える上で良好な資料となるものである。

**遺物：**出土遺物には、土師器、須恵器、軟質土器、石製品がある。その中で、SB101からは軟質土器の長頸壺、土師器の瓶形土器、高杯形土器の完形品が出土し、SB109からは土師器の高杯形土器、製塙土器、軟質土器の把手付鍋、須恵器の出作・市場型土器の壺形土器が出土した。出土した軟質土器と出作・市場型土器は、松山平野でも出土例の少ない貴重なものである。

これら、検出した遺構と出土遺物からは、調査地周辺が弥生時代後期から古墳時代前半にかけて松山平野の主要な遺跡の一つと考えられる。特に、古墳時代前半には出土遺物と竪穴式住居址の形態から、渡来人とのかかわりが強い集落と考えられ、今後の調査と整理によって桑原地区における渡来人の生活が明らかになるとと思われる。

## 【参考文献】

- 梅木謙一編 2000年 『弥生土器の様式と編年－四国編－』 木耳社
- 高尾和長編 2002年 『船ヶ谷遺跡4次調査』 松山市文化財調査報告書第88集 松山市教育委員会・財松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 高尾和長 2002年 『椿木四反地遺跡5次調査』 松山市文化財調査報告書第87集 松山市教育委員会・財松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 高尾和長 1996年 『東本遺跡4次調査・枝松遺跡4次調査』 松山市文化財調査報告書第54集 松山市教育委員会・財松山市生涯学習振興財团埋蔵文化財センター
- 柏原浩二編 2005年 『東本遺跡6次調査地・桑原遺跡2次調査地・桑原遺跡1次調査地』 松山市文化財調査報告書第105集 松山市教育委員会・財松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 田崎博之 1993年 『樟味遺跡II』 『樟味遺跡2次調査報告』 受援人:大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ 愛媛大学埋蔵文化財調査室
- 吉岡和哉 2004年 『桑原遺跡5次調査地』 松山市文化財調査報告書第99集 松山市教育委員会・財松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 河野史知ほか 1997年 『桑原地区的遺跡III』 松山市文化財調査報告書第58集 松山市教育委員会・財松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 高尾和長ほか 1997年 『兼ノ口遺跡II』 『～6・7・8次調査～』 松山市文化財調査報告書第60集 松山市教育委員会・財松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 梅木謙一ほか 2002年 『桑原地区的遺跡IV』 松山市文化財調査報告書第86集 松山市教育委員会・財松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 高尾和長 1999年 『船ヶ谷遺跡-2次調査-』 松山市文化財調査報告書第70集 松山市教育委員会・財松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

第13章

たる　み　し　たん　じ  
樽　味　四　反　地　遺　跡

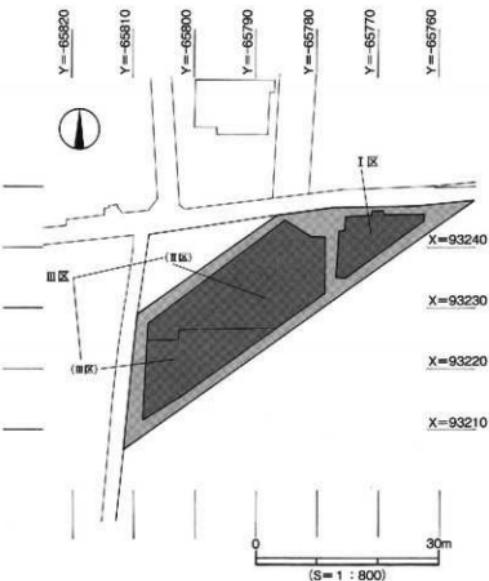
7 次 調 査 地



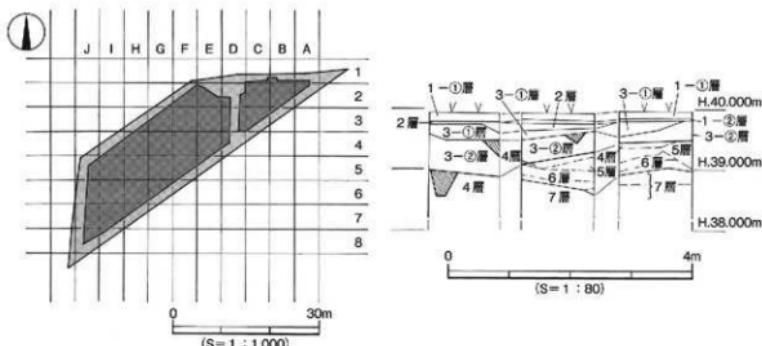
## 第13章 樽味四反地遺跡 7次調査地

### 1. 野外調査の経過と方法

対象地の安全対策と調査区の設定を行った後、2003（平成15）年1月14日から重機等を用いて表土除去に着手する。試掘調査のデータを鑑み、まず地表下0.3mまで掘削する。調査当初は掘削した順に、東からⅠ区・Ⅱ区・Ⅲ区と呼称していたが、Ⅱ区とⅢ区にまたがって多くの遺構が確認されるに至り、煩雑さを解消するために、Ⅱ区とⅢ区とを合併させて、「Ⅲ区」とした。したがって、調査区はⅠ区とⅢ区の2地区から構成されることになる（第303図）。対象地の西半部には黒色系の遺物包含層が遺存していたことから、人力にて遺物包含層の精査を試み、遺構の輪郭を確定させる過程で遺物を確認した。遺構面を確認し、竪穴式住居址、溝、土坑、性格不明遺構、柱穴などの生活関連遺構を多数検出した。平板測量にて遺構配置図を作成し、遺構埋土を確認した後に遺構精査に着手。一括性の高い遺物が確認された遺構に対しては、縮尺1/10の遺物出土状況平面測量図と遺構断面土層図を作成する。なお、Ⅲ区の掘削は北部と南部に分けて行い、先に北部から実施し、南部については2月3日から着手した。これは、Ⅲ区南部の登記移転に伴う書類手続き上のためである。7日には遺構検出を行う。19日には古墳時代の竪穴式住居址S B301の抜き取られた主柱穴を確認する。21日、古墳時代の竪穴式住居址S B304と性格不明遺構S X301～303の精査着手。3月上旬、S B304の床面近くにて外面に格子叩きのある把手付き鍋が在地土器と共に伴することを確認したことから、調査検討会を実施し、調査方法と記録化（測量図と写真）についての意見交換を行う。限られた調査期間内に、調査精度維持の徹底と、遺物出土状況の詳細な記録作成を最優先に行うことを確認した。13日にはS B304とS X301～303の遺物出土状況及び他の遺構の完掘状況の記録写真を高所作業車から撮影する。14日、S B304南壁沿いのS K317の埋土から土製算盤玉形紡錘車が出土する。出土遺物と遺構埋土との関係を現地にて最終確認した上で、測量図に所見を記録し、遺物の取り上げを実施する。24日にはS B304と



第303図 調査地測量図



第304図 区割図及び土層柱状模式図

S X301～303の完掘状況を撮影し、25日からは調査区の埋め戻しに着手し、31日には野外調査にかかる全ての作業を完了した。

測量に際しては、国土座標第IV座標系基準点から調査地内に座標点を移動し、これを基準とした5m方眼のグリッド割りを設定した。グリッドはX = 93250、Y = -65760を起点として東から西へA・B・C…J、北から南へ1・2・3…8とし、A 1～J 8区といった呼称名を付した〔第304図〕。

堅穴住居址・溝・土坑等の主な生活関連遺構の精査に際しては、セクションベルトを意図的に設定し、セクションベルトの断面とセクションベルト沿いのトレンチ床面とを照合して、土層の対応関係を絶えず確認・検討しながら調査を進めている。

## 2. 基本層位

調査対象地の長さはおよそ48m分で、調査以前は水田であった。現況ではほぼ平坦で、標高40mを測る。基本層位は、1～6層を検出した〔第307図、図版93-3〕。

1層－現代の水田や畑に関わる土層で、耕作土部分に相当する1-①層と、床土部分の1-②層に細分可能である。



第305図 古墳時代中期前葉の堅穴式住居址 (S B 304)



第306図 測量風景

1-①層：灰色土（N5/0）で層厚15cmを測り、調査区全域で検出した。

1-②層：明赤褐色土（2.5Y R5/6）で層厚5cmを測り、鉄分とマンガンの沈着が認められる。

調査区北西隅（J 5区）を除き全域に分布する。市道櫛味溝辺線関連調査の統一基本土層では、1-①は第I①層、1-②は第I②層に相当する。

2層-褐色土（7.5Y R5/1）で調査区西部に分布する。層厚4~18cmを測り、弥生土器片、古墳時代～中世の土師器や須恵器の小片などの遺物をわずかに含む遺物包含層で、統一基本土層の第II層に相当する。

3層-黒色土（2.5Y2/1）と、褐色土（7.5Y2/1）とがある。調査区全域に分布し、北東部に薄く、南西部には厚く堆積する。

3-①層：黒色土（2.5Y2/1）で、層厚14~34cmを測り、粘性の強い土である。弥生時代中期～後期の土器、古墳時代の土師器と須恵器、古代～中世の土師器と須恵器を含む遺物包含層であるが、遺物の包含量は少ない。本層上面は遺構面（調査で確認された遺構構築面）となり、調査区北壁断面において埋土が灰色土の柱穴を数基確認している。統一基本土層では、第IV層に相当する。

3-②層：褐色土（7.5Y2/1）は3-①層で、層厚4~60cmを測り、10mm大の小礫を含む。調査区全域に分布し、北東部に薄く、南西部には厚く堆積する。弥生時代中期～後期の土器、古墳時代の土師器を主体とする遺物包含層で、遺物の包含量が多い。遺物の集中する地点がいくつもあり、このなかには本層を切り込んで構築された遺構、すなわち竪穴式住居に伴うものを含んでいると考えられる。本層上面は遺構面（遺構構築面）となり、主要遺構にはS B302がある。統一基本土層では、第IV層に相当する。

4層-粘性の強い暗褐色土（7.5Y R3/4）と、極暗褐色土（7.5Y R2/3）とがある。暗褐色土は2~3mm大の礫粒を多量に含み、ガチガチした質感がある。調査区全域に分布し、層厚10~40cmを測る。調査区北壁における本層上面は、東端で標高39.5m、西端で標高39.0mを測る。本層上面が遺構面（遺構構築面）となり、主要な遺構にはS D301がある。統一基本土層では、第V層に相当し、人工遺物は不含しない。極暗褐色土（7.5Y R2/3）は5mm大の礫粒をわずかに含み、局部的に堆積がみられる。統一基本土層の第V層に該当する。

5層-にぶい黄褐色土（10Y R5/4）で、調査区の北西部に分布する。層厚8~30cmを測り、地形的に低い箇所に堆積し、人工遺物は不含しない。統一基本土層の第V層に相当する。

6層-黄褐色砂質土（2.5Y5/4）で、10~40mm大の礫を多く含む。調査区の北半部に分布が限られ、局部的に土地が下がった窪地に堆積し、層厚10~50cm以上を測る。人工遺物は不含しない。統一基本土層の第V層に相当する。

7層-にぶい黄褐色砂礫（10Y R4/3）で、100mm大の円礫が密集し、層厚16~60cm以上を測る。調査区のはば全域に分布するが、局部的に黄褐色砂質土（2.5Y5/3）がブロックでみられる。北壁における本層上面はI 4区で標高38.68m、G 3区で38.2m、F 2区で39.0mを測り、ちょうどG 3区付近が谷状に落ち込み地形を呈している。人工遺物は不含しない。黄褐色砂礫と黄褐色砂質土は統一基本土層の第V層に該当する。

4層以下は人工遺物を包含しないため、堆積時期は定かではない。ただし、4層上面からは弥生時

代前期後半に比定できる溝が構築されていたことから、4層の堆積時期の下限を弥生時代前期後半以前と考えることができよう。

### 3. 調査概要

検出した遺構は竪穴式住居址4棟、溝1条、土坑18基、性格不明遺構3基、柱穴114基である。これらの確認面（構築面）は、3-①層上面、3-②層上面、4層上面のいずれかである。ただし、野外調査の過程において遺構埋土と3層との識別が困難であったことから、4層上面まで掘り下げた上で再度遺構の検出を行い、遺構の輪郭を確定させている。以下では、遺構構築面は3-①層上面を第一遺構面、3-②層上面を第二遺構面、4層上面を第三遺構面と呼称して報告することとする。

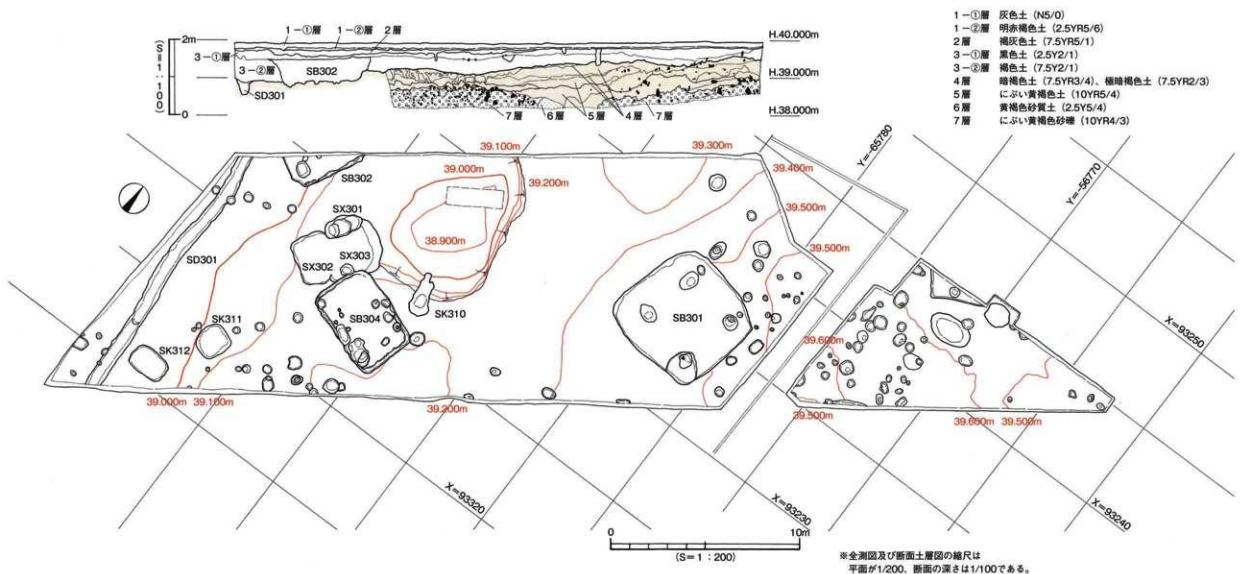
遺構の帰属時期については、出土遺物と埋土、さらに遺構検出面を総合して判断した。したがって、出土遺物が伴わない遺構と、伴っていても小破片のため時期を特定することが困難な遺構については、帰属時期を特定することは差し控えている。

さて、遺構には弥生時代前期後半・中期後葉～後期前葉、古墳時代中期前葉・中期末葉～後期前葉に時期比定され、二時代4時期に区分可能である。主要な検出遺構は種類別に表7にまとめた。

以下では、時期別に抽出して調査所見を詳述する。なお、一部の遺構については埋没要因についても言及している。これは、遺構に伴うと判断される遺物の出土状況を現地で確認・検討した上で、測量図の作成や記録写真の撮影を行い、さらに取り上げ後の遺物に対して室内調査で接合関係を試み、また記録写真による検証を重ねた結果、遺構埋没要因に対して非常に興味深い見通しが得られたからである。本報告では積極的に言及し、集落遺跡及び竪穴式住居址の精査における新たな調査視点を提示する。

表7 検出主要遺構一覧

遺構名称	位置	平面形態	規模 長さ×幅×深さ (m)	主な出土遺物
S B301	D 3・E 3ほか	隅丸方形状	5.92×5.84×0.18～0.80	古墳後期土師器・須恵器
S B302	I 4・I 5	方形か長方形	(0.8+)×(0.7+)×0.16	古墳後期土師器
S B304	G 5・H 5ほか	隅丸長方形状	5.0×3.4×0.20～0.60	古墳中期土師器・紡錘車
S D301	J 5・G 6ほか	-	14.5×0.66～0.88×0.25～0.45	弥生前期土器
S K311	I 7	不整隅丸方形	1.73×1.6×0.22	弥生中期土器
S K312	I 7	隅丸長方形	2.03×1.4×0.22	弥生中期土器
S K310	G 5	不整長梢円形	2.25×1.15×0.29	古墳後期須恵器（埋納）
S X301	H 5・I 5	長梢円形	2.3×1.1×0.42	古墳中期土師器
S X302	H 5・H 6ほか	隅丸長方形状	2.7×2.2×0.09～0.18	古墳中期土師器
S X303	H 5・I 5	隅丸方形状	3.4×2.8×0.16	古墳中期土師器



第307図 遺構全測図及び北壁断面土層図

## 4. 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は溝1条（S D301）と土坑2基（S K311・S K312）である。これらの遺構は、調査地西端部の地形的に緩傾斜してやや土地が下がって平坦化したところに分布する。

### （1）溝（S D）

#### S D301 [第308図、図版94-2]

調査地の西端部、J 5～8区に位置し、第三遺構面にて検出した。調査区北壁の観察により、造物包含層の③～②層が溝を覆っていることを確認している。溝はわずかに東西に蛇行するものの、ほぼ真北方向を指向し、北と南は調査区外へ続く。溝の規模は、検出長14.5m、幅66～88cm、検出面からの深さ25～45cmを測る。溝の横断面形態はU字形を呈し、底は南から北へわずかに下がっており、比高差は23cmを測る。J 7区では溝の底に30cm余りの段が形成されている。検出時は埋土が黒色土（N 15.0/0）で硬く締まっており、わずかに弥生土器の細片が認められた。埋土は三層に分層可能で、上から①層黒色土（N 15.0/0）、②層黒褐色土（10Y R2/2）、③層黒色土（7.5Y R1.7/1）となり、③層は2mm大の碎礫粒をわずかに含む硬く締りのある土である。以上の調査所見より本遺構は人為的に構築され、区画を意図した溝の可能性が高いものと考えられる。なお、溝は機能停止後、北東側から流入した③～②層により埋没が始まったことが断面観察から理解できる。

調査は2箇所に東西方向のセクションベルトを設定し、調査区北壁と2本のセクションベルト沿いに土層観察用のトレチを設定し、絶えず土の対応関係に留意しつつ精査を行った。遺物は溝検出時、①層・③層から弥生土器の破片数点が散在して出土し、量はきわめて少ない。なお、②層からは遺物の出土はみられない。

**出土遺物（1628～1632）** 1628と1631は③層出土、他は①層からの出土である。1628～1630は壺、1631と1632は壺である。1628と1629は折り曲げ口縁のもので、口縁部が如意形を呈し、1628は口端の下端に刻み目を施す。1629は口縁下にヘラ描沈線文を2条施す。1630は貼付口縁のもので、口縁からわずかに下がった位置に粘土紐を貼り付け、断面は扁平な三角形を呈し、刻み目を施す。1631は胴上半部にヘラ描きによる弧文を施す。

**時期**：遺構構築面と出土遺物から、S D301は弥生時代前期後半（梅木編年の伊予中部I-3様式）に機能を停止したと考える。なお、弥生時代前期後半を下限とすることが妥当であるが、遺物量がわずかで、小片数点に限られることから、上限を特定することは差し控えておく。

### （2）土坑（S K）

#### S K311 [第309図上、図版94-3]

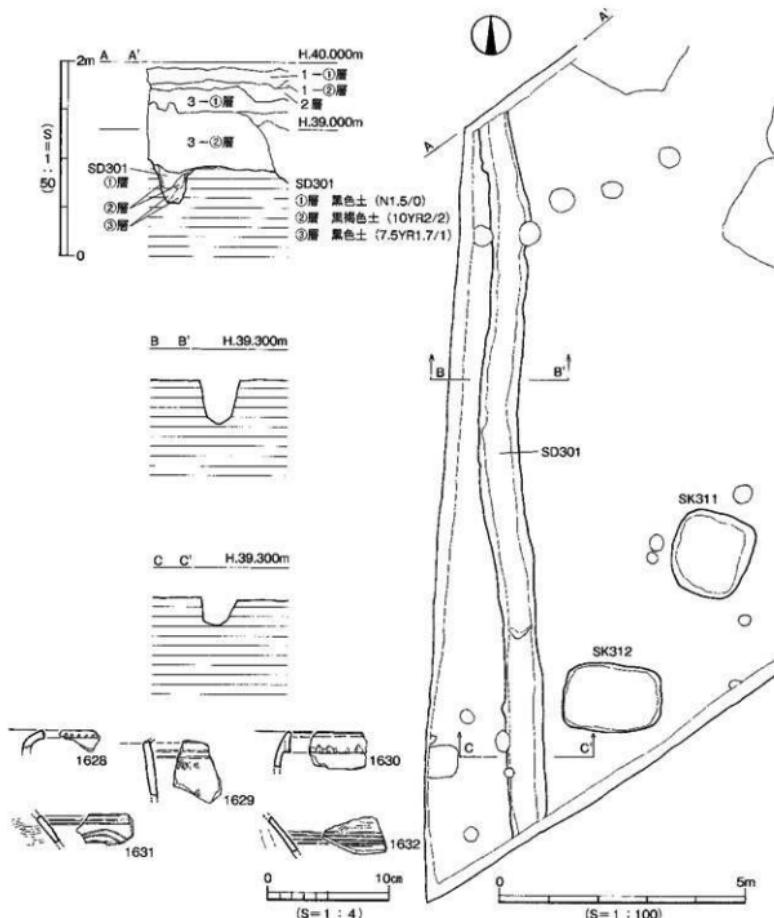
I区南西部のJ 7区に位置し、S D301の東3.2mの地点にある。第三遺構面にて検出した。平面形態は不整隅丸方形を呈し、長軸は真北方向を指向し、N-17°-Eである。横断面形態は逆台形状を呈し、規模は長軸1.73m、短軸1.6m、検出面からの深さ22cmを測る。埋土は黒色土（N 15.0/0）の單一層で、炭化物の粒が多く認められた。調査は四分法で行い、絶えずベルト断面で土層の変化に留意しつつ精査を進めた。遺物は弥生土器片がわずかに散在して出土したもの、図化可能な遺物はベルト除去時に出土した1点に限られる。

**出土遺物（1633）**「く」の字状口縁で肩部の張りが弱い壺である。

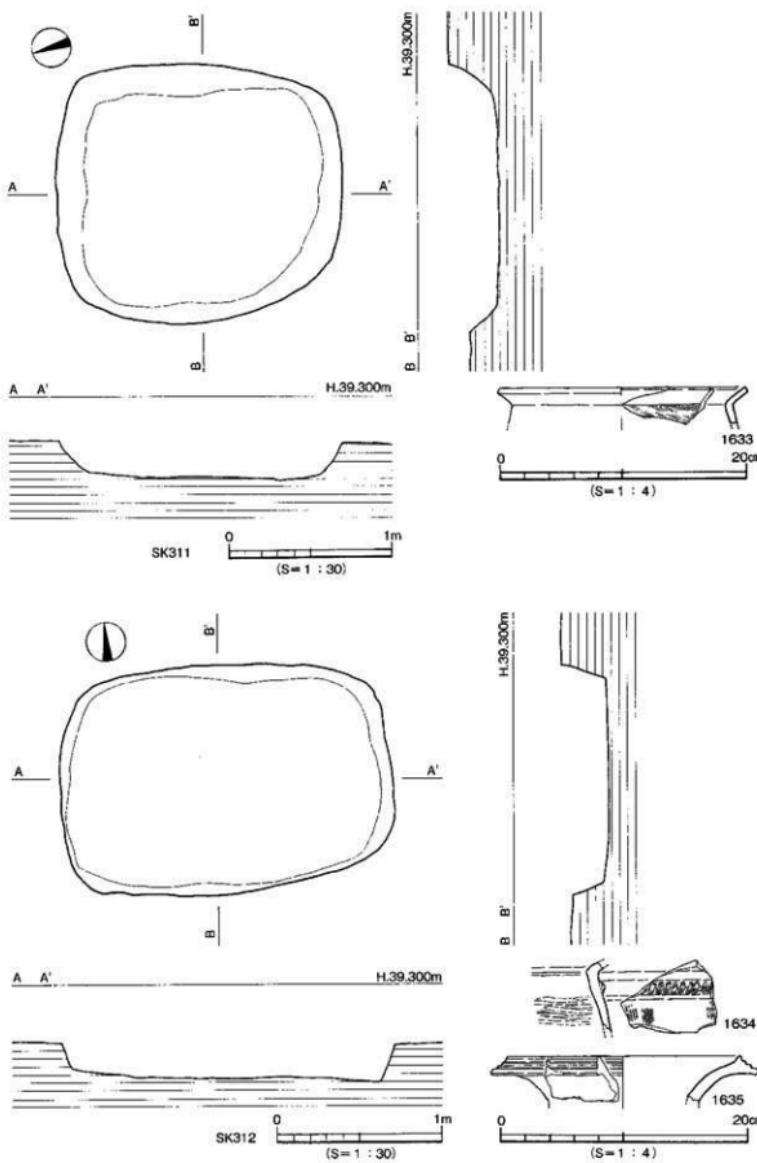
時期：遺構構築面と遺物とから、SK311は弥生時代後期前葉（梅木編年）の伊予中部V-1様式に機能が停止したと考える。

## SK312〔第309図下、図版94-3〕

I区南西部のI7区に位置し、SK311の南西1.8m地点にある。第三遺構面にて検出した。平面形態は隅丸長方形を呈し、長軸は東西方向を指向する。埋土は粘性の強い暗褐色土（7.5Y R3/4）と、



第308図 SD301測量図及び出土遺物実測図



第309図 SK 311・312測量図及び出土遺物実測図

極暗褐色土（7.5Y R2/3）とがある。横断面形態は逆台形状を呈し、規模は長軸2.03m、短軸1.4m、検出面からの深さ22cmを測る。埋土は黒色土（N1.5/0）の單一層で、炭化物の粒が多く認められた。

調査は四分法で行い、絶えずベルト断面で土層の変化に留意しつつ精査を進めた。遺物は弥生土器片がわずかに散在して出土した。

**出土遺物（1634・1635）** 1634は折り曲げ口縁で、口縁からわざかに下がった位置に、断面三角形の突帯を貼り付け、刻みを施す。1635は口端が上下に拡張され凹線文を施した壺である。

**時期**：遺構構築面と遺物より、S K312は弥生時代中期後葉（梅木編年の伊予中部IV様式）に機能を停止したと考える。

## 5. 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は竪穴式住居址3棟（S B301・302・304）、土坑1基（S K310）、性格不明遺構3基（S X301～303）である。遺構の多くは、地形的に一段やや高い地点に分布する傾向があり、主には調査地西半部に位置する。遺構は全てが同一の時期に構築されたものではなく時期差があるため、時間軸に沿って報告することとする。

### （1）性格不明遺構（S X）

S X301【第310～313図、図版96-1】

調査地の西部、H 5・I 5区に位置し、近接するS X302に切られ、S X303を切る。構築面は第二遺構面と判断される。平面形態は長楕円形状を呈し、規模は長軸2.3m、短軸1.1mを測る。縦断面形態は階段状を呈し、検出面からの深さは最深で42cmを測る。検出時の埋土は黒色土（N2/0）で、炭化物片が多く認められた。埋土はこの黒色土（N2/0）の單一層に限られ、床面までの精査過程で埋土を分層するには至らなかった。

埋土を精査する過程においては土師器片が数点出土した。P 1で取り上げた遺物は土師器瓶の口縁部から胴部にかけての破片で、遺構のほぼ中央、床面から20cm離れた地点で出土したものであるが、室内調査の過程で3-②層から出土した破片と接合できることが判明した。これは、本遺構が3層堆積後に構築されたことを示唆するものであり、興味深い知見のひとつである。

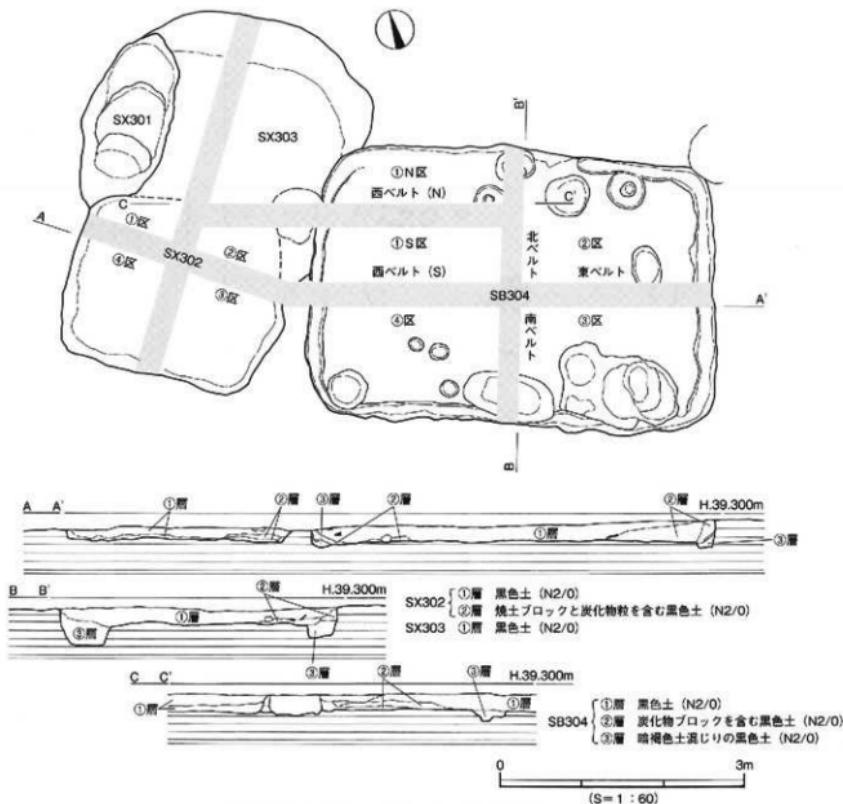
**出土遺物（1636～1639）** 1636～1638は埋土上位、1639は埋土中位と遺物包含層から出土したものである。1636は中型壺の口縁から胴部上半にかけての小片である。接合することはできないが、胎土と色調、さらに器壁の厚さを検討し、同一個体の可能性が高いものと判断した。球形の胴部に「く」字形に屈曲する口縁部がつき、口縁部の外外面には横ナデによる弱い稜線がみられ、口端は内面にわざかに肥厚する。1637と1638は壺の頸から胴部上半にかけての小片である。1637の胎土は精良で、0.2mm以下の非常に粒の小さい混和剤を選択して採用している。1638は1.2～1.5cmの粘土縫の積み上げがみられ、粘土縫の接合部は指ナデされる。1639（P 1）は瓶で、2つの大きな破片が接合できたものである。復元口径は21.2cmを測り、口縁部がわざかに外反し、口端は面取りされる。調整は、外側が粗い縦～斜め方向のハケで、内面が下から上へのケズリである。なお、口端から11.5cm下の外側には把手の剥落した粘土痕が確認できることから、本来、把手を取り付いていたものと考えられる。胎土には1～5mmの石英、1～3mmの長石、2～3mmのクサリ礫が多くみられる。

時期：遺構構築面と遺物とから、S X301は古墳時代中期前葉に機能を停止したと考える。

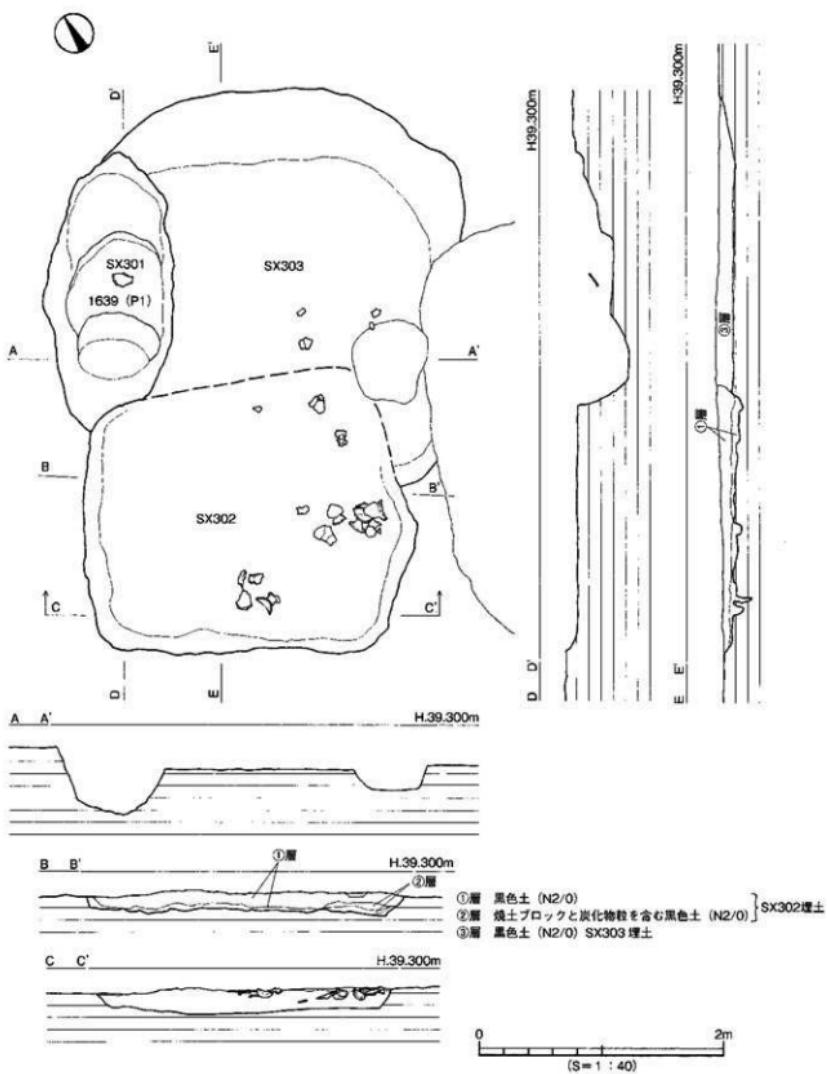
**S X302〔第312・314図、図版96-1・98〕**

調査地の西部、H 5・H 6・I 5・I 6区に位置し、先述したS X301とS X303を切る。構築面は第二遺構面と判断される。平面形態は隅丸長方形状を呈し、規模は長軸2.7m、短軸2.2m、検出面からの深さ9~18cmを測る。検出時の埋土は黒色土（N2/0）で、炭化物片や焼土粒が多く認められ、土器器の細片が認められた。埋土は二層に分けられ、①層は黒色土（N2/0）、②層は焼土ブロックと炭化物粒を多量に含む黒色土（N2/0）である。

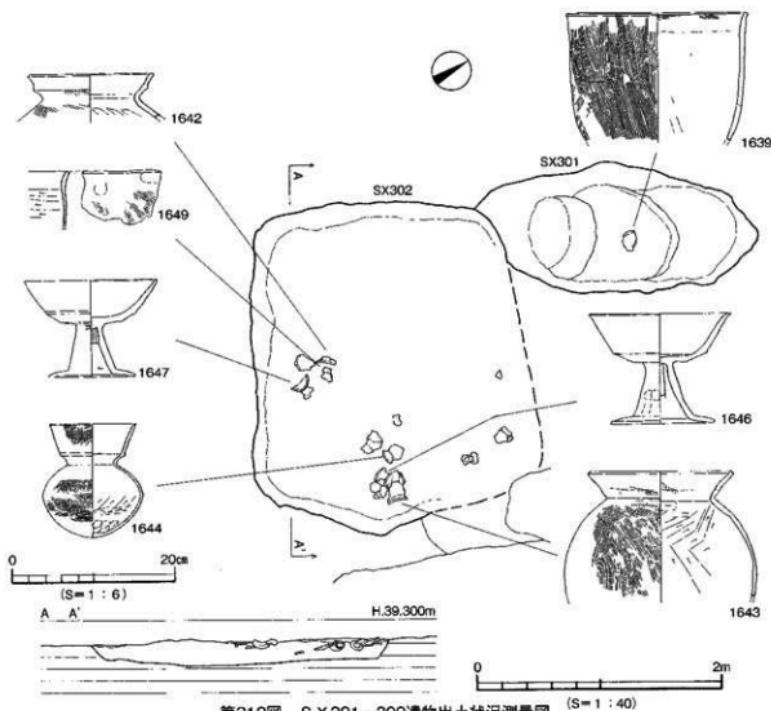
調査ではS B304やS X301・303との時間的前後関係を土層で確認するためにセクションベルトを南北方向に1本、東西方向に2本設定した〔第310図〕。セクションベルトを境界として、遺構北西部



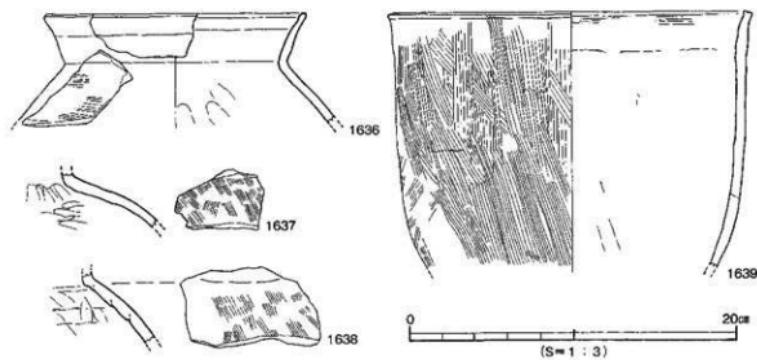
第310図 S X301~303・S B304測量図



第311図 SX301~303測量図



第312図 S X 301・302遺物出土状況測量図



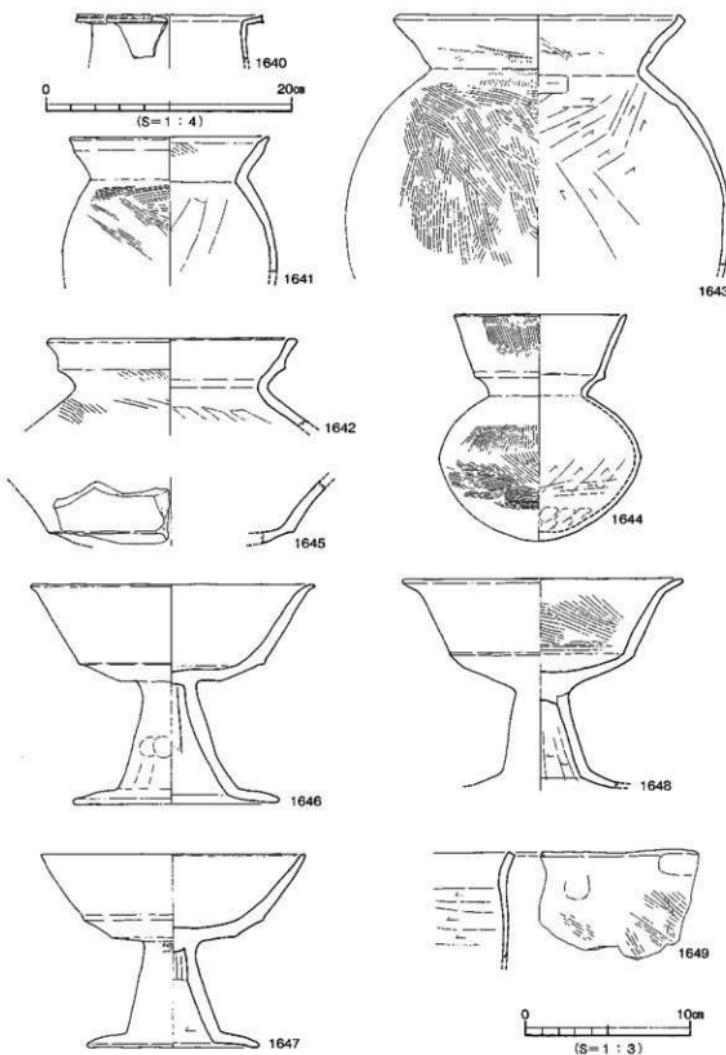
第313図 S X 301出土遺物実測図

を①区、北東部を②区、南東部を③区、南西部を④区としている。精査直後から②区と、③区の東と南から土師器の一群が確認できたことから、大きな破片は全て原位置にとどめ、埋土と遺物との関係に留意し精査を続行した。その結果、土師器は①層上部から出土したものであり、遺構の床面からは8~12cm遊離しつつも、ほぼ面をなして出土すること、床面に接して土師器を含む遺物が全くみられないことが判明した。遺構の床面は標高38.92~38.95mを測り、わずかに凹凸がみられる。

遺構内に周壁溝をはじめ、主柱穴や土坑などの付帯施設はみられない。さらに窓や炉といった火所も未検出である。したがって、本遺構が炊飯施設を伴う竪穴式住居とは性格を異にする施設の可能性が高いものと考えられる。これは、出土遺物の有無や内容からではなく、下部構造及び付帯施設の有無を根拠としている。

遺物は遺構内の東部と南部の二つのブロックに分かれて分布しており、土師器の壺・壺・二重口縁壺・高坏などがある。このうち二重口縁壺1644は完形品、高坏1646と1647は一部を欠くが大半をとめるもので、横倒しの状態で出土している。ただし高坏の壺の一部は後世の削平により破損したものと考えられることから、本来は完形品が横倒しで置かれていた可能性が高いものと推察される。壺1642は3~①層出土の破片と接合可能であり、このことは先述したS X301と同様、本遺構が3層堆積後に構築されたことを示唆する重要な知見となる。壺1643は縦半分と胴部下半を欠く資料である。出土状況から判断する限り、もともとは完形品の状態であった中型壺を、縦半分と胴部下半を打ち欠いて現況に整形した上後に、あたかも高坏1646を覆うように置かれたものと理解できる。

**出土遺物（1640~1649）** 1640~1643は壺、1644は壺、1645~1648は高坏、1649は瓶である。以下、器種毎に述べる。1640は遺構北東部②区の出土で、弥生土器の小型壺の小片である。1641~1649は土師器である。1641は遺構南西部④区の埋土①層、東ペルト埋土①層、遺物包含層からそれぞれ出土した破片が接合したものである。1642は遺構南西部④区の埋土①と3~①層（遺物包含層）から出土した破片が接合できたものである。中型壺の口縁から頸部にかけてのもので、口縁全体の3/4遺存である。復元口径14.4cmを測り、口縁はS字状を呈し、口端は丸味をもつ。1643は遺構南東部③区から出土した壺で、復元口径17cmを測る中型品の大きな破片である。球形の胴部に「く」字形に屈曲する口縁部がつき、口端の内面がわずかに突出する。調整は、体部外縁が縦~斜め方向のハケ後にナデ、内面が横~斜め上方へのケズリである。野外調査の埋土精査時に口端の一部を破損した以外は遺存が良好で、破断面は摩滅する。1644は東ペルトから出土した二重口縁壺の完形品である。出土時に口縁部や体部にヒビ割れはみられたものの、その他にヒビや破損はみられない遺存良好な資料である。底部は丸底で、胴部は扁球形を呈し、短く外反する一次口縁の上には、直線的に長く外傾する二次口縁が取り付く。法量は口径10.2cm、器高13.9cmを測る。胴部下半を中心として黒斑が認められる。1645は遺構北東部②区から出土した高坏の壺部で、5×8cm大小の小片である。胎土は精良、1646は遺構北東部②区、1643の下から出土した高坏である。壺部の1/2は後世の削平により破損しており現存しない。ただし、脚部の一部は横倒して置かれる以前に打ち欠かれた可能性がある。これは、壺部の破損部は出土時に上面であったのに対して、脚部の打ち欠かれた部分が下であったことがその根拠となる。壺部は逆台形状を呈し、口縁部は直線的で、口端がわずかに外反する。復元口径は17.2cm、器高13.5cmを測り、脚部は直線的に「ハ」字に開き、屈曲して短く内湾する裾部が取り付き、屈曲部内面には明確な稜をもつ。胎土は良好で、1~2mmの石英と長石を少量含む。1647は遺構南部③区から出土した高坏で、壺部の1/3は後世の削平により破損しており現存しない。一方脚部の1/2は横倒して置か



第314図 S X302出土遺物実測図

れる以前に打ち欠かれたと判断され、先述した1646と同様な一部破碎行為が執行されたことを示す事例となろう。坏部は逆台形状を呈するが、口縁部はやや内湾気味となる。復元口径16cm、器高11.8cmを測り、焼成は良好とはいはず、明赤褐色を呈している。1648は遺構北西部①区の破片と北東部②区の破片とが接合した高坏で、脚部の大半を意図的に打ち欠いている。なお坏部は後世の削平により3/4が破損し現存しない。坏部は逆台形状を呈し、口縁部は直立気味に立ち上がり、口端付近で鋭く屈曲する。復元口径16.8cm、残高12.9cmを測る。1649は遺構南東部③区の高坏1647近くから出土した瓶の口縁部小片である。口縁部はわずかに外反し、口端は面取りされる。調整は、外面が粗い斜め方向のハケ、内面が横方向のケズリとなり、口端付近は外反のため強い横ナデが施される。胎土には1~3mm大の石英と長石を含む。なお、焼成時の影響によるものであろうか、口縁の外面が青灰色を呈する。

**時期**：構築面と遺物とから、S X302は古墳時代中期前葉に機能を停止したと考える。重複関係からは、隣接するS X301やS X303よりも後続する。なお、埋土に弥生土器1640が含まれていたことからも本遺構の周辺には弥生時代中~後期前葉の生活関連遺構の存在する可能性が高い。報告した土師器は、その出土レベルと埋土との関係から…活性が高いものと判断できる。

#### S X303〔第311図、図版96-1〕

調査地の西部、H 5・I 5区に位置し、近接するS X301と302に切られ、構築面は第二遺構面と判断される。平面形態は隅丸長方形を呈するものと復元される。規模は長軸3.4m、短軸2.8mを測る。縦断面形態は浅い皿状を呈し、検出面からの深さは16cmを測る。検出時の埋土は黒色土（N2/0）の單一層に限られる。

埋土の精査過程において、土師器片が数点出土した。いずれも床面上での出土であるが、図化可能なものはない。遺構内に周壁溝をはじめ、主柱穴や土坑などの付帯施設はみられない点はS X302に共通している。

#### (2) 竪穴式住居址（S B）

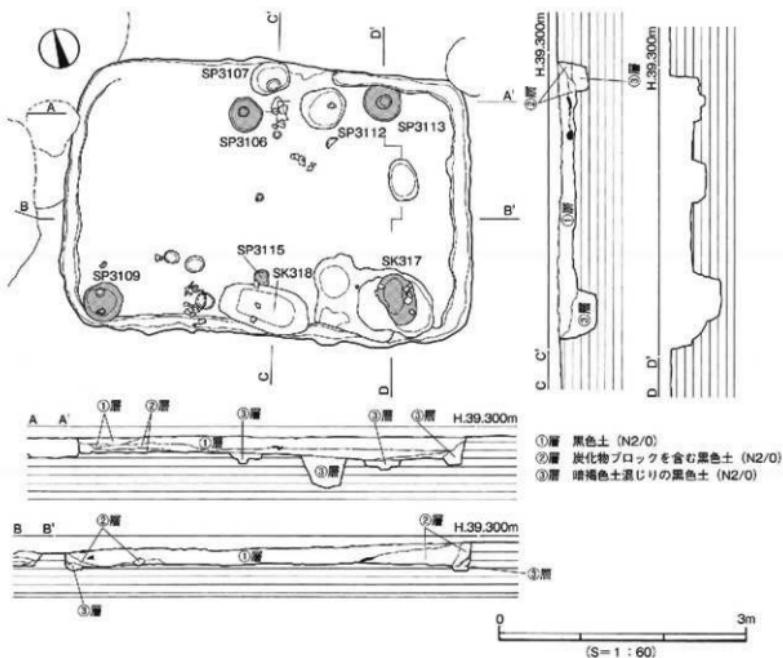
##### S B304〔第310図・第315~319図、図版96-2・97-1・99・100〕

調査地の西部、G 5・6、H 5・6区に位置し、S X303を切る。構築面は第二遺構面と判断される。平面形態は隅丸長方形を呈し、長軸方向は東西からやや北に振れており、N-75°-Wである。規模は長軸5.0m、短軸3.4m、検出面からの深さ20~60cmを測る。検出時の埋土は黒色土（N2/0）で、焼土ブロックや炭化物粒は多く認められたが、遺物は全くみられなかった。埋土は三層に大別可能で、①層は黒色土（N2/0）、②層は炭化物ブロックを多量に含む黒色土（N2/0）、③層は地山を構成する粘性の強い暗褐色土（7.5Y R 3/4）が混じる黒色土（N2/0）である。暗褐色土には2~3mm大の礫粒を多量に含み、ガチガチした質感がある。このうち、①層は本遺構の全域に分布しており、多くの遺物を含む。層厚4~22cmを測る。②層は主に遺構の北部に分布が限られる。遺構を縦断するよう設定したセクションベルトB-B'の観察では、長軸方向の両端にこの②層がみられ、西に比して東で厚く認められる。A-A'では遺構全域に分布し、堆積が水平に近いことや、この②層が床面から掘り込まれた付帯施設（周壁溝、S K317・318、S P3106・3107・3112）を覆うことが確認されている。

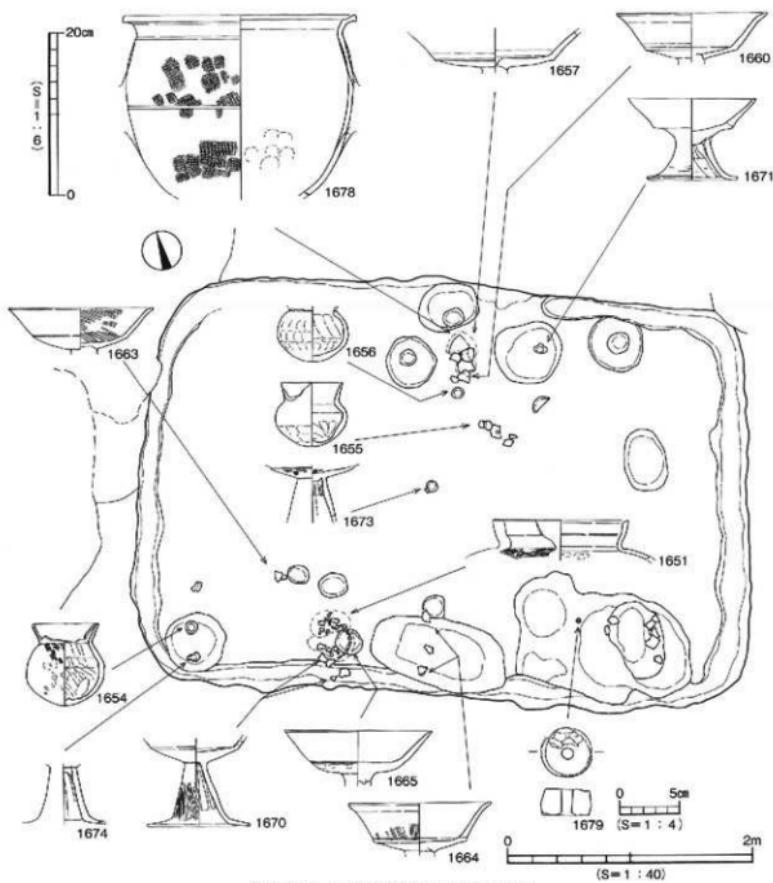
調査ではS X302や303との時間的前後関係を土層から把握する目的でセクションベルトを長軸方向に1本、東西方向に2本設定してから精査を始めた〔第310図〕。精査に際しては北西部を①N区と①

S区、北東部を②区、南東部を③区、西南部を④区に区分している。精査を進めていく過程で、①層から土師器のほかに、わずかな弥生土器小片と石器が出土した。さらに精査を続けたところ、①層下部や②層上面において土師器が次々と出土し、なかには特異な器種や出土状況を留めるものがいくつか認められた。すなわち、破碎散布され、外面に特徴的な叩きのみられる把手付鍋、口縁部を打ち欠いて据え置かれた小型丸底壺、壺部の口縁部を全て打ち欠いて据え置かれた高壺などである。

遺構内には周壁溝をはじめ、主柱穴や土坑などの付帯施設が伴う。壁際には、幅16~25cmの周壁溝がめぐる。ただし、①区北壁沿いでは明確な掘り方を確認できていないことから、本来、①区を除く②~④区に限って周壁溝が巡っていた可能性を指摘しておく。主柱穴に着目すれば、S P3106・3113、S K317の東半部、S P3115・S P3109及び①区に未検出と想定される柱穴1基を合わせた6本柱構造の堅穴式住居と考えられる。いずれの柱穴からも柱痕を確認することができず、廃絶時に全てが抜き取られた可能性は高いものと判断される。柱穴間はS P3106・3113間が1.7m、S P3113・S K317の東半部間が2.3m、S K317東半部・S P3115間が1.55m、S P3115・3109間が2mを測る。なお、北西隅に想定した未検出の主柱穴については、床面に楚板を直接据えた上で主柱を立てた可能性もあるのではないかだろうか。なお、検出面から床までの現存値が20~60cmを測ることや、竈の存在や痕跡を示唆する粘土や粘質土、さらに焼土や炭のブロックが未検出であることを積極的に評価して、



第315図 S B304測量図



第316図 S B304遺物出土状況測量図

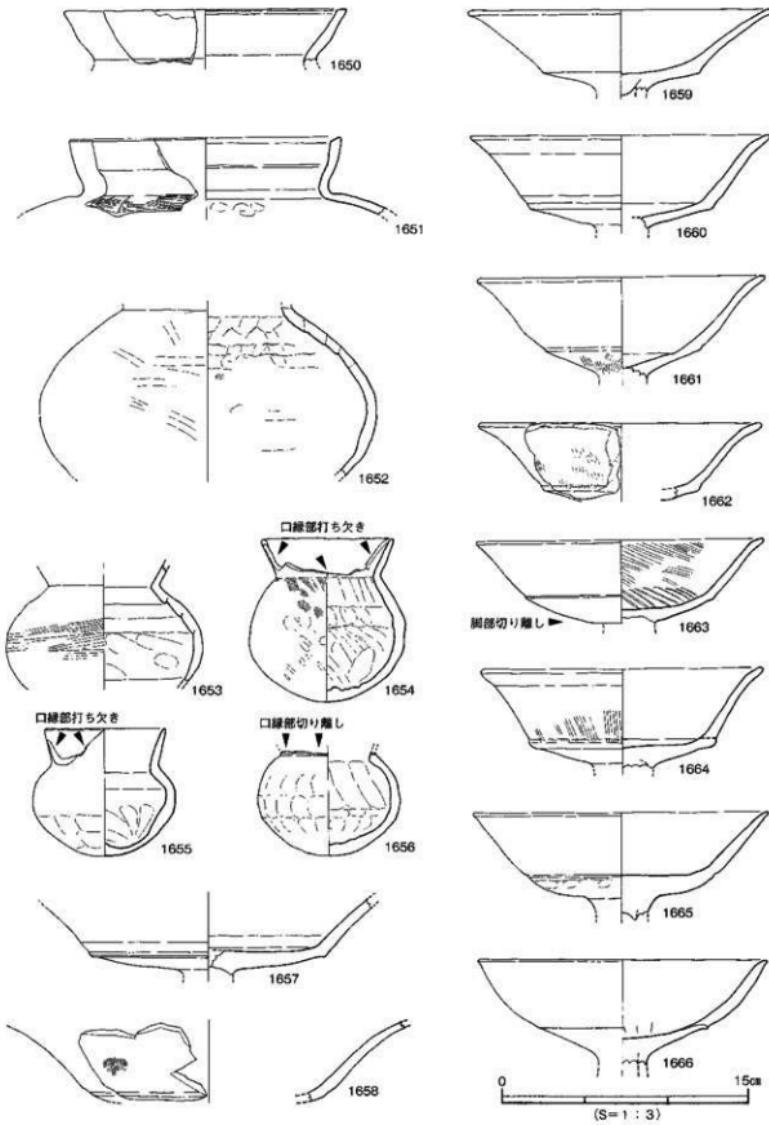
本遺構には竈が造り付けられていなかったと理解しておきたい。

主要な出土遺物については、精査時において原位置にとどめたまま、埋土との関係に留意しながら観察と測量、さらに写真撮影を実施し、取り上げ・収納時にも再度観察を実施した。②層を除去して床面を検出した際には、周壁溝や土坑、柱穴などの付帯施設の輪郭を確定することができたことから、これらについては埋土を確認した後に、精査をおこなった。先述したように柱穴はいずれも柱痕を確認するには至らなかったことから、柱は抜き取られた可能性が高いものと考えた。注目されるのは②区で検出したS P3112の埋土中位から完形の高壙の壊部を切り離した脚部が天地を逆にした状態で出土したことと、③区で検出したS P3109の床面から口縁部の一部を打ち欠いた小型丸底甕が据え置か

れた状態で出土したことである。これらは明らかに人為的かつ意図的な行為が反映されたものと理解できる。柱穴のうち、S P3106・3107・3113では、床面にてわずかな凹みが確認されたことから、柱の位置や大きさを考える上でひとつの手がかりとしては有効な資料になる。

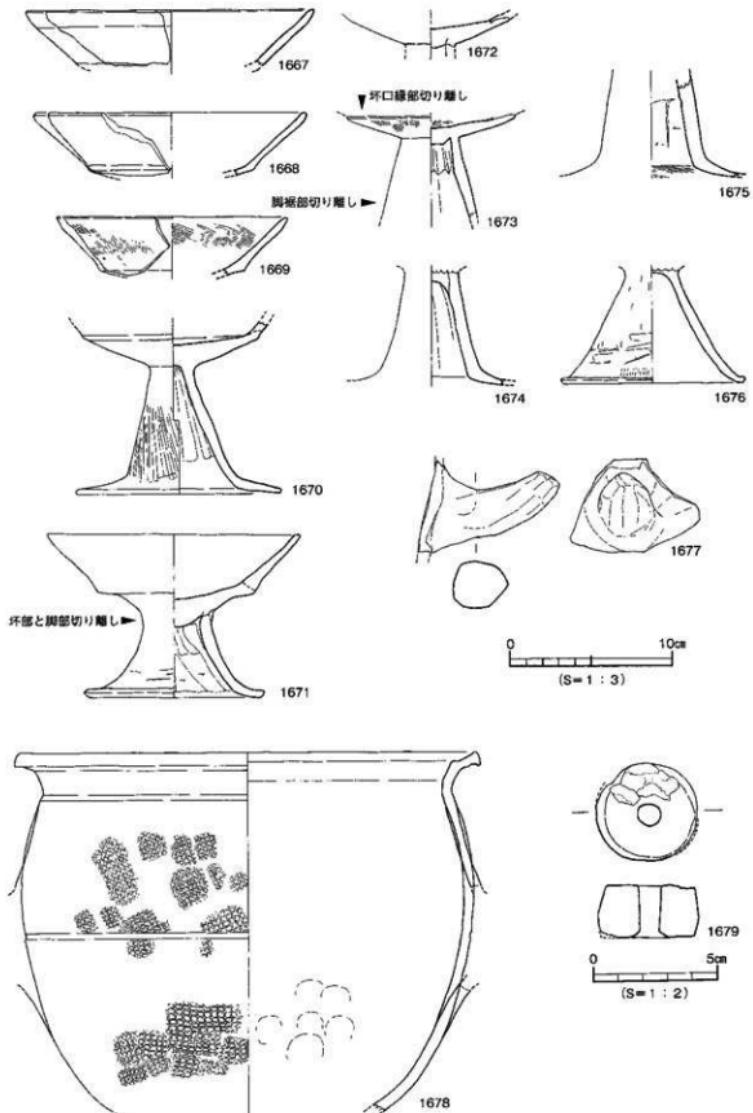
なお、遺構の南壁に沿って構築されたS K317では、埋土上層において、完形の土製算盤玉形紡錘車が据え置かれた状態で出土している。この土坑に限り、3~4cm大の凹縫があたかも充填されたかのように大量に確認されたが、焼土や炭化物は認められなかった。凹縫には受熱による赤化や黒化は認められない。出土遺物のうち、確認された土器は①層下部と②層上面での出土が大半を占める。一見すると平面的に散在するように思えるが、厳密には一定のまとまりを見出すことが可能である〔第316図〕。すなわち、北ベルト上とその付近と、④区南壁沿いとに大別が可能であり、前者には破碎された把手付鍋1678や、口縁の一部を打ち欠いた小型丸底壺1655、口縁全てを打ち欠いた小型丸底壺1656、高坏の坏部1657と1660、坏部の口縁部と脚裾部を打ち欠いた高坏1673などがみられ、後者には高坏と甕の口縁部がみられるのである。このことから、鍋・小型丸底壺・甕の取り扱いに際しては一定した規律の存在が示唆される。また、器種別では高坏の出土量が突出しており、本遺構廃絶に伴う儀礼の執行には高坏が主要器種として認識されていたものと理解できる。

**出土遺物（1650~1682）** 1650と1651は甕、1652は壺、1653~1656は小型丸底壺、1657~1676は高坏、1677は甕の把手、1678は把手付鍋、1679は土製算盤玉形紡錘車、1680~1682は石器である。以下、器種毎に詳述するが、必要に応じて室内調査の過程であらたに判明した遺物の接合関係についても触れる所としたい。1650は弱いS字状の口縁を呈する小片。口端は面取りされ、内面にわずかに突出する。1651もS字状の口縁で、胴部が張るものと復元される。口縁から胴部上半のみが遺存する。15×25cmの狭い範囲でまとまって出土したものの、1652は頭部から胴部にかけて1/4が残る破片。胴部は下から幅2cmの粘土紐を積み上げ、胴部上半から頭部にかけては幅1.3cmの幅狭い粘土紐が用いられる。粘土紐は内傾接合で、胎土は良好である。色調は内外面ともに明るい橙色を呈している。1653は頭部から胴部上半にかけての破片で、口縁部の大半を欠く。6破片が接合し、残存する頭部や胴部下端がほぼ直線状を呈することから、口縁部と胴部下半は人為的な破碎行為の結果である可能性がある。1654は口縁部の1/4を意図的に打ち欠いた例である。口径7.9cm、器高10.0cmを測り、口頭部と胴部の高さの比率が1:3となり、口頭部は短い。口径は胴部最大径を下回り、胴部最大径の83.1%の数値を示す。1655も口縁部を意図的に打ち欠いた例。3.6×2.2cmの逆三角形状に欠かれている。口径7.2cm、器高7.8cmを測り、胴部に比べて口頭部は長く、口頭部と胴部の高さの比率は1:2.5となる。1656は口縁部の全てを意図的に打ち欠いた例である。残高6.3cmを測り、調整は外表面が指押さえ後にナデを施している。焼成は良好で、色調は外表面がにぶい赤褐色を呈して胴部下半に一部黒斑が取れ、内面が橙色を呈する。1657は脚部の全てを欠き、坏部の1/4のみが遺存する。遺存する坏部に口端は遺存しない。胎土には1~2mm大の石英と長石がみられ、さらに同大の金雲母も含む。1658も坏の一部のみが遺存し、口端はみられない。④区とS K318とから出土した4破片が接合したものである。1659~1668は復元口径16.2~18.2cmを測る中型品で、いずれも脚部を欠く。1659はS P3112・①区・②区から出土した10破片が接合する。脚部との接合部の破片のみがS P3112からの出土である。S P3112からは別個体の高坏の切り離された脚部1671が出土していることを参考にすると、この10の破片のうち、脚部との接合部の破片は意図的に破碎された可能性が高い。口端の外表面は丁寧に横ナデされる。1660は北ベルト上と④区から出土した4破片が接合する。最も残りの良い破片は坏部の1/6で、

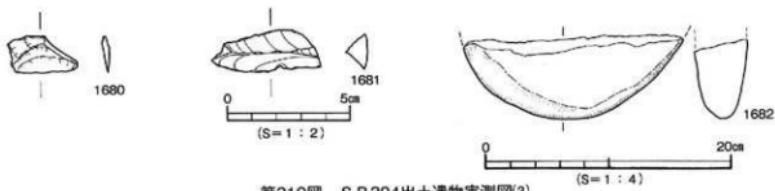


第317図 SB 304出土遺物実測図(1)

口端から脚接合部付近まで留める。互いの出土地点が60cm以上離れることを積極的に評価し、坏部が破碎散布された可能性を認めておきたい。1661は②区出土で、坏部の1/4が口端から脚接合部まで留める。胎土は良好。1662は④区出土で、坏部の1/5の遺存。1663は脚部を欠くが、坏部がほぼ遺存する。口径17.4cm、残高5.1cmを測り、S P 3110のすぐ西でまとまって出土した。坏部の外底には筋状の凹凸がみられ、別作りの脚部を接合するための工夫が認められる。胎土と焼成は良好で、色調は内外面ともに明赤褐色を呈する。1664はS K 318とその直近から出土した2破片が接合する坏部片で、全体の1/4を留める。脚部との接合部が残る破片はS K 318から出土している。坏部外底には凹凸がみられる。1665は1651の南と②区から出土した2破片が接合し、脚部は欠き、坏部の1/2を留める。口縁部が直線的に立ち上がり、口端は丸くおさまる。1666はS K 317・②区・③区・④区・④区周壁溝から出土した7破片が接合し、坏部の1/4を留める。復元口径17.2cmを測り、残高6.5cmを測る。口縁部は内湾して立ち上がり、口端は強い横ナデによってわずかに外反する。1667～1669は口縁部が直線的に立ち上がる。1667はS K 317から出土した2破片。1669は④区出土の小片で、胎土は良好。1670～1676は高坏の脚部が中心。1670は④区出土の2破片が接合したが、裾部は2/3を欠き、坏部は大半を欠き、わずかに坏底部の1/4を留める。脚部は「ハ」字形に開き、裾部は短く直線的に屈曲し、端部は面取りが意識されている。1671はS P 3112と南ベルトから出土した4破片が接合し、全体形（器形）や、坏部と脚部を切り離したことが知れる興味深い資料になる。復元口径15.4cm、器高10.0cmを測り、脚部は大きく「ハ」字形に開き、裾部は極端に短い。1672はS K 317から出土した坏底部の小片である。1673は坏口縁部と脚断部を打ち欠きにより意図的に破碎した好例である。坏部は底部と口縁部の接合部から外され、一見すると口径10cmの器台のように見える。脚部は数度の剥離により脚下半を外し、意図的に高さが抑えられ、自立できる。精査時に自立して出土したことからも、意図的に高坏の上下両端を破碎した後に、埋め戻し過程で据え置いた可能性が高い。1674はS P 3109検出直前の④区出土。縦1/2が遺存する脚部で、裾部と坏部は打ち欠きにより意図的に破碎された可能性が高い。脚内部には円錐充填が施され、指によるナデ付けが観察できる。焼成と胎土は良好。1675は③区出土で、脚部を大きく欠く脚下端。内面にはヘラ状工具による横方向のケズリがみられる。1676は④区出土の1/4が遺存する脚部で、「ハ」字形に大きく開き、裾部は屈曲せずに、わずかに外反し、端部が外面に丸く肥厚する。仕上げのナデ調整が甘いため、外面には縦方向のハケや、板状工具（ハケと同一の工具か）の小口痕が顕著に認められる。1677は西ベルト出土の把手完形品。軸の胴部に差し込まれたものであり、接合部は粘土を付加した後に、丁寧なナデが施される。1678は北ベルト上とその周辺から出土した6片が接合し、底部と把手を欠く。全体の1/3を留めるもので、遺存する胴部の中位には把手を接合した際に補強した粘土が外面に盛り上がっている。胴部は強く張り、胴部最大径からやや下がった位置には、4mm幅の1条の凹線状の施文を施す。頭部は強い横ナデによる段がある。口縁部は強く外反し、外面には段をもち、口端は強い横ナデにより面をなす。調整は、胴部外面には正格子の叩き、内面は指押さえ後にナデを施す。外面の叩きが顕著で残っていないことから、叩き後にナデを施した可能性も残される。外面は先述した凹線状の施文を上端として下方に4.5cm程度の幅が横ナデによって叩きが消されており、凹線状の施文を際立たせる意図があったことを容易に認めることができる。復元口径27.6cm、残高21.9cmを測り、焼成は良好。色調は褐色から灰白色を呈しており、全体的には灰白色の靱が強い印象を受ける。1679はS K 317の埋土上部から出土。出土直後は器面の遺存も良好な完形品であったが、洗浄時に器面が剥落するとともに一部が欠損する事態に陥った。断面形



第318図 SB 304出土遺物実測図(2)



第319図 SB 304出土遺物実測図(3)

態がわずかな紡錘形を呈し、中位からわずかに下がる位置に、全局する弱い稜線が看取される。1680と1681は西ベルト除去中の①層より出土。1680はサヌカイト製の綫長剝片。上縁を折り取ることにより成形し、長さ2.8cm、幅1.5cm、最大厚0.26cm、重さ0.95gの完形品である。1681は肉眼観察により大分県国東半島の姫島産黒耀石製と判断できる剝片、あるいは残核である。細部調整による刃部の作出はみられず、上縁には使用による微細な剥離が看取される。長さ4.4cm、幅1.7cm、最大厚0.95cm、重さ4.91gである。1682は砂岩製の台石。上半部を大きく欠く。使用による剝落や削痕などの使用痕を平坦面に認ることはできない。

時期：構築面と遺物とから、SB 304は古墳時代中期前葉に機能を停止したと考える。重複関係から、隣接するSX 301やSX 302より後続する。出土遺物については、その出土レベルや埋土との関係から一括性は高く、遺構が人為的に短時間で埋め戻された可能性が高いものと判断できる。

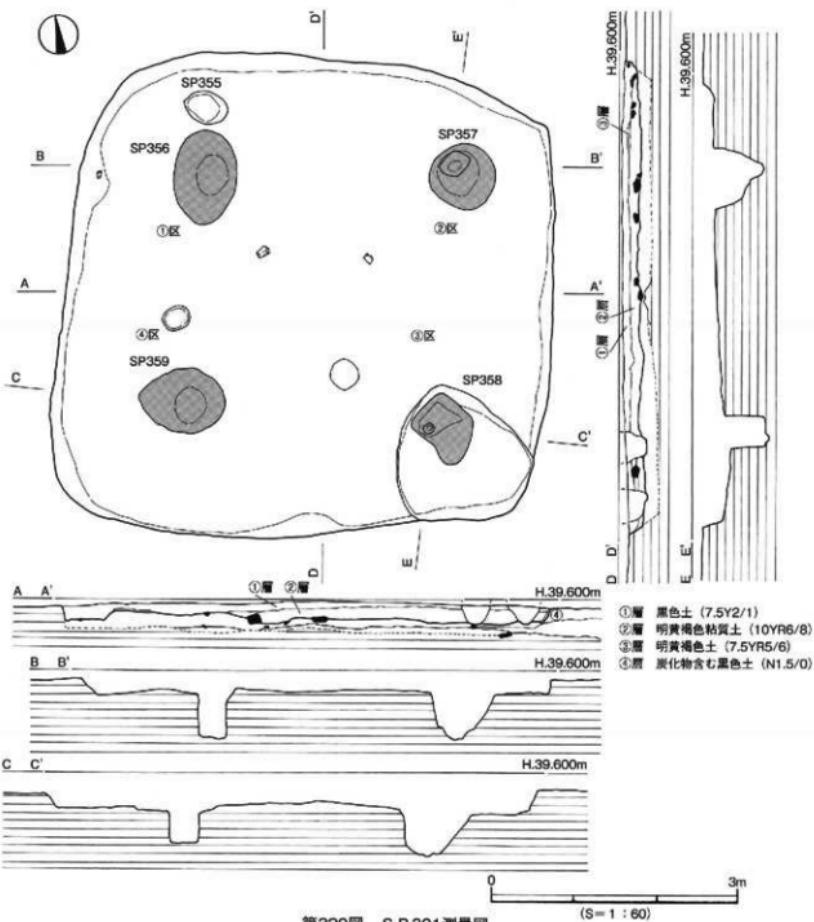
#### S B 301 [第320~322図]

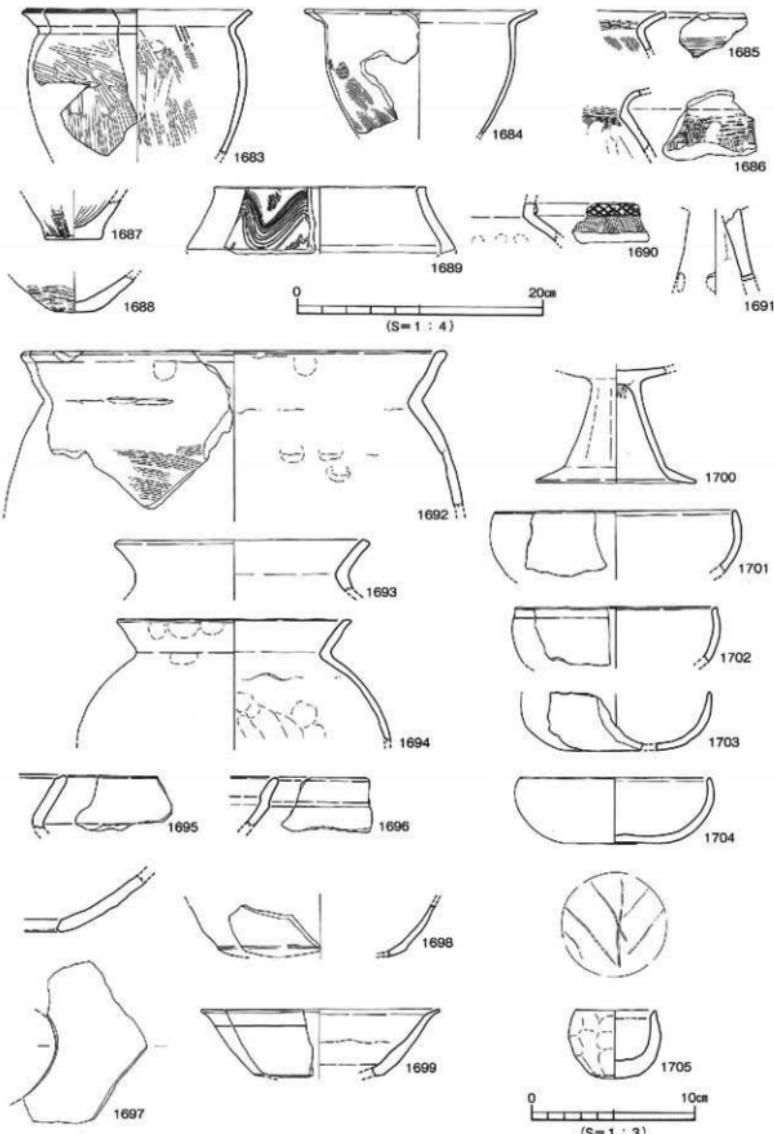
調査地の東部、D 3・4、E 3・4、F 3・4区に位置する。構築面は第二遺構面と判断される。平面形態は南北の壁がやや丸みをもつ隅丸方形形状を呈し、長軸方向は真北からやや東に振れ、N-8°-Eである。規模は東西5.92m、南北5.84m、検出面からの深さ18~80cmを測る。検出時の埋土は黒色土(7.5Y2/1)で、焼土粒と炭化物粒をわずかに含みやや軟質で、遺物は全くみられなかった。埋土は四層に大別可能で、①層は黒色土(7.5Y2/1)で、層厚4~8cmを測る。②層は明黄褐色粘質土(10YR6/8)で、1mm大の白色礫粒を多量に含む堅固な埋土である。③層は明黄褐色土(7.5YR5/6)で、1mm大の白色礫粒を多量に含む堅固な埋土である。このうち、②③層上面は標高39.45mとほぼ水平をなす。さらに、十文字に残したセクションベルトのうち、北ベルトでは40cm程度の範囲で焼土が分布することを確認している。また、本層上面からは一部主柱穴の輪郭が確認されている。これらのことから、この②③層上面を使用時の床面と認定した。したがって、②③層は構築時の貼床埋土の可能性が高い。④層は黒色土(N1.5/0)で、炭化物粒を多量に含む軟質土。東ベルトの立ち上がり(住居東壁)で確認でき、住居の壁板痕跡の可能性がある。なお、本住居址は30~50mmの円礫を多く包含する暗灰黄色砂質土(2.5Y4/2)にまで掘削が到達して構築されている。構築時の床面は凹凸が顕著で、多数の礫が露出しており、不安定な状況であったものと判断され、必然的に貼床を必要としたことが想起される。

調査では十文字になるようセクションベルトを東西南北に設定してから精査を始めた。精査に際しては北西部を①区、東部を②区、南東部を③区、南西部を④区に区分している。精査を進めていく過程で、①層からは須恵器や土器類のはかに、わずかな弥生土器小片と石器が出土した。さらに精査を続けたところ、これらの遺物は②③層からほとんど認められなかった。また、破碎散布や一部打ち

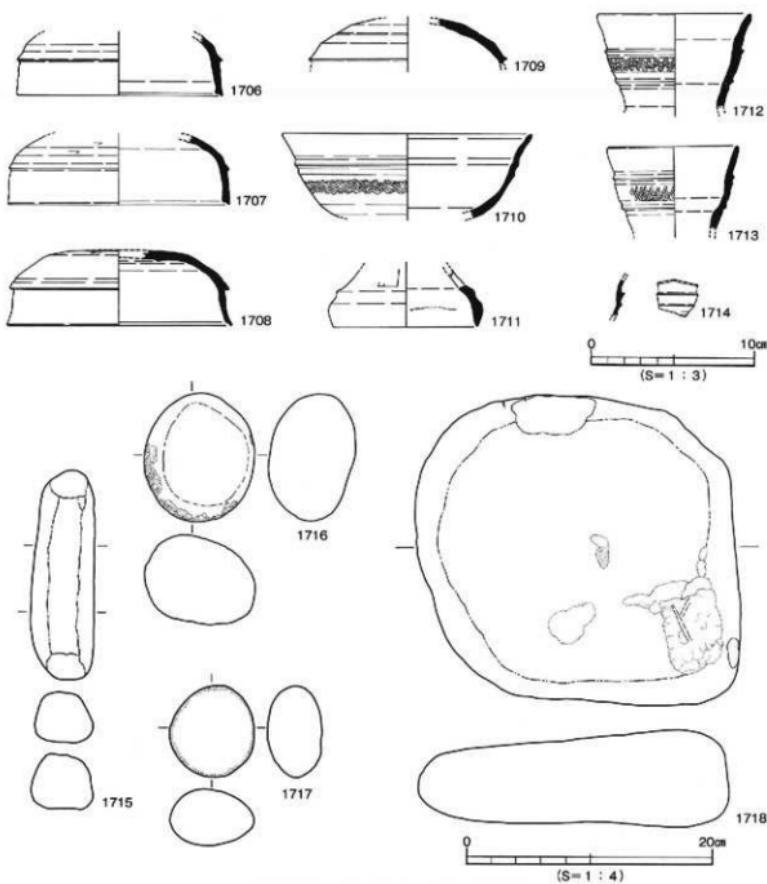
欠いた土師器や須恵器はみられず、特異な器種や完形をとどめる器は未検出である。なお、地山直上（構築兼使用時床面）からは完形の台石が据えられた状態で確認され、これは住居廃絶時に直接関係する遺物の可能性が高いものと考える。

遺構内に周壁溝や土坑などはみられず、5基の柱穴がみられる。このうち4基はその配置から主柱穴と判断でき、S B 301は4本柱構造の竪穴式住居址と考えられる。いずれの柱穴も柱抜き取りの掘り方が確認されており、柱痕は認められなかった。柱穴間はS P 356・357間が3m、S P 357・358間が3.2m、S P 358・359間が2.8m、S P 359・356間が3mを測る。主柱穴の掘り方は、住居構築時の床





第321図 SB 301出土遺物実測図(1)



第322図 S.B.301出土遺物実測図(2)

面における輪郭の確定が困難であったことに起因し、本来の平面形態は明らかではない。規模に大小があり、これは柱抜き取りの掘り方が多分に影響していることが想起される。S.P.358は柱穴の外側に二回り以上大きな土坑状の掘り方がみられ、これは構築時の床面から掘り込まれた抜き取りに伴うものであろう。

**出土遺物 (1683~1718)** 1683~1691は弥生土器、1692~1705は土師器、1706~1714は須恵器、1715~1718は石器である。以下、種類ごとに採り上げ、器種ごとに詳述する。1683~1688は甕の小型品。1685・1686・1688は外面に叩きがみられる。1689は複合口縁壺の口縁部で、外面には二種の波状文を施す。1692~1696は甕。1692は復元口径25.8cmを測る大型品。「く」字形に屈曲し口縁部の端部

を強い横ナデで仕上げる。1697は瓶の底部片で、直径5cmを超える蒸気孔がみられる。外面の一部には黒斑を観察できる。1698～1700は高坏で、1700は大きく「ハ」字形に開き、屈曲して短い裾部がつき、内面には明瞭な稜線がみとめられる。1701～1704は壇で、いずれも口縁部が内湾する。比較的遺存の良い1704には平底の底部がつく。1705はミニチュアである。器面の摩滅が著しく、口縁部の1/2を欠く。1706～1709は坏蓋で、1708は天井部が扁平で、天井部と口縁部を分ける棱は断面三角形の鋭いものである。口縁部は外反して下がり、口端は尖り氣味である。調整は天井部外面の1/2に回転ヘラ削りを施す。1710と1711は高坏で、前者は把手を取り付くタイプとなる。坏部は全体の1/3の遺存で、器壁は非常に薄い。口端内面には段が付き、体部外面には2条の明瞭な突帯をもち、突帯下には5条一組の波状文を施す。調整は外底にヘラ削りが認められる。胎土は精良で、色調は他に比べて最も黒味が強く、外面が黒灰色、内面が灰色を呈し、焼成は極めて良好である。1712と1713は広口壺の口縁部片である。1712は外傾して立ち上がる口縁部外面に2条の鋭い突帯をもち、突帯間には6条一組の波状文を施す。内外面には自然釉が薄くみられ、製作時の調整不足のためか、部分的に火彫れが認められる。1715と1716は敲石で、前者は花崗岩製で棒状を呈する。上下端には使用による明確な潰れは認め難い。1716は硬質砂岩製で、縁辺部に明瞭な潰れが認められる。1717は砂岩製の磨石、1718は硬質砂岩製の台石。

時期：構築面と遺物とから、S B301は古墳時代後期前葉には機能を停止したと考える。出土遺物には住居廃絶時の埋め戻しに伴う特徴的な状況が認め難いことから、S X302やS B304のような人為的かつ意図的な遺構の埋め戻しは想起できない。よって、住居廃絶時に際しては上屋を除去して、主柱を抜き取った後は、自然埋没により埋積した可能性が高いものと理解しておきたい。

### S B302〔第323図〕

III区北西部、I 4・5区に位置し、第二遺構面からの構築である。遺構の大半は調査区外へ続くが、平面形態は方形か長方形を呈するものとみられる。調査区北壁の土層観察では、深さが現存54～74cmを測り、輪郭が確定できた第三遺構面からの深さはわずかに6～20cmであった。調査区北壁の土層観察では、埋土が二層に大別でき、①層は黒色土(7.5Y2/1)で、10mm大の小礫を含む。②層は黒色土(N2/0)で、40～50mm大の礫をわずかに含む。精査は②層の下部を対象に実施し、床面にて付帯施設のS K316と壁溝を確認した。S K316は住居の南東隅に位置し、平面形態は不整隅丸長方形を呈し、規模は長軸80cm、短軸70cm、深さ16cmを測る。壁溝は住居南壁に沿って確認し、規模は幅10～20cm、深さ6cmを測る。埋土はいずれも黒色土(N2/0)で、礫を殆ど含まない。主柱穴は未検出である。実測可能な遺物はS K316から土師器片数点が出土した。

出土遺物(1719～1721) 1719は口縁部がわずかに内湾し、口端が面取り気味におさめる壺の破片で、復元口径15.6cmを測る。胎土には混和剤として1～2mmの石英と長石に加えて、1mmにも満たない微細な全雲母がみられる。1720は鉢あるいは壺の口縁部小片で、口縁部は短くわずかに外反し、口縫は尖る。1721は高坏の口縁部小片である。口縁部は外反し、口端は丸くおさめる。

時期：遺構確認面と遺物から、S B302は古墳時代後期前葉には機能を停止したと考える。住居の下限は古墳時代後期前葉に比定可能であるものの、遺物が少量かつ小片であることから、その上限について特定することは差し控えておく。また、遺物の出土状況に特徴的な完形品の据え置きや横倒し、一部毀損、さらに破碎散布などが認められないこと、埋土には水平基調の堆積が認められないことな

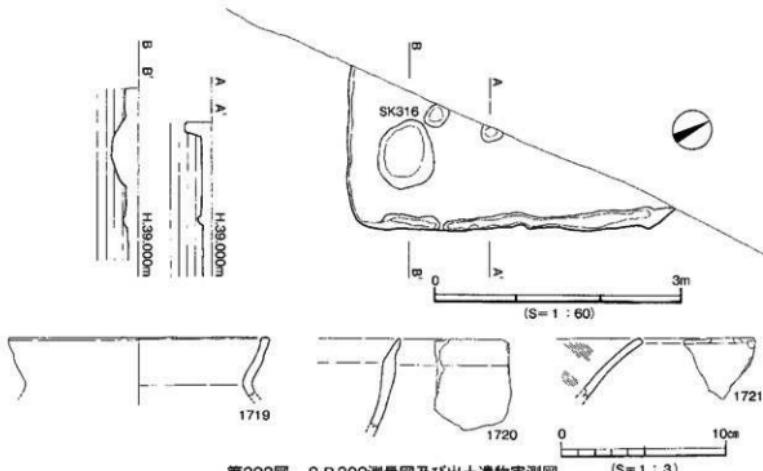
どから、S B B 302の廃絶時に際しては土師器を用いた儀礼行為と、人為的かつ意図的な埋め戻しは執行されず、自然埋没により現況に至った可能性が高いものと判断される。

### (3) 土坑 (SK)

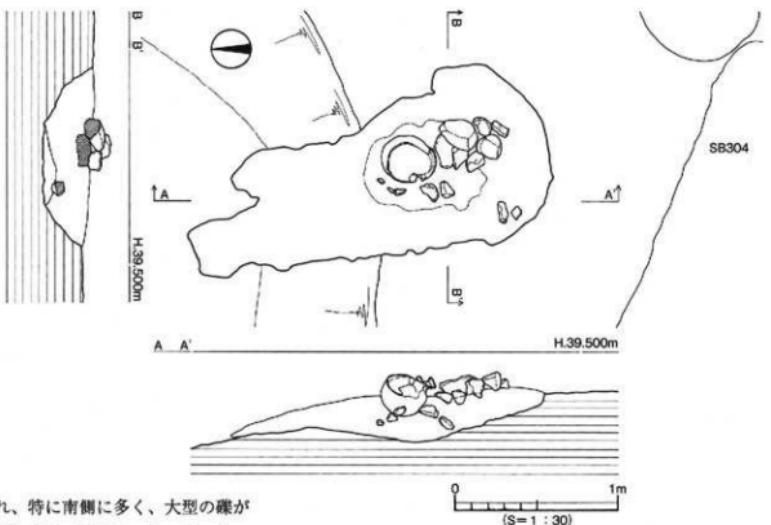
#### SK310 [第324図、図版97-2・100]

G 5 区に位置し、S B 304の北70cmの地点である。平面形態は不整形な長椭円状を呈し、長軸は真北から西に振れており、N-15°-Wとなる。規模は、長さ2.25m、幅1.15m、検出面からの深さ29cmを測る。縦断面の観察により、平面位置で遺物のある箇所一帯が他より10cm深く掘り込まれていることが判明し、遺物を据え置くことが土坑構築時に既に決定していたものと理解できる。埋土は黒色土(N2/0)の單一層であるが、これは土坑の輪郭を確認した以降に精査して得られた所見である。野外調査では、最初(当初のⅡ区南壁付近)の表土掘削後の精査中に須恵器と大型円碟を確認していた。この時点では土坑の輪郭をラインとして認定することは困難であった。12cm程度掘り下げた時点で、帶状の輪郭が南壁から北へ向かって1.8m程延びていることが確認できたことから、当初、溝として認識していた。この時に、遺物として須恵器の大甕1個体の完形品が斜位で据え置かれた可能性のあること、その南には10~25cm大の円碟数点が積まれていること、さらに遺構は3-①層上面から構築されていることなどが確認できた。調査区を拡張して表土掘削を再度おこない精査したところ、遺構は延びているものの、拡張したところではその輪郭が半円形を呈することを確認した。これを受けて既検出の輪郭と整合した結果、不整形な長椭円形状の平面形態であると認定できることから、「土坑」として認定した。遺構の精査では人為的に据え置かれた遺物と碟を原位置に残した状態で、埋土の除去を進め、出土状況の詳細記録を作成・撮影した。

遺物は床面から15cm上に位置し、約30度傾けた状態で出土した。破損した口縁部は破片が確認でき、割れ口も新しいことから、当初から完存していたものと判断される。円碟は遺物の北東を除いてみら

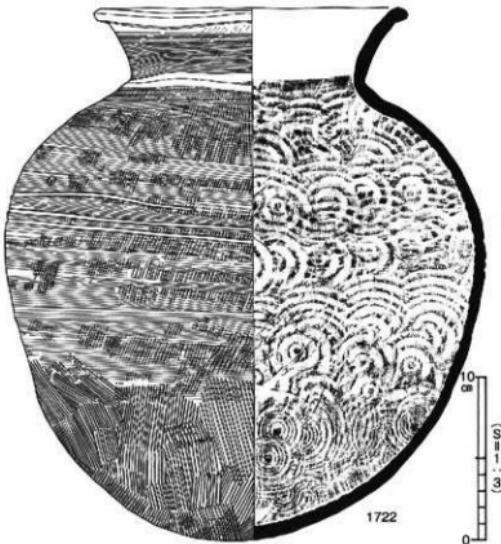


第323図 S B 302測量図及び出土遺物実測図



れ、特に南側に多く、大型の礫が集中する。礫は10cm大、15cm大、25cmの三種があり、いずれも角がとれた丸い川原礫（自然礫）である。礫が遺物を傾けた南方向に集中し、積み上げられていることからも、この礫と遺物とは有機的に関係のあることが知れる。遺物にみられる斜位の傾きは偶発的なものとは即断できず、むしろ礫との有機的関係を積極的に評価し、人為的かつ意図的なものと理解しておきたい。遺物内には埋土が充填しており、室内調査時に水洗を試みたところ、土師器・須恵器・装飾品などの人工遺物を確認するには至らなかった。

**出土遺物** 1722は完形の須恵器の大甕である。口縁部は短くわずかに外反し、口端は外面に肥厚し、玉縁状を呈する。頸部は短く、回転横ナデにより明確に作出され、



第324図 S K310測量図及び出土遺物実測図

胴部は肩部のやや張る球形を指向する。調整は、胴部が外面に平行叩き後にカキ日を施し、底部から10cm程度上には再度平行叩きを施す。内面には二種の円形の穴で具痕がほぼ水平に連続して認められることから、整形時における器壁の叩き締めが横方向になされたことが知れる。なお、胴部最大径の位置には、2mm幅の沈線文が螺旋状に2周半巡る。口径17.8cm、器高32.5cm、胴部最大径29.4cmを測る。

時期：構築面と遺物とから、S K310は古墳時代後期前葉に時期比定しておきたい。

## 6. 小 結

今回の調査により、対象地は弥生時代前期の溝で始まり、中期後葉～後期前葉には土坑が構築され、古墳時代に移行し、中期前葉には竪穴式住居と性格不明遣構、後期前葉には竪穴式住居と土坑が構築されていたことを確認した。これにより対象地は、弥生時代前期後半に土地利用が開始され、弥生～古墳時代にわたり主に生活関連遣構が展開する安定した地盤であったことがあらためて判明した。古墳時代中期前葉は、日本列島においていわゆる渡来人との交渉や影響を裏付ける考古資料が顕著にあらわれる時期であり、今回の調査は当平野の歴史的役割を考える上で興味深いものとなる。

### (1) 土層について

今次調査で検出した土層は1～7層で、このうち6・7層はかつての河川の氾濫によって堆積した砂質土や砂礫層である。5層は、石手川中流南岸域の野外調査では「地山」と呼称され、既往の調査では遣構確認面として報告される機会の多い土層である。今次調査で注目されるのは4層と3層である。4層は第三造構面を形成し、今次調査では5層を完全に覆うことが確認できたことから、広義の「地山」の範疇で捉えておく必要がある。3層は黒色土と褐色土に分層可能で、両層の上面が遣構構築面をなしていることが判明した。検出遣構の沿継時期から第二造構面の褐色土上面は古墳時代中～後期の地表面、第一造構面の黒色土上面は古代～中世の地表面を形成していたものと考えられる。

### (2) 古墳時代中期前葉の竪穴式住居址 S B304について

古墳時代の遣構には、1期の中期前葉（S X301～303、S B304）と、2期の後期前葉（S B301・302、S K310）がある。注目されるのは1期にみられる遣構の重複関係やS B304、そしてS B304の廃絶過程に執行された行為（廃屋・埋め戻し儀礼）である。1期の遣構は8×5mの狭小なエリアに次々と構築されたとみられ、遺物から大きな時間差を見出すことは困難である。重複関係を根拠にS X303→S X301→S X302とS X303→S B304と変遷する可能性は高い。ただし、S X301とS X303との先後関係は確定することは困難である。当該期の確実な住居址報告事例の少ない当平野においては、S B304は基準資料のひとつとして位置付けられよう。興味深いことは一定の規模を誇る竪穴式住居にもかかわらず、造り付けの竈が付設されていなかった点にある。遺物に把手付鍋や瓶の把手が伴うことから炊飯を可能とした食器が成立していたことは確実である。したがって、問題となるのはこの竪穴の規模ということになる。このように考えると、S B304が当該期の竪穴式住居としては相対的に小型の部類に属するものと想定可能となる。この想定が妥当であるならば、造り付けの竈は大型の竪穴式住居に付設されていたとみられ、S B304のような小型住居とは相互に補完し合う関係が成立していたかあるいは小型住居には移動式竈を作っていた可能性を見出すことができる。

第14章

たる　み　し　たん　じ  
樽　味　四　反　地　遺　跡

8 次 調 査 地



## 第14章 檜味四反地遺跡 8次調査地

### 1. 野外調査の経過と方法

対象地の安全対策と調査区の設定を行った後、2003（平成15）年4月16日から重機等を用いて表土除去に着手する。試掘調査のデータを鑑み、まず地表下0.4~0.9mまで掘削する。調査区は掘削した順に、西からⅠ区、ⅡA区、ⅡB区と呼称した。対象地の西半部は東半部に比して黒色系の遺物包含層（後述する4層）の厚く堆積していることが調査区北壁沿いの断面土層で確認できた。断面を精査したところ、この遺物包含層の形成過程で構築された遺構や、完全に切り込んで構築された遺構も存在することから、検出が予想される遺構には複数の時期のものを含むことは容易に推察できた。しかしながら、野外調査に与えられた期間の関係上、この遺物包含層上面や堆積過程の面での遺構検出を実施することは断念せざるをえず、人力で遺物包含層の精査を試みた後、粘性の強い暗褐色土（後述する5層：75Y R3/4）上面で遺構の輪郭を確定させることとした。調査対象地の表土を一度に全て除去し、人力にて遺構検出作業を試みた結果、各区で多数の堅穴式住居址や溝、さらに土坑や柱穴等の生活関連遺構を検出す。大半の遺構には重複関係が認められ、輪郭の不明確なものが多く、先後関係が判然としない状況であった。

5月中旬、高所作業車を用いて遺構検出状況の記録写真を撮影する。その後、平板測量によって縮尺1/100の遺構配置図を作成し、遺構番号と埋土とを記録する。遺構の精査は工程上ⅡB→ⅡA→Ⅰ区の順で行い、遺構番号は区毎に3桁の番号を付した。測量図は必要に応じて縮尺1/20の遺物出土状況の平面図や、縮尺1/10の遺構断面上層図を作成し、写真は35mm判の白黒、カラー・リバーサル、ネガカラーの各フィルムを用いて撮影し、主要な写真については4×5判や6×7判を用いて写真担当の大西に撮影を依頼した。26日、台風接近に伴う強風と豪雨により、調査区が完全に水没する。

6月からは、愛媛県下が梅雨入りした影響で、しばしば野外での作業を中断することがあった。この時は、仮設の調査事務所内で出土遺物の洗浄と注記、さらに作成した測量図の縮分合成と、撮影した記録写真の整理作業を中心とした室内整理作業を実施し、梅雨の合間に訪れたわずかな晴れ間には、調査区に溜まった雨水を除去した上で、遺構保護のために調査区を覆っていたシートを外し、遺構面の乾燥に努めた。この作業の結果、晴天時の野外調査はスムーズに進行し、遺構の精査と測量を効率良く実施することができた。

野外調査も後半にさしかかった7月からは、Ⅰ区では遺構の精査と併行して、重複関係のため不明確であった遺構の輪郭を確定する作業を続けていた。次第に遺構の輪郭が判明し、同区における遺構の配置状況をほぼ確定することができた15日に、同区の東半部に大型の建物跡1棟が存在することを確認。縮尺1/40で作成した遺構配置図と報告書掲載の既往の測量図を合成し検討したところ、この建物跡に関する興味深い所見を得ることができた。すなわち、



第325図 超大型建物跡

この建物跡は平成10年度に調査された同6次調査地検出の大型建物跡とは別の新たな建物跡であること、両者は直交する位置関係にあり、西側柱の柱筋が同一線上に並ぶこと、さらに6間×6間の総柱構造の建物跡で、床面積が150m<sup>2</sup>を超えると想定される巨大な規模を誇ること等である。31日には現地に集合した当職員による検討会を実施し、建物跡の確認状況とともに調査体制とその方針について議論を重ねた。その結果、加島がこの建物跡の調査に専念し、これまで加島が同時並行で進めていた梅味高木遺跡7次の調査は、高尾が引き継いで実施することが確認された。

県下の梅雨が明けて晴天に恵まれるようになった8月には学識経験豊かな諸先生を現地招請し、新たに確認された超大型建物跡を含む調査指導を開催したところ、多くのご指導とご助言、ならびに調査に対する激励の温かいお言葉を頂戴した。すなわち、新たに確認された建物跡は、①平成10年度検出の建物跡とは別のものである。②しかしながら時期差は認め難く、ほぼ同じ時期に構築された可能性は高く、西日本最大級のものと評価できる。③全国的にみても有数の規模を有し、屋内棟持ち柱を有する床束式の総柱型の高床構造である、ことが明らかになった。さらに諸先生方からは④前回検出の建物跡と考え合わせると、古墳時代への転換期の梅味地区には首長層の存在を裏付ける複数の特殊建造物の存在することが確実となり、周辺を含めた遺跡の全体像を解明するためにも、慎重且つ充分な調査を要するとの見解が相次いだ。さらに、⑤前回と今回の対象地も含む一帯が、国指定史跡の価値に値する極めて重要な遺跡に該当するものであり、遺跡を全面的に現状保存し、将来の活用に備えた積極的な行政側の対応が今後は必要になる、との見解も示された。

これらの貴重且つ重要な見解を踏まえて、8月はこの超大型建物跡を構成する個柱を中心に精査と測量さらに記録写真の撮影を進めた。調査期限の迫っていることから、日没まで継続して測量を実施し、資料化の充実を試みる日々が続く。歴史上きわめて重要な情報を含む超大型建物跡を中心とした調査成果を速やかに市民に公開する「現地説明会」と、測量を含む補足の調査とを行う必要から、道路建設課と文化財課、さらに埋文センターで協議を重ねた結果、当初8月末の予定であった野外調査の期間は半月延長されることとなる。9月4日午前中に報道発表を行い、大きな反響を呼んだ。6日午後に現地説明会を開催したところ、天候に恵まれたこともあり300名を超える市民の参加があり、中には関東地方から駆けつけた方もみられた。現地説明会当日は、超大型建物跡を構成する柱穴に対



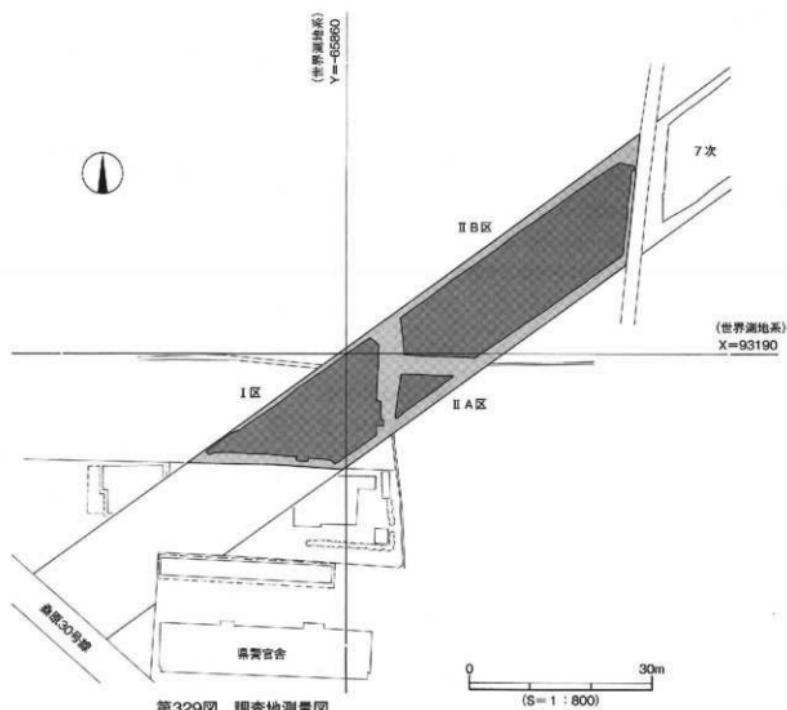
第326図 調査指導



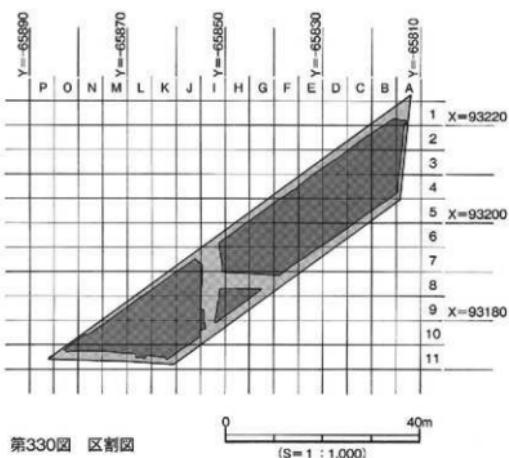
第327図 現地説明会(1)



第328図 現地説明会(2)



第329図 調査地測量図



第330図 区割図

して土糞を用いて養生した後に柱を復元的に立て、視覚的により判りやすい現地での公開に努めた。また隣接地点には仮設テントを準備し、出土遺物と撮影した写真パネルの展示も行った。実際に足を迷んでいただいたい300余名の参加者には資料を配付し、現地にて調査成果を速報的に解説したところ、好評を博した。8日からは調査の補足を行い、15日に野外調査を終え、測量図、出土遺物、発掘・測量道具等を移動した。測量に際しては、国土座標第IV座標系基準点から調査地内に座標点を移動し、これを基準とした5m方眼のグリッド割りを実施した。グリッドはX=93225、Y=-65810を起点として、東から西へA・B・C……、北から南へ1・2・3……とし、A1～P11区といった呼称名を付けている。なお、I区について砂と真砂土を用いて遺構保護の措置を講じている。

## 2. 基本層位

調査対象地の長さはおよそ74m分で、調査以前は水田であった。現況は対象地の東半部はほぼ平坦地で、標高38.9～39.7mを測り、西端部のI区とII A区は一段下がり、水田面も同様である。基本層位は1～7層を検出した〔第331・332図〕。

1層－現代の水田や畑に関わる土層で、耕作部分に相当する1①層と、床土部分の1②層に細分可能である。

1-①層：灰色土（N5/0）で、層厚6～50cmを測り、調査区全域で検出した。

1-②層：明赤褐色土（2.5Y R5/6）で、鉄分とマンガンの沈着が認められた。層厚4～10cmを測り、調査区全域で検出した。市道櫻味溝辺駿河関連調査の統一基本土層では、1-①は第I①層、1-②は第I②層に相当する。

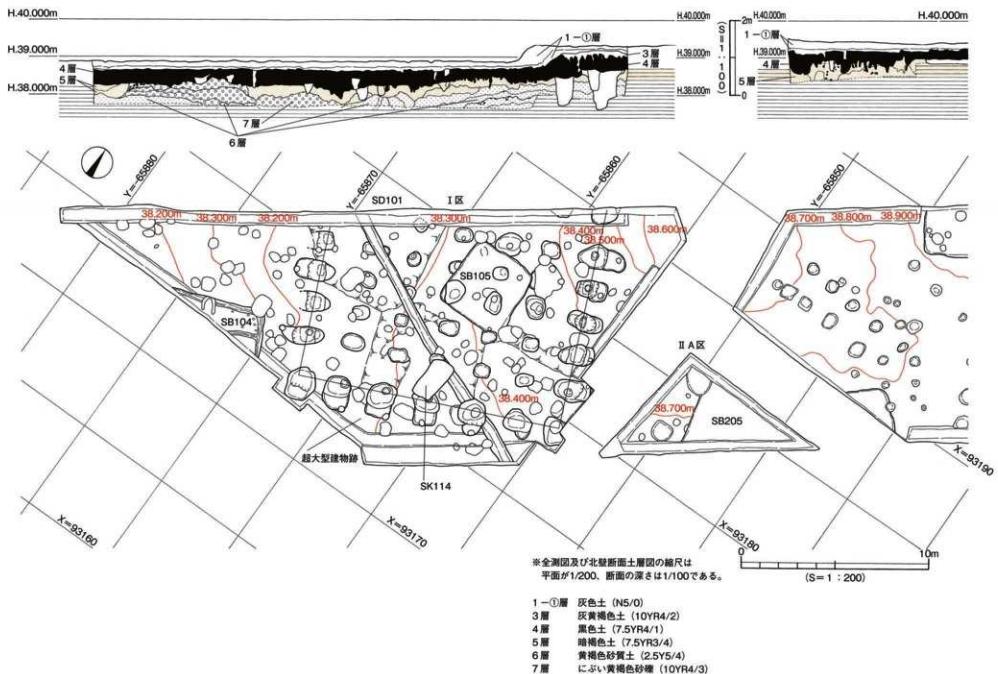
2層－褐灰色土（10Y R4/1）で、調査区の東半部に分布する。層厚14～40cmを測り、主には古墳時代～中世の土師器と須恵器片、さらに陶磁器片等をわずかに包含する遺物包含層である。統一基本土層の第II層に相当する。

3層－灰黄褐色土（10Y R4/2）で、調査区の中央北端部に局部的に遺存していた。古墳時代～古代の土師器や須恵器片をごくわずかに包含する遺物包含層であり、統一基本土層の第III層に相当する。

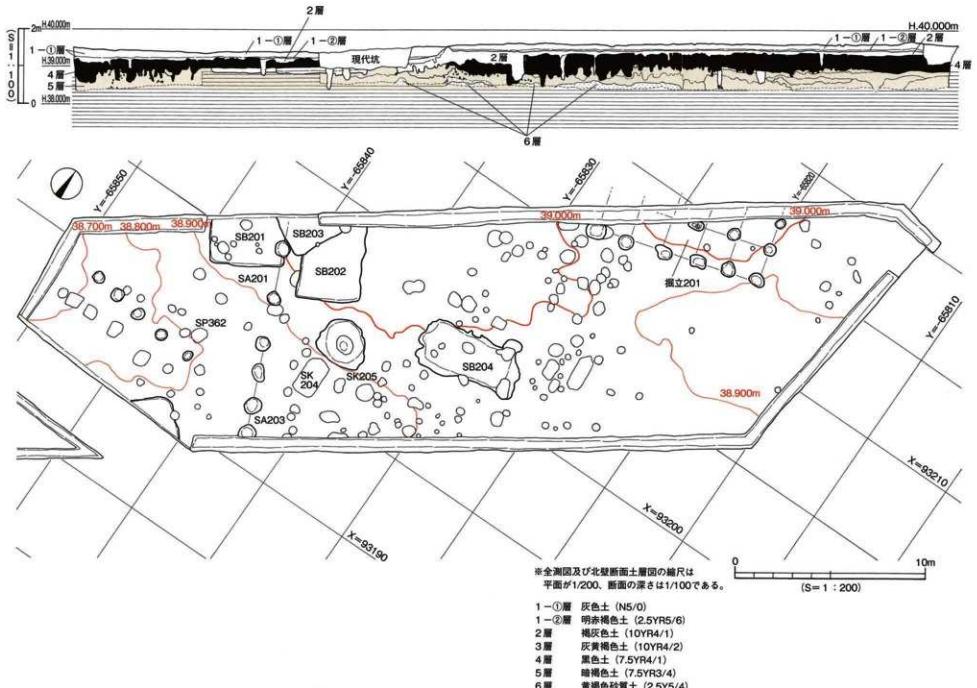
4層－黒色土（7.5Y R4/1）で、調査区全域に分布していた。層厚16～60cmを測り、主に弥生土器と古墳時代の土師器と須恵器を含む遺物包含層である。I区の北壁断面では土色と土質のわずかな違いを根拠として上下に分層することが可能であったものの、II B区では分層が困難であった。したがって、今次調査地では本層を明確に分離するには至らなかった。統一基本土層の第IV層に相当する。本層の堆積過程で遺構が構築されており、主要遺構に超大型建物跡を挙げることができる。

5層－粘性の強い暗褐色土（7.5Y R3/4）で、2～3mm大の礫粒を多量に含み、ガチガチした質感がある。調査区のはば全域に分布する。調査区北壁の本層上面は、II B区東端で標高38.91m、同西端で38.78m、I区東端で38.67m、同西端で38.28mを測り、緩やかに西に向けて地形が下がりつつある。本層上面が最終遺構面となり、主要遺構にはSD101、SB201・203などがある。人工遺物は包含せず、統一基本土層の第V層に相当する。

6層－黄褐色砂質土（2.5Y5/4）で、砂粒は2～3mm大で揃っている。I区とII区の一部で堆積が



第331図 I・II A区全測図及び北壁断面土層回



第332図 II B区全測図及び北壁断面土層図

確認され、旧地形に起伏のあることが判明している。統一基本土層の第VI層に相当する。7層-にぶい黄褐色砂礫（10Y R 4/3）で、なかには10cm大の大型円礫を含む。I区西半部で検出され、層厚30~50cmを測る。統一基本土層の第VII層に相当する。

### 3. 調査概要

検出した遺構は竪穴式住居址8棟、超大型建物跡1棟、掘立建物址1棟、溝1条、土坑19基（井戸1基を含む）、横列2条、柱穴388基である。これらの遺構のうち、超大型建物跡については調査区北壁断面の観察を通じて4層堆積過程で遺構の輪郭が確認できたことから、少なくとも遺構面は1面ではなく、複数面存在していたことが判る。このことは遺構埋土が複数色確認できていることとも符合しており、対象地内には複数の時期の遺跡が存在することと関連している。具体的には、遺構には弥生時代中期後葉、同後期終末、古墳時代前期初頭、同中期前半、同中期後葉～後期初頭、古代、中世に帰属するものがあり、遺構の時期が下るに従い、構造埋土が黒色系→灰色系へ変化する傾向はうかがえる。遺構の帰属時期については埋土と出土遺物を総合して判断している。

### 4. 弥生時代の遺構と遺物

#### （1）溝（SD）

##### SD101 [第333図、図版101-3]

調査地西端部のI区、J10、K9・10、L9区に位置し、溝の両端は調査区外へ続く。古墳時代初頭の超大型建物跡を構成する柱穴や古代のSK114に切られる。I区北壁の観察により4層堆積以前に構築されていたことを確認している。規模は検出長16m、幅0.45~0.6m、検出面からの深さは30cmを測り、横断面形態は逆台形に近い。埋土は黒色土（N1.5/0）の單一層で、溝底には砂粒や礫の堆積は認められなかった。遺物はわずかな弥生土器が出土したほか、土師器を数点確認した。

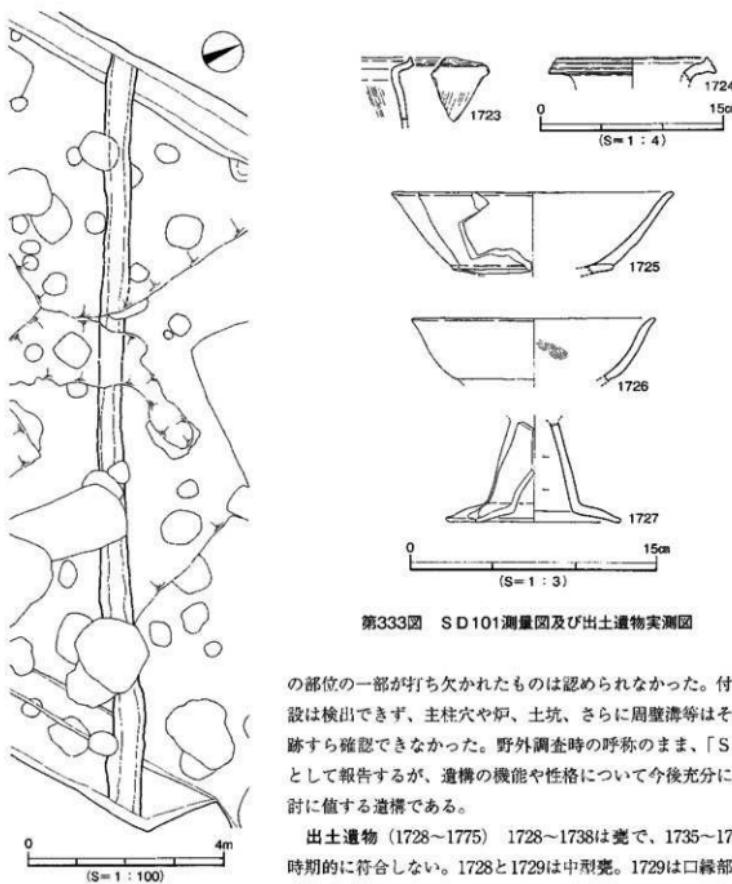
**出土遺物** (1723~1727) 1723と1724は弥生土器の壺と壺の小片である。1725~1727は土師器の高坏で、坏部や脚部が大きく欠損する。

**時期**：遺物には弥生土器と土師器とがあり、直接的に溝に伴う遺物は検出時の遺構重複関係から前者の可能性が高いものと判断される。したがって、SD101の帰属時期は弥生時代中期後葉、梅木編年の伊予中部IV様式に比定される。

#### （2）竪穴式住居址（SB）

##### SB204 [第334~337図、図版101-4・107・108]

調査地東半部のII区、D5、E5区に位置し、検出時は灰色系埋土の柱穴に切られていた。平面形態は隅丸長方形状を呈し、短辺は不整形となる。規模は長軸2.88m、短軸1.1~1.34m、検出面からの深さは20cmを測る。埋土は①層黒色土（7.5Y R 2/1）を主体とし、南北の掘り方付近では②層にぶい黄褐色土（10Y R 4/3）小ブロック混じりの黒色土（7.5Y R 2/1）が認められた。遺物には弥生土器の壺・壺・鉢・高坏・器台・支脚があり、いずれも破片で出土した。これらの土器は、火破片が折り重なって出土しており、まさに遺構内に充填されたような状況を呈していた。また完形品や口縁等

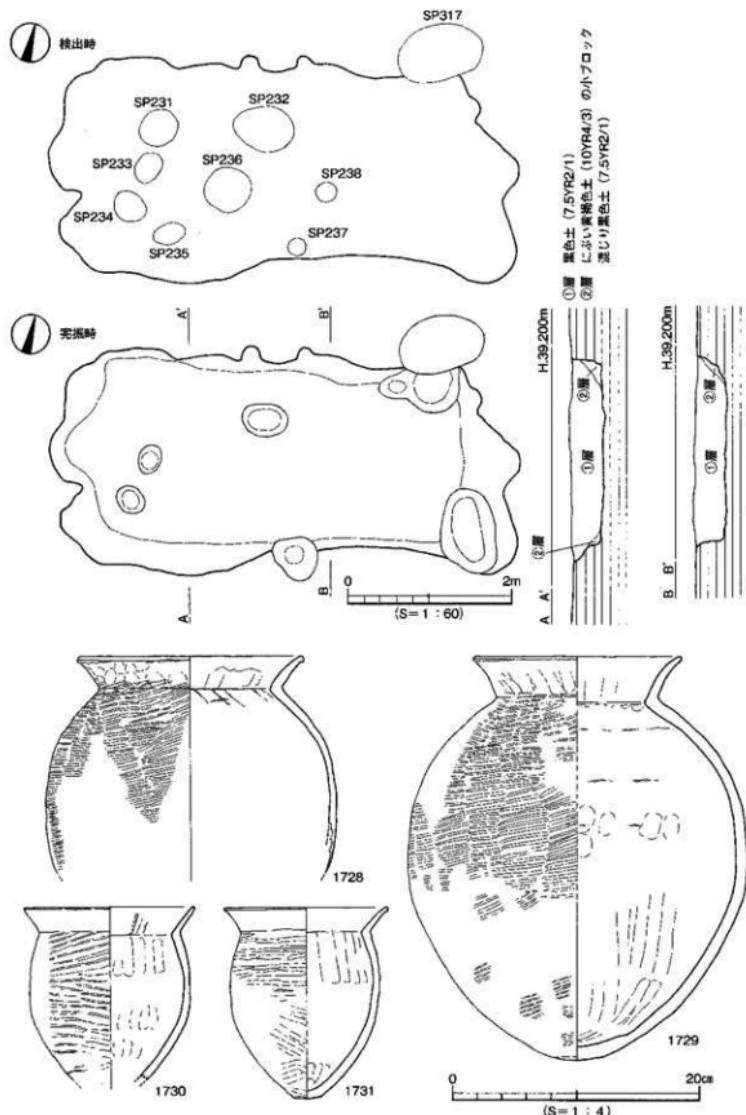


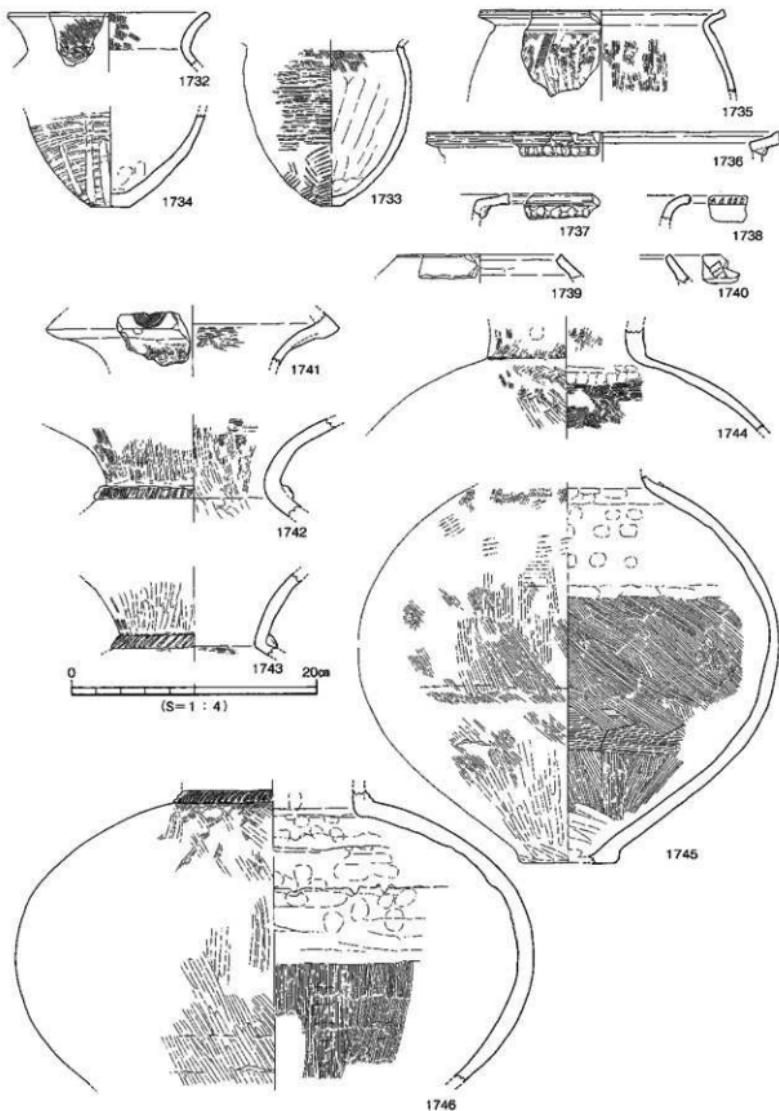
第333図 S D 101測量図及び出土遺物実測図

の部位の一部が打ち欠かれたものは認められなかった。付帯施設は検出できず、主柱穴や炉、土坑、さらに周壁溝等はその痕跡すら確認できなかった。野外調査時の呼称のまま、「S B」として報告するが、造構の機能や性格について今後充分に再検討に値する造構である。

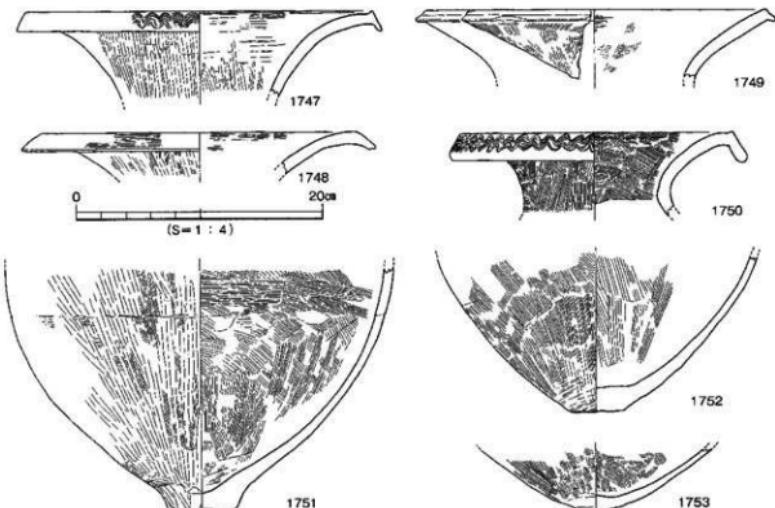
**出土遺物 (1728~1775)** 1728~1738は壺で、1735~1738は時期的に符合しない。1728と1729は中型壺。1729は口縁部が長く、「く」字状を呈し、肩部の張りは強い。胴中位が張り、短胴傾向がうかがえ、底部は丸みのある小さな平底となる。調整は口縁部が指ナデであるのに対し、胴部外面には平行タタキを顯著に残し、底部付近には黒斑が広く認められる。法量は復元口径16.4cm、器高33.2cmを測り、全体の約1/2の遺存である。1730~1734は小型壺。これらは肩部の張りが弱く、胴部の丸みに欠ける。1731は全体の3/4が残り、胴部外面には平行タタキを施す。口径は13.3cm、器高15.7cmを測る。1735~1738は小破片で、遺物の遺存が不良で、遺存良好な遺物の時期と符合しないことから、これらは埋土に混入していた可能性は高く、本造構に直接的に伴う遺物ではない。

1739~1760は壺。口縁部が遺存する複合口縁壺は数少なく、わずかに小型品の2点(1739と1740)、中型品の1点(1741)に限られる。1744~1746は長頸壺の可能性のある胴部である。いずれ





第335図 SB 204出土遺物実測図(2)

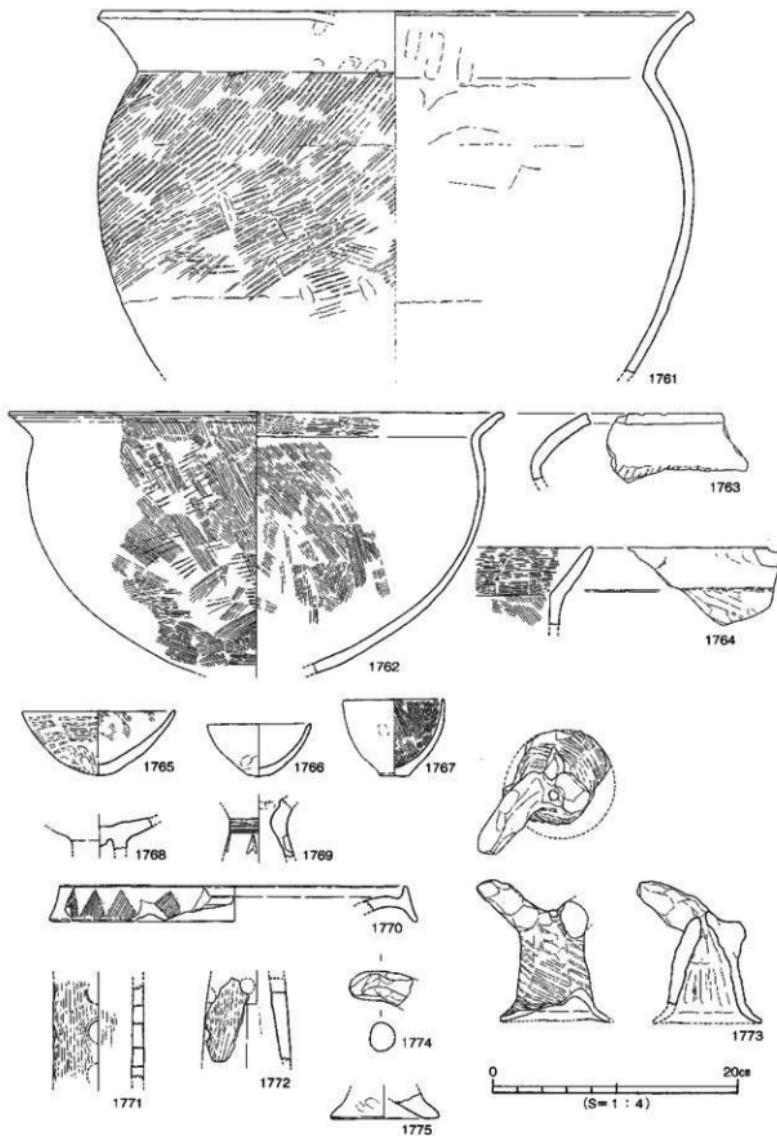


も肩部は張り、とくに1746の張りは強く、胴部が倒卵形を呈する。内外面には3cm間隔で粘土帯の接合痕が観察され、外面は縦～斜位のヘラミガキが顕著にみられる。1747～1750は口縁端部が垂下する広口壺。垂下した口縁端面には櫛搔波状文を施すものもみられる。1751～1753は広口壺の胴の可能性がある。1754～1760は小破片で、本遺構に直接的に伴う遺物ではない。1759や1760のように小破片ながら弥生時代前期に遡る遺物が確認されたことは、本調査対象地周辺に当該期の遺構が存在することを示唆している。

1761～1767は鉢で大型品がみられる。1761は復元口径47.8cmを測る折り曲げ口縁の大型品。口径と最大胴部径は同じとなる。遺存不良ではあるが、口縁に片口部をもつ可能性が高い。調整は胴部外面に平行タタキ痕を顕著にとどめる。1762は復元口径40cmを測り、口径が最大胴部径を凌駕する。胴部外面の調整はタタキ後に粗いハケ目調整である。1763と1764は大型品の可能性がある口縁部片。1765～1767は直口口縁の中型～小型品。これらは大型品に比べて遺存が良好で、ほぼ完形品である。1765は浅いボウル状を呈する中型品で、口径12.4cm、器高5.2cmを測り、底部は丸味をもち、外面には広く黒斑が認められる。1767は塊形を呈する小型品で、口径8.1cm、器高6.3cmを測る。底部は小さい平底で、調整は内面に縦方向の細かいハケ目調整である。

1768と1769は高坏で、1769は時期的に符合しない遺物であり、埋土に混入していた可能性が高い。

第336図 S B204出土遺物実測図(3)



第337図 SB204出土遺物実測図(4)

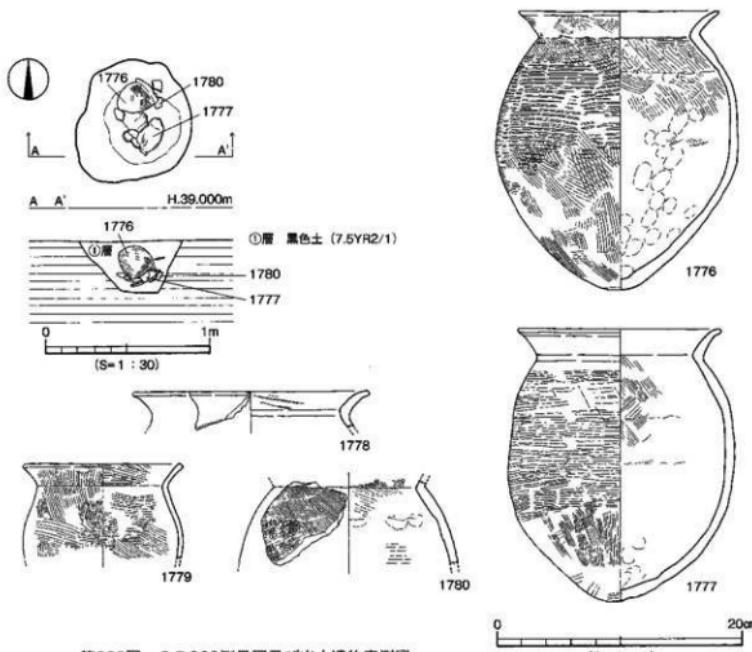
1770～1772は器台である。1770は復元口径28cmを測る大型器台の口縁部片。受部は上下に大きく拡張させ、外面には充填山形文を施す。1773～1775は支脚。1773は中空で、上部には大きな2本の角状突起が取り付き、その間の後ろに小さな背びれ状の突起がみられる。調整は外面に粗いタキ痕、内面にシボリ痕を留める。外面の背びれ状突起側に黒斑が認められる。

時期：埋土と出土遺物の特徴から、S B204の帰属時期は後期終末、梅木編年の伊予中部V-4様式（梅木III-2：終末期新相）に比定される。

### (3) 柱穴 (S P)

S P 362 [第338図、図版101-5・108]

調査地東半部のII B区、G 7区に位置する。平面形態は検出時に不整形を呈していたことから、繰り返し平面精査を行い輪郭の確定に努めたところ、結果的に不整形であると認定せざるを得なかった。規模は東西長0.64m、南北長0.74m、検出面からの深さは32cmを測る。床面は平坦で、横断面形態は逆台形状を呈する。埋土は①層 黒色土（7.5YR2/1）で、3～5mm大の砂礫粒をわずかに含む。遺物は弥生土器の甕がみられ、完形品1個体を含む。これらの土器は、すべてが遺構の床面に接しておらず、層厚4cm程度の埋土が堆積した後に口縁部や胴部片（1778～1780）、さらに2/3程度遺存する1777



第338図 S P 362測量図及び出土遺物実測図

があり、さらにこの上にはほぼ完形の1776が口縁を下にして出土した。遺物の位置関係と遺存状況とから、これらの遺物は遺構が自然埋没する過程で流入したものではなく、人為的に遺構内に収められた可能性が高いものと判断される。

**出土遺物（1776～1780）** 図化可能な遺物は全て壺である。このうち、1776は唯一の完形品である。口径16cmを測る中型品で、口縁部は「く」字状を呈し、肩部の張りは強く、底部は小さな突状を呈する。器高22.8cmを測る短胴品で、調整は外面の上半に平行タタキを顕著に残す。1777は1776に比べやや肩部の張りに欠ける。口縁から胴部上半を大きく欠き、外面に広く黒斑が観察できる。1778は口縁部の小破片で、復元口径19cmを測る。口縁部の屈曲は甘く、外面に稜線は認められない。1779は口縁から胴上半部にかけての破片で、復元口径12.6cmを測る。肩部の張りは弱く、長胴傾向がうかがえる。外面にハケ目調整がみられ、平行タタキは認められない。1780は肩部の張りが強く、外面には平行タタキ後ハケ目調整を施す。

**時期：埋土と出土遺物の特徴とから、S P 362の帰属時期は後期終末、梅木編年の伊予中部V-4様式（梅木III-2：終末期新相）に比定される。**なお、本遺構には複数個体の壺を意図的に収めた状況が認められ、一括遺物に準じる上器群として理解できる。

## 5. 古墳時代の遺構と遺物

当該期の主な遺構は、超大型建物跡、竪穴式住居址、掘立柱建物址、横列である。このほか、多くの柱穴を検出したが遺物を伴うものは少なく、これらは帰属時期を特定することが困難であった。

### （1）超大型建物跡〔第341～353図、巻頭図版5、図版102～105〕

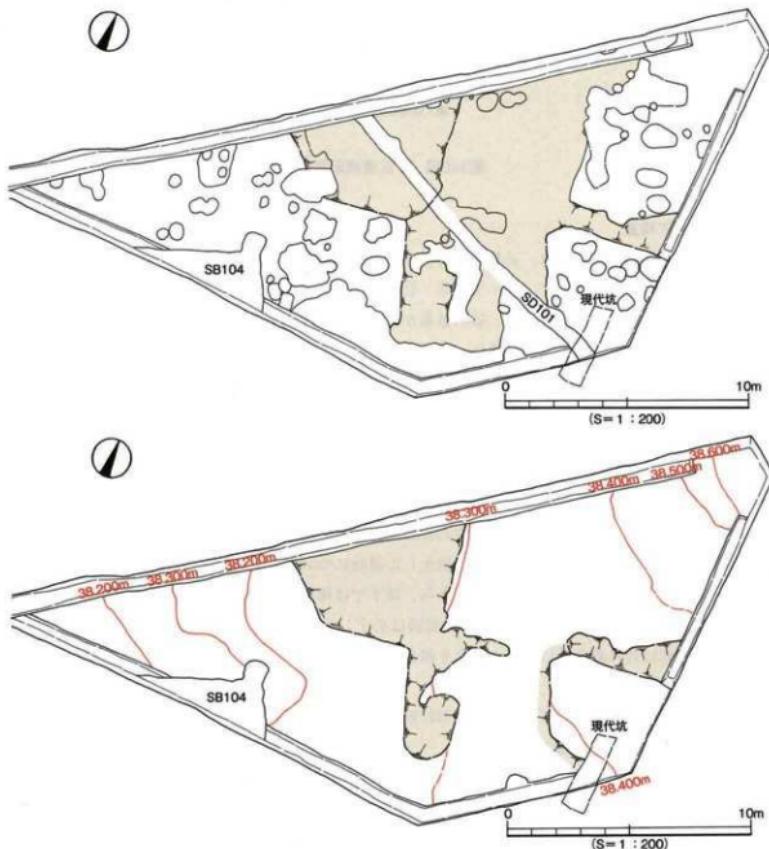
調査地西部に設定したI区の東半部、I 9・10、J 7～10、K 8～11、L 9～11、M 9・10区に位置する6間×6間の縦柱建物である。以下では、まず建物跡の確認に至る過程を明らかにした上で、確認後の柱穴調査について詳述する。

#### 建物跡の確認に至る過程

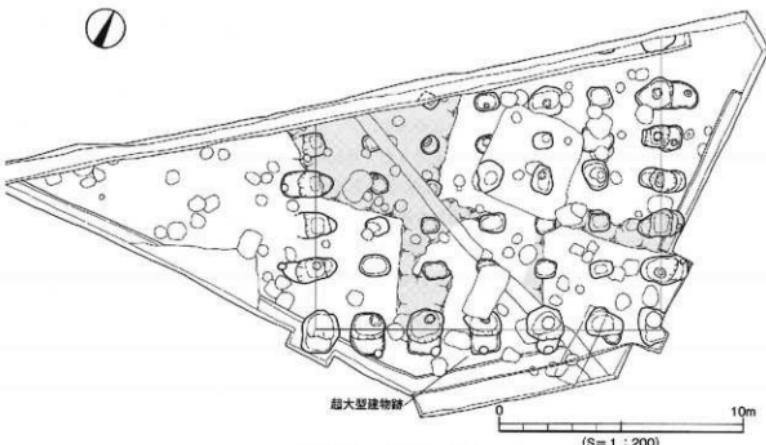
I区における野外調査では、黒色遺物包含層を人力で掘り下げた後に暗褐色土上面にて遺構の輪郭を確定する作業を繰り返し実施することとなった。第339図上段はこの遺構検出作業の初期段階を示したものである。調査区の東半部を中心として規模が5～6m程度の平面方形を呈する土の違いが3ヶ所で認められた〔図版102-1〕。一辺5～6m程度の平面方形のものは当初竪穴式住居址の可能性が高いと判断して、十文字にセクションベルトを設定して埋土の精査に着手した。ところが、わずか数cmの深さしか遺存しておらず、床面も凹凸が著しくみられ、また主柱穴や周壁溝といった竪穴式住居址の付帯施設として常見される遺構が全く確認されなかつことから、これらが竪穴式住居址ではなく、地形変更に伴う段カットが遺存している可能性を考えた。この認識は結果的に概ね妥当なところであった〔第339図下段〕。これらと併行して調査区周囲には雨天時の排水を意図して、深掘りトレンチを設定した。北トレンチの東端付近で断面土層に深さ0.7～1mを測る大型の柱穴か土坑状遺構が存在することを確認した。また、これらは黒色遺物包含層をわずかに切り込んで構築されていることも確認した。しかしながら、この時点では建物を構成する柱穴の多くは判然としておらず、この2基の遺構から調査区内に超大型建物跡が存在することは認識できていなかった。したがって、I区

で既に輪郭が確定していた遺構については、個々に遺構番号を付し、埋土を確認した後に精査に着手した。よって、東柱の多くが、建物を構成する柱穴と認識されることなく、個別に精査を進めた。土層を断ち割ったラインが建物の柱筋を通過していないのはこのためである。また、東柱の多くは、埋土が単一層で、柱痕跡を留めるものは少なかった。

梅雨が明け、I 区の遺構の輪郭がほぼ確定できた 7 月 15 日に超大型建物跡 1 棟の存在を確認した。全体の遺構の輪郭が確定して測量したのが第340図である。このように、超大型建物跡は、地形改変の段カットや凹地に溜まっていた黒色遺物包含層を除去し、さらに遺構の重複関係を執拗に追究した結果、確認するに至ったものである。なお、建物跡の北の側柱についてはその大半が調査区外に位置しており、わずかに 2 基を断面にて確認したに留まる。



第339図 I 区地形測量図



第340図 I区遺構配置図

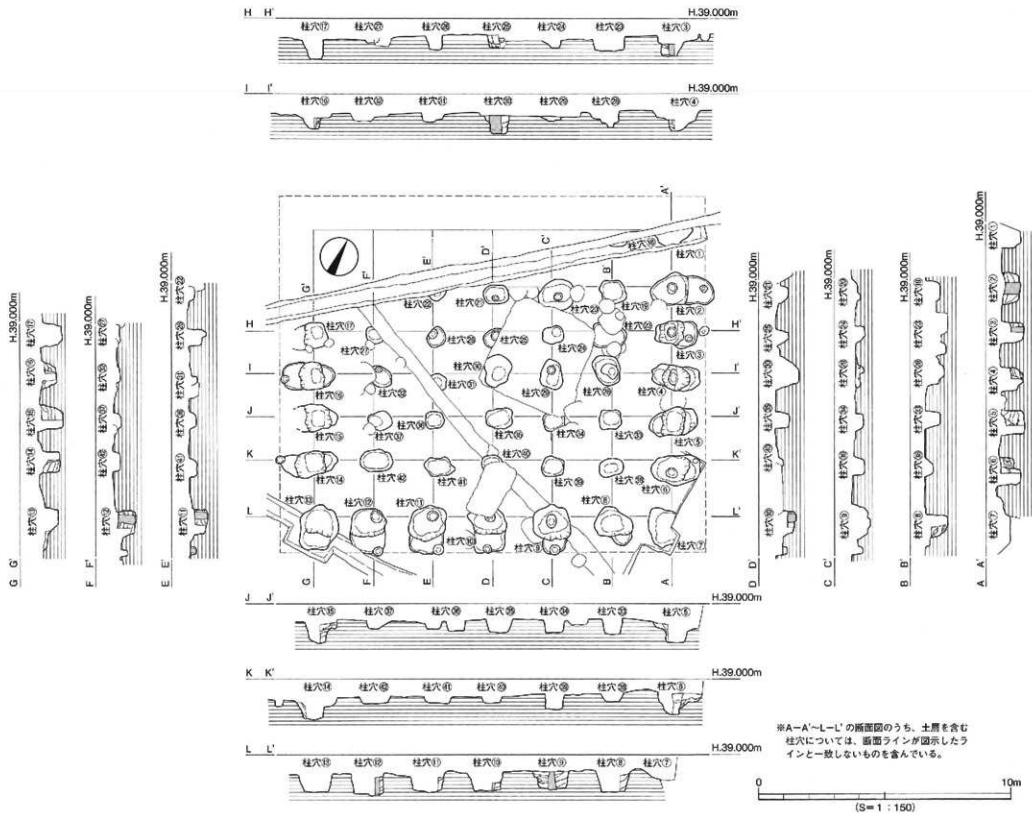
#### 確認後の柱穴精査

建物を構成する柱穴の精査は、必然的に側柱が中心となった。精査は、まず柱痕跡を平面的に確認することから着手した。柱穴②・③・⑨・⑩・⑪・⑫・⑯・⑰の8基からは平面と断面にて柱痕跡が確認され、柱穴④・⑤・⑥・⑧・⑭・⑮の6基からは柱抜き取り跡を平面と断面にて確認することができた。各柱穴におけるこれらの成果は、精査目的をより明確にした上で、より意識的に埋土の精査を実施したことにより得られたものである。調査中に遺物が出土した場合は帰属する土層を特定することに努め、現地にて繰り返し検討を行った。なお、柱穴⑦については農業用水路を保全する必要から柱穴の輪郭を検出した面で調査を終えたため、これ以上の精査は控えざるを得なかった。

このように、超大型建物跡を構成する柱穴の調査は大きく二つの段階に分けられ、確認後の柱穴精査、すなわちⅡ段階での調査で多くの良好な情報を獲得することができたのである。個々の柱穴については、Ⅱ段階で精査を実施した柱穴を中心に観察所見を報告し、事実関係を明確にしておきたい。超大型建物跡を認定する以前に各柱穴から出土した遺物についても併せて報告するが、これは取り上げ時の土層観察と記録が充分ではないことから、以下では帰属埋土不詳として扱うことを予め明記しておく。なお、第341図に掲載した柱列の断面図は必ずしも平面図に記載した断面ラインとは合致していない。これは野外調査時に断面土層図を測量したラインが、復元した柱筋とわずかに異なることに起因している。

**平面形態：**超大型建物跡の平面形態は方形に近いものであり、明確な幅の狭い長方形と異なる。建物跡の長軸はN-25°-Wを指向する。

**規模：**超大型建物跡の規模は梁間6間で11.4m、桁行6間で14.2mを測り、床面積は161.88m<sup>2</sup>を測る。建物北の側柱については7基のうち、精査ができたのは2基（柱穴①と⑰）に限られるが、縦じて側柱の柱穴が、東柱に比べて掘り方は大きくかつ深い。また側柱の柱穴には建物の外方向にテラスを有する傾向がある。さらに東西側柱の柱穴には建物の内と外の両方にテラスを有するものもみられた。



第341図 超大型建物跡 測量図

なお、建物中央に位置する柱穴②は他の東柱の柱穴と異なり、掘り方が大きくかつ深く、立柱痕跡が側柱のものとほぼ同じ直径40cmを測る。よって、この柱穴②は床を支えるのみならず、床を突き抜けて屋根まで到達する屋内棟持ち柱の機能をも併せ持っていたと理解される。以下、各柱穴の所見を詳述する。

#### 構成する柱穴（側柱）

**柱穴①**〔第342図上、図版105-1〕：建物の北東隅に位置する側柱穴。野外調査時のI区北壁断面の精査中に確認され、4層の黒色上の一部を切り込んで構築されている。北壁深掘りトレンチでは平面形態が隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.3m、検出面からの深さは108cmに達する。柱穴掘り方の東側は段状のテラスとなり、柱穴最深部との比高差は25-35cmを測り、最深部の標高は37.6mとなる。立柱痕跡や抜き取り痕は確認するに至っていない。埋土は①～⑫に分層され、図化可能な遺物は埋土下層の⑥層から弥生時代中期後葉、梅木編年の伊予中部IV様式に比定される高坏の口縁部片1781と壺底部片1782が出土している。

**柱穴②**〔第342図下、図版104-1〕：建物東の側柱穴で、柱穴①の南に位置する。平面形態は長楕円形となり、規模は長軸2.55m、短軸1.3m、検出面からの深さは72cmを測り、最深部の標高は37.66mとなる。柱穴掘り方の西寄りで立柱痕跡を断面にて確認する。埋土は①～⑦に分層され、このうち⑥層が立柱痕跡で、直径40cmを測り、⑦層は礎板痕跡の可能性が考えられる。なお、柱穴内埋土は上層と下層に括ることが可能である。立柱痕跡から東方向1.35m地点にて小穴を検出している。規模は直径30cm、検出面からの深さ44cmを測る。図化可能な遺物は⑤層から弥生時代後期中葉前後の壺底部片1783、⑥層からは壺口縁部片1784と1785が出土している。

**柱穴③**〔第343図上〕：建物東の側柱穴で、柱穴②の南に位置する。平面形態は不整隅丸長方形となり、規模は長軸1.6m、短軸1.05m、検出面からの深さは90cmを測り、最深部の標高は37.5mとなる。柱穴掘り方の西寄りで立柱痕跡を断面にて確認する。埋土は①～⑦に分層され、このうち⑥層が立柱痕跡で、直径38cmを測り、⑦層は礎板痕跡の可能性が考えられる。なお、柱穴内埋土は上層と下層に括ることが可能である。立柱痕跡から東方向1.35m地点にて小穴を検出した（断面土層図のA～A'）。規模は直径37～40cm、検出面からの深さ30cmを測る。図化可能な遺物は④層から弥生時代前期の如意形口縁甌の口縁部片1786、壺底部片1787、上層から弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭のボウル状を呈する直口口縁鉢の口縁部片1788と1789、支脚片1790、⑥層から壺口縁部小片1791のほか、帰属埋土不詳遺物に1792～1795がある。

**柱穴④**〔第343図下、図版109〕：建物東の側柱穴で、柱穴③の南に位置する。平面形態は長楕円形となり、規模は長軸1.95m、短軸1.0m、検出面からの深さは93cmを測り、最深部の標高は37.53mとなる。柱穴掘り方のやや西寄りで柱抜き取り痕跡を断面にて一部確認する。埋土は①～⑩に分層され、このうち⑥層が柱抜き取り痕跡である。なお、柱穴内埋土は上層と下層に括ることが可能である。図化可能な遺物には口端に凹線文を施した広口壺小片1796、外面に平行タタキ痕と細かい刷毛目調整が認められる丸底片1797、器台の裾付近の小片1798があり、これらはいずれも帰属埋土不詳遺物である。1798は色調が赤色（10R5/6）を呈し、推定径22cmの円形透かしが千鳥状に施され、外面は丁寧なヘラミガキである。

**柱穴⑤**〔第344図上、図版104-2・109〕：建物東の側柱穴で、柱穴④の南に位置する。平面形態は不整長楕円形となり、規模は長軸1.84m、短軸1.09m、検出面からの深さは97cmを測り、最深部の標

高は37.47mとなる。柱穴掘り方のやや西寄りで柱抜き取り痕跡を断面にて一部確認する。埋土は①～⑧に分層され、このうち①②層が柱抜き取り痕跡埋土である。なお、柱穴内埋土は上層と下層に括ることが可能である。図化可能な遺物には「く」字状口縁壺の口縁部小片1799～1801、複合口縁壺の小片1802、広口壺の口縁部と肩部片1803と1804があり、これらはいずれも帰属埋土不詳遺物である。

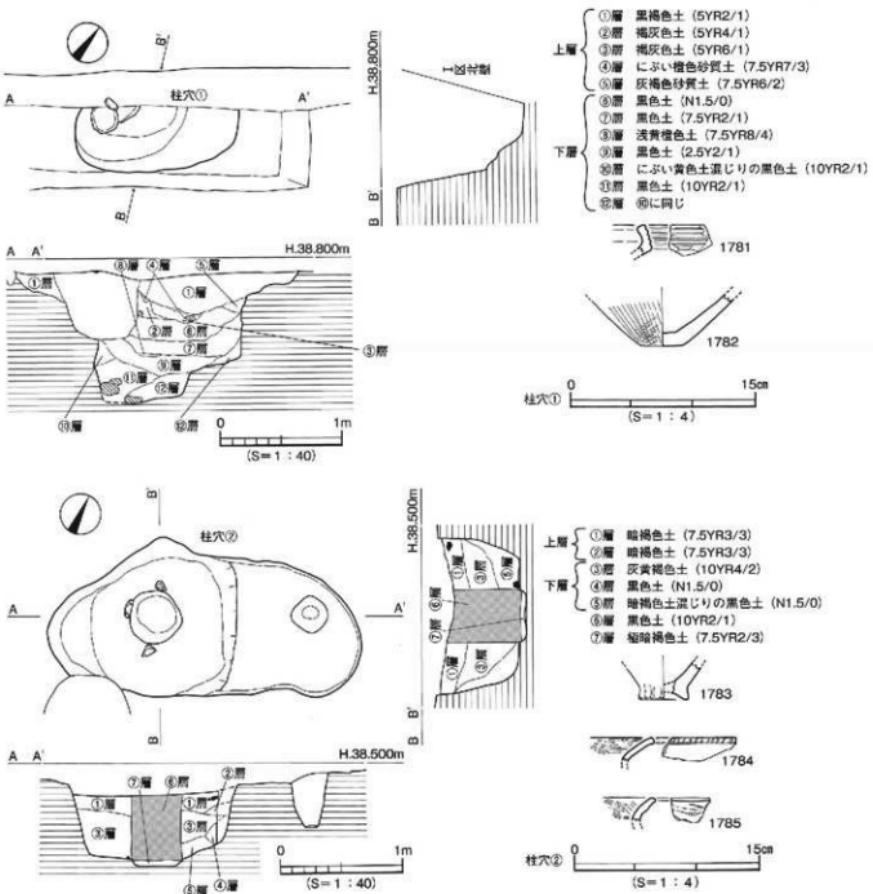
**柱穴⑥**〔第344図下〕：建物東の側柱穴で、柱穴⑨の南に位置する。平面形態は不整隅丸長方形となり、規模は長軸1.95m、短軸1.2m、検出面からの深さは100cmを測り、最深部の標高は37.6mとなる。柱穴掘り方のやや西寄りで柱抜き取り痕跡を断面にて一部確認する。埋土は①～⑨に分層され、このうち⑦～⑨層が柱抜き取り痕跡埋土である。なお、柱穴内埋土は上層と下層に括ることが可能である。図化可能な遺物には抜き取り痕跡埋土から広口壺の口縁部片1805、帰属埋土不詳遺物の壺口縁部小片1806～1809、ボウル状の鉢片1810がある。

**柱穴⑦**〔第345図上、図版109〕：建物東南隅の側柱穴。野外調査では可能な限り柱穴プランを確認した後に立柱痕跡や抜き取り痕跡を確認すべく、埋土の精査に着手した。初期段階に著しい湧水が認められた為、精査を途中で断念した。よって、埋土の大半は未掘となつた。平面形態は不整隅丸長方形となる可能性が高く、規模は検出長軸1.07m、短軸1.6mを測る。図化可能な遺物には柱穴検出時に出土した壺の胴部上半片1811や中実の支脚1814、中空の支脚1815があり、1815は受部が傾斜し、外面上には指頭痕が顯著に残る。

**柱穴⑧**〔第345図下、図版104-3・109〕：建物南の側柱穴で、柱穴⑦の西に位置する。平面形態は不整隅丸長方形で、北西部と南西部に突出部があり、後者は明確なテラス状を呈する。規模は長軸1.63m、短軸1.52m、検出面からの深さは93cmを測り、最深部の標高は37.52mとなる。柱穴掘り方のやや東寄りで柱抜き取り痕跡を断面にて一部確認する。埋土は①～⑥に分層され、このうち①②層が柱抜き取り痕跡埋土である。図化可能な遺物には抜き取り痕跡埋土から複合口縁壺の口縁部片1816、帰属埋土不詳遺物に弥生時代中期後葉の高坏小片1817、器台の胴部小片1818があり、1818は推定直径2.4cmの円孔がみられ、外面上にヘラミガキ調整が施される。色調は赤色（10R5/6）を呈し、1798と同胎土で、同一個体の可能性もある。

**柱穴⑨**〔第346図上、図版109〕：建物南の側柱穴で、柱穴⑧の西に位置し、S D101を切る。平面形態は不整隅丸長方形で、掘り方の南側が段状のテラスとなる。規模は長軸1.95m、短軸1.5m、検出面からの深さは72cmを測り、最深部の標高は37.6mとなる。柱穴掘り方の北西寄りで立柱痕跡を断面にて確認する。埋土は①～⑨に分層され、このうち⑨層が立柱痕跡の埋土となり、下部での柱直径は34cmを測る。なお、柱穴内埋土は上層と下層に括ることが可能である。立柱痕跡から南東1.3mの地点にて小穴を検出しており、規模は直径30～40cm、検出面からの深さは46cmを測る。図化可能な遺物には埋土下層出土の壺口縁部小片1819と1820、埋土上層出土の壺口縁部小片1821、帰属埋土不詳遺物に壺1822、広口壺1823、高坏脚裾部1824、折り曲げ口縁の鉢1825がある。このうち1824は外面に細かい刷毛目調整後に推定直径1.8cmを測る円孔が並列して施される。色調は赤色（10R5/6）で、1818と同色となる。1825は精良な土を胎土に用いており、色調はにぶい橙色（7.5Y R6/4）を呈し、復元口径は18cm程度となる。

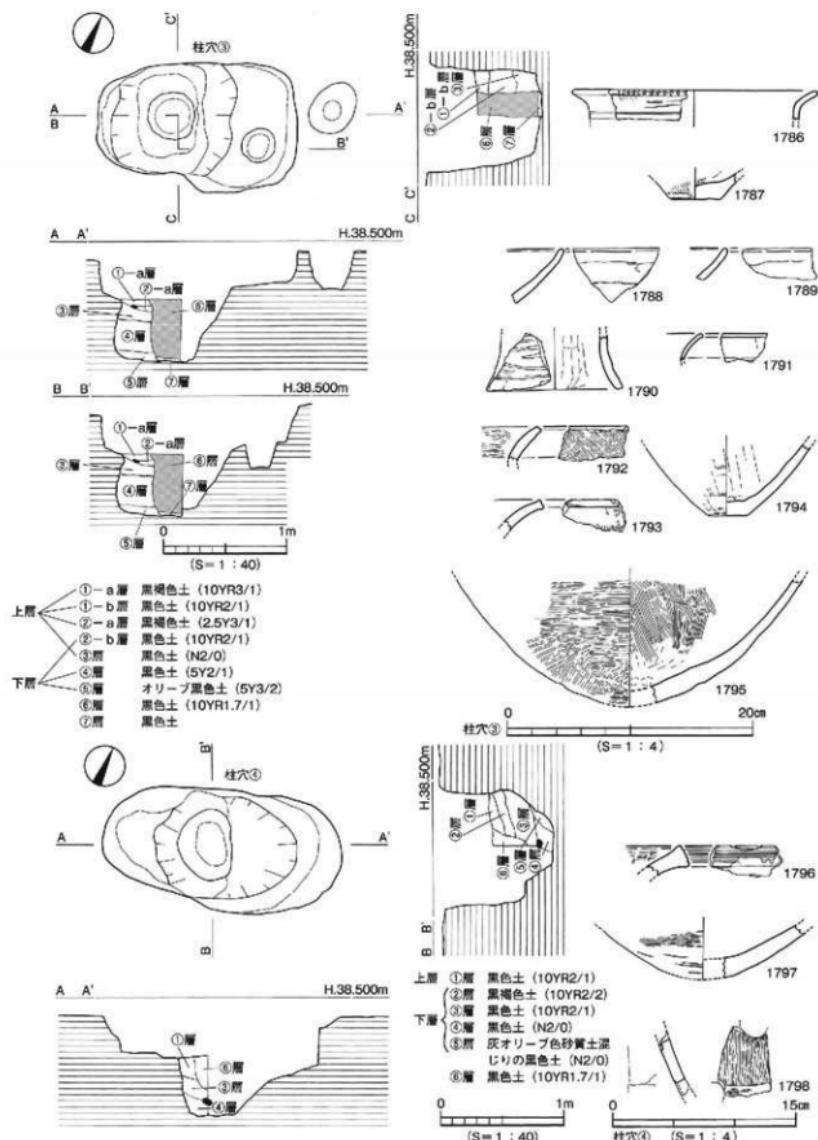
**柱穴⑩**〔第346図下〕：建物南の側柱穴で、柱穴⑨の西に位置し、S K114に切られる。平面形態は不整隅丸長方形で、掘り方の南側が段状のテラスとなる。規模は長軸1.77m、短軸1.3m、検出面からの深さは72cmを測り、最深部の標高は37.53mとなる。柱穴掘り方の北西寄りで立柱痕跡を断面にて



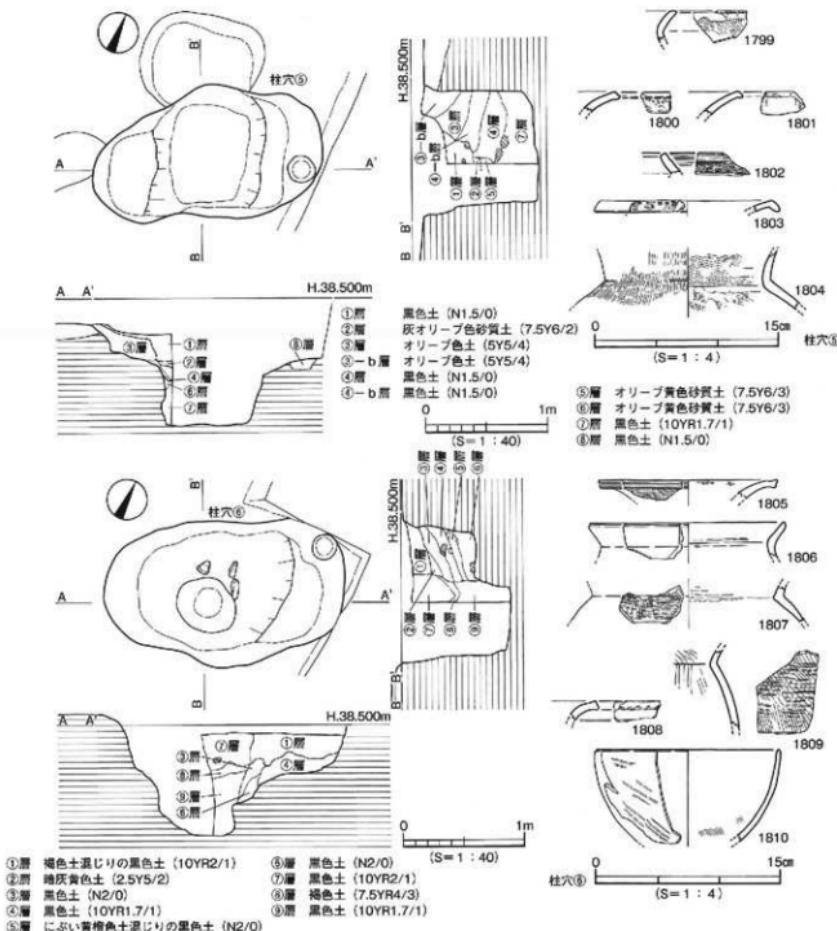
第342図 超大型建物跡 柱穴①・②測量図及び出土遺物実測図

確認する。埋土は①～④に分層され、このうち④層が立柱痕跡の埋土となり、下部での柱直径は30cmを測る。なお、立柱痕跡から南東1.3～1.35mの地点にて小穴を検出しており、規模は直径30～35cm、検出面からの深さは20cmを測る。図化可能な遺物には埋土下層出土の壺口縁部小片1826、埋土上層出土の壺口縁部小片1827、帰属埋土不詳遺物に鉢の可能性がある口縁部小片1828がみられる。

柱穴⑪〔第347図、図版110〕：建物南の側柱穴で、柱穴⑩の西に位置する。平面形態は不整隅丸長方形で、掘り方の南側が段状のテラスとなる。規模は長軸1.82m、短軸1.43m、検出面からの深さは65cmを測り、最深部の標高は37.56mとなる。柱穴掘り方の北東寄りで立柱痕跡を断面にて確認する。

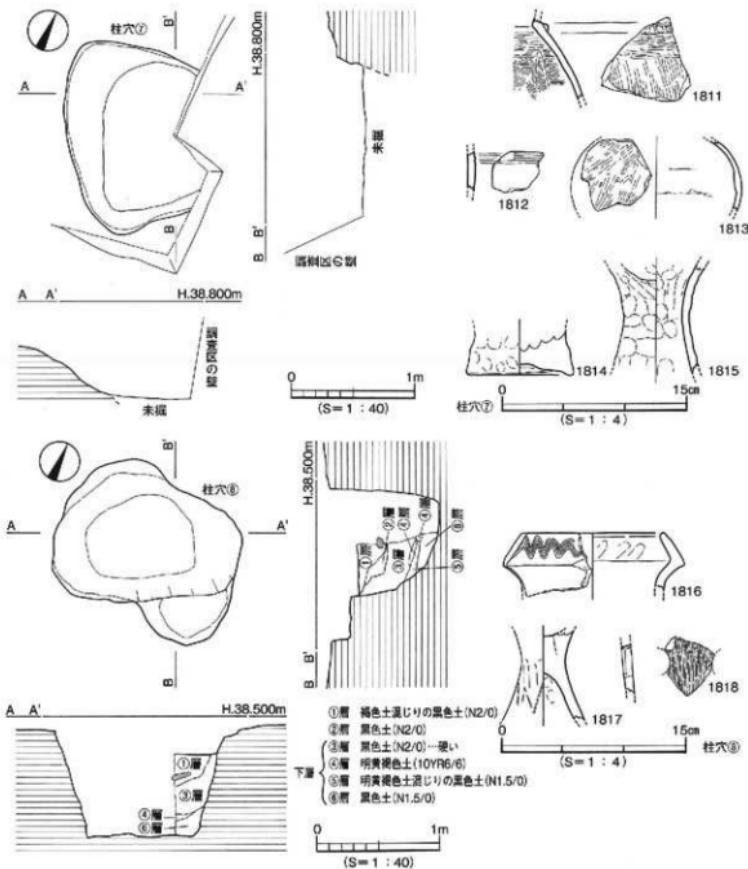


第343図 超大型建物跡 柱穴③・④測量図及び出土遺物実測図



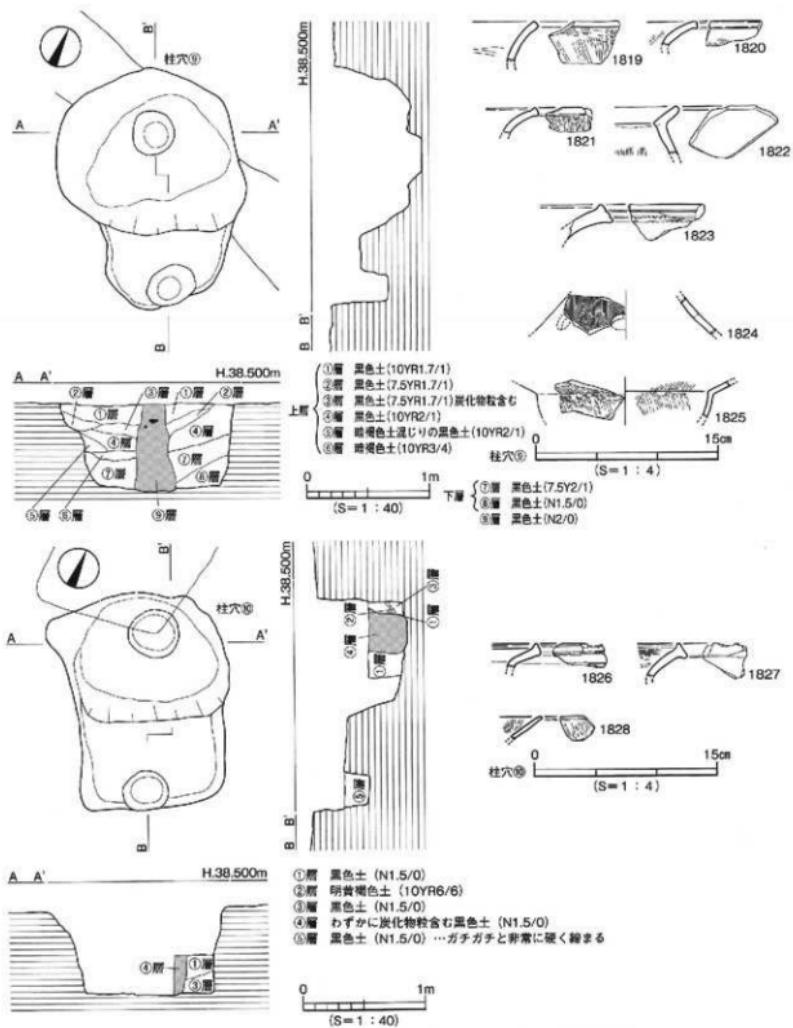
第344図 超大型建物跡 柱穴⑤・⑥測量図及び出土遺物実測図

埋土は①～⑦に分層され、このうち⑥層が立柱痕跡の埋土となり、下部での立柱痕跡直径は29cmを測る。なお、立柱痕跡から南東1.4mの地点にて小穴を検出しており、規模は直径35cm、検出面からの深さは28cmを測り、断面にて直径16cmの立柱痕跡を確認している。図化可能な遺物には埋土上層から壺1829～1834、壺底部1835、支脚1836のほか、主柱の立柱痕跡埋土から壺口縁部小片1837と壺底部片1838、帰属埋土不詳遺物の壺1839、壺あるいは鉢の口縁部小片1840、折り曲げ口縁の鉢1841がある。



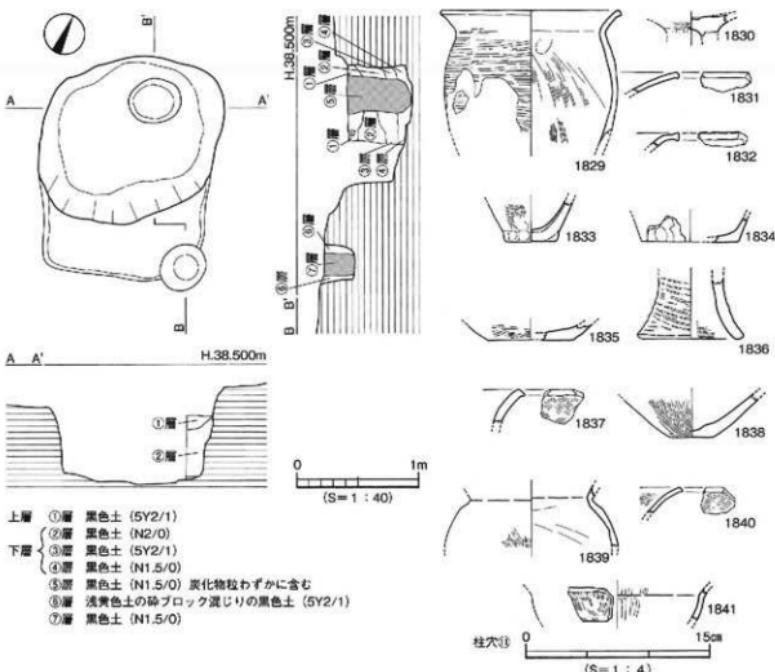
第345図 超大型建物跡 柱穴⑦・⑧測量図及び出土遺物実測図

**柱穴⑫** [第348図、図版110]：建物南の側柱穴で、柱穴⑪の西に位置する。平面形態は不整隅丸長方形で、掘り方の南側が段状のテラスとなる。規模は長軸1.9m、短軸1.36m、検出面からの深さは84cmを測り、最深部の標高は37.41mとなる。柱穴掘り方の北東寄りで立柱痕跡を断面にて確認する。埋土は①～⑥に分層され、このうち⑦層が立柱痕跡の埋土、⑧層が整地あるいは礫板痕跡と考えられる。下部での立柱痕跡の直径は35cmを測る。なお、立柱痕跡から南東1.35mの地点にて小穴を検出しておらず、規模は直径33cm、検出面からの深さは27cmを測る。図化可能な遺物には埋土下層出土の1842



第346図 超大型建物跡 柱穴⑨・⑩測量図及び出土遺物実測図

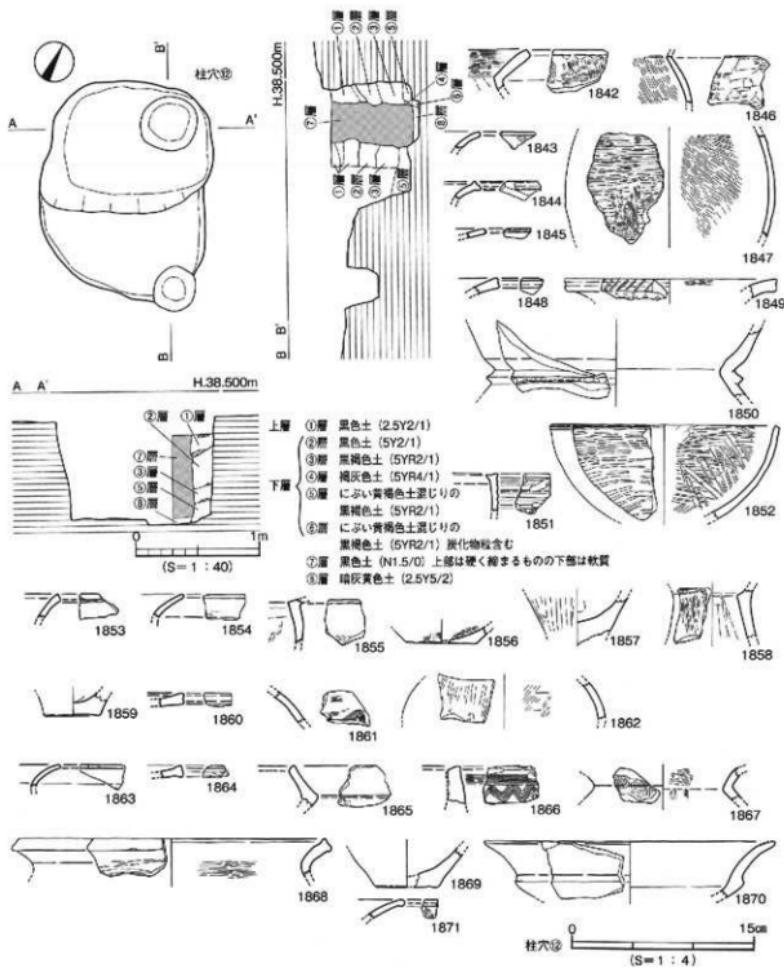
～1852、埋土上層出土の1853～1858、立柱痕跡埋土出土の1859～1862、帰属埋土不詳遺物の1863～1871があり、他の側柱の柱穴と比べて、比較的多くの遺物が出土している。1847は外面にタタキ調整を施した壺の胴部片、1852はボウル状の鉢で、口縁部は直口し、外面には平行タタキ痕が顕著である。



第347図 超大型建物跡 柱穴⑩測量図及び出土遺物実測図

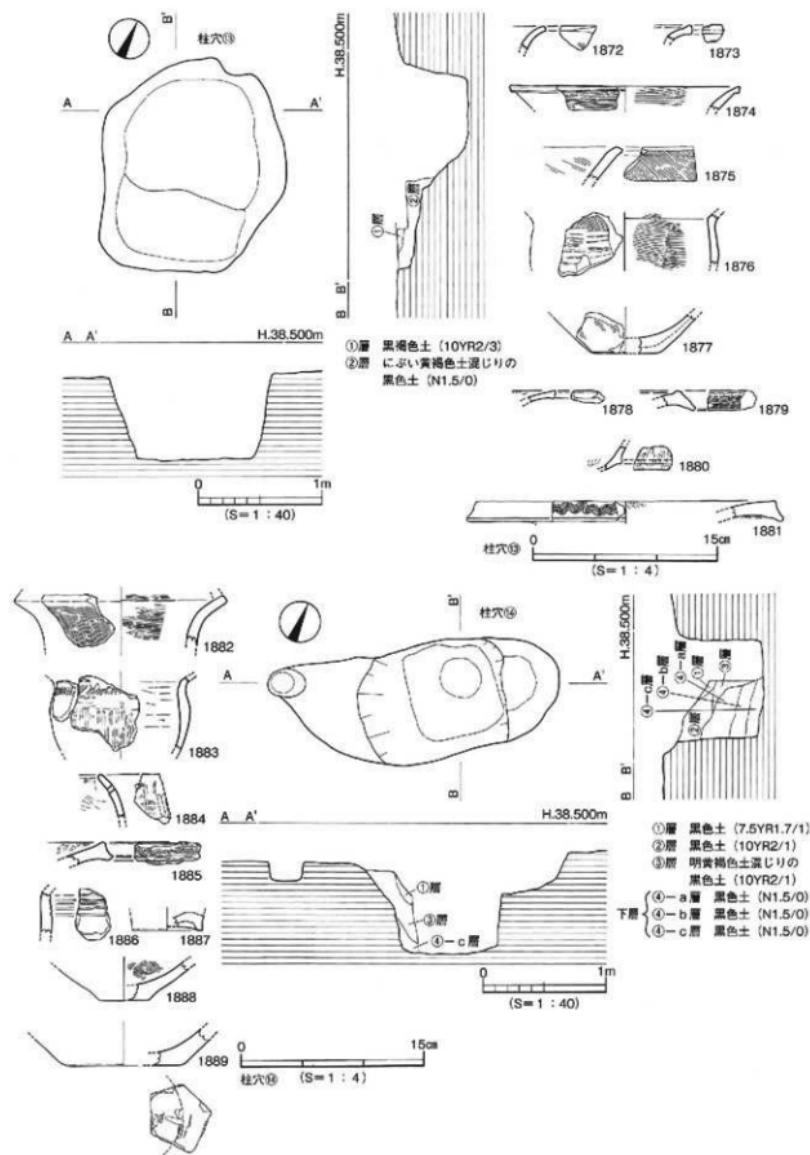
**柱穴⑩**〔第349図上、図版110〕：建物南西隅の側柱穴である。平面形態は不整隅丸長方形状を呈し、掘り方の南側が段状のテラスとなる。規模は長軸1.80m、短軸1.55m、検出面からの深さは70cmを測り、最深部の標高は37.53mとなる。柱穴内埋土を慎重に平面精査したが、立柱痕跡をはじめ、柱抜き取り痕跡埋土を確認するには至らなかった。埋土は黒褐色土（10Y R 2/3）、にぶい黄褐色土混じりの黒色土（N1.5/0）である。図化可能な遺物には埋土下部から甕の口縁部小片1872、埋土上部から甕の口縁部小片1873と、復元口径18.4cmを測る甕の口縁部小片1874が出土した。口縁外面には平行タタキ痕を施す。1875～1881は帰属埋土不詳遺物である。1879は口縁端部が垂下し、5条の櫛描波状文を施した長頸甕の口縁部小片。1880は二重口縁甕の口縁部小片かあるいは小型器台である。1881は復元口径24.4cmを測る器台の口縁部片。色調はにぶい橙色（7.5Y R 6/4）を呈する。

**柱穴⑪**〔第349図上、図版110〕：建物西の側柱穴で、柱穴⑩の北に位置する。平面形態は不整長梢円形状を呈し、掘り方の東と西側が段状のテラスとなる。規模は長軸2.38m、短軸0.93m、検出面からの深さは82cmを測り、最深部の標高は37.45mとなる。柱穴内埋土は①～④に細分でき、このうち①～③層が柱抜き取り痕跡埋土となる。この理解に立脚すれば、主柱は掘り方中央から北30cm程度の

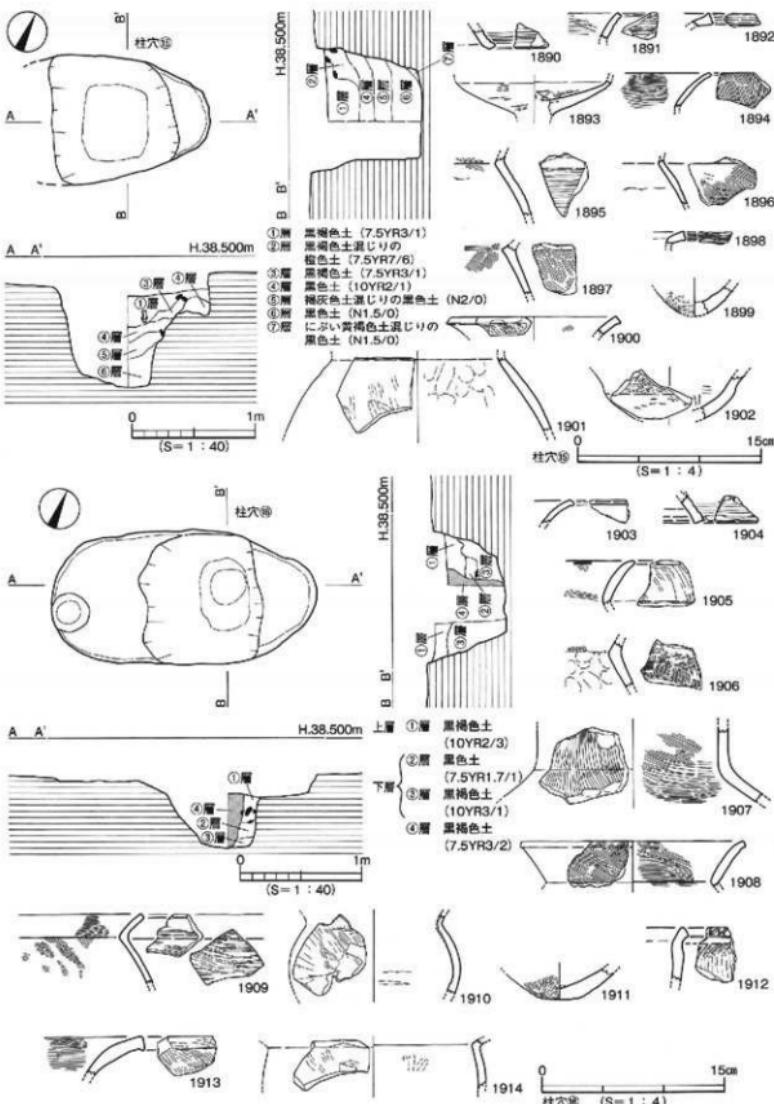


第348図 超大型建物跡 柱穴跡測量図及び出土遺物実測図

地点に位置していた可能性を指摘できる。なお、掘り方の西端部で小穴を検出した。規模は直径25~30cm、検出面からの深さは15cmを測る。図化可能な遺物には埋土下層から複合口縁壺の1次口縁部片1882、埋土上層から壺の胴部上半片1883と無頸壺の口縁部片1884が出土している。柱抜き取り痕跡埋土からは広口壺の口縁部小片1885があり、帰属埋土不詳遺物には壺と壺の小片がある。

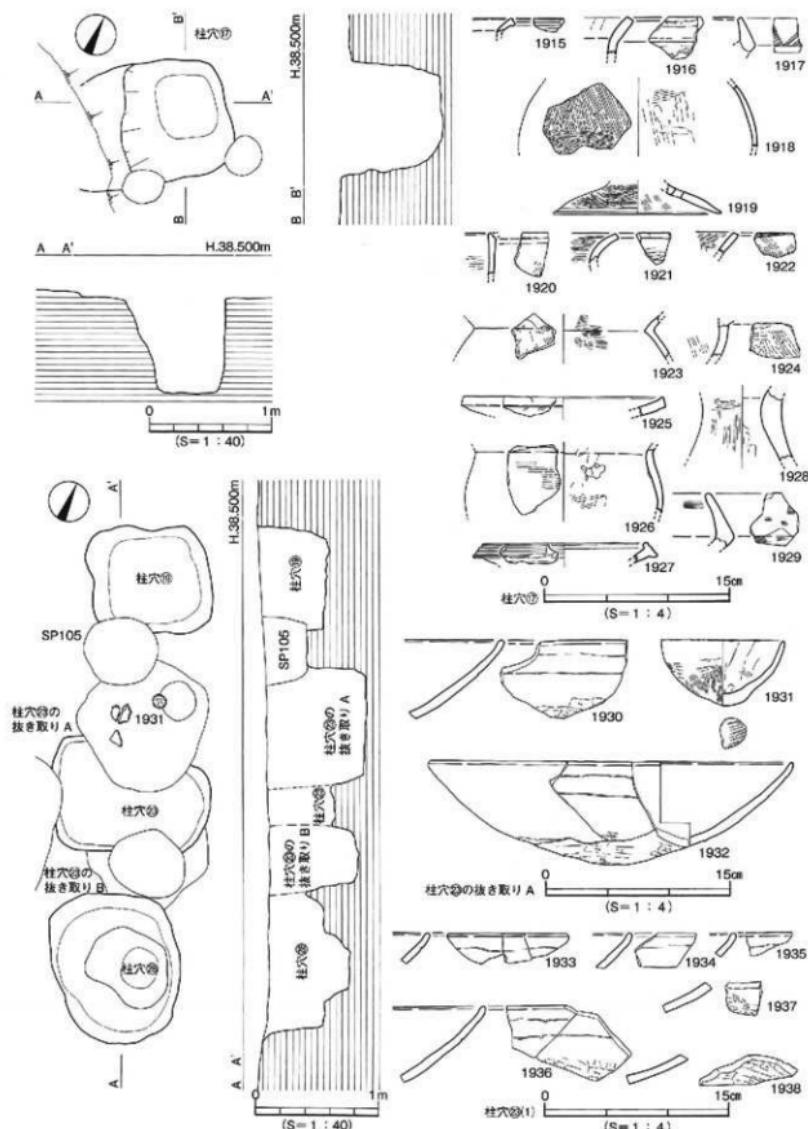


第349図 超大型建物跡 柱穴⑬・⑮測量図及び出土遺物実測図

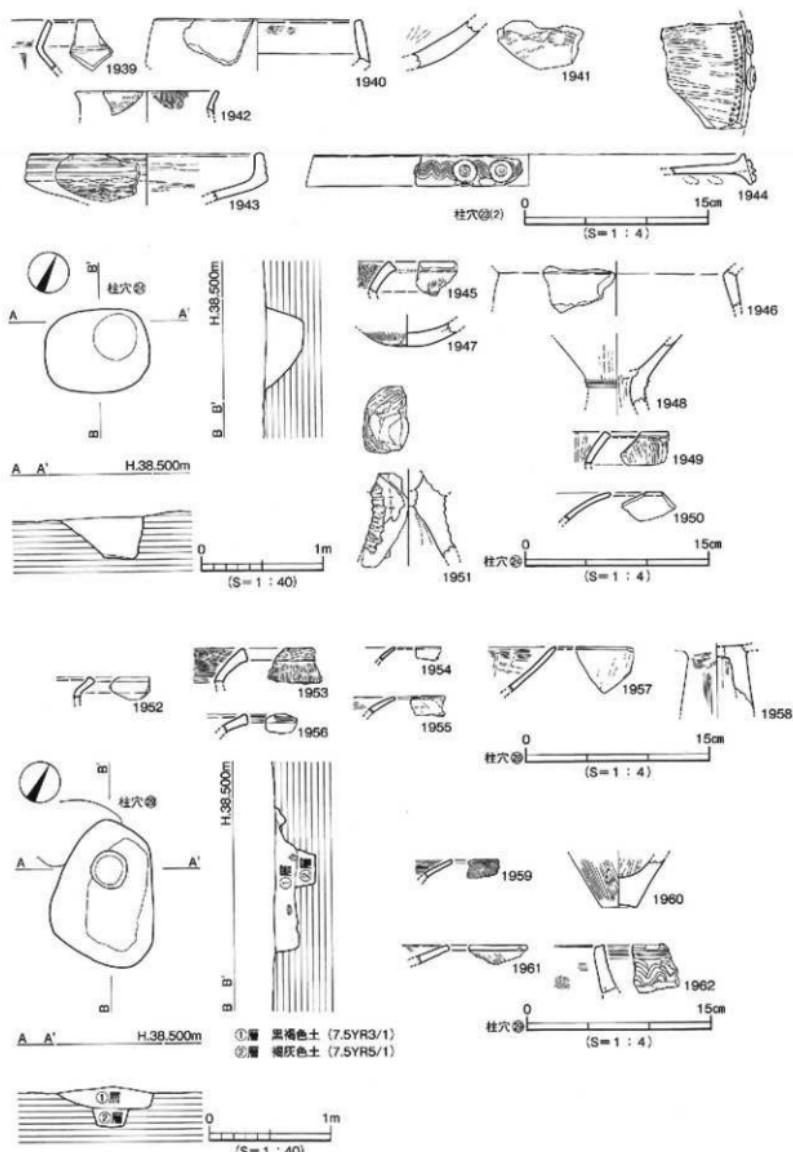


第350図 超大型建物跡 柱穴⑯・⑮測量図及び出土遺物実測図

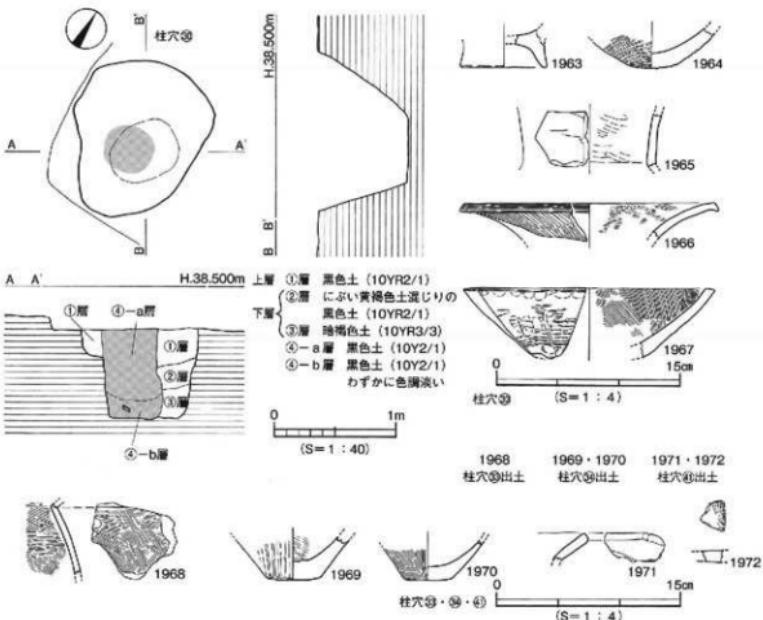
椎味四反地遺跡8次調査地



第351図 超大型建物跡 柱穴(1)・◎測量図及び出土遺物実測図



第352図 超大型建物跡 柱穴◎・◎・◎・◎測量図及び出土遺物実測図



第353図 超大型建物跡 柱穴⑩・⑪・⑫・⑬・⑭測量図及び出土遺物実測図

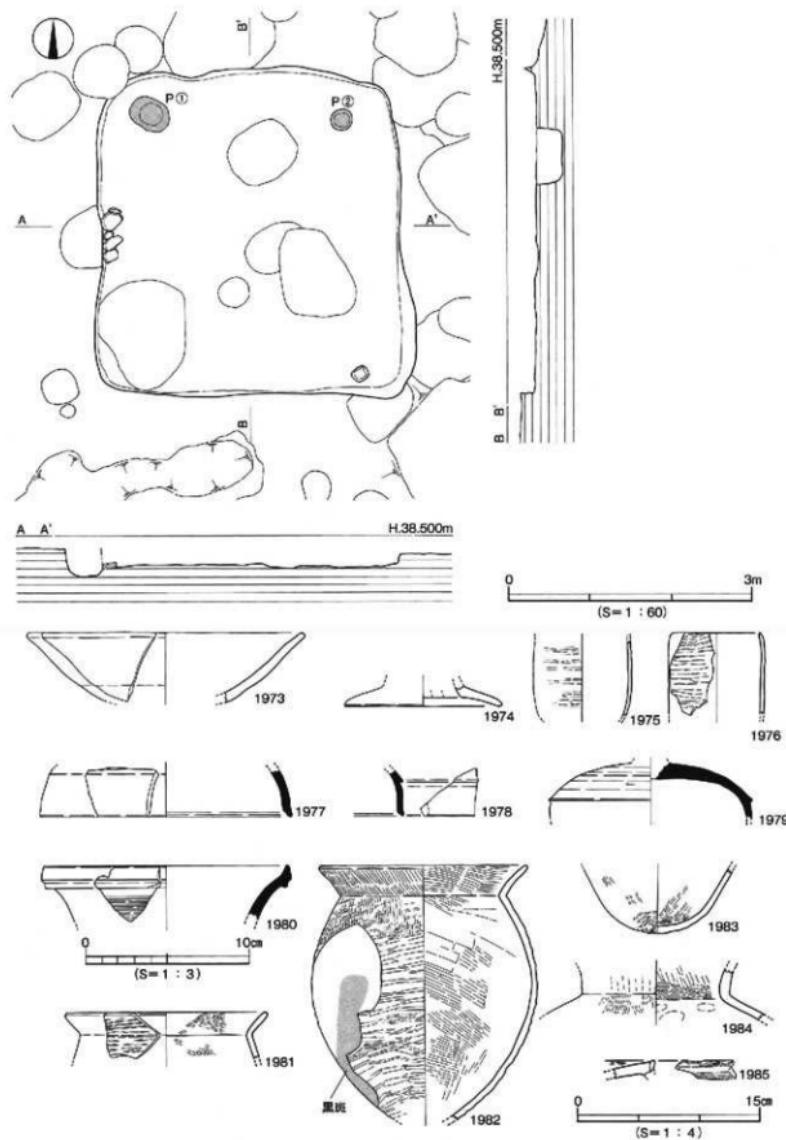
**柱穴⑩**〔第350図上、図版110〕：建物西の側柱穴で、柱穴⑩の北に位置する。平面形態は不整圓丸台形状を呈し、掘り方の東西に段状のテラスが取り付く。掘り方の西側は削平により大きく失われ、規模は現存で長軸1.27m、短軸1.05m、検出面からの深さは93cmを測り、最深部の標高は37.42mとなる。柱穴内埋土は①～⑦に分層され、①～③層が柱抜き取り痕跡埋土となる。図化可能な遺物には埋土下層から高坏の脚部小片1890、埋土上層から壺の口縁部小片1891、口端に凹線文を施した広口壺口縁部小片1892、高坏の坏部片1893があり、このほか帰属埋土不詳遺物に1894～1902がある。1893は坏部に段をもつ高坏で、色調は外面がにぶい黄褐色（10Y R7/4）を呈し、胎土は白色粒を少量含むが精良である。

**柱穴⑪**〔第350図下〕：建物西の側柱穴で、柱穴⑩の北に位置する。平面形態は不整橈円形状を呈し、掘り方の東西にテラスが取り付く。規模は長軸2.15m、短軸1.1m、検出面からの深さは60cmを測り、最深部の標高は37.6mとなる。柱穴内埋土は①～④に分層され、④層が立柱痕跡埋土となる。床面の凹みから復元される主柱の直径は30～40cmを測り、柱穴内の掘り方埋土は上層と下層に括ることが可能である。図化可能な遺物には埋土下層から壺口縁部小片1903と高坏脚部小片1904、埋土上層から壺と壺破片1905～1907が出土したほか、帰属埋土不詳遺物の1908～1914がある。1908は復元口径18cmを測る壺の口縁部片、1909は外面に平行タタキ痕を留める。

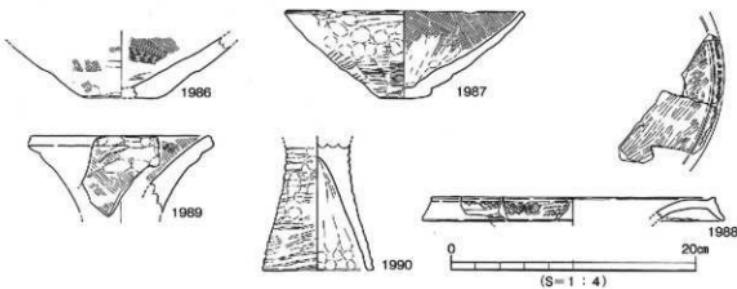
柱穴⑯〔第351図上、図版110〕：建物西の側柱穴で、柱穴⑮の北に位置する。平面形態は不整隅丸長方形を呈し、掘り方の西にテラスが取り付く。規模は長軸1.18m、短軸0.96m、検出面からの深さは79cmを測り、最深部の標高は37.38mとなる。柱穴内埋土を精査したにもかかわらず、立柱痕跡をはじめ、抜き取り痕跡を平面で確認するには至らなかった。固化可能な遺物は埋土の下部から壺口縁部小片1915と1916、複合口縁壺口縁部小片1917が出土したほか、高坏の脚部1919がみられる。1919は脚部が屈曲し裾に向かって内湾しながら開くタイプで、色調はにぶい橙色（7.5Y R7/4）を呈する。外面調整はヘラミガキで、円孔を4ヶ所に施す。1920～1927は帰属埋土不詳遺物である。

#### 構成する柱穴（東柱）

柱穴⑭・⑯・⑰及び柱穴⑯柱抜き取り痕〔第351図下・352図上・中、図版111〕：建物東から二番目の南北列の東柱である。このうち柱穴⑯のみ比較的の遺存が良く、他は柱抜き取りと推測される掘り方により大きく削除されている。野外調査時に南北方向の断面ベルトで土層観察をおこなったにもかかわらず、埋土の識別が困難であった。柱穴⑯は平面形態が不整丸長方形を呈し、規模は長軸0.97m、短軸0.83m、検出面からの深さは52cmを測り、最深部の標高は37.83mとなる。側柱の柱穴に比べて、30cm程度浅く掘られている。柱穴⑯は平面形態が不整隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.3m、短軸0.89m、検出面からの深さは53cmを測り、柱穴⑯とほぼ同じ深さとなる。柱穴の掘り方の北と南には抜き取り跡と考えられる大きな掘り方があり、北を抜き取りA、南を抜き取りBと呼称すると、いずれも東柱の掘り方よりも20～25cm深く掘り込まれていた。柱穴⑯は平面形態が不整法形状を呈し、規模は長軸1.2m、短軸1.05mを測り、検出面からの深さは65cmとなり、床面は二段に掘り進められている。これらの埋土は黒褐色土（10Y R2/3）である。遺物は柱穴⑯から1933～1944が出土し、1930～1932は抜き取りAから出土している。注目されるのは1931が完形品で正置の状態で認められたことと、1930と1932とが同一個体の破碎した大型の鉢であったことである。これらが推測した柱穴⑯の柱抜き取りAに伴う遺物と仮定すると、柱穴⑯が掘られ、超大型建物の機能が停止し、解体した際に伴う遺物と評価できることになる。因みに柱穴⑯からは1933～1944が出土しており、工程の順序から考えると、これらは1930～1932に比べて相対的に古い段階の柱穴内埋土に伴う遺物群と理解できる。また1933～1938が1930や1932と接合できないものの、これらと同一個体に判断される遺物であることは興味深い。すなわち、同一個体の大型の直口縁の鉢を破碎した上で、大型建物の建設に際する東柱の柱穴には、東柱を据え付けた後に埋め戻した壇上に比較的小形の破片を散布し、比較的大形の破片は据え付けた柱を抜き取った後に、その掘り方に完形品の小型鉢とともに入れている状況を復元することが可能となるからである。ただし、野外調査時に縦断面における埋土観察ではこの復元を裏付ける積極的な所見を得られることはなく、推定の域を脱し得ない。1931は直径10cm、器高5.4cmを測る完形品の小型の鉢。底部は厚みの出した丸底で、外面には平行タタキ後に細かいハケ目調整が看取される。1932は復元口径29.5cm、器高8.5cmを測り、図示した口縁部の右破断面には柱穴⑯出土の1788と1789とが接合する。1944は中型の器台の口縁部で、復元口径35cmを測り、上端面（内面）には丁寧なヘラミガキ、下端面（外側）には細かいハケ目調整を施し、口端には7条の描波状文後に2個一対の円形浮文を貼付する。なお、内外面及び口端の一部には赤色顔料の遺存が確認される。これらの遺物のうち1930～1938は弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭、梅木Ⅲ-2～Ⅲ-3（弥生時代終末期新相～古墳時代初頭）に位置付けられる。1952～1958は柱穴⑯出土の遺物である。



第354図 SB 105測量図及び出土遺物実測図(1)



第355図 SB 105出土遺物実測図(2)

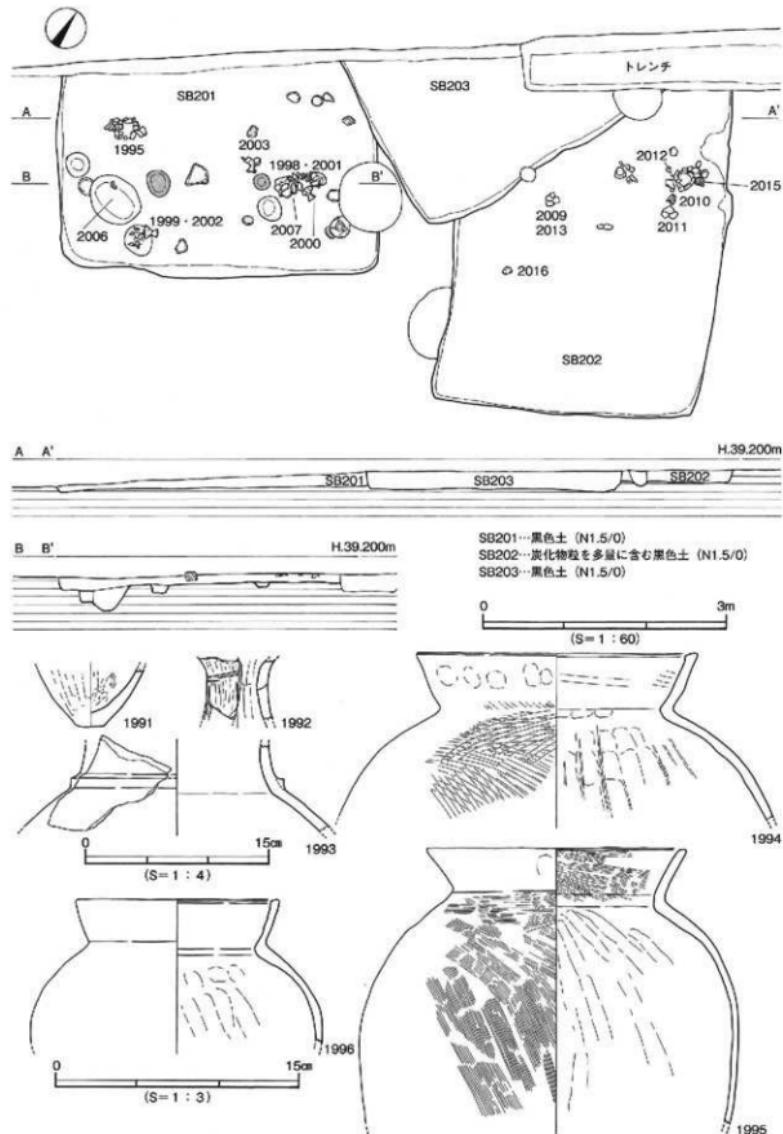
柱穴④〔第352図中〕：建物北から三番目の東西列の東柱で、柱穴②の西に位置する。SB 105の精査過程で、住居床面にて確認できた。平面形態は不整隅丸長方形を呈し、規模は長軸0.83m、短軸0.68m、検出面からの深さは30cmを測り、最深部の標高は37.81mとなる。埋土は黒褐色土(10Y R 2/3)の單一層である。遺物は1945～1951が出土した。1948は高坏で、坏部と脚部の境界には3条の沈線文を施す。1951は受部に角状突起をもつ中空の支脚で、外面には平行タタキ痕をとどめる。

柱穴⑤〔第352図下〕：建物北から四番目の東西列の東柱で、柱穴④の西に位置する。SB 105の精査過程で、住居床面にて確認できた。平面形態は不整長方形を呈し、規模は長軸1.07m、短軸0.89m、検出面からの深さは33cmを測り、最深部の標高は37.82mとなる。掘り方中央のやや北寄りが一段深く掘りこまれておらず、埋土は二層に細分できた。遺物は壺口縁部と底部小片1959～1961、複合口縁壺の口縁部小片1962がある。

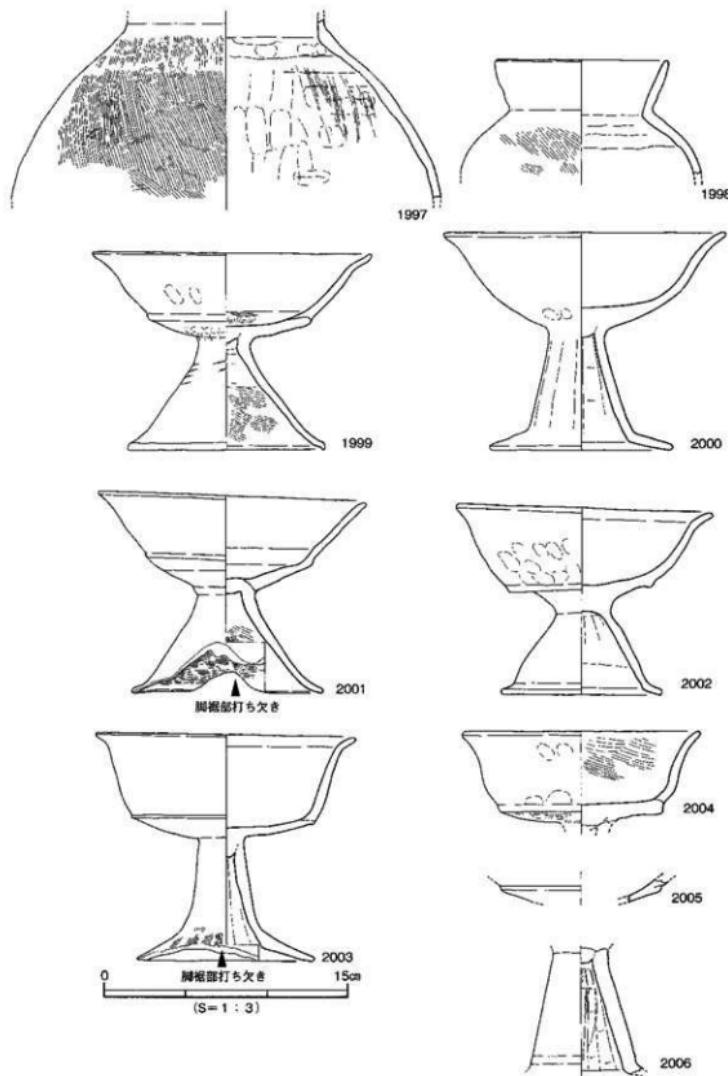
柱穴⑥〔第353図上、図版102-2〕：建物の中央に位置し、柱穴⑤の西に位置する。SB 105の精査過程で、住居床面にて確認できた。平面形態は不整隅丸方形を呈し、規模は長軸1.35m、短軸1.05m、検出面からの深さは75cmを測り、最深部の標高は37.41mとなる。埋土は①～④に細分でき、④層が立柱痕跡埋土となり、下部の立柱痕跡の直径は42cmを測る。埋土は上層と下層に括ることが可能である。遺物には立柱痕跡埋土から壺底部の小片1963、帰属埋土不詳遺物の丸底で外面に平行タタキ痕のある壺小片1964、埋土下層から壺頭部片1965、広口壺の口縁部片1966、大型直口鉢の口縁部1967がある。このうち1967は口端に指痕、胴部外面に平行タタキ痕、内面にハケ目調整がみられる。

柱穴⑦埋土からは壺の胴部小片1968、柱穴⑧埋土からは壺底部小片1969と1970、柱穴⑨埋土からは壺口縁部小片1971と器台口縁部小片1972が出土している。

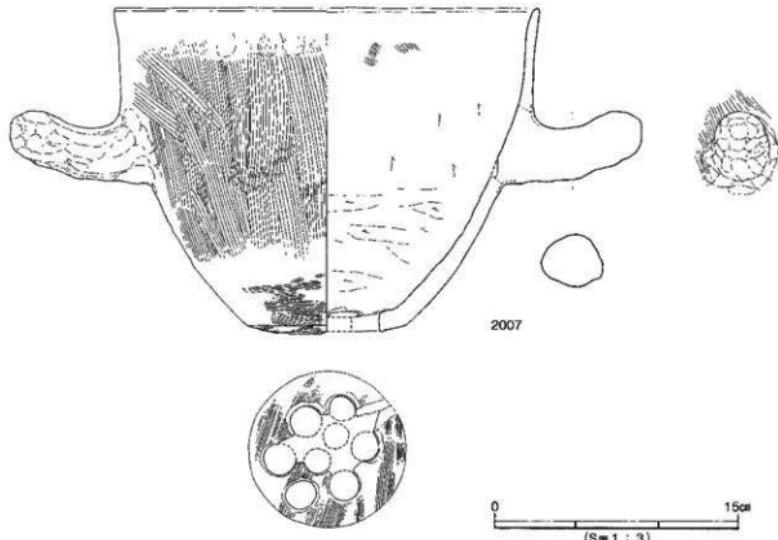
**超大型建物の時期：遺構の検出面、埋土、重複関係、遺物を総合すると、古墳時代前期初頭を下限として理解することに最も整合性があるものと考えられる。**遺物に弥生時代前期や中期に遡るもののが散見されるが、これらの遺物は直接的に遺構の時期に関係するものではなく、個柱や束柱、屋内棟持柱を据え付ける際に用いた土に混入していたものと判断される。このことは今次調査区の北や東の調査で当該期の生活関連遺構が検出されていることや、今次調査区で確認した4層(黒色遺物包含層)に当該期の遺物が含まれていることと密接に関係していることといえよう。遺物のみに限定することなく、遺構の検出面や別遺構との重複関係等を総合して帰属時期を判断した点を確認しておきたい。



第356図 SB 201・202・203測量図及びSB 201出土遺物実測図(1)



第357図 S B 201出土遺物実測図(2)



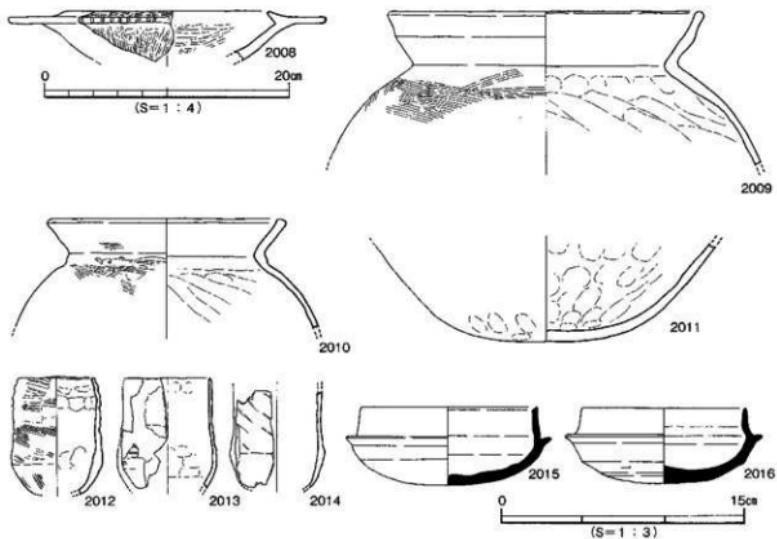
第358図 SB 201出土遺物実測図(3)

## (2) 竪穴式住居址 (SB)

計7棟の住居址を検出した。このうち、I区南西部の南壁に一部重複する形で検出したSB104については、今次調査で報告することは控え、同9次調査で報告することとする。

## SB105 [第354・355図]

調査地西部のK8・9区に位置し、超大型建物を構成する柱穴⑩・⑪～⑬・⑭・⑮・⑯を切って構築される。断面図A～A'ラインで示したように、本住居を構築する際に先行して掘られていた柱穴⑮の東壁に沿って小砾を積み上げて住居西壁中央を補強した様子が確認されている。平面形態は隅丸方形状を呈しており、規模は東西3.65m、南北4m、検出面からの深さ15～20cmを測る。埋土は黒色土(N1.5/0)の単一層であり、超大型建物を構成する柱穴との重複関係を識別することは非常に困難であった。よって、埋土精査では超大型建物を構成する柱穴埋土を一部掘り下げてしまい、本来柱穴に伴う遺物を住居遺物として取り上げたものを含んでいる。帰属する柱穴の特定が困難であったことから、第354図にて実測図を提示した。遺物は住居埋土中で散在して出土し、土師器高坏・製塩土器、須恵器坏壺・高坏・甕を含む。この他、超大型建物を構成する柱穴に含まれていたと判断できる遺物として弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭の土器1981～1990がある。なお付帯施設として住居北でP①とP②を検出した。その配置からは対峙する主柱穴の存在が予想されたことから、該当箇所を精査したが、主柱穴を検出すには至らなかった。ただし、住居南東隅付近にて根石と考えられる大型の扁平砾を確認しており、この位置に主柱が立てられていたものと想定される。この理解に従えば、4本の主柱で屋根を支える構造が復元可能となる。



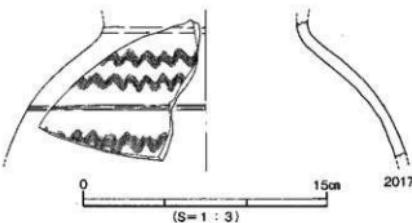
第359図 SB 202出土遺物実測図

**出土遺物（1973～1990）** 1973は高坏の坏部小片。1974は高坏の脚裾部片。1975と1976は製塙土器。いずれも胴部小片で、外面にはタタキ調整がみられる。1976は口縁部がわずかに内溝し、復元口径5.2cmを測る。1979は有蓋高坏の蓋で、天井部の1/3が残り、復元口径は12cm前後を測る。1981～1983は甕。1981は口縁部小片で、復元口径16.2cmを測る。肩部の張りは弱く、外面に平行タタキ調整を施す。1982は住居の北西部出土。口縁部は「く」字形を呈し、体部下半がやや下膨れ状を呈し、底部を欠く。調整は外面がタタキ目、内面はハケ目を施した在地窯である。復元口径は16.8cmを測り、器高は20cmを超える。剥落の認められる外面の一部には黒斑が看取されており、焼成時に生じた剥落の可能性がある。1988は器台の受部片。口端は下垂し、外面に4条の波状文を施す。受部内面はハケ目後にミガキ調整を施す。復元口径23cmを測る。1989と1990は支脚。

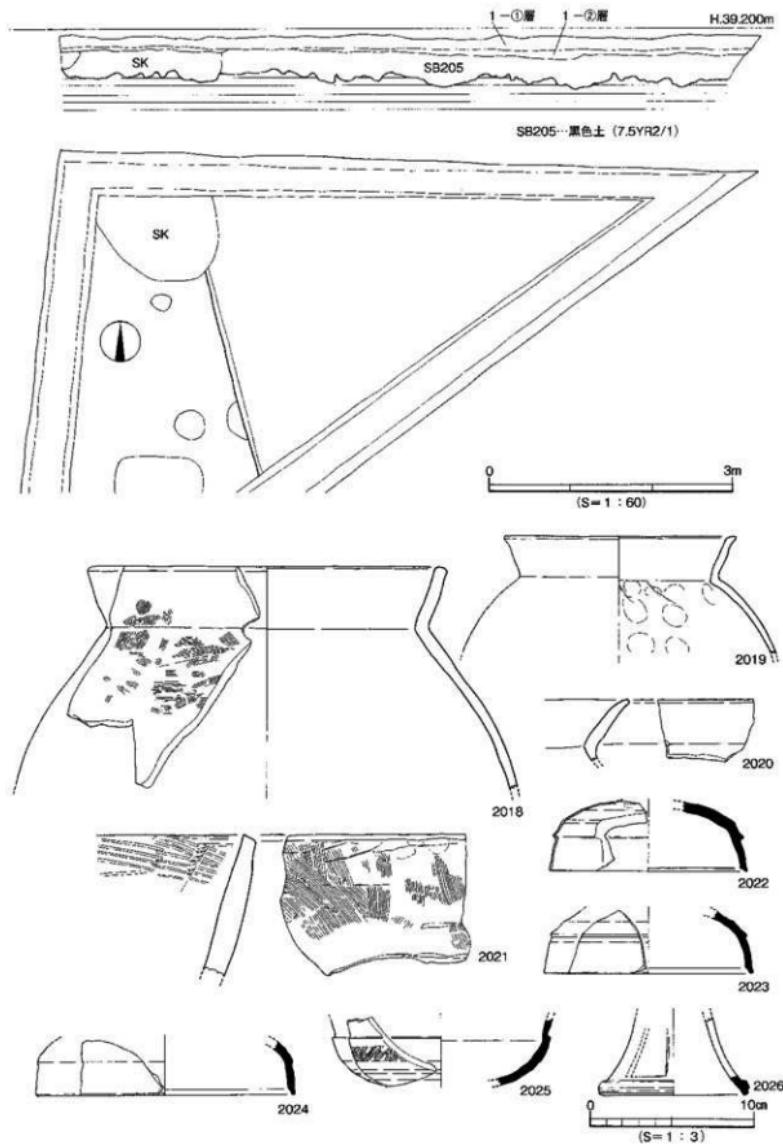
**時期**：埋土と遺物さらに遺構の重複関係から、1973～1980がSB 105に直接伴う遺物の可能性が高い。したがって、SB 105は古墳時代中期末～後期初には機能が停止していたものと考えられる。

#### S B 201 [第356～358図]

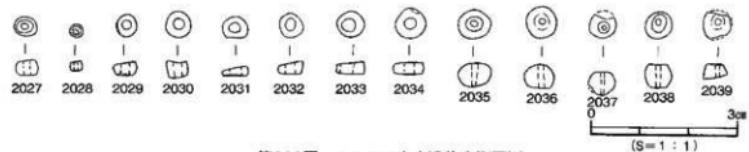
調査地中央北端のG 5・6区に位置し、住居の一部は調査区外へ続く。SB 203



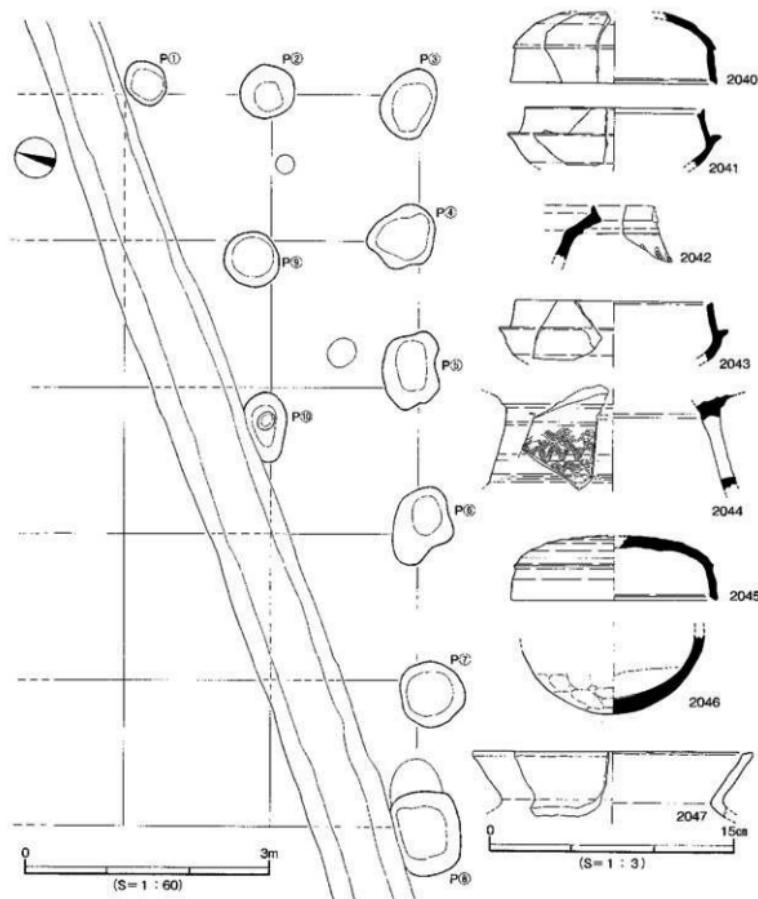
第360図 SB 203出土遺物実測図



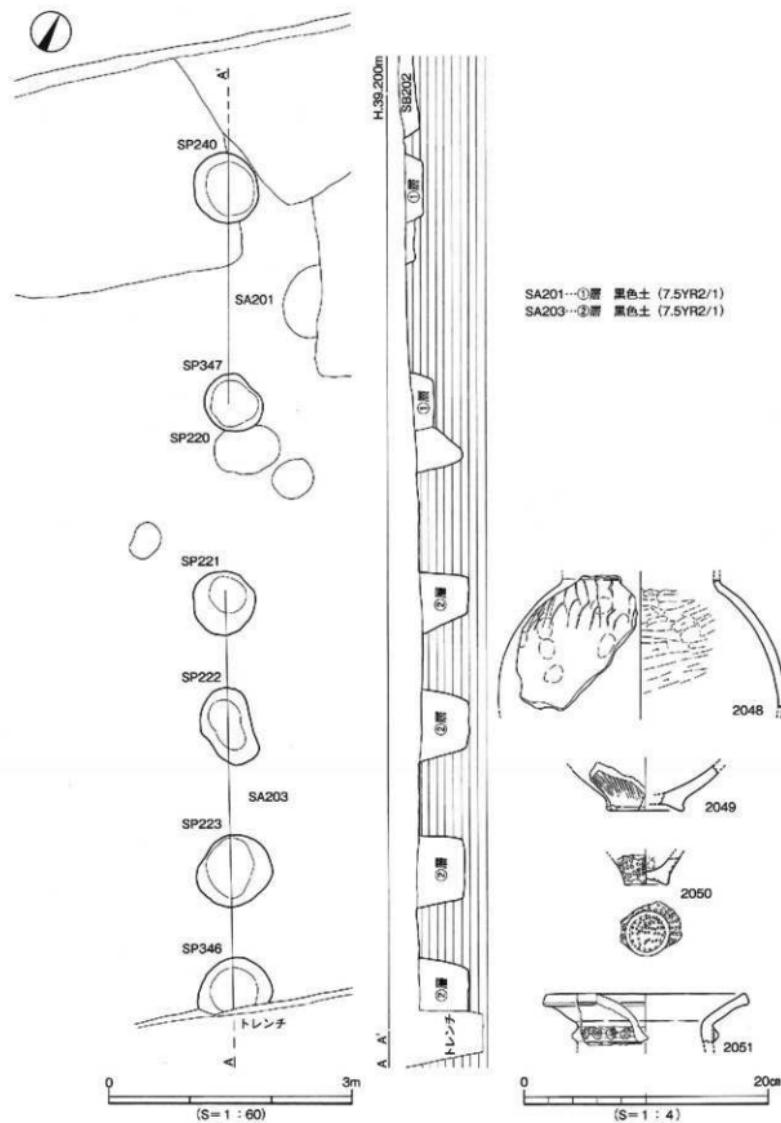
第361図 SB205測量図及び出土遺物実測図(1)



第362図 S B 205出土遺物実測図(2)



第363図 据立201測量図及び出土遺物実測図



第364図 S A 201 · 203測量図及び出土遺物実測図

と、S A201を構成するS P240に切られる。検出時における遺構の重複関係は比較的明瞭に確認することができている。平面形態は方形ないしは長方形を呈する可能性が高く、規模は東西3.95m、南北2.55m以上、検出面からの深さ10~15cmを測る。埋土は黒色土測る。埋土は黒色土(N1.5/0)の單一層である。付帯施設として、2基の主柱穴(P①とP②)を確認し、その配置から調査区外にさらに2基の柱穴の存在が予想される。なお、住居南西部に柱穴や土坑状の落ち込みを検出したが、本住居に伴うものは野外調査で明らかにすることはできなかった。遺物は床面から土師器の壺と高杯のほか、弥生土器小片が出土した。

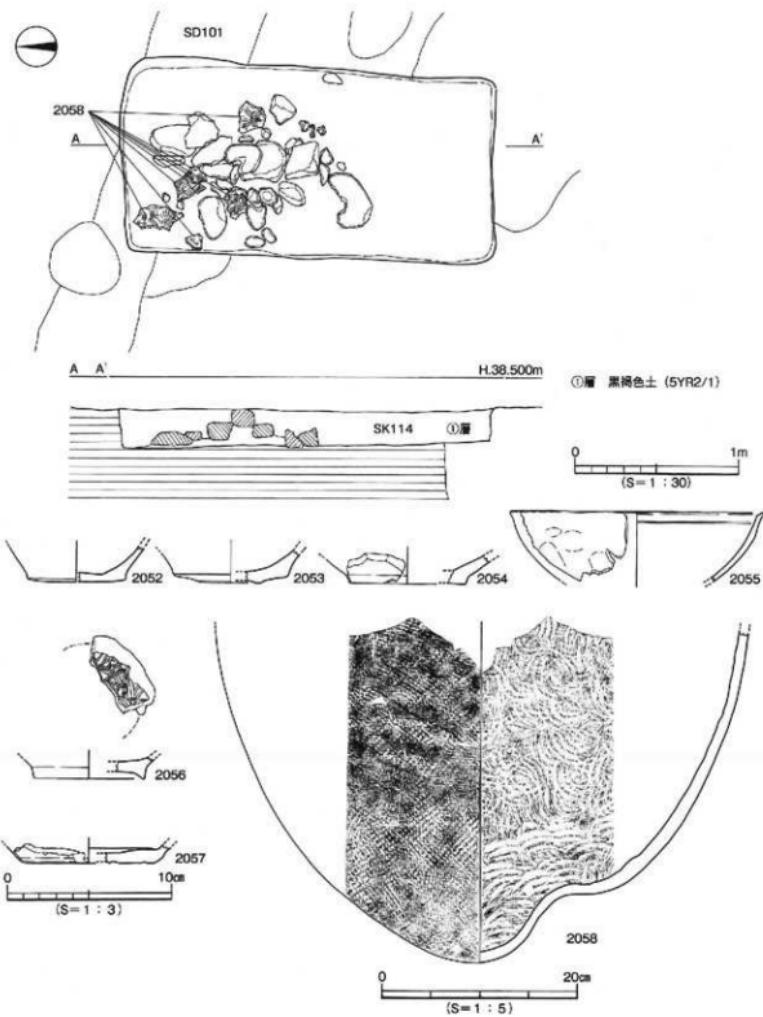
**出土遺物(1991~2007)** 1991~1993は弥生土器。1994~2007が直接伴う遺物である。1994は口縁部の約1/4が残る中型壺で、復元口径17cmを測る。1995は復元口径15.8cmを測る中型壺で、肩部の張りは弱く、長胴化の傾向がうかがえる。1996は1995の小型品で、復元口径12.5cmを測る。1997と1998は壺、1999~2006は高杯。1999~2001は壺部が皿状を呈し、口縁部は緩やかに外反し、相対的に壺部の深いタイプである。1999は主柱穴P①の南で横倒しの状態で出土、2000はP②の東で横倒しの状態で出土、2001は2000に近接し倒置の状態で出土したものである。興味深い点は2001の脚裾部1/2が打ち欠きにより欠損している点である。脚部が壺部から折れているものの、本来は脚部と壺部は接合しており、脚裾部の半分を打ち欠きにより損壊させている。2002~2004は壺部が明確な屈曲部を有し、箱型を呈し、相対的に壺部の深いタイプである。脚部は短くて裾に向かって緩やかに「ハ」字形に広がるものと、長くて裾に向かってあまり広がらず、屈曲して裾が短く外に広がるものとがみられる。2002は1999と一緒に出土した。わずかに口縁壺部に破損があるものの、完形品として評価できる。壺部の口径15.3cm、壺部の器高5.4cmを測り、脚部高6cmと比べて壺部高はほぼ同じである。色調は内外面ともに橙色(25Y R6/8)とぶい黄橙色(10Y R7/3)を呈し、壺部には黒斑が認められる。2003はP②の北で横倒しの状態で出土した。壺部は完形であるものの、脚裾部2/5が打ち欠きにより損壊が認められる。2007は2000の西に接し据え置いた状態で出土した壺である。内部には4~5cm大の川原礫数点が認められた。口縁部~胴部の1/2は欠けており、右の把手も遺存していない。バケツ形を呈しており、口縁部がわずかに外反する。復元口径25.8cm、器高19.9cmを測り、把手がやや高い位置に取り付け。平底の底部には焼成前に入れられた蒸気孔の8孔がある。調整は外面が縱方向の粗いハケ目、内面がケズリ後にナデが施され、部分的にハケ目が残されている。把手に刻みや凹み、さらには小孔は施されていない。胴部下半に黒斑が認められる。

**時期: 埋土と遺物、さらに遺構の重複関係からS B201は古墳時代中期前半代に時期比定される。**なお、出土遺物のうち1994~2007は当該期の器種構成やそれぞれの器形を考える上で興味深く、据え置き、横倒し、倒置や高杯にみられる脚裾部の一部損壊などは住居廃絶時の行為を示す事例となる。

#### S B202〔第356・359図、図版106~112〕

S B201の東に隣接しており、F 5・6区に位置し、S B203に切られる。平面形態は長方形を呈するものとみられ、規模は東西3.25m、南北4.9m以上、検出面からの深さは16~20cmを測る。埋土は黒色土(N1.5/0)で炭化物粒を多量に含む。付帯施設は未検出で、主柱穴に該当する柱穴は全く認められなかった。遺物は床面から土師器の壺と製塙土器、須恵器の壺身のほか、弥生時代中期後葉の高杯の口縁部片が出土している。

**時期: 埋土と遺物、遺構重複関係から、S B202は古墳時代中期末~後期初頭に時期比定される。**



第365図 SK114測量図及び出土遺物実測図

SB203(第356・360図、図版106・113)

SB201と202を切る住居址で、平面形態は方形ないしは長方形を呈する。遺構の一部は調査区外へ続くため、正確な規模は明らかではない。付帯施設は未検出で、遺物は極めて少なく、住居南側で図

化可能な須恵器の壺片が出土したにとどまる。

**出土遺物（2017）** 2017は壺の肩部片。破片資料のため実測図がもう少し頗る可能性がある。沈線文2条により区画された上下には7~8条一組のシャープな波状文を施し、内面の調整は回転横ナデによる。色調は内外面ともに灰色（N6/0）を呈し、胎土は緻密で、焼成は極めて良好である。

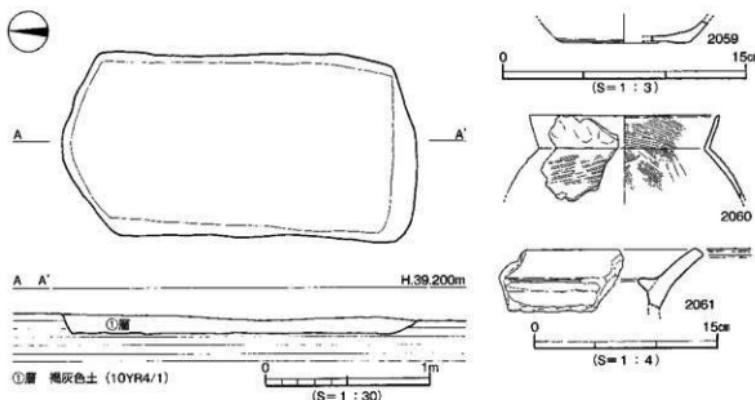
**時期：**埋土と遺物、さらに遺構重複関係から S B 203は古墳時代後期初頭以降に時期比定される。

#### S B 205〔第361・362図、図版114〕

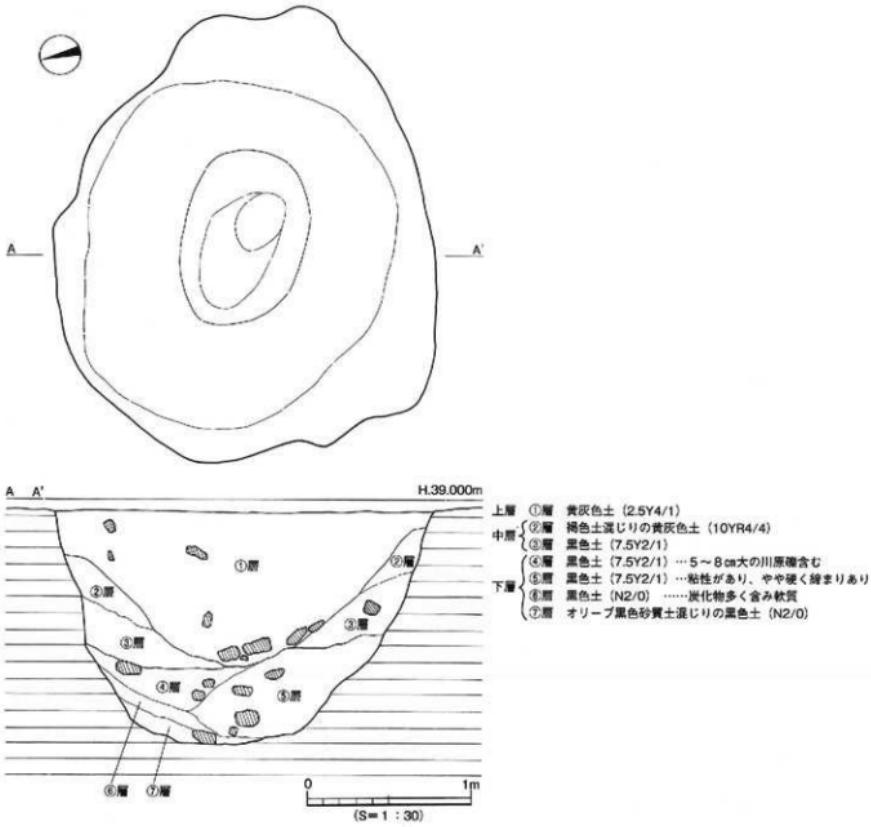
II A区のはば全面、H 8・9・G 8区に位置し、住居の北と東は調査区外へ続く。平面形態は確定できず、規模も同様である。調査区北壁断面の観察に拠れば、検出面からの深さは22~40cmを測り、床面に凹凸が著しく認められる。したがって、断面観察では明らかにできなかったが、構築時の床面上に土を貼り、使用時の床面をかさ上げしていた可能性は高いものと判断される。精査にもかかわらず、付帯施設は未検出である。遺物は埋土中から土師器の壺と移動式竈と考えられる土製品片、さらに須恵器の壺蓋と無蓋高壺、高壺の脚部、ガラス小玉、土玉、白玉が出土した。なお玉製品のほとんどは住居址埋土の水洗選別によって確認したものである。

**出土遺物（2018~2039）** 2018は壺の大型品で、口径21.9cmを測り、肩部の張りは弱く、長胴化の傾向がうかがえる。2019は中型品で、口縁部は「く」字形を呈し、口端が外にわずかに屈曲する。2021は移動式竈と考えられる土製品で、上端はヨコナデにより仕上げる。体部には1.5cmの粘土帯を積み上げた痕跡があり、接合部は指押さえ後にやや粗いハケ目調整を施し、器壁は最大で1.5cmを測る。色調は内外面ともににぶい赤褐色（5 Y R 5/4）を呈し、焼成は良好である。2022~2024は須恵器の壺蓋小片。2024は碎片で、復元口径がさらに小さくなる可能性がある。2025は無蓋高壺の壺部片である。2027と2028はガラス小玉、2029~2034は白玉、2035~2039は土玉である。

**時期：**埋土と遺物とから、S B 205は古墳時代中期末~後期初頭に時期比定される。遺物に移動式竈の可能性がある土製品片を含んでいることは、興味深い。



第366図 S K 204測量図及び出土遺物実測図



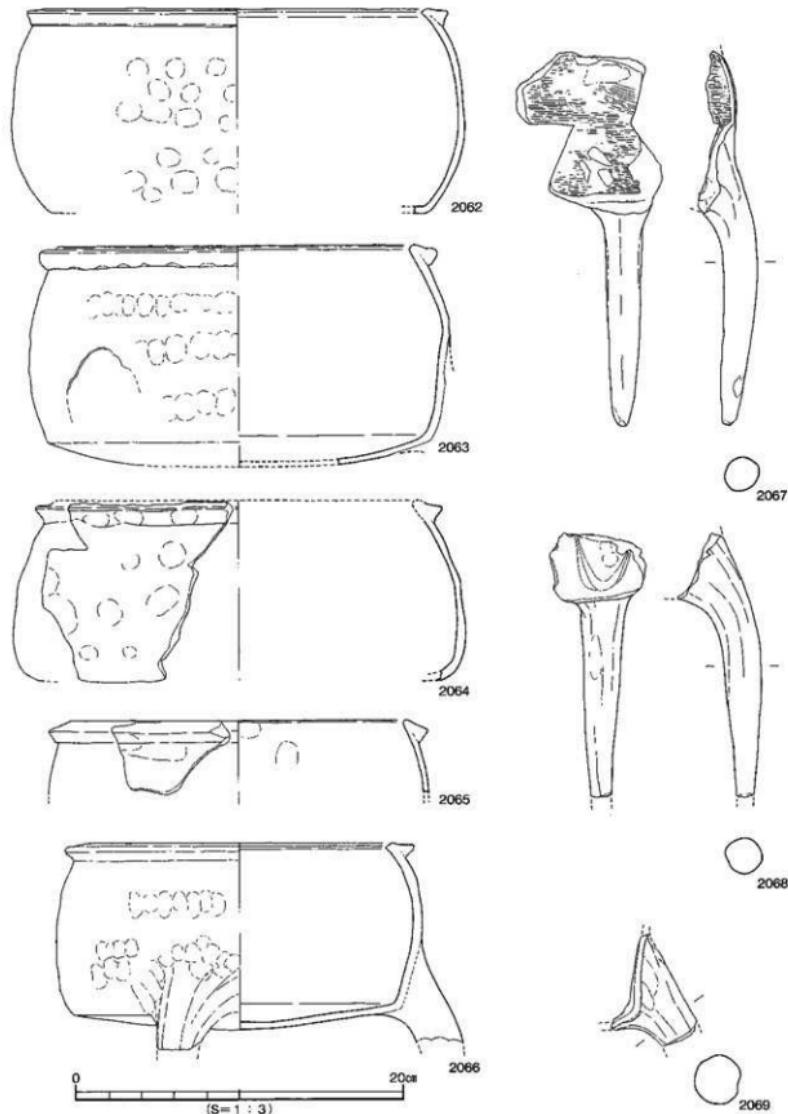
第367図 SK205測量図

## (3) 挖立柱建物址(掘立)

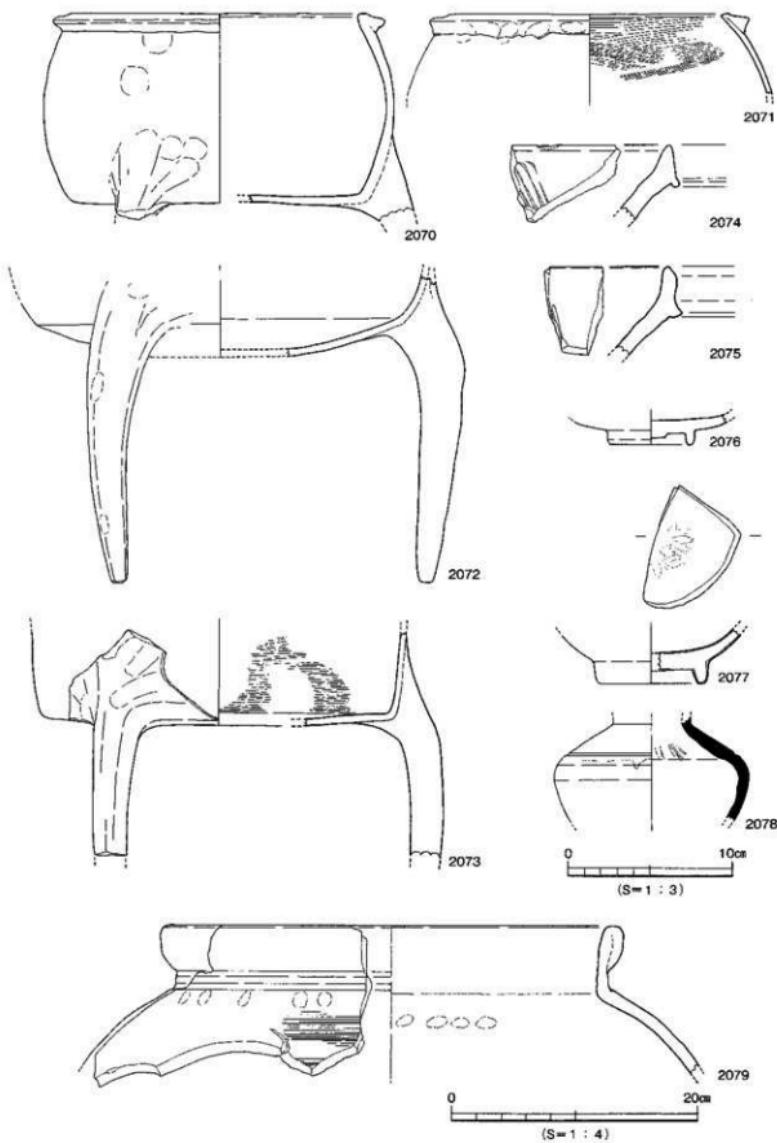
## 掘立201〔第363図、図版106-2・113〕

調査地東端部のB3、C2・3、D3区に位置する縦柱構造の掘立柱建物址である。東西5間、南北2間以上で、建物主軸が真北から15度西に振れている。建物構成する柱穴は10基確認でき、各柱穴間は18mを測り、埋土は黒色土 (N1.5/0) の單一層である。いずれも立柱痕は認められず、廃絶時に柱は抜かれた可能性が高い。遺物はP①・③~⑤・⑦の埋土中から、図化可能な土師器の壺、須恵器の壺蓋・壺身・壺・器台の破片が出土している。これらの遺物は柱抜き取り後に流入したと考えられる。

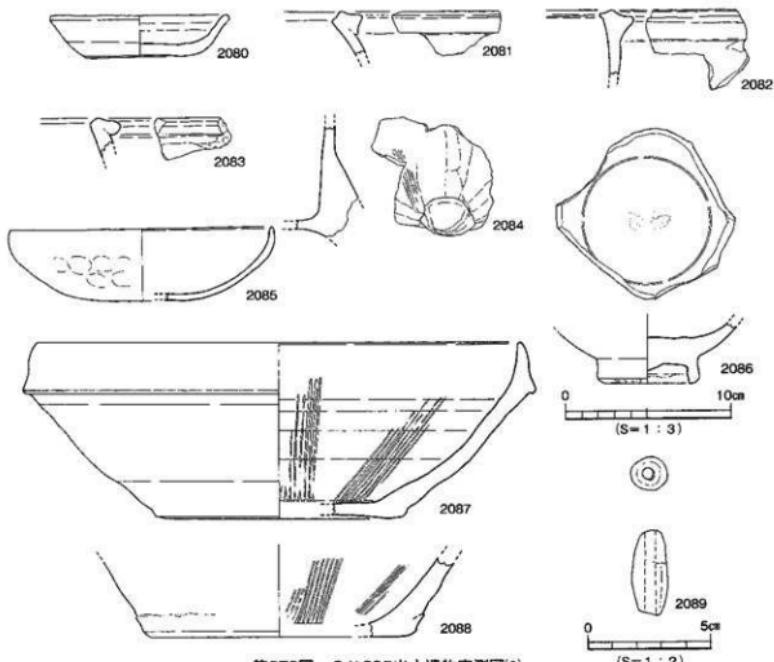
出土遺物 (2040~2047) 2040~2046は須恵器、2047は土師器。2040と2041はP①出土品。壺蓋と壺身の小片である。2040は復元口径12.6cm、器高4.4cmを測る壺蓋。2041は復元口径11cmを測り、底部



第368図 SK 205出土遺物実測図(1)



第369図 SK 205出土遺物実測図(2)



第370図 SK 205出土遺物実測図(3)

を大きく欠く。2042はP③出土品。壺の口縁部小片で、口端は上方につまみ上げ、突線下には波状文を施す。2043と2044はP④出土品。2044は器台の脚部片。突帯間には6~7条一組の波状文を三組施すが、そのうち最上段の波状文は部分的に途切れる。長方形の透かし孔を交互に配置したものとみられ、外面には自然釉が付着している。2045と2046はP⑤出土品。2045は約1/4が遺存する壺蓋で、復元口径12.4cm、器高3.9cmを測る。天井部の2/3は外面に回転ヘラケズリがみられる。2047はP⑦出土の土師器の壺片。口縁部は「く」字形を呈し、口端は先細る。

時期：埋土と遺物から、掘立201は古墳時代後期初頭頃に機能を停止し、埋没したものと理解できる。

#### (4) 檻列 (SA)

##### S A 201 [第364図]

S B 201を切り、調査区外の北に続く檻列である。S P 240と347の2基を検出し、柱穴間は2.7mを測る。当初は南に位置するS P 221~223と346を一連のものと考えていたが、これらは掘り方の規模が大きくかつ深いこと、わずかに軸が振れること、埋土に違いがあること、柱穴間の距離が異なることから、これとは別の檻列と認定した。検出時点ではS B 201との重複関係は明確に認識でき、新旧関係を確認できた。埋土は黒色上(7.5Y R2/1)の單一層である。固化可能な遺物の出土はみられなか

った。

時期：柵列を構成する柱穴が古墳時代中期後半以降に機能していた可能性が高いものと判断できる。

#### S A203 [第364図]

S A201の南に位置し、S P221～223と346で構成され、一部は調査区外南へ続く。柱穴間は1.54～1.76mを測り、埋土は硬く締まりのある黒色土（7.5Y R2/1）である。図化可能な遺物はS P221から土師器の壺、S P222から弥生土器の壺、S P223から弥生土器のミニチュア底部片と長頸壺片がある。

時期：遺物から古墳時代中期段階に機能を停止したものと考えておきたい。

## 6. 古代の遺構と遺物

古代の遺構はI区で検出した土坑SK114である。

#### (1) 土坑 (SK)

##### S K114 [第365図、図版106-3・4・113]

調査地南西部、K10区に位置する。検出時にSK114がSD101や超大型埴物跡を構成する柱穴（柱穴⑩と⑪）を切っていることを確認している。平面形態は長方形を呈し、規模は長軸2.3m、短軸1.17m、検出面からの深さ20～24cmを測り、床面は平坦であるが、わずかに南が高い。埋土は黒褐色土（5Y R2/1）の單一層である。遺物は埋土中から土師器の壺、黒色土器、須恵器の皿と大甕のほか、10～40cm大の砾が多数確認された。これらの砾は整然と配置しておらず、土坑の北半部にて遺物とともに散在して出土している。

出土遺物（2052～2058） 2052～2054は土師器の壺。2052は外底に糸切り離し、2053は外底にヘラ切り離しが認められる。2054は平高台が付き、色調は内外面ともに橙色（2.5Y R6/6）を呈する。2055は黒色土器の内黒塊。口縁部は内湾した後にわずかに矧く外反する。口端の内面にはわずかに段をもち、色調は外面がにぶい黄橙色（10Y R6/3）、内面が暗灰色（N3/0）を呈する。2056は輪高台が付く黒色土器の内黒塊。内面には丁寧なヘラミガキを施す。色調は外面が灰黄褐色（10Y R5/2）、内面が灰色（N4/0）を呈する。2057は須恵器の皿。2058は須恵器の大甕の胴部下半で、底部は整形後に歪みがみられる。調整は外面が正格子タタキ痕、内面には同心円文（青海波文）の充て具痕をとどめる。

時期：埋土と遺物とから、SK114は10～11世紀代に時期比定される。

## 7. 中世の遺構と遺物

中世の遺構にはII B区で検出したSK204とSK205がある。

#### (1) 土坑 (SK)

##### S K204 [第366図]

調査地中央部のII B区のF6区に位置する。平面形態は不整長方形を呈し、規模は長軸2.17m、短

軸1.07m、検出面からの深さ11cmを測り、埋土は褐灰色土（10Y R4/1）の単一層である。遺物は埋土中から土師器の壺、弥生土器の甕と壺の破片が出土した。

**出土遺物（2059～2061）** 2059は土師器の皿。外底は糸切り離し痕がみられ、復元底径8.2cmを測る。色調は内外面ともに灰黄色（2.5Y7/2）を呈する。2060は弥生時代後期終末の甕小片である。口縁部は「く」字形を呈し、体部外面には平行タタキ痕調整が認められる。2061は弥生時代中期初頭の短頸の広口大壺片。口縁内面に貼り付け突帯が巡る。

**時期：**埋土と遺物とから、S K204は14世紀を前後する時期に比定しておきたい。なお2060と2061は土坑に直接伴う遺物ではなく、埋没過程で流入したものと判断される。このことは周辺に弥生時代中期初頭や後期終末の遺構が存在することを示唆するものである。

#### S K205【第367～370回】

S K204の北に隣接し、E 6・F 6区に位置する。平面形態は不整橢円形状を呈し、規模は長軸2.83m、短軸2.33m、検出面からの深さ1.4mを測る。横断面形態はU字形を呈し、中央部が若干掘り窪む。埋土は①～⑦層に分層できるが、堆積状況から大きく3層に大別した。すなわち、上層は①層で、黄灰色土（2.5Y4/1）。5～8cm大の川原砾が散在し、土の粒はきめ細かく硬く締まる。中層は②③層で、褐色土混じりの黄灰色土（2.5Y4/1+10Y R4/4）と黒色土（7.5Y2/1）である。下層は④～⑦層で、黒色土をベースとする。上・中層が顕著な斜面堆積を示す。なお遺物は下層に多く集中しており、あたかも意図的に投棄したかのような印象を受ける。最下部を精査したものの、曲物等を確認することはなかった。

**出土遺物（2062～2089）** 2062～2079は下層出土品。2062～2073は土師器の三足付き羽釜。胴部外側には煤が付着するものがみられ、蓋は口端に接して断面三角形のものが貼り付けられる。脚部はやや細目となる。2066は復元口径17.4cm（内径）、器高12.2cmを測り、色調は外側が灰褐色（7.5Y R4/2）、内側が橙色（5Y R6/6）を呈する。2074と2075は備前焼の擂鉢。口縁部は上下にやや拡張される。2076と2077は青磁の碗。2076は輪高台が付き、高台内の外底に回転ヘラケズりが認められる。内外面には釉薬を施しており、色調は胎土が灰色（N5/0）、釉がオリーブ灰色（5G Y6/1）を呈し、不透明で渋った色調である。2077は内底に花文を施し、色調は露胎部分がにぶい赤褐色（2.5Y R5/4）、釉が不透明でオリーブ灰色（2.5G Y6/1）を呈する。2078は須恵器の壺。2079は備前焼の壺。口縁部は直立気味に立ち上がり、口端は扁平な玉縁状を呈する。復元口径37cmを測り、色調は外側が灰褐色（7.5Y R4/2）、内側が褐灰色（10Y R5/1）を呈する。2080～2089は上層出土品。2080は土師器の皿で、4/5が遺存する。口径10.4cm、器高2.6cmを測り、外底には回転糸切り痕がみられる。2085は土師器の塊。2086は青磁の碗で、高さのある輪高台が付く。内底には不明瞭な文様が認められる。2087は束縛系擂鉢、2088は備前焼の擂鉢である。2087は口縁部を上下に拡張させ、胴部内面には上方から下方へ向けて、櫛描きの平行条線を放射状に施す。2089は管状上鍤である。

**時期：**埋土と遺物とから S K205は14世紀後半～15世紀の一部に時期比定される。なお S K205は規模と土層堆積状況、さらに遺物の投棄状況及び出土状況から素掘りの井戸の可能性を考慮しておきたいた。

## 8. 小 結

今次調査では、弥生時代後半期の生活関連遺構、古墳時代前期初頭の超大型建物跡、中期前半と中期末初一後期初頭の堅穴式住居址、古代の土坑、中世の土坑（素掘りの井戸か）を検出し、当該期の集落の広がりを確認した。

### （1）古墳時代前期初頭の超大型建物跡について

調査で明らかにされた超大型建物跡は、平面形態、規模、構造さらに廃絶時期から判断して一般階層に関わるものではない。日本列島における既往の調査および研究成果から、この遺構はいわゆる首長階層に関係する特殊建造物と評価できる。今次調査では古墳時代前期初頭の堅穴式住居址が未検出であったことから、この特殊建造物は一般階層の居住域とは隔離した地点に遺地していた可能性は高いといえよう。なお、超大型建物跡の立地と古墳時代前期初頭の景観については第19章で詳述する。

松山平野では現在のところ、樟味地区を除き同時期の同様な遺構は未検出である。弥生時代中期後葉に遡ると右手川の北岸域には愛媛大学城北キャンパス内を中心に広がる大集落・文京遺跡があり、ここからは3棟の大型建物跡が確認されている。このうち1号大型建物跡は梁間4間、桁行き4間以上の方形に類似する平面形態に復元されており、推定床面積は118m<sup>2</sup>である。建物跡内に精査が及んでいないため建物の正確な規模や構造等には課題を残しているものの、これらの建物は集落内中枢域に位置しており、周辺と比べて50cm～1m程度高い地点と報告されている。注目すべきは建物跡と近接して堅穴式住居址が検出されている点である。このことは大型建物が一般階層の堅穴式住居と完全に隔離されてはいないことを示し、樟味例とは異なり、興味深い。なお右手川を介した両地点で巨大な特殊建造物が確認されたことは、弥生時代後半期以降の松山平野には統括する支配者階層が確立していたことを示すとともに、地域社会の構造や再編成を考える上で大きな指針を与えるものとなる。

### （2）古墳時代中期前半の堅穴式住居址 S B201について

S B201は3.95×2.56m以上の方形ないし長方形の堅穴式住居址である。付帯施設については一部明らかにできなかったものの、精査で確認された遺物の出土状況から、住居廃絶時に伴う器の供獻行為の実態について新たな知見を得ることができた。すなわち、高坏2002は完形品据え置き、高坏1999と2000は完形品の横倒し、高坏2001は倒置、瓶2007は据え置かれており、さらに高坏2001と2003には脚部に打ち欠きがなされていた。これは、器の供獻行為が一器種に限っておらず、これまで未知であった「蒸す」行為に関わる新器種にまで及んでいることを示している。高坏にみられる一部損壊行為については、当平野においてはこれまで積極的に取り上げられる機会は少なく、その実態については充分に把握されているとは言い難い側面がある。野外調査時における埋土精査の段階から留意すれば、類例は増えることが予想される。これについては第19章で整理することとした。

#### 【参考文献】

- 愛媛大学振芸文化財調査室 1998 『文京遺跡シンポジウム－弥生大集落の解明－』資料集  
平成17年度愛媛大学公開講座「文京遺跡から学ぶ弥生時代のムラ」編集委員会 2006 『文京遺跡から学ぶ弥生時代のムラ』

第15章

たる　み　し　たん　じ  
樽味四反地遺跡

9次調査地



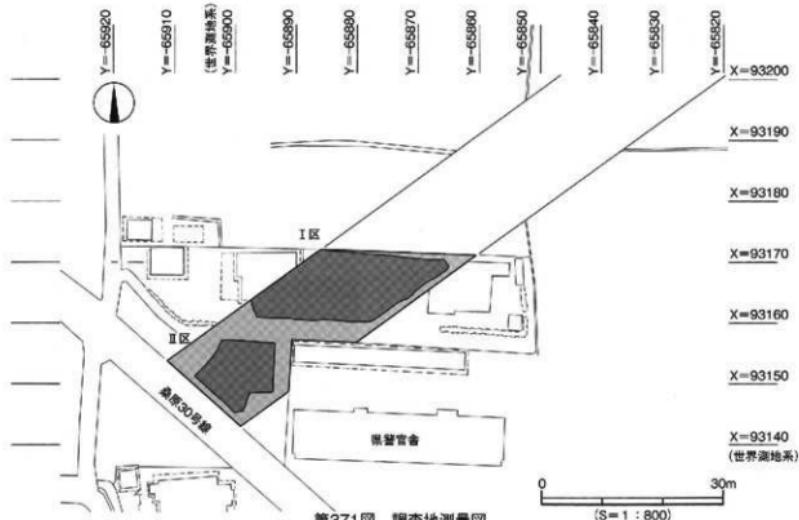
## 第15章 檜味四反地遺跡 9次調査地

### 1. 野外調査の経過と方法

対象地の安全対策と調査区の設定を行った後、2004（平成16）年8月2日から調査に着手する。対象地内に仮設テントを設営し、発掘機材の搬入を行い、生活道路と用水路の保全上、調査区をI区とII区に区分した。下旬からは試掘調査のデータを参考にして、対象地に重機等を搬入し、地表下0.7～0.8mまで掘削・除去する。I区では黒色遺物包含層（後述する4層）の精査を人力で試み、遺構及び遺物の確認作業に移行する。遺物の溜まりが確認できた地点（S X102や104など）については面的に広範囲を精査し、遺物に伴う掘り方の検出に留意しつつ作業を行う。II区では4層を切り込む形で数条の溝を検出したことから、まずこの溝を中心に遺構の精査に着手し、その後4層を除去した後に調査区南端のS B201の精査を開始した。

8月下旬～10月下旬には愛媛県下に相次いで大型台風が通過した影響で、県下に大雨洪水波浪の各警報が発令されたことで調査はたびたび中断され、調査工程に遅れが生じる要因となった。検出した遺構埋土の観察と記録が完了した11月からは、検出遺構のうち主要な生活関連遺構の堅穴式住居址の精査ならびにこれら遺構の確認面となつた5層上面の地形測量に主眼をおいた。

以下では注目すべき知見のえられたS B102を中心精査過程を述べる。S B102の精査にあたり、まずは南北方向に2本のセクションベルトを設け、ベルト沿いにサブトレーンチを入れて遺構の遺存と、埋土の堆積状況を観察する。その後にサブトレーンチの深度までベルト間の精査を試み、段階的に遺構



第371図 調査地測量図

埋土の精査を行った。住居の南東隅では土師器の高坏3個体以上がそれぞれ特異な状況で出土したことを確認する。完形の高坏の脚部を切り離し、坏部のみを正置した上で別個体の高坏脚部を据え置いた事例2163と2180や、完形品の高坏を横倒しに置いた事例2168は、明らかに意図的になされたことを示すものである〔第372図〕。この時点では観察できていなかったが、高坏脚部2180の裾部は一部が打ち欠かれており、一部損壊行為も加えられていることを後日認定した。なお、脚部が切り離されて据え置かれた2163や横倒しの高坏2168は出土を確認した時点では完存で、坏部内には埋土が充填していたことも確認している。野外調査では遺物の出土状況を縮尺1/10の平面図で測量するとともに、レベル測量した後に立面図も作成し、記録写真的撮影を段階的に実施し、記録化の充実を図った。

寒さの厳しくなった12月中旬以降には、文化庁・愛媛大学・愛媛県歴史文化博物館・財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センターの諸先生から現地にて調査指導を賜る。さらに年が明けた1月21日には松山市文化財保護審議会委員の諸先生から現地にて調査指導を賜った。これらの結果、S B 102が古墳時代中期の古い段階に帰属する竪穴式住居址であること、出土した高坏や甕は住居廃絶時に供献された遺物群の可能性が高く、土師器を用いた儀礼的行為が執行されたことを具体的に示す好事例であることが確定する。27日には現地にて報道発表を行い、続く29日には一般市民を対象とした現地説明会を開催する。説明会当日調査区内に順路を設け、遺構確認面の起伏を実際に歩いて体感していくとともに、S B 102では土師器を用いた遺物供献行為の状況を現地で直接ご覧いただいた〔第373図〕。調査区に近接して設営した仮設テント内では調査で出土した遺物の展示をはじめ、遺物実測図や記録写真パネルをあわせて掲示するとともに、説明会資料を配布し、速やかな情報公開と正確でわかりやすい調査成果の公表に努めた。当日は天候に恵まれたこともあり、160名もの参加があり、埋蔵文化財に関心をお持ちの市民の方々から好評を博すことができた。その後、S B 102の全体像を確認する目的で、北側を一部拡張したところ、住居址下部が良好な状態で遺存していることを確認する。土師器と共に伴した初期須恵器にも住居廃絶時に伴う儀礼行為が執行された痕跡のあることが判明する〔第374図〕。平板を用いた遺物分布図を作成するとともに、レベル測量値を記録する過程で帰属埋土の観察を行う。その後は文化財課の指導及び道路建設課の全面的なご理解とご協力をいただき、遺構内に真砂土を



第372図 住居廃絶に伴う土師器



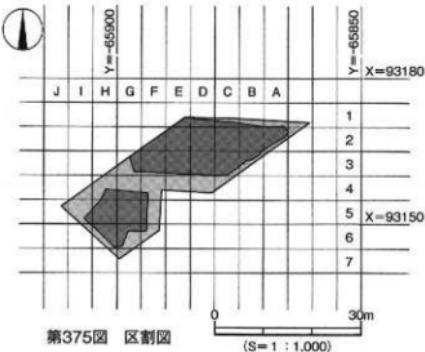
第373図 現地説明会



第374図 住居廃絶に伴う初期須恵器

充填する造構保護の措置を講じることとなつた。諸準備を整えてから、人力にて真砂土を充填する作業を実施してから調査区を埋め戻す。野外調査に關わる全ての作業を終えたのは2月28日のことである。測量に際しては、業者に委託して国土座標第IV座標系基準点から調査区内地に座標点を移動し、これを基準として5m方眼のグリッド割りを実施した。グリッドはX=93175, Y=-65865を起点として、東から西へA・B・C…、北から南へ1・2・3…とし、A1～J5区といった呼称名を付けた〔第375図〕。

なお、野外調査は工程上、東野森ノ木遺跡2次調査と同時並行で実施する必要があったことから、一調査員が担当している。



第375図 区割図

(S=1:1,000)

## 2. 基本層位

調査対象地の長さはおおよそ39m分で、調査以前は宅地であった。現況は既存建物の基礎撤去後に厚く造成土が盛られた状態であった。現地表面の標高は38.4～38.8mを測り、I区とII区では30～40cmの比高差が生じており、相対的に北東から南西に向けて緩やかに下がる地形となっている。基本層位は1～5層を検出した〔第376・377図〕。

- 1層-現代の既存建物の基礎撤去後に厚く盛られた造成土で、真砂土を基本とする。層厚26～60cmを測り、調査区全域で検出した。
- 2層-宅地化以前のかつての水田や畑に關わる上層で、耕作土部分に相当する2-①層と、床上部分に相当する2-②層に細分可能である。調査区全域に分布する。市道桜味溝辺線統一基本土層では、2-①層が第I①層、2-②層が第I②層に相当する。
  - 2-①層：灰色土（N5/0）で、層厚4～26cmを測る。
  - 2-②層：明赤褐色土（25Y R5/6）で、鉄分とマンガンの沈着が認められた。層厚4～7cmを測る。
- 3層-灰色微砂（10Y5/1）で、主には調査区の南西部で堆積が認められた。層厚6～22cmを測り、古墳時代後期～古代の須恵器をわずかに包含する遺物包含層である。統一基本土層の第III層に相当する。
- 4層-黒色土（N2/0）で、炭化物粒を多量に含み、粘性が強い。調査区全域に分布しており、層厚20～70cmを測り、主にI区西半部に厚く遺存していた。弥生土器と、古墳時代の土師器と須恵器を含む遺物包含層で、I区北壁断面では西端部において土色や土質のわずかな違いを根拠として上下に分層することが可能であったものの、北壁全域では分層が困難であった。統一基本土層の第IV層に相当する。

5層-にぶい黄褐色土（10Y R5/4）で、調査区の東半部に分布する。礫は含まず、本層以下からは人工遺物は確認できなかった。粘性が非常に強く、ガチガチと締まった質感がある。統一基本土層の第V層に相当する。調査区北壁断面の観察によれば、I区の東端部における本層上面の標高は38.03m、同西端部における標高は37.84m、II区西壁断面の北では37.65m、同南端部では37.32mを測り、北東から南西に向けて地形が落ち込む様相を呈している。本層上面が最終の造構確認面となり、主要造構にはSB102がある。

6層-粘性の強い暗褐色砂礫混じり土（7.5Y R3/4）で、2～3mm大の砾粒や、1～2cm大の円礫を多量に含み、ガサガサした質感がある。調査区の西半部に分布する。統一基本土層の第VII層に相当する。

### 3. 調査概要

検出した造構は竪穴式住居址7棟、掘立柱建物址1棟、溝7条、土坑20基、柱穴60基である。これらの造構は4層上面では造構の輪郭が判然とせず、最終的に5層上面にてその輪郭を確定することができた。前章で報告した同8次調査の成果を踏まえると、古墳時代に帰属する造構の多くは4層の堆積過程で構築された可能性が高いことを指摘できる。検出造構には、弥生時代後期後葉、同後期終末、古墳時代中期前葉、同中期後半、同後期に帰属するものがある。

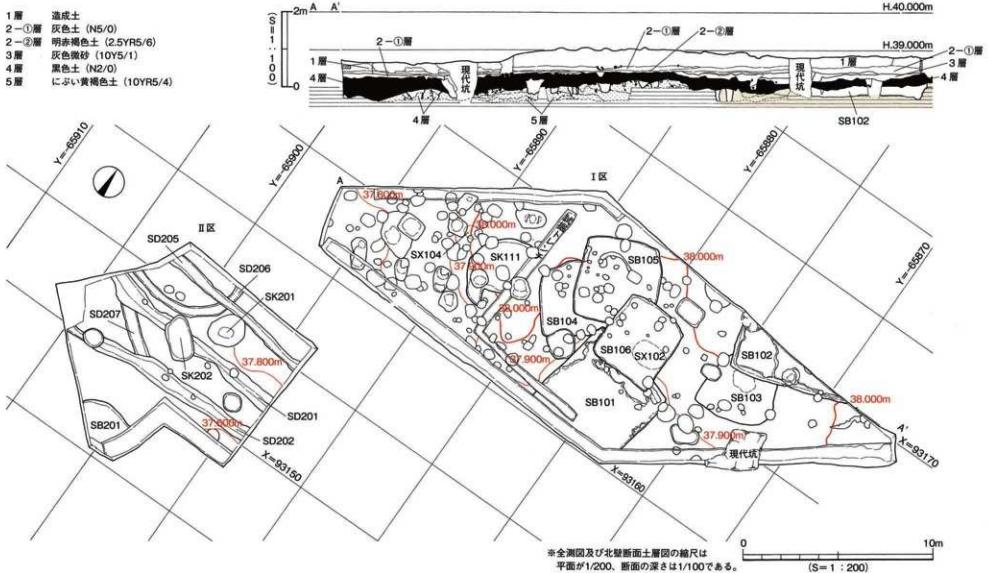
### 4. 弥生時代の造構と遺物

#### （1）竪穴式住居址（SB）

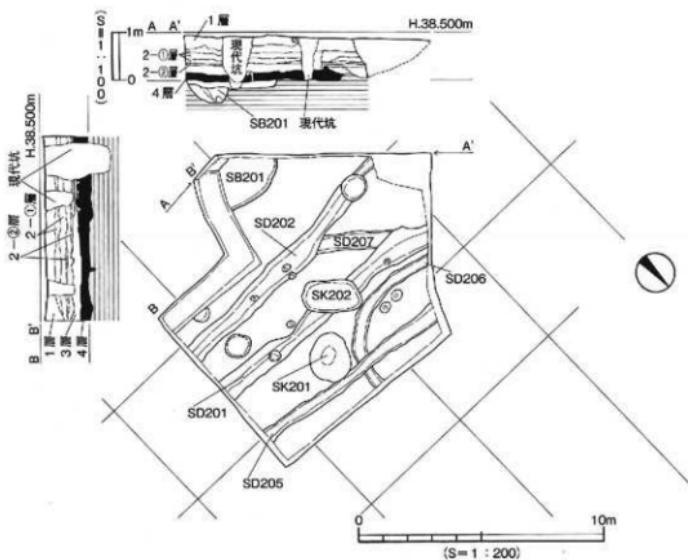
##### SB103〔第378図、図版121〕

調査地東端部のA2、B2区に位置し、SB102によって切られている。平面形態は不整隅丸方形の可能性が考えられるものの、遺存が極めて不良であることやSB102に切られることに起因して、確定するには至らなかった。規模は東西3.4m、南北検出長3.3mを測り、検出面からの深さはわずかに2cm程度に過ぎない。埋土は黒色土（5Y2/1）の單一層で、付帯施設は未検出である。住居中央に相当する地点から遺存良好な弥生土器の溜まりが検出され、遺物は1.39×0.88mの範囲に集中している。器種には甕、壺、支脚がみられ、甕の占める比率が高い。なお、埋土中から土師器と須恵器の小片がわずかに出土している。

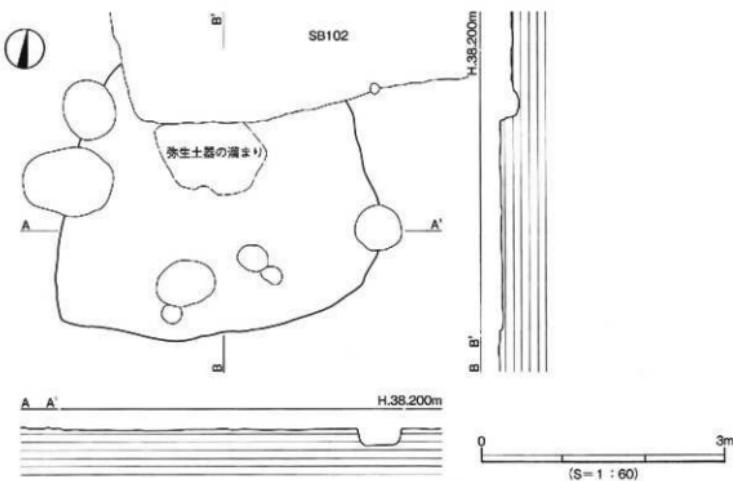
出土遺物（2090～2106） 2090～2101は弥生土器、2102は土師器小片、2103～2106は須恵器片である。2090～2099は甕で、各大きさがみられる。2090はほぼ完形品で、口径15.4cm、器高27.1cmを測る、器高の高い中型品。口縁は「く」字形に屈曲し、やや直線的に長く、口端を面取りする。肩部の張りが強く、胴下半の縫まりが強く長胴となり、底部は平底となる。調整はハケ目が主体である。色調は外面がにぶい橙色（7.5Y R6/4）、内面がにぶい黄橙色（10Y R7/3）を呈し、胴下半に黒斑と煤の付着が認められる。2091～2093は復元口径が14.5～17.4cmを測るが、器高がそれほど高くない一群である。肩部の張りが強い2091と、肩部の張りが弱い2092と2093とがみられる。調整はいずれも外面がハケ目である。2094～2096は復元口径が10～12.2cmを測る小型品。肩部の張りが強い2094と、弱い2095と2096とがあり、調整は胴部外面がハケ目、内面はケズリである。底部2097～2099は平底である。2100



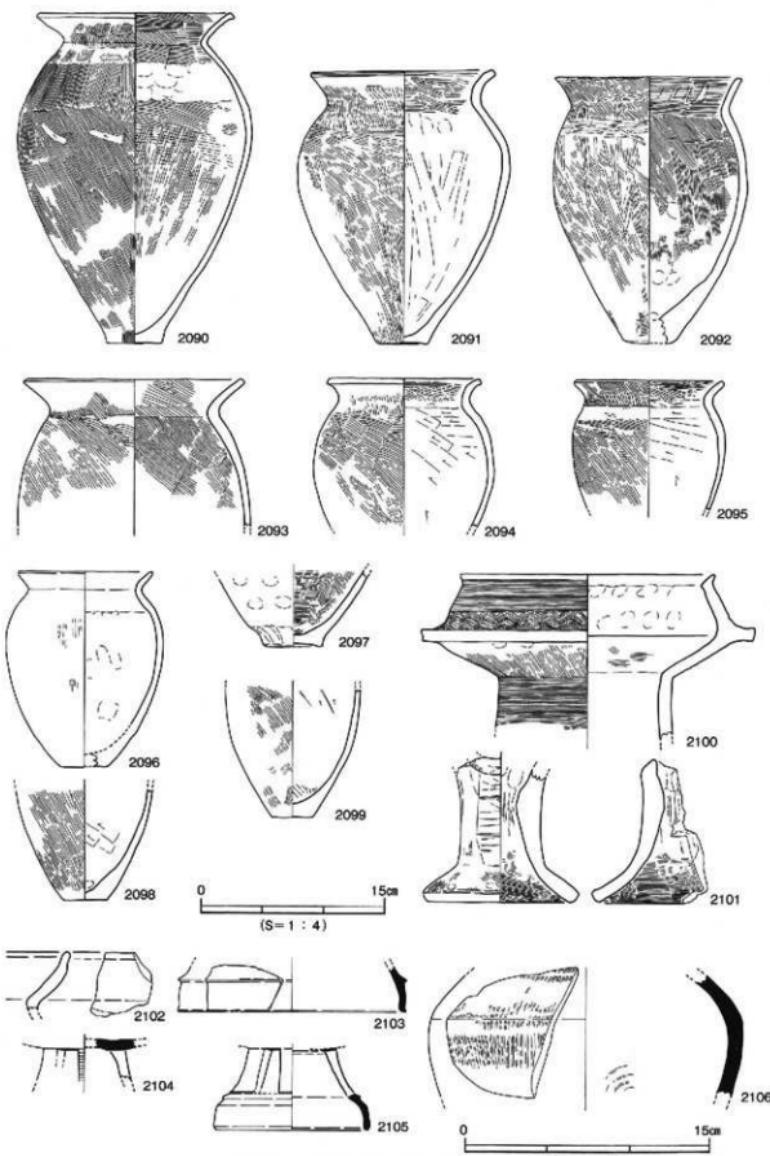
第376図 I・II区全測図及び北壁断面土層図



第377図 II区遺構配置図及び南壁・西壁断面土層図



第378図 SB103測量図



第379図 S B 103出土遺物実測図(1)

は複合口縁壺で、口径20.8cmを測る大型品。口縁部の接合部が「コ」字状を呈し、複合口縁部と頸部には加飾を施し、前者には10本一単位の櫛描沈線二組と、8条の波状文、後者には10本一単位の櫛描沈線三組がみられる。色調は外面がにぶい橙色（5Y R7/4）を呈する。2101は受部がU字状を呈する中空の支脚で1/2が遺存する。2102～2106は古墳時代の土師器の壺、坏蓋、有蓋高坏、壺である。

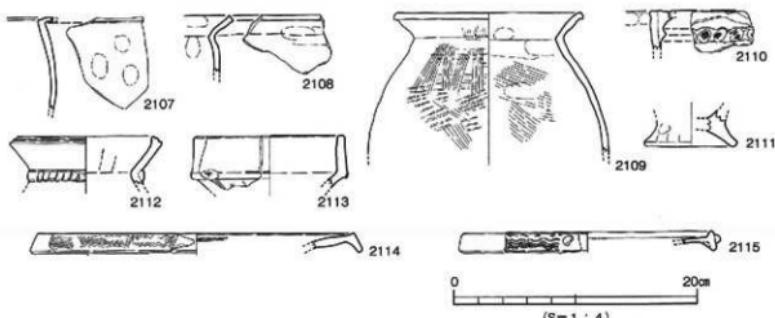
時期：埋土と遺構重複関係、さらに遺物から、SB103は弥生時代後期後葉、梅木編年の中V-3様式（梅木II-2）に時期比定される。

#### SB201〔第377・380図〕

調査地南端部、G6、H6区に位置し、一部は調査区外へ続く。平面形態は遺構の大半が調査区外へ続くために推定の域を出ないが、円形を呈する可能性があることを認めておきたい。規模は確定できない状況にあり、検出面からの深さは16～44cmを測る。調査区西壁の断面観察により、住居埋土を覆う形で4層が堆積していることを確認できた。付帯施設の可能性があるものとして、住居中央寄りと思われる位置で検出した土坑状の落ち込みがあるが、その大半が調査区外へ続くため、詳細を充分に明らかにするには至らなかった。埋土はにぶい黄褐色土（10Y R5/4）の碎ブロック混じりの黒色土（N2/0）で、遺物は埋土上部と土坑状の落ち込みとから弥生土器がわずかに出土した。

出土遺物（2107～2115） 遺物のうち埋土上部から出土したのは2107・2111・2113、土坑状の落ち込みから出土したのは2108と2109、他は埋土中からの出土である。2107と2108は器壁が薄く、外面の調整はナデを施す。2109は復元口径15cmを測り、肩部の張りは弱い。外面の調整はハケ目を主体とするが、一部平行タキ痕が看取できる。色調は内外面ともに明赤褐色（5Y R5/6）を呈する。2110～2112は中期中葉～後葉の壺と壺である。2113は復元口径11.4cmを測り、接合部は「コ」字状を呈し、複合口縁部は直立気味に立ち上がり、外面に加飾はみられない。2114は口端が下垂する長頸壺で、復元口径は25.6cmを測る。2115は器台の口縁部小片。復元口径は20.2cmを測り、口端は上下にやや拡張し、8条の波状文の上に円形浮文を貼付する。色調は内外面ともに橙色（25Y R6/8）を呈し、外面には黒斑が認められる。

時期：埋土と遺物から弥生時代後期終末期古相、梅木III-1に時期比定される。遺物のうち、2110



第380図 SB201出土遺物実測図